THE KAIZO

改造

拾貳月號

1921

大正拾年拾二月一日發行

有島武郎譯
（譯者裝幀）

ホヰットマン詩集

第一輯

四六版二一七、表紙見返共總代天金

定價壹圓九拾錢
送料八錢

彼れは恐らくは完成者ではない。然し、彼れは確かに創始者だ。健全な胚子、自由な泉源、それは彼れだ。彼れを識り、彼れを味へ。

……譯者

高村光太郎譯
（清宮彬氏裝）

ホヰットマン自選日記

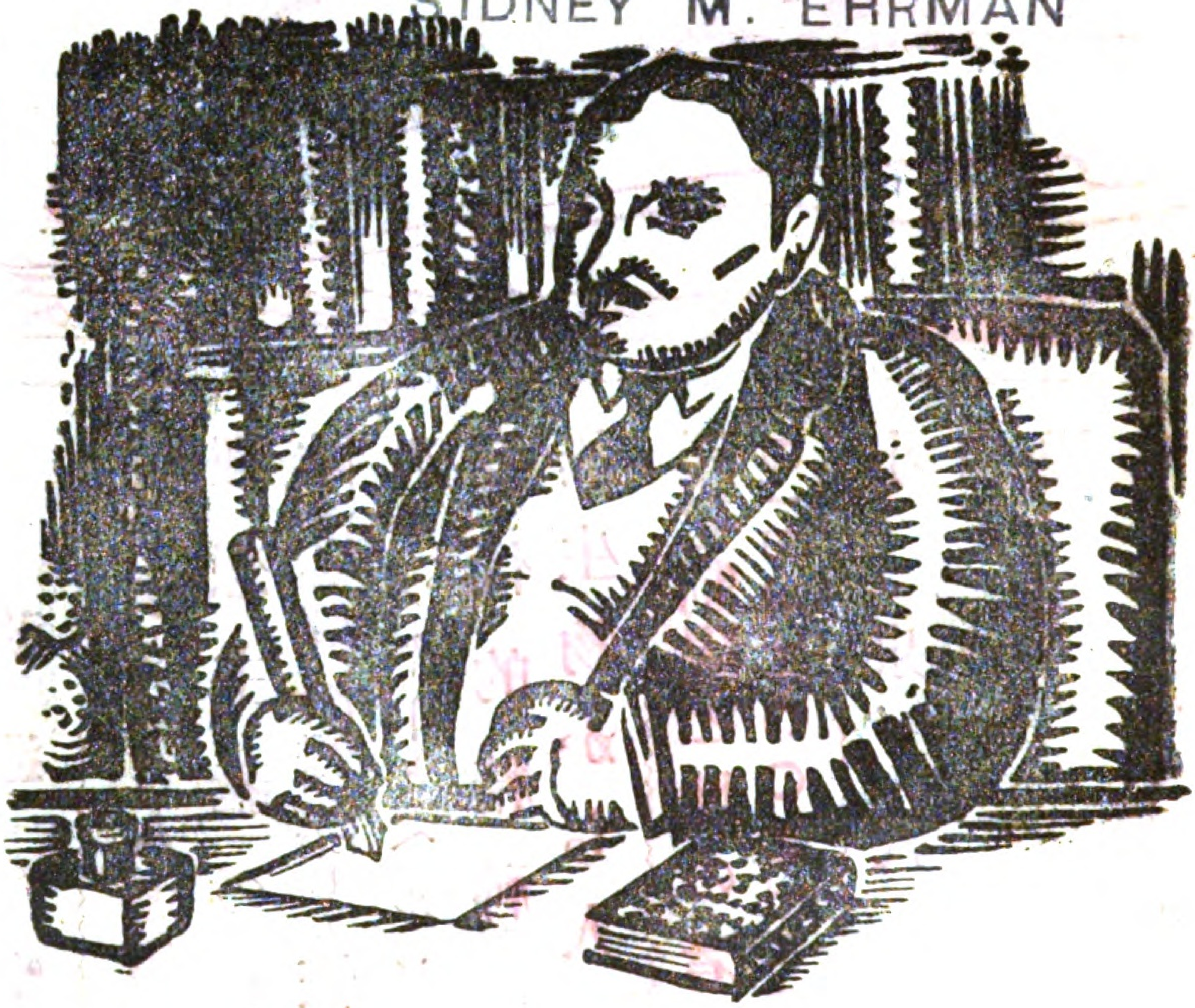
―ホヰットマン散文全集第一卷―

四六版四六二
總布上製
定價貳圓八拾錢
送料十二錢

東京牛込
神樂町二

叢之閣

振替東京四二八八九
電話番町四八一二



SSS

サンエス萬年筆

現代の各方面に於ける代表的人士の手に執らるるペンは！

如何なる人のポケットにも如何なる家の卓上にも學窓にも！

東京市 細沼株式會社 馬喰町

大阪・福岡・名古屋・金澤・札幌



改造十二月號目次



ハヴロック・エリス原著、矢口達氏譯

性的心理大觀

有名なるハヴロック・エリスの著で性慾學の權威であることは知らぬ人は無からう。性は人生に横はる一大事業で性の問題は人生の中心問題である。之をいかに理解すべきかを知らぬ中は人生を愛するものとは云へない。本書は氏の三千頁の大著を上下二巻に縮譯したもので性問題に關する一切の問題を極めて嚴肅な科學的見地から説述して絶大な智識と教訓とを與へる。

上巻目次

（四六判細活字洋布裝箱入 價貳圓六拾錢送料拾七錢）

下巻目次

（四六判細活字洋布裝箱入 價貳圓五拾錢送料拾七錢）

東京市麹町區飯田町壹の貳 株式會社 天祐社 （振替東京一〇一二八番 電話九段長一一七三番）

スタイン全集

理學博士 石原純
早大教授 阿部良夫
東北大助教授 遠藤美壽
東北大助教授 山田光雄
の四氏擔任

千古の偉人アインスタイン氏が世界文明に貢献したる絶大の偉業を記念するために本社は、アインスタイン全集を刊行す。擔任者は石原博士を始め我國の有する最俊英の理學者である、本書が萬古を貫く一大權威の名著たるは呶々を要するまでもなし、本社は我國に對し本書を提供し得ることを一大光榮と信ずる。

東京芝櫻田本郷町
改造社
振替東京八四〇二

逃避行

尾崎士郎著

◇四六判布装天金函入◇

定價貳圓參拾錢

◇送料金拾八錢◇

東京芝櫻田備前町 改造社 振替東京八四〇二

新人の出現

一新人出現す、戀を信ずる能はず、功を信ずる能はず一切の權威の桎梏より逃れんとする悲しき勇者の――低迷期に呻めく若き魂の悶えを――大膽に突きつめた絢爛火の如き藝術である、――三千枚の長大編より成る其一部――血の滴るが如き藝術――一つの懷疑的頽敗時代と否定的享樂とが錯綜して造る混沌たる交響樂――それはあらゆる意味に於て日本人に運命づけられた歷史的クリシスである――と觀ずる作者の全身は煮立つが如く沸き返つておる――若し天下盡く小生に道を開くことを拒めば小生は藝術の爲めに一生を棒にふらんのみ――かかる自信を有する著者の熱血は指の先き、爪先きまでピク々々と生動して若き日が一切を支配しておる偉大なる勢力に驚かされる。

文學博士

現代文化人の心理

◇◇四六版箱入背皮金文字入
最新式機械綴參百八拾五頁◇◇定價金貳圓七拾錢◇◇送料金拾九錢◇◇

日本社會學の泰斗たる米田博士苦心の勞作にして、現代文化人の考察から現代社會問題の文化的意義を究明せし重要なる著書、篇中文化の學問的主旨を闡明し、現代文化の各國に於ける特異を較べ、而して其心理を解剖し、文化問題としての現代社會問題を説明すること詳細を極む。現

文明の再建

バート

ラッセルの著書の我國語に譯されたるもの尠しとせざるも、本書は之等の群書と聊か趣を異にし、一代の巨人が直接我國民と語り、若くは本誌を通じて我思想界に與へ

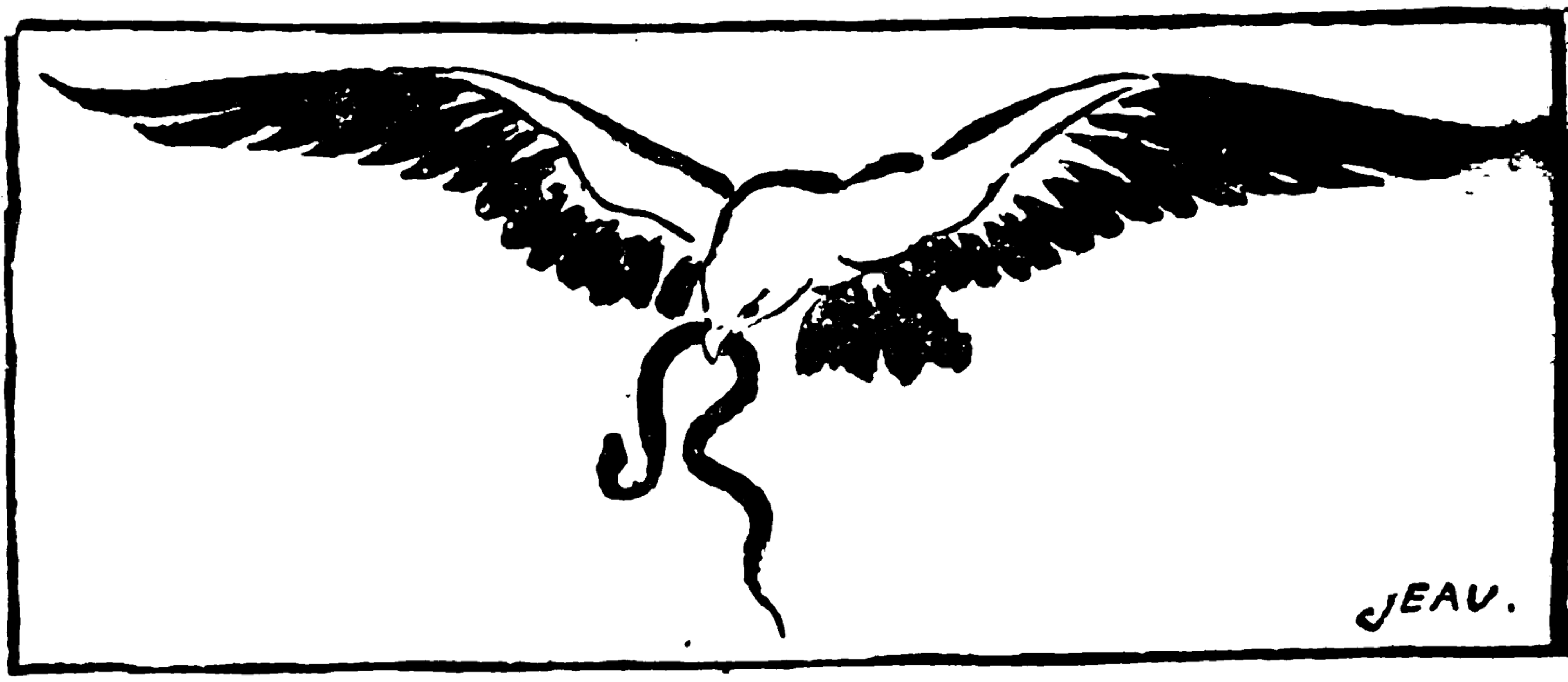
ランド・ラッセル著

たる我國民性を基礎とせる彼の理想、哲學を述べたるものにして、彼の『愛國心の功過』の一文の如き、空前の大論文として單り思想界のみならず、官僚、軍閥の徒に至る迄一大刺戟を與へ、異常の感動を與へたるものたるは、今尚世人の記憶に新なる所である。我社は玆に此世界的大思想家の來朝を記念せむが爲めに、敢て此貴重なる一書を江湖に薦めむとするものである。【最新刊】

四六版布裝函入
定價壹圓八拾錢
送料金拾六錢

東京芝櫻田備前町
振替東京八四〇二

改造社



══((改造十二月號))══

政治家としての人道勇と人類愛

原氏の錆ある末路は我等をして涙ぐましむ、爪の先きまで行き屆く人情の機微には幾たびか袖をしぼらしめた、だが我々は熱を平にして原氏經綸の跡を討ねる必要がある、乾兒政治の弊を見なければならぬ既成政黨は既に社會の信望を缺ぎ、その領袖も信用と經綸に缺ぐ、情實に城き上げられたる舊勢力によりて政黨を率ゐ、內閣を率ゐ、國民を率ゐんとするは、痼疾にて起つ能はざる老耄者によりて人類の革新を望むがやうだ。全軀に瀰漫せる惡血、枯渇せる心神ではどうして「鮮かに昇りつゝある朝日の心」が分明しやう、我々をして見れば、出るものも、出るものも兇狀もちの如く、痼疾患者の如く見られる、それは卽ち革新の目的物であつて被告の地位に立つもののみである。

政局の停頓を射貫くものは氣鋭の壯者にある、政治は新たなる創造であり、擴大なる創作でなくてはならぬ、舊套に依據し、低徊するならば現在の領袖にてもよし、なんで四十男、五十男に勇氣に閃く政治が出來やう。明治維新の鋭き改革は三十前後の生埋的に新鮮な志士の若き血で斷行された。

時は將に竹どんも白くなり、源治も霜に惱む大正十年の晩秋だ、達磨や卯太は木碓の側こそふさはしと思はるれど。人類の希求する政治は日一日と高遠を求め、人類の行く道々は日一日と汚物に漬されゝ、極度の愛に溺りたいは我も人もの總ての欲求だが、物質の窮乏はその愛を日一日と遥き隔たりに置かんとし、疎き情に割かんとす、恩愛は勇氣を挫く、我が政治家に人類愛なく、人道勇なく、僅かにその年々の豫算にて塵芥でも始末するとしか看取されぬは殘念である。

乾兒で政治をするな、そんな卑怯な舊道を步むな、高く經綸を揭げよ、共鳴する國民の輿を後援とし、自己の意思として邁進せよ、感激なき政治は我々とは沒交涉だ、我々の歡迎し、我々の共鳴する政治はその基本を人類愛におく內閣だ。人道勇で斫り進む內閣だ。

理想主義のために



阿部次郎

一

自ら欺くことなしに一つの主義を信ずると言明することは決して容易なことではない。一つの主義を信ずるとは、これによつて生活の全體を律する義務を負ふことを意味するからである。あらゆる思想とあらゆる實行とをこの原理を以て貫かむとする情熱を持ち續けることを意味しなければならないからである。この操持と情熱とを缺くとき、吾々の主義はたゞ名稱であつて生活の原理ではない。生活原理としての主義は吾々の心の奥底に深い根を植ゑてゐるものでなければならぬ。

從つて主義は、最も善い意味に於いて人を保守的にする。一度一つの主義を信じたものは、容易にこれと矛盾する他の主義に轉移することが出來ない。轉移は劇しき戰を經て始めて行はれる。古い主義に從ふ生活が支持すべからざる破綻と矛盾とを暴露して、吾々にその不合理を徹底的に自覺させるとき、吾々は始めて從來の生活原理と離れて新しい主義に赴くことが出來る。主義の轉移には生爪を剝がすやうな痛ましい批判と破壞とが先行しなければならぬ。この段階を經ずに、輕々しく一つの主義を置去りにして、輕々しく他の主義に鞍替へするのは、生命として主義を信ぜずに名前としてこれを信ずる無主義者のみの能くするところである。この眞理は個人に就いても社會に就いても同樣に適用する。一時期若くは一時代の合言葉となる主義が氣樂に忘れられて、眞正に征服せられることなしに何時の間にか他の主義に處を讓るのは、その個人若くは社會の甚しき無性格を證明するものと云はなければならぬ。

現代に於ける哲學の主潮は新理想主義であるといふ言葉は、吾々の久しい間聽かされて來たところである。自ら理想主義を信ずる者として（人格主義とは理想主義の內容を更に立入つて規定した言葉に過ぎない）、私は固よりこの言葉に對して何の異議をも持つてゐない。實際今日の哲學世界は、畢竟アナクロニズムを意味する二三の傍系的主張を除けば、未だ理想主義に代るべき新しい言葉を知らないと云つていゝであらう。併し新理想主義が最新の思潮であるかどうかは、私の玆に重きを置かうとする點ではない。私の玆で問題にせむとするのは、それが新しいにせよ舊いにせよ、既に吾々の社會が曾て新理想主義の哲學を歡迎したことゝ、今日に於いても少くとも哲學の範圍に於いては依然としてこれを通用させて置くやうに見える事實とである。一度新理想主義の哲學を信ずると稱した吾々の社會は、果してこの主義を生活せむとする情熱を持つてゐるか、若くは曾ての情熱を持つたことがあるか。若し又吾々は既に新理想主義といふものを捨てゝ更に新しい主義に轉移してゐるならば、この轉移は果して誠實に一つの主義を信ずる者の粘強さと內

心の苦悶とを以て行はれたか、吾々は果して理想主義の支持すべからざる破綻を體驗したか、この體驗は理想主義の徹底的批判と破壞とを意味するやうな力強い思索を一つでも產出したか、吾々は舊い主義を當然葬るべきが如くにして葬り、新しい主義を當然產むべきが如くにして產んだか。寧ろ吾々の社會は理想主義を生活せむとする情熱を、單に今持たぬばかりでなくて曾て持つたこともなく、たゞ暫く新理想主義といふ名前を弄んだだけで內實は依然として舊き實證主義の生活を繼續したのではないか、從つて理想主義の殁落を體驗することなしに何時の間にかこれを無視し蔑視するやうになりつゝあるのではないか。若し吾々がこの疑問に對して、斷乎として否と答へることが出來ないならば、吾々の社會は性情の浮薄を此處に暴露して、隱さうとしても隱すことが出來ぬものと云はなければならぬ。併し吾々は自ら欺くことなしに、この疑問に對して斷乎として否と答へることが出來るか。

或人は云ふかも知れない、吾々は單に理想主義に對するのみならず一般に哲學といふものに對して情熱を失つたのである、新しい情熱が他の方面に吾々の心を吸引するために、吾々は哲學などはどうでもいゝやうになつてしまつたのであると。併しこの言葉は、前よりももつと深い意味に於いて、その人若くはその社會の性情の浮薄を證明する。彼は最初からその生活を眞理に基かせるといふ要求を持つてゐないからである。凡そ吾々の情熱が一時の發作でなくて內面的必然性を持つてゐる限り、新しい情熱は常に新しい哲學を要求せずにはゐられまい。一つの生活が本當に一つの生活になるには、これを指導するに足る規制原理（レギユラテイヴ・プリンシプル）が必要であり、その情熱が眞理に協つてゐるといふ信念を缺くことが出來ないからである。この意味で新しい情熱がこれに相應する哲學の擴充若くは方向轉換を要求するのは當然であるが、それが哲學そのものと絕緣せむとするとき、その情熱は早晚根なし草として枯死すべき運命を擔はなければならぬ。殁落するのは哲學ではなくて、却てその發作的情熱それ自身である。

茲に於いて問題は再び、吾々は果して理想主義を卒業したか、吾々は理想主義を卒業するだけの必然的な段階を踏んで、本當に新しい主義に到達してゐるかどうかといふことに歸つて來る。或人はこの問題に答へて、「さうだ」と云ふであらう。理想主義もブールジョアの哲學の一種に過ぎない、プロレタリヤートが世界を支配せむとする時代には、新しい現實主義の哲學が必要だ、と答へるであらう。併し私はさうは思はない。眞理そのものにはブールジョアの眞理もプロレタリヤートの眞理もない。ただブールジョアの見た眞理の半面とプロレタリヤートの見た眞理の半面との相違があり得るだけである。眞理そのものはブールジョアとプロレタリヤートの差別なく、凡そ人間に妥當なものでなければならない。さうして理想主義にはこの人間に妥當な眞理がある。それはブールジョアに通用すると共に又プロレタリヤートにも通用する。理想主義はただ、それが凡そ人間に通用せぬものであることを證明されることによつて始めて破られる。併し吾々の時代は決してそんなことを證明する哲學を持つてゐないのである。

理想主義は、他の凡ての主義と同樣に、その由來から見れば極めて古いものである。併し吾々に永遠の使命を課して其の實現を要求する理想主義の精神は、吾々の生活が理想的なものとならぬ限りは、永へに新しく、永へに若く、永へに將來のものでなければならぬ。固より理想主義的精神の緊張は時によつて隆替がある。それは實證主義の破綻によつて刺戟せられ、特定の理想の固定によつて衰頽する。吾々は今日の新理想主義に於いて、人類の歷史上第幾回目かに、理想主義的精神の緊張を見ようとしつゝある。併し吾々の社會に於いては、それは未だ名稱として注目をひいた位のところに過ぎない。現實生活が複雜と多難とを加へるにつけて、この主義が吾々の生活を支配する力は、將來のものとして益々發揮されなければならぬ。吾々は理想主義を捨てる權利を持つほど、まだ理想のために緊張した生活を通つて來てゐないのである。理想主義が古いといふ言葉は、その實、より古き實證主義が自ら防禦するための一つの口實に

過ぎないであらう。當來社會の基礎は理想主義的精神の徹底によつて始めて築かれる、私はこの事を確信して疑はない。今日の急務は理想主義を捨てゝ實證主義に復歸することではなくて、理想主義を正しく理解し正しく應用することである。弛めるまゝに漂ひ行く精神をひきしめて、理想主義の見地を確保しつゝ自己と社會との改造を計策することである。

二

理想主義とは何であるか。それは言葉の通りに、理想を指導原理としてあらゆる思想と生活とを律して行かうとする主義である。理想成立の順序はどうであつても、それが一度理想として確立するや、これに現實を命令し支配する權威を與へて、この理想を生活原理とせむとする情熱である。理想主義は、現實を何等かの意味に於いて理想の光の下に見ることを得る限り、これをあるがまゝに肯定することを避けない。併し現實の生活は、世界の組織か吾々の觀照の態度か、內外孰れかの方面に缺陷があることを原則とするとすれば、理想主義の現實生活に於ける適用には、何等かの意味に於ける戰ひがあるのが普通である。この意味に於いて、吾々は、理想主義の生活は戰ひの生活であるといふことを許されるであらう。

併し現實との嶮しい戰ひに疲勞を覺えるとき、吾々は現實回避の手段として理想と名けられる小さい城に立籠ることを思ふ。吾々に休養を與へるものならば虛僞を恥とせず、社會の便宜に合するものならば他律的强制をも甘受せむとするほど意氣地なしになるとき、其處には一種の似而非理想主義が――理想主義的精神の弛緩より生ずる所謂理想主義が生れる。これは一つの理想主義が既に硬化して將に死滅せむとするときに生じ易き現象である。この時社會は、新なる、粗剛なる、戰ひを避けざる精神を得て蘇生せむことを冀ふ。理想主義の反動としての現實主義は、此處にその歷史

的正義を持つてゐるのである。

例へば吾々はイブセンの「幽靈」に於いて此の如き現實主義——寧ろ眞實主義——の精神を見る。放蕩無賴の夫を世間とその子との前に取繕つて、これを理想の人らしく見せようとしたアルギング夫人の努力は、遂に破滅に終らざるを得なかつた。彼女は一切の事實をその子の前に曝露せむとして、「理想主義」の權化マンデルス牧師と問答する——

マンデルス　では貴女は、外ならぬ御自分の義務と責任とを履行することを、卑怯と呼ばれるのですか。子供といふものは父と母とを敬愛しなければならぬといふことを、貴女は忘れたのですか。

夫人　私達はこの事をそんなに一般的に解すべきではありません。寧ろ私達はかう問ふべきでせう——オスワルトは侍從アルギングを敬愛しなければならないかと。

マンデルス　貴女の親心には、御子息の理想を蹂躙することを禁ずる聲はちつとも響かないのですか。

夫人　でも、さうすると眞理は？

マンデルス　でも、さうすると理想は？

夫人　あゝ、理想か、理想か！　私がこんなに卑怯でさへなかつたなら。

吾々はこの場合アルギング夫人に滿腔の同情を寄せることを禁じない。卑怯の故に、虛僞を根據とする理想を固執せむとする理想主義が眞實の前に破れなければならないのは誠に當然の事に屬する。この意味の理想主義は假裝せる便宜主義に過ぎないからである。

併し理想主義の本質が牧師マンデルスによつて代表されてゐると考へるのは、云ふまでもなく甚しい淺慮である。本當の理想主義は自己の生活と社會とに於いて實現することを要するものをその心に負うて、情熱と苦悶との眼を輝かしつゝ、明かに現實の眞相を見る。明かに現實の眞相を見て自分の理想と矛盾するものと根氣強く戰ひながら、世界の限

々まで實現すべきものを實現しようとする。明かな、勇敢な、戰ひに堪へる精神は本來理想主義のものである。破壞すべきものを破壞して常により眞實なものゝ上に生活の基礎を改築することは理想主義の根本信條である。然るに牧師マンデルスの所謂理想は、畢竟安逸を可能にするための支柱で、虛僞を恥とせざる無恥と眞實を見るに堪へぬ無氣力との結晶に過ぎない。此等凡ての點に於いて眞正の理想主義は却てアルギング夫人の味方である。逸樂を求める精神ではなくて内面的負荷の感情から動いてゐるところも、曾て自分にとつて貴重であつたものをも敢て破壞して「眞實」に協つた生活を求めようとする情熱も、「眞實」の實現を現實の生活に求めて回避せずに戰ひ抜いて行く勇氣も、悉く理想主義の根本精神に合致する。たゞ彼女の追求の目標が立入つた内容的規定を缺く一般的「眞實」であるが故に、又彼女の敵とするところが曾て「理想」と呼ばれて來たものであるが故に、彼女の態度は反理想主義であるが如き外觀を呈するのである。

三

似而非理想主義の所謂理想が、個人の便宜を離れて社會の便宜をその内容とするとき、理想はその社會に生息する個人に對して他律的強制となる。子オスワルドにとつて必要と思惟された理想は、虛僞を支柱として心の安逸を保持するための幻影であつたが、母アルギング夫人を曾てその放蕩無賴の夫に繫ぎとめたものは、結婚した婦人の義務として社會が彼女に強制した固定觀念であつた。この意味に於ける理想は、吾々の呼吸を塞ぎ吾々の手足を縛つて自由にのび〳〵とした生活をすることを妨げる桎梏である。ファウストの言葉を藉りていへば、それは「役に立たずの古道具奴」である。理想がその新鮮な内面的な力とその眞理内容とによつて作用することをやめて、傳統の權威若くは社會の威力によつてのみ人を支配せむとするとき、それは例外なくこの「古道具」の仲間入りをする。若い生々した魂がこのやうな

理想主義を反撥するのは固より當然である。

併し理想主義を悉くこの種のものであると解釋するのは、云ふまでもなく底拔けの妄想である。底拔けの殼となつた理想の罪は「殼」が負ふべきであつて理想が負ふべきではない。理想とはその人の全生活を一貫すべき情熱である、底からその人を支配すべき力である。この情熱と力とは彼自身の奥底からでなければ何處からも湧いて來やうがないのである。この意味に於いて、理想とは他の何物にも優りて彼自身の創造すべきもの、彼自身のみの創造すべきものである。理想とは畢竟彼自身の最も深き必然性——最も深き必然性なるが故に最も根本的に彼の生活を支配する力を持つものの別名に過ぎない。眞正の理想は彼に無用の古道具を賣飛ばす力を與へる。彼の背中に古道具を括り付けて遠い道を喘ぎ行かしめるものは、理想ではなくて理想に反するもの——彼自身の中にある怠惰と卑怯とである。

併し吾々自身の奥底から湧いて來るものが、どうして吾々を支配するものとなるか。理想の作用は固より禁止のみではないが、それが吾々自身の自然的な生活に抑揚をつけて、或物を催進し或物を禁止する當爲（ゾルレン）の權威を持つて來なければ理想とは云ひ難い。この當爲の權威は何處から來るか、吾々自身の中に吾々自身を命令する力が生れて來るのは何故であるか。それは現實の慾望は相互に矛盾し得るといふ動かすべからざる事實があるからである、而も亦生活の全體をその根柢に於いてその目標に於いてその作用に於いて統一せむとする要求が吾々の心の中に不拔の根據を持つてゐるからである。統一の原理は、此の如き心の中にあつては、當然に抑揚をつけるものとして——或慾望を催進し或慾望を抑制するものとして働かずにはゐられない。統一の原理は多樣を支配することを求める。それが支配することを求めるのは全體として生きむがためである。部分の禁壓は全體の催進の見地の下に行はれる。かくて吾々自身の最も深き必然性は、吾々自身の遵奉しなければならぬ當爲となるのである。

四

甲は言ふ、理想を持つ者には思ひ切つた金儲が出來ないと。乙は言ふ、卓越した事功を現世に擧げようとする者にとつて、理想はたゞ足手纏となるに過ぎないと。丙はいふ、理想の色は灰色である、流動して凝滯するところなき地上の享樂に、それは徒らに憂鬱の影を投げようとすると。これを口にすると口にせぬとに論なく、所謂「經驗」に富んだ世間師は、大低かう云ふやうな理由を腹の底に貯へて理想を忌避しようとする。併し何故に彼等は、金儲こそ、現世の事功こそ、地上の享樂こそ、即ち人間の理想であると主張することをしないか。何故に彼等は自分も亦理想主義者である、たゞ自分の理想は金儲であり現世の事功であり、地上の享樂である、自分は形式上汝と同主義者であるが、たゞ理想の内容について汝と見解を異にするに過ぎないと、公々然として主張することをしないか。金儲の外に、現世の事功の外に、地上の享樂の外に、猶理想の存在を認めて、これを恐れ、これをうるさがり、その目を掠めつゝ、偸盗の如くその金錢と事功と享樂とを貪り集めむとするは、畢竟彼等自身の中に、權利上その生活目的を脅かす力が潜んでゐるからである。理想の特徴は、それが個々の慾望を禁止するとき、當然これをなすべき權威あることを信じてこれを禁止する帝王らしさにある。然るに彼等の生活目的は、未だ彼等自身の中にもこの資格を具備するものとは見えてゐないのである。故に彼等は理想を足手纏ひと感じてこれを忌避しつゝ、金儲や現世の事功や地上の享樂に、強ひて僭主らしい日蔭の權威を與へようとするに過ぎないのである。彼等が理想を忌避することは、却つて反面から理想の權威と彼等の生活目的の乏しさとを證明する。本當に公けに生きることを知る者にとつて、理想は何の足手纏ひでもない。理想の根本義は「なくてならぬ一つの事」を促進する火のやうな情熱にある。一つの情熱に殉ずる者にとつて、この情熱を煽るものが足手纏ひになる理由は何處にもないであらう。理想は因よりこれと矛盾するものを禁止する。これと矛盾する限り、金儲けを現

世の事功をも地上の享樂をも禁止せむとする。併し理想が吾々に、これ等のもの以外に生くべき力を與へるならば、この禁止は根本的の意味で吾々から何の奪ふところもないのである。慾望の禁止は固より吾々を苦める。併しこの苦痛を甘受させるところに——さうしてこの苦痛をさへ一つの積極的な力として、人生の一大事に立向はしめるところに、理想の理想たる所以があるのである。

理想は、金儲を理想とする者には、思ひきつた金儲をすることを命ずる。現世の事功を理想とする者には、無條件に現世の事功を追求することを命ずる。又地上の享樂を理想とする者には、顧慮するところなき奔放の享樂を貪ることを命ずる。たゞ問題は此等のものが果して人間の理想となり得るかどうかにある。若し吾々が心の隅の何處かに、此等の慾望を牽制する當爲の力を感ずるならば、吾々は此等のものを理想とすることが出來ないやうな、より高いものを持つてゐるのである。金儲や功名や享樂はこのより高い理想に照して、その權利と制限とを享けて來なければならないのである。玆に於いて、金錢や功名や享樂以上の理想は、始めて時によつて此等のものを制限する權威として作用する。併し吾々が明確にこの永遠な理想を信ずるとき、金錢や功名や享樂は吾々にとつて畢竟何するものぞ。

五

或人は又云ふであらう。人間の智慧は弱少である、吾々は千萬年の後を見窮める力を持つてゐない、理想の力はそれが永遠性をもつことによつて始めて確乎不拔となるであらうが、永遠の理想を認識することは到底人力のよくするところではない、それよりは寧ろ現在の僞りなき慾望とその慾望の描き出す目前の標的とに信頼して、永遠のことはこれを永遠に任せ、吾々は人間らしく、謙遜に、現實的に、その日その日を生きて行けばそれでよいではないかと。

この思想には確かに一理がある。若し理想主義とは、理想内容の固定を條件として、吾々が懷抱する理想の觀念の進

化發展を容さぬものであるならば、それは確かに、身の程を忘れた人間の高慢の一兆候たるに過ぎないであらう。若し又理想に從つて生活するとは、千萬年の後のユートピヤを描いて、これを目標として生活することをのみ意味するならば、吾々は明日のために今日を空くし、その日のその日生活の意味を永久に他日に繰越して行くといふ謗を免れないであらう。併し理想の永遠性とは、理想の永遠性であつて、理想表象の永遠性ではない。又理想に從つて生活するとは、或主義（プリンシプル）に從つてその日その日の生活に內容を與へて行くことであつて、必ずしも千萬年後のユートピヤを目標とすることを意味するのではない。この二つの點に論者の誤解がある。

人類は從來何を理想として來たか。人類が理想と考へたところのものが、時代により民族により個人によつて甚しき相違を持つてゐることは、今更繰返すまでもない周知の事實である。併し理想表象の變化發展は人類に共通な理想の永遠性を否定する理由とはならない。これが理由とならないのは、猶物理學的知識の變遷が物理學的眞理の永遠性を否定する理由とならないと同樣である（論理學の根本問題第一章參照）。寧ろ理想の永遠性は、各時代や各個人の理想表象が何等かの意味に於いて眞理內容を持つことを可能にするための缺く可からざる根據である。吾々の理想と思惟するところには多くの誤謬があり得る。併し若しその背後に永遠の理想があることを豫想しなければ、誤謬の征服や思想の進化や理想の發展などゝいふ概念は全然無意味なものとなつてしまふであらう。故に理想の永遠性を信ぜぬところに、固より理想主義は成立ち得ない。併しこれを信ずることは決して理想內容の固定を意味するものではないのである。凡そ理想の永遠性は理想主義者に二重の負荷を與へる。第一の負荷は、云ふまでもなく、彼が現在理想と信ずるところを、全力を盡して實現せむとすることである。併し第二に、この實行の努力は彼に理想の新しき方面を開示する。彼は永遠の理想に則つて刻々にその理想の觀念を擴充若くは改造して行かなければならない。この第二の負荷を眞摯に感ずるところ

に、眞正な理想主義者の流動性と人間らしい自適のところとがある。論者はこの點を見逃してゐるのである。

而も理想の本義は、吾々の前途にユートピヤを描き出すところにあるのではなくて、吾々の生活に方向を與へるところにある。凡そ方向を決定することを要するところには、それを決定すべき原理――換言すれば理想がなければならぬ。理想の實現は久遠の未來にあつても、理想の作用は吾々の一日一日にある。一日一日の生活に方向を與へ、これに永遠に參する意義を與へるものは理想でなければならぬ。愛や正義や人格價値の充實や――此等諸の觀念は、吾々の生活に方向を與へるものとしてこの意味の理想に屬する。さうして假令愛や正義や人格價値等の概念は、その內容に就いて社會的個人的に樣々の變容を受けることがあつても、此等の觀念そのものが理想として適用することは、人類が人類として存續する限り、恐らく變ることがないであらう。人間の知慧は誠に弱少であるが、吾々が省みて自己の衷心から確實なものを掴み出す力を持つ限り、原理としての理想は決してそんなにあやふやなものではないのである。

併し原理としての理想が深く人の心を衝動するに對して、現實の生活がこれと矛盾すること甚しきを意識するとき、吾々の心熱は、當にあるべき狀態を、理想實現の狀態を、夢想して其處に憧憬の情を寄せむとする傾向を持つ。ユートピヤとしての理想は此處に生れる。このやうなユートピヤは、これを創造する人の個性や智識や經驗の相異によつて、精粗と眞らしさとに於いて種々の段階を持つことが出來るが、この類のユートピヤによつて將來の歷史的事實を卜することは、原則として甚だ困難なことに違ひない。この意味に於いて、ユートピヤ的理想主義の妥當性を疑ふものには正當の理由があると云ひ得るであらう。併し此の如きユートピヤと雖も、これを求むる原理が正當で、これに憧るゝ心熱が深刻である限り、それは心から人を動かすことによつて人類を一步理想の世界に接近せしめる。縱令誤れるユートピヤにもせよ、眞摯にこれを求めむとするの努力は決して空には終らない。コロンブスの東洋に航せむとする企圖は失敗

に歸しても、彼はその失敗の結果として亞米利加大陸を發見した。

六

私が「理想主義のために」言はむと欲するところは決してこれに盡きない。理想と現實とは凡そ如何に關係するか。理想の認識根據たる現實的經驗は何故に權利上理想の支配の下に立たなければならないか。等しく現實を重視しながら、現實に適合することによつて理想の權利を證明しようとする實證主義の精神と、理想から下つて來て現實をこれに協ふものとして鑄直さうとする合目的性(ツエツクエツシヒカイト)の觀念とは如何に相異するか。又、凡そ統一ある生活に於いては必ずなかるべからざる無意識の理想と、吾々の意識に課せられたる規範としての理想主義とは如何に相互に作用するか。吾々の出發點となつた倫理的理想主義は、如何にして宇宙觀上の理想主義と聯絡するか、換言すれば、理想に從つて生活を律せむと努力する意味の理想主義は、如何にして一切が理想の光の下にあることを靜觀せむとする理想主義と結合するか。私は此等の問題についても一應の考察を下して見たかつた。併し遺憾ながら今は微恙のためにこの豫期を果すことが出來ない。さうして此等の問題は、實際もつと學術的な形に於いて別に取扱ふ方が適當なのであらう。故に私はたゞ最後に自分のプグラムを述べて、この不滿足な論文を擱筆する。(十一月六日)

歐洲の經濟社會は何時如何にして恢復するか

法學博士 堀江歸一

戰爭の餘映今日に現はる

華盛頓會議に國際經濟上の問題が附議されるかどうかは、未だ判然しないが、近頃北米合衆國から到達する情報に據ると、どうも或る議案が提出されさうである。世界到る所の經濟組織は戰爭の爲めに攪亂されたと云ふものゝ、其程度は國に依つて其れ〴〵異なる所があるし、又二三の國の如きは、戰爭中、國力に大なる增進を來して居る。斯る場合に、戰爭の爲めに、有利なる地位に立つを得た國が不利の地位に陷つた國を援助し、國際間の協力に依つて、世界經濟の局面を一新することは、最も希望する所である。千九百二十年白耳義國ブラッセル府に開催された國際財政會議の如き、以上の方策を商議することを目的としたものであつて、通貨財政外國爲替等に就て、諸國政府の、代表者や、專門家の意見を蒐集し、數十個條の決議を公にしたが、果して何時に爲つて實行されるかは、一個の疑問である。(三田學會雜誌大正十年十一、十二月號參照)尤も其一個條として、財政整理の爲めに、軍事費に大なる削減を加へなければならぬと決議したことが、世界の輿論を動かして、華盛頓會議の召集應招を見るに至つたものとすれば、ブラッセル財政會議も亦無用でないやうなものゝ、當時の決議を實行するには、更に今一度の會議を經なければならぬ。是れが華盛頓會議に國際經濟上の問題が附議されると、想像される所以であつて、相當の理由の存することを認める。

如何なる事情から、歐米の經濟社會が今日の如くに、攪亂されたか、之を說明するには、先づ軍事費の數量から、觀察しなければならぬ。十八世紀末から、十九世紀中、世界の諸方面に數回の戰爭はあつたが。最も多くの軍事費を要したのは、南北戰爭であつて、其れでも南北双方を合せて、七十億弗に過ぎな

かつた。然るに今度の戰爭に於ては、聯合諸國側の軍事費が千四百四十二億八千七百六十九萬弗であり、同盟諸國側の軍事費が六百三十億千八百十六萬弗であり、合計二千八十三億五百八十五萬弗に上つて、南北戰爭の四十倍に當るのである。若しも是等の軍事費に對する財源が悉くなり、又は其大部分なりが租税の收入に依つて、調達されたならば、戰爭當時の國民をして戰爭の費用を負擔せしめる譯であつて、戰後に戰時財政の禍を及ぼさゞるを得る次第である。然し斯の如きは如何なる國に於ても、實行に不可能とする所であつた。何故に不可能であつたかは、交戰諸國が一の合衆國を除き、毎年の國民所得を超過する程度に於て、軍事費を支辨して居つた一事を以つて、之を知るを難しとしない。左に戰前に於ける諸國の國民所得と軍事費の國別額とを並記して、其事實を明にしよう。(單位百萬弗)

	戰前國民所得年額	軍事費
合衆國	三八、〇〇〇	三二、〇八〇
英吉利	一〇、七〇〇	四四、〇二九
佛蘭西	七、三〇〇	二五、八一二
伊太利	三、〇〇〇	一二、三一三
獨逸	一〇、五〇〇	四〇、一五〇

即ち合衆國以外の諸國は國民所得年額に比較して、約四倍內外の割合に於て、軍事費を支辨したのである。若しも戰爭當時の國民所得を以つて、軍事費を支辨する方針を取つたならば、戰爭が約四年續いて、國民所得の約四倍を軍事費の財源に充てる以上は、戰時數年間を通じて、國民から衣食を支持するに必要なる全部の所得をも奪取しなければならぬこと〻爲る。斯の如きは如何なる國も爲し難き所であつて、諸國は何としても現在の國民所得ばかりでなく、將來の國民所得――次第に依つては、數十年後又は其以後の國民所得に依賴して、戰時の財源を調達するの必要に接した。戰時の財源を調達する爲めに、將來の國民所得に依賴すると云ふのは、如何なる事柄であるかと云へば、國家が戰時の急に應ずる爲めに、或る短かい期間に於て、公債を發行し其期間內に於て、公債の收入は之を費消しながら、其後數十年間に亙つて、公債の元利金を支拂い、其支拂に必要なる財源を得る爲めに、數十年間を通じて、國民に負擔を加へるのは、即ち其れであつて、今日の戰爭と公債の發行とは、離る可からざる關係を持つのである。是れは私の空想だが、若しも國際間に公債の收入を財源として、戰爭を行はないと云ふ協定が出來るか或は國民が戰爭を忌避して、軍事公債には如何なる條件でも應募しないと云ふ申合せをしたならば、其時から戰爭は跡を絕つこと〻爲るであらう。兎に角今日は戰時に公債が

盛に利用される。而して斯く發行される公債の當時の國民所得と金額に於て、大差なきものである以上は、當時の國民貯蓄に其應募の財源を求めるが如きは、至難の數であつて、國が自ら國民の爲めに、公債に應募する財源を作り出すことに努力せざるを得ざるに至つた。然らば國家は何に依つて、此種の財源を作り出したかと云へば、第一に國家自ら政府紙幣を發行し、第二に中央銀行をして銀行券を増發させ、第三には中央銀行なり、市中諸銀行なりをして、銀行券を支拂準備金として、市場に信用を膨脹させることとの三策を施したのである。斯くて戰後の今日に於ては、交戰諸國は第一に國債の増加に依る利子の負擔に苦しめられ、第二に通貨並に信用の膨脹に依る經濟社會の攪亂に惱まされざるを得ざるに至つた。今日歐米交戰諸國殊に歐洲諸國の財政が窮乏し、經濟が混亂を極めつゝある原因は何としても是等二個の事情に之を歸しなければならぬ。普通の讀者に取つては、多少煩雜の嫌なきを得ないかも知れないが、左に三四の統計を掲げて、右の事實を論證する資料に充てたいと思ふ。(單位百萬弗)

(一)公債利子負擔の増加

	戰前經費	公債利子	一九二〇年經費	公債利子
合衆國	七三五、一	二三、九	七、三八八、五	一、〇二〇、五
佛蘭西	九〇〇、五	一九五、二	八、六七六、五	一、九〇七、六
伊太利	三三一、四	一三三、二	四、三〇九、六	八五八、八
英吉利	八〇四、五	九六、五	六、八三六、五	一、七三五、五

(二)通貨流通高

	一九一三年末	一九一九年末	増加率
合衆國	三、四一三	五、八七〇	一、七二
佛蘭西	二、〇四三	七、七三二	三、七八
伊太利	五七九	三、七六三	六、四九
英吉利	一、〇七〇	二、六八〇	二、五〇

右表に於て、通貨と云へるは、金銀貨、紙幣、銀行券等總て流通中の通貨である。

(三)預金増加

	一九一三年末中央銀行預金	同上市中諸銀行預金	一九二〇年末中央銀行預金	同上市中諸銀行預金	増加率
合衆國	—	一五、七〇〇	—	二八、二八九	二、〇五
佛蘭西	二四	一、一九五	六七二	三、一九五	二、九五
伊太利	一七	一四〇	一四五	五二二	四、一八
英吉利	三五	五、三五五	一、〇〇〇	二、九九五	二、二八

(四)物價騰貴率(一九一三年を百とす)と通貨預金膨脹率

	一九二〇年末物價	一九二〇年通貨預金増加率平均
合衆國	二一九	一八八
佛蘭西	四二五	三三六

伊太利	四五九	五三三
英吉利	三一七	二三九

國際處分案

上記の四表を通覽すれば、歐洲諸國の經濟社會は何故に今日苦惱して居るかの原因を看取するに難しとしない。即ち軍事費の財源を調達する爲めに、公債を增發し、其利拂に要するだけの金額が戰前に於ける經費總額の一倍五又は六から二倍にも當る、公債の應募を容易ならしめる爲めに、紙幣や、信用を極度まで膨脹させ、其結果として物價を騰貴させるに至つた。而して物價が騰貴した爲めに、更に經費の膨脹を促して、財政を窮迫させて居ることは、明白の事實である。此局面を展開する政策として、一時盛に主張されたものは、實に資本徵課金制度であつて、日本には此制度の英國に於て倡唱されたものが廣く流布したようであつたが、實は英國ばかりでなく、佛、伊、瑞西、獨、墺、匈、チエツコ・スロヴアキアの諸國に於ても、一部人士の唱道する所であつた。純財政上の見地から考へると、資本徵課金制度は以前北米合衆國の三四聯邦州に於て行はれだり、又最近露國過激派政府に依つて行はれたりした公債棄却と云ふ最も嫌忌す可き手段に出でないで、公債の負擔を輕減する方法たるを失はないように見える、兩種方法中の一を選擇しなければならない絕對絕命の場合に迫つたものとすれば、吾人の取る可きもの丶、公債廢棄でなくて、徵課金制度である可きことは論を俟たない。公債廢棄は國債所有者だけに、全體の負擔を荷はせるものであつて、若しも戰時國家が國民の愛國心などに訴へて公債を發行したような場合には、此手段は殊に橫恣の嫌なきを得ない、之に反して資本徵課金制度は如何なる種類の資本であるを問はず、總て資本の所有者に負擔を加ふるものであつて、財產を以つて能力の表示としたならば、公平に負擔を分配する所以と考へられたのである。然し資本徵課金制度が宜しいと云ふのは、公債棄却に比較しての話であつて、其一種の潤色された公債棄却であることは、何としても之を否定するを得ない。英國で最も熱心に資本徵課金制度を主張したペシツク、ローレンスは此制度の利益を列擧して「資本徵課の結果は公債の全部又は一部を銷却し、通貨の部分的收縮を實し、豫算の均衡を保つことに在る、斯くて中流事業家の如きは、資本徵課金の行はれない場合に重率の所得稅を賦課せられるよりもし事業經營上に、妨害を加へられることが少ないであらうし又一方に資本徵課金の壓迫を最も多く感じる人は巨富を擁して、何等一身上の努力を爲さず、投資の收益を貪る地位に立つものである」と論じたが、此種の議論では、資本徵課金制度に對する世間の反對に

當るを得なかつた。今日の國家は財政を運用するに就て、將來公債を利用することの必要を眼中に置いて居る。戰時に國民を驅つて、公債に應募させ、戰後に徵課金を名義として、公債を國庫に返還させる、假令い斯く國庫に回收する目的物は一の公債に止まらず、他の形態の資本に及ぶとしても、公債所有者は斯る財政的處置に對して、如何なる感を懷くであらうか、其懷く所感が遂に國家をして將來事變に際し、又平時に於て、公債を利用することを封ぜしめるに至る所以であると考へたならば如何なる國も資本徵課金制度を敢行するに躊躇せざるを得ざるに至るのである。

外債の帳消しと相殺

次に起る國際財政上の計畫は合衆國をして其諸外國に有する債權を棄却させようと云ふのであつて、俗に公債の帳消し問題と稱せられるものである。今度の戰爭で、合衆國は殆ど一個の財神たるの觀があつた。如何なる國も結局合衆國に財力の援助を仰いだ、之を仰いだ目的とする所は或は爲替の調節を謀るとか、或は外國購入品の代金を決濟するとか、或は國內正貨に對する取付を回避するとか、種々の點に存したのに相違ないが、諸國は何か事があれば、必ず合衆國に財政上の援助を求めたのであつて、斯くて戰後に於ては、諸國の合衆國に負ふ債務は百億弗に近づいた。其重なるものは左の如くである。(單位百萬弗)

佛蘭西	三、〇四七
英吉利	四、二七七
伊太利	一、六六六
白耳義	三五〇

公債帳消し論を唱行するに就て、合衆國をして之に承諾せしめる論據は何れに在るかと云へば、合衆國として、世界を擧げて、破產に導くような債權を持つて居るよりも、之を棄却して世界の經濟を振興し、斯くて利益を共に頒つ方が賢明であるとする大局論に基くのであつて、現に英國のサー、ジョージ、ペイシュの如き、千九百十九年七月二十日の紐育トリビユーン紙上に於て、此問題に關する意見を揭げ、其末節に於て「余の意見は合衆國が何處までも債權を主張して、債務國に强要するよりも、一時債權を放棄して、他日一弗に對して、五十仙を恢復す、ことを得策とする主義に基くものである」と論じたのを見ても、論旨の要點は看取し得られる。或は賢明なる經綸策であるかも知れないが、合衆國に取つては、恰も御爲めごかしの感なきを得ない、果して合衆國が之を容れるであらうか、容易に其然るを判斷するに苦まざるを得ない。

上記のものより實行的價値の多いと認められるのは、國際間

に於ける債權債務關係を相殺する案である。此計畫は始め英國を中心として立案されたものであり、隨つて之を實行した所で、利益の及ぶ所は英國だけに止まつたのであるが、講和條約の賠償金條項が決定し、聯合諸國の全部が獨逸に對して、賠償金領收の範圍に於て、債權者であり、其債權を獨逸國債の形態で回收し得るように爲つてから、問題の局面は著しく展開し來たのである。之を具體的に説明すれば、今度の戰爭で、英國は大陸諸國の爲めに、頻に財政上の援助を與へ、數回も諸國から公債應募の要請を受けて、之に應じた、中には或る國に向つて、斯く資金を融通することを條件として、聯合國と歩調を一にすることを約させしめた場合もある。斯くて英國は戰爭中であるに拘はらず、歐洲大陸の諸國に向つて、少なからさる程度に於て、債權を設定した次第であつて、此一事は英國をして流石に世界の財主であり、國際金融の覇者である名と實とを全うせしめた觀を示するに足りたが、一方に英國自身も國際貸借の關係の日に月に自國に逆と爲ることに對しては、之を如何ともするを得ず、此勢に對抗する爲め、遂に合衆國に外債を發行するに至つた。隨つて今日英國は歐洲諸國に對して、約十五億磅の債權を持つと共に、合衆國に對して約八億四千萬磅の債務を負うのである。英國の債權中、其露西亞に對して有するもの丶如きは露國政治上の狀態の安定しない限り、安全確實を以つて、許すを得ないが、他の諸國に對する分の如きは、先づ國際的證券を以つて、之を認め得るのであるから、此證券を利用して、合衆國に負ふて居る債務を決濟させ、債權債務の相殺を行はせようと云ふ計畫は多くの機會に於て、提唱された。而して今日の如く聯合諸國の總てが獨逸から賠償金として獨逸債券を受領して居る、一方に英國以外の聯合諸國は英國に上記の債務を負い、又合衆國に百億弗に近い債務を負うて居るものとすれば、佛伊白の諸國は先づ獨逸債券を受領するに隨つて、英國なり、合衆國たりに債務を決濟する、英國は斯く獨逸から直接に、又他の債務國から間接に領收して獨逸債券を以つて、對米債務を決濟する方法に出たならば、戰時多年に亘つて、紛糾錯綜し來つた國際債務の關係を整理するに至る道理である。

合衆國の財的覇權

右の計畫が假に實行されたとして、其結果はドウなるかと考へると、最も著しく現はれることは、合衆國をして獨逸に對する唯一の債權者たらしめる一事である。合衆國としては他の諸國に有なる債權が減少して、獨逸に有する債權が增加する。而者共に不確實であるとも云へるが、施すに或る工夫を以つてしたならば、確實に爲るとも云へる。獨逸の賠償金償用に發行す

る公債の金貨拂であることは、論を俟たないが、如何にして其金貨支拂が實行されるかは、諸國の要へる所であり、又將來に就て何とも見込の付けられない點である。而して諸國今日の財政的實力を以つてしては、如何にしても獨逸をして確實に金貨支拂を實行させるだけの財政的實力を生ぜしめる援助を與へることが不可能であるとしなければならぬ。其際に合衆國が獨逸債務の最も大なる所有者と爲り、獨逸をして金貨支拂の實力を備へさせることが、啻に獨逸ばかりの利益に止まらず、合衆國自身の利益であると云ふ事實を生じ來つたならば、米獨兩國の間に於て、如何なる經濟上の關係が發生するであらうか。合衆國は獨逸の經濟社會を復興する責任を負い、之を復興させるに必要な資本や、原料を供給することゝ爲るのは、自然の勢であつて、或は此事は戰後世界經濟上の局面に最も大なる變動の一として、吾人の眼前に展開されるに至りはしないかと思はれる。

何れにしても合衆國今日の經濟的强味は歐洲諸國に對して、現に大なる債主であり、一方に諸國は將來益々合衆國に資金の融通を仰がなければならぬ點に存する。同國元老院議員ボラー氏は合衆國をして軍備縮小に贊同しない諸國に對しては、速刻債權を回收させる手段に出でしめようとする意見を公にしたことがある。斯の如きは假令い一片の脅し文句であつて、幾ら合衆國が黄金本位の國であつても、斯くまでに露骨に金權を楯とすることはあるまいと考へられるけれども、現に今日は所謂弗外交(ダラーデイプロマシー)の全盛時代である。金權を掌握する合衆國が右に債權の回收を猶豫することを以つて、歐洲諸國を控制し、左に新に資金を供給することを以つて、支那を掣肘する態度に出たならば太平洋の主人として、太平洋問題解決の關鍵を握るものは、即ち一の合衆國あるのみと爲る。移住民の問題に、商品の輸出に常に合衆國に依賴する所の多い我國の如き、何を以つて、斯る合衆國の勢に對抗しようとするものであらうか。

、國際貸借の變動

私は少し方面を更へて、歐洲並に合衆國に於ける國際貸借の問題を考へたい。合衆國は歐洲開戰以來歐洲諸國に巨額の貨物を賣却し、始めは其代金として、旣に歐洲に賣却した自國の有價證券を領收し、漸次積年の債務を償却するに至つた。而して千九百十七年の中頃から、有利なる貿易差額を正貨で自國に回收することの代りに、合衆國は諸外國に資金を貸出すことゝ爲り其金額は約九十億弗に上り、其利子も年年に四億五千萬弗を下るまいと稱される。而して合衆國内に商船の建造されたことは戰前同國の外國に支拂つて居つた運賃の負擔を節約せしめ…に

至つたに相違ない。是等以外に於ける國際貸借上の項目で、合衆國の借方に屬する旅行者の費消金であるとか、移住民の送還金であるとか、手數料保險料であるとか云ふようなものは、精細に研究したならば、戰前よりも減少するであらうが、假に同額であるとして、合衆國の國際貸借が如何に動くかを考へると戰前五億弗の支拂勘定に爲つて居たものが、戰後の今日に於ては、二億乃至三億弗の受取勘定に爲つて居るのである。

既に合衆國の國際貸借に斯る變化が現出した以上、合衆國は債權國として、輸入超過の方嚮に就かなければならぬ道理であるのに、世界經濟の變調は同國をして依然輸出超過國たる地位に居らしめるのである。思ふに輸入の抑制、輸出の奬勵は、後歐洲諸國の經濟政策に於て、殆ど一つの標語と爲つて居る所であるが、事實問題として見れば、輸入の抑制と云ふのは、縱に奢侈品の輸入を制限するだけの話であり、又此制限をすることは原料品や、機械を輸入する餘裕を作る必要から打算されて居るとも考へられる。斯くて今後數年間は歐洲諸國が合衆國から食料品、棉花、木材、皮革、銅、石油機械殊に農具等の供給を受けることは、必然の勢である。但し是等物資の支拂に對し、又合衆國から借り入れた資金の利子支拂に對し、歐洲諸國は何物を以つてするかと云へば、物資の輸出を之に充てるの外に、道はないであらう。昨今合衆國に向つて、印度から「ジュート」や茶が、海峽殖民地から錫や、護謨が、ジヤヴアから珈琲が、濠州から羊毛が盛に輸出されるのは、此趨勢に支配されたものと見る可きであるが、歐洲の本國から合衆國に向つて、物資を多く輸出することに就ては、當分の間或る限度があり、合衆國は物資の輸出に對し、證券の領收を以つて、滿足するの外ないであらう。言葉を換へて云へば、合衆國は近き將來に於ては、債權の利子なり、收益なりを取立てる代りに、歐洲の復興の爲めに、尙ほ從前以上の融通をしなければならぬ地位に居るのである。歐洲戰爭中、聯合諸國の合衆國に於ける物資の購入は實に合衆國の貸出金で、決濟され、斯くて合衆國の貸出金を異常の高に上らしめた。然らば將來に於ける合衆國の對歐洲輸出は如何にして代金の決濟を得るかは、一に繫つて、合衆國の方寸に在りとされる。

財政と通貨との關係

以上私は國際間に交錯して居る經濟上の問題を觀察したが、國內經濟だけの關係で云ふと、諸國が今日の如き通貨を混亂した狀態に置いて顧みなかつたならば、何としても經濟的復興の曙光を仰ぎ得ないのである。而して今日の誤の基く所は全く、戰時財政の根本方針に間違があつたからだとも云へるし、又其

間違をしなければならぬやうな戰爭が行はれたからだとも見られる。私は今此機會に於て、戰時財政の根本問題に就て、多少の觀察を試みたい。租稅と公債との兩者に戰時の財源を仰ぐ場合に、其孰れの一に重きを置く可きかと云ふことは、之を選擇するに就て、比較的自由の地位に居つた英米兩國に於て、頻に討議された問題であつた。其間に兩者の一方ばかりに偏れと云ふ極端說もないではなかつたが、一般に顧みられなかつた。而して大體に於ては、當初は隨分大なる規模に於て、公債に依賴し、後に國家の信用に健全なる基礎を供へる爲めに、租稅が利用されたのであつて、唯問題は兩者に依賴する程度の如何であつたが、先づ合衆國は戰時財源の三分の一まで、英國は其四分の一まで、租稅收入に依賴し、他を公債に依賴することゝ爲つた。公債に依賴することが多きに過ぎたか、租稅に依賴することが少なきに失したかは、一個の問題であり、又水掛け論にも爲るが、兎に角比較的多く租稅に依賴したと稱される英米兩國であつても、尙ほ戰時財源の三分の二なり、四分の三なりは公債に依賴したのであつて、斯く公債が增發されたならば、必ず通貨と信用との膨脹を來して、始末に窮すると云ふことは、戰爭の當時から想像されて居つた所であつて、今日は正に其想像が事實に的中することに爲つた。

通貨や、信用の膨脹の依つて惹起された事實は喋々しく論述しない、要するに戰時財政の必要之を然らしめたものであるとして、偖如何にして之を收縮し其常態を期す可きであらうか。合衆國の經濟學者エドゥヰン、ウォルターケムメラー氏は『物價騰貴と通貨收縮と題する小著に於て、通貨收縮の方策を論じて、』其金利の引上、銀行貸出の差別的制限、經費の緊縮等に存することを擧げたが、大體に於て其通りである。經濟上の關係の常調を保ち、自然的調節の行はれる場合であれば、通貨なり信用なりの膨脹は自動的に調節され可き道理である。即ち貸付の期限が來て、貸付金が返還されゝば、其れだけ信用は收縮するし、又銀行券が兌換の爲めに銀行に歸還すれば、其れだけ通貨の回收を見るのであつて、膨脹の後には斯る作用の起ることを期待し得るのである。然るに今日の歐洲に於ける狀況は如何であらうか。銀行券は國家に對する貸出を行ふ必要から、發行されたものであつて、殆ど強制的に發行されたと云へる。隨つて其發行高の如きは、正貨準備とも關係がなければ、社會の經濟的需要にも支配されない。英蘭銀行の銀行券は今日でも、正貨の增減に支配されて居るものゝ、一方に同國には政府紙幣があつて今日通貨として最も有力な地位に居ることを閑却してはならぬ。一方に銀行の預金の內にも、國庫金の預入れられた

ものがあり、市中諸銀行の預金亦公衆が其所有する公債を擔保にして、銀行から借入れた資金の振替へられたものが多い以上は、容易に其減縮することを望まれない。殊に今日兌換制度復興の問題を考へる場合に、吾人の念頭に入れて置く可きことは金の分配に於ける變動と金産出額の減少との二點とである。前者に就て私は左の如き統計を掲げる。（單位百萬弗）

	一九一三年に於ける銀行所在丼に流通中の金貨	一九一九年に於ける銀行所在銀行所在の金貨
白耳義	六八、〇	五一、三、〇
佛蘭西	一、一九二、〇	一、〇七八、〇、〇
伊太利	二八九、〇	二〇四、〇
英吉利	七六四、〇	五七四、〇
瑞西	四四、〇	一〇〇、〇
瑞典	三〇、八	七五、六
諾威	一七、九	三九、二
丁抹	一九、六	六〇、八
獨逸	八三六、七	二六一、四
合衆國	二、九三〇、〇	四、一八三、〇
日本	二〇六、〇	一、〇二九、〇

即ち前表に據ると、金が歐洲交戰諸國の全體から、相當に減少して、他の諸國に集積したことは、明瞭であつて、金の分配に不平等を生じた。之を矯制するには、金の分配に就て、平均以上に多くを得た國は物資を輸入して、金を輸出し、反對の地位に居る國は物資を輸出して、金を輸入すると云ふ自動的調節の本筋に俟されることを必要とする。此作用が起つたとしても、尙ほ他の一困難がある。即ち金の分配に就て各國とも豐富なる程度に於て、之に與らんとしつゝある際に、世界に於ける金産額の減少して已まないこと、今日の如くであつては、諸國をして兌換制度の復興に困難を覺へしめざるを得ないのである。

假に金が世界を通じて、今日よりも公平に分配されたとした所で、兌換制度の再開されるまでには、各國共に其準備として通貨や、信用を縮小することが必要である。如何にして之を縮少す可きものであるか、政府が借入金を返濟し、又公債を償還する、即ち戰時通貨や、信用の膨脹を招いだと正反對の財政方針を取ることが急務中の急務があつて、流石に歐洲諸國も此點に着目したものが、政府が公債を發行したり、借入金をしたりして、今日以上に通貨の膨脹を惹起すことを禁物とするだけの輿論が起つた。唯戰爭の行掛りから、今日の如き財政狀態が持續されたならば、到底通貨膨脹を究極の手段としないければならず、随つて通貨の收縮を期するを得ない、其れを不可なりとす

るならば、財政の局面を展開する爲めに、軍事費を節約しなければならぬと云ふことが、財政家や、政治家の眼に遲蒔きながら映じ出して來たものと見られる。

ブラッセル會議の決議

千九百二十年のブラッセル國際財政會議がどの位有力のものであり、又眞面目のものであかは、私の本論に於て何とも明言しない所であるが。兎に角財政に關する委員會の決議で、本會議が滿場一致の贊意を表した決議の内に、左の如き一個條があるのである。

物價の低落並に繁榮の恢復は生産の增加に依る。而して政府の經費が常に收入に超過し、豫算に不足を生じることは、(a)信用並に通貨に今日以上の膨脹を來し、(b)内國通貨の價値に今日以上の低落を招き 外國爲替に大なる變動を惹起し(c)今日以上に物價と生活費を上進させる所以であつて、是等の關係から、生産の增加に對する最大の妨害にならさるを得ない。豫算に於て收入不足の財政を承認する國は一般的敗頽に誘はれる危道を陷むものであつて、吾人は如何なる犧牲を拂つても、此危道を脱しなければならぬ。

故に各國政府は社會的並に財政的改革に於ける第一歩として、左の諸策を行う義務に服しなければならぬ。

(a)經常費を削減して、經常收入と均衡を保つ程度に至らしむること。

(b)軍事費の削減が國家の安全を保證する程度と兩立する限りに於て、嚴重に之を爲すこと。

(c)總ての不生産的臨時費を廢棄すること。

(d)生産的經費と雖も、事情の許す最低限度まで低減すること。

之と同時に通貨並に外國爲替に關する委員會も通貨收縮の必要を決議し、其一個條に於て「通貨膨脹の勢を加へることは、之を中絶させなければならぬ。而して此事は或る國に於ては、急速に其効果を擧け難いとしても、尚ほ通貨を增加することを廢棄し、且つ通貨の基礎とする眞實の富を增加することに依つて、行はれるものである」と述べたのである。

以上の決議を推窮して行く一方に、歐洲の財政又は經濟の狀況を考へたならば、今日軍備縮小論が眞面目に爲つて來たことは、敢て異とするに足らない。單に戰爭の悲慘なる記臆が生きて、戰爭廢止の方便として、軍備を縮小しようとするのではない。當分交戰す可き對手國が見出されないから軍備を縮小するのでもない。軍備縮小を通じて軍事費を節約し、以つて財政の壓迫から經濟社會を解放しなければ、民生の安きを得せしめる

望みのないと云ふことが、軍備縮小の根柢と爲つて居ることを諒解しなければならぬ。斯る見地から考へて、私は歐洲の經濟社會は當分其の面目の恢復を告げる望みの絕無であることを信ぜざるを得ない。何時に爲つたらば、其れが恢復するかと云ふことに對しては、軍備の縮小が勞力や物資を不生產的事業から解放し、財政の整理に依つて、通貨の膨脹する勢が止まり、生產力の增進に依つて、通貨なり、信用なりを支持する基礎と爲るべき富の增進した時こそ、即ち經濟社會復興の機運を開くものと答へるの外ないのである。華盛頓會議が純乎たる財政經濟の問題を議事に上程するか、又は之を回避するか、之を知るを得ないが、其豫期された問題である。軍備の縮小が誠實に行はれることは、假令い前途遼遠の感はあるとしても、世界經濟恢復の第一步である。我國政府や、其代表者たる全權委員が能く這般の關係を理解し、世界の輿論に相和する位の態度に出るであらうか。軍備縮小の會議に現役軍人を全權委員に任命したり、民主的氣分の日に月に盛なる今日、國民と沒交涉な貴族の頭領を委員の一人に擧げたりするような政府であつては、果して華盛頓會議に於て、如何なる成果を擧げ得べきであらうか。私は姑く時局の發展を待たうと思ふ。

カウツキーとベルンシタイン

在伯林本社特派員　室伏高信

一

英國での二人の老社會民主々義者、ハインドマンとベルフォード・バックスとが、私のために、同じ卓子のうへで、二通の紹介狀を書いてくれた時の、ハムステッドの美しい思出から二ケ月ばかり立つて、伯林が秋を迎えようとする八月末から九月初めへとかけて、私はこの國での、現存する最も多く歷史的な二人の老社會民主々義者カール・カウツキーとエヂュアード・ベルンシタインとの二人に會ふことができた。この二人の名は、ある時は同僚であり、ある時は論敵であり、ある時は黨派を異にし、またその性格においてもその社會主義の歷史上における立場においても多くの相違點をもつてゐるにもかゝわらず、常に人々の連想から切り離すことができない名のように思はれる。オーグスト・ベーベルの自叙傳を讀むものは、この二人が、既に彼等のチューリッヒ生活の時代において『相分つべからざる二人』であつたことを知るであらう。この時は今から丁度四十二年前のことであつたから、ベルンシタインもカウツキーも、ともにまだ彼等の二十年代の血氣盛りのことであつた。ビスマークの社會主義鎭壓令は、社會主義を鎭壓する代りに、その智的中心を國外へと移した。チューリッヒの名と、そしてチューリッヒで發行されて、獨逸へと密輸入されてゐた『ゾチアール・デモクラート』の名とは、この時代における獨逸社會主義の秘密運動の中心として永く紀念さるべき地位を占めるであらう。ベルンシタインは久しくこの『ゾチアール・デモクラートの主筆であつた。『ゾチアール・デモクラート』を中心として、この頃、ベーベルや、リープクネヒトや、アウアや、獨逸社會主義運動の先輩の諸君が、このチューリッヒの町へと集まつた。彼等は彼等のチューリッヒの一團を『モール倶樂部』と名づけて、こゝに社會主義の討議を鬪はしたばかりではなしに、舞踏に歌唱に、彼等の青年時代を流浪の旅に、樂しく生活しつゝあつた。カウツキーも歌ひ、ベルンシタインも歌ひ、ベーベ

ルの謂ふところの『相分つべからざる二人』は、モール倶樂部の『合奏者』としても、『相分つべからざる二人』であつた。（August Bebel, Aus meinen Leben, Dritter Teil, s. 96）

ベルンシタインが彼れの有名な修正主義を宣明して以來、この二人は正面の論敵として久しく相闘ふ二人であつた。世界戰爭の中途に、彼等はともに社會民主黨から脱して、獨立社會黨を組織したが、それも暫らくの間で、ベルンシタインは、矢張り彼れに最も多く適した多數派社會黨へと席を移した。そしてベルンシタインが、或はクノウとともに、多數派社會黨の智的指導者であるごとく、カウツキーは、或はヒルヘルデイングとともに、獨立社會黨の智的指導者として、今も尙ほ舊のごとくに、獨逸の、そして世界の社會主義運動のうへに異彩を放ちつゝある。一つは世界における修正派の社會民主々義を、他は世界におけるマルクス派の社會民主々義を代表しつゝ、今も尙ほ舊のごとくに『相分つべからざる二人』である。

二

私は先きにベルンシタインに會つた。シエーネベルヒのある物靜かな通り、そこは他の伯林の街と同じように、五階建の家が軒を並べて立つてゐるが、その建物の二階の、多分四間位であらうと思はれる一角が、ベルンシタインとその夫人と、一人の家族との住家となつてゐる。私が最初に彼れを訪ふた時には、伯林の中流以下の多くの住宅にあるように、食堂とも、應接室ともつかないような、ある一室に私は通された。この室に入つた時に、先づ私の眼に觸れたものは、彼れが昨年シエーネベルヒの同僚の諸君から贈られた記念の扁額であつた。この扁額は彼れの七十回の誕生日を記念するためであつた。數分の後に、私はこの七十一歳の老社會主義者ベルンシタインの書齋に導かれた。彼れの二つの室は書物をもつて塡められてゐた。そして入口の戸のところには、マルクスとエンゲルスとの肖像が並べられて、その下にベーベル、リープクネヒト、アウアアの寫眞が、そして他の一方にはゴルキー、トルストイなぞが、また他の一隅にはラサールレの青年時代の油繪の美しく裝飾されてゐる扁額が人の目を惹く。この國の社會主義者のうちで、或は世界の社會主義者のうちで、最も多くラサールレの流れをくむでゐる彼れが、特にラサールレの肖像を油繪にして、美々しい額緣で飾りたてゝゐることは、もとより何の好奇心にも價ひすることはないであらう。座には二人の先客、ともになにがしの博士といひ、そのうちの一人は、曾つてベルンシタインの論敵の一人であつたブレンターノの門下生であつた。そしてベルンシタインと相對して脊の低い、藪睨みの老夫人が控えてゐた、ベルン

シタインが他の先客と話をしてゐる間に、私はこの老夫人や、及びブレンターノ門下のなにがし博士と話をしてゐた。このなにがし博士は、非常な話し好きでブンターノ老教授が、革命の後に、バイエルンの共産主義のもとに艱難な生活を送つたことや、今は學界を退隱してフローレンスの町に平和な餘生を送つてゐることなぞを話した。ベルンシタイン夫人は、彼女がその良夫とともに倫敦に流浪してゐた時のことや、またその時代に生まれた子供が既に技師となつてゐることなぞ、色々と打明けて話してはくれたが、その鐵睨みのせいか、何となく氣の置けるように思はれてならなかつた。がその後ベルンシタイン夫人は私のために私の下宿へわざわざ訪ねてきてくれた位ひで、非常に親切な、世話ずきな夫人であることが直ぐにわかつた。

三

私とベルンシタインとの會談は、第一回目に會つた時も、第二回目に會つた時も、單なる雜談に終始した。それはベルンシタインが雜談を撰むだためではなくて、私自身が、既に數年來人と議論を闘はせることに興味を覺えなくなつてきたためであつた。私たちは先づ獨逸の現狀についての雜談から始めた。丁度この頃に、バイエルンと東プロイセンとを中心としての反革命運動と、ヴヰルト内閣を中心としての共和主義擁護運動との渦中に、私たちは私たち自身の興味を發見してゐたし、またそうしなくてはならない周圍の狀況のもとに置かれてゐたからであつた。ベルンシタインは寧ろ獨乙共和國の前途について、やゝ悲觀に過ぎはしないかと思はれるほどに、反動を重要視してゐた。彼れに從へば獨逸共和國は、革命後三ケ年にして、尚ほフランス大革命がそうであつたごとくに、決して平安の夢を貪つてゐることはできなかつた。何となれば彼れに從へば、共和主義に絶對的信仰をもつてゐるものはこの國の重なる八政黨のうちで、多數派社會黨と獨立社會黨との二つに過ぎないからであつた。デモクラットといひ、また中央黨といひ、中間黨は、要するにマルクスの謂ふところの "cinerits, anderse its" であつて、まさかの場合には賴むに足らないとは、ベルンシタイン――修正派の代表者としてのベルンシタインの語つたところであつた。

しかしこの中間黨がまさかの場合に賴むに足らないといふことは、ベルンシタインにとつては、常にこれと闘爭するといふ結論を導きはしなかつた。『協同内閣(コワリシヨン)』もまた一つの『階級闘爭(クラツセンカンプフ)』であると、私は私の確信ではないにしても、たゞこの時に一寸思ひ浮んだまゝに、『協同内閣もまた一つの階級闘爭の方法である』といふて見た。『確かに(フライリツヒ)』と、ベルンシタインは、

便貯金を引出すように、造作もなく答へた。然り、まさかの場合には頼むに足らないほどの中間黨と協同することも、ベルンシタインにとつては、明確確實な階級鬪爭の一方法であつた。否なそればかりではなかつた。私はその後ベルンシタインに招かれてゲールリッツにおける社會民主黨の總會に出席することができた。この總會――最も歴史的な總會の一つ――においてのベルンシタインの『階級鬪爭の一方法としての協同內閣』は、百尺竿頭、更に一歩を進めてゐることがわかつた。『獨逸人民黨と民主黨との間に今日如何なる區別があるか？』とは、この總會における彼れの九月二十日の大演說の眼目であつた。そしてそはいふまでもなく社會民主黨と獨逸人民黨との協同內閣の提唱であつた。詳しくいふと、社會民主黨と、反動黨としての獨逸人民黨との妥協の提唱であつた。もつと詳しくいふと民主黨も獨逸人民黨も、ともに資本主義黨である以上、そして既に社會民主黨が今日民主黨と協同內閣を組織してゐる以上、他の資本黨としての獨逸人民黨と提携するも何の不都合もないではないか。ベルンシタインはこう論ずるのであつた。こゝに修正主義者としてのベルンシタインの色彩が益々鮮やかになつてくる。然り、社會民主黨と資本黨との『區別』が益々不明瞭になつてきて、ベルンシタインの修正主義の色彩が益々明瞭になつてくる。

四

『ベルンシタインは社會民主黨の疑義における吾々の前衛である。』――フリードリッヒ・ナウマンは甞つてベルンシタインを批評してこういつたことがあつた。ベルンシタインが一八九九年に修正主義を宣明して以來、多くの資本主義者は彼れをもつて『吾々の前衛』と考へたであらう。多くの社會主義者は彼れをもつて社會主義の裏切り者と考へたであらう。またカウツキーに從へば彼れはマルクス主義の『誤解者』であつた。しかしベルンシタイン自身に從へば、彼れは早くからマルクスの門徒であつた。(Ed. Bernstein, Aus den Jahres meines Exils, S. 103) 一八九九年にその修正主義を宣明してから後でさへも、彼れ自身は矢張りマルクスの門徒といふ彼れ自身の確信を變へてはゐなかつた。彼に從へば唯物史觀はマルクス主義の最重要な『鎖』であつて、この『鎖』とともにマルクス主義は興亡を一つにするものである。(Ed. Bernsteini Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie' S. 32) そしてこの解說に次いでの彼れの『社會主義の假定』のうちの一章は全然唯物史觀の批評と見るべきものであるが、彼れが私に語つたところによると、彼れは

決して唯物史觀の反對者でもなければ、また決してマルクス主義の反對者でもなかつた。彼れに從へば彼れの修正主義は決してマルクス主義の反對を意味するものでもなく、また彼れをもつて『マルクス主義の批評者』と見ることは彼れを正當に理解してゐることではなかつた。私は世界戰爭の中途、一九一五年にブタペスト大學の諸君からマルクス主義の批評者として招聘されたことがあつた。私はその時に、社會主義の外部のものに、マルクス主義の批評をすることはできないといつて謝絶しました。』ベルンシタインは、マルクス主義の批評家として扱はれるのが如何にも心外だといつた風に、興奮の態でコウ語つた。彼れがこの時に私に語つたところによると、レニンやトロツキーや、凡ての左翼派のマルキストは、たゞマルクスの青年時代――彼れは『青年時代』といつた時に、まだ未熟な青年時代といふことを無論言外に含めてゐた――の一面だけを見て、マルクス主義を口にしてゐるところの、淺薄な學徒であるに過ぎない人たちであつた。

ベルンシタインは、こゝで彼れのボルシエヴヰズム批評へと話題を轉じようとしてゐたが、私は既に彼の最近の數著によつて、この點についての彼れの意見は充分にこれを知つてゐたし、また彼れがどういふ意見であるかといふことは、郵便貯金を引出す程度に平凡なことのように思はれてゐたので、私は彼れの希望を遮つて直ぐと話をレニンやトロツキーやチノヴヰエフなどの人物評へと移した。私は人物評そのものには、何の興味をも感じてはゐないにしても、彼れが個人的にロシア革命の、そしてまた或は世界革命の中心人物を知つてゐるかどうか、また個人的にどういふ感情をもつてゐるかといふことに、いくらかの好奇心をそゝられてゐたからであつた。しかし彼れの答は、私の好奇心に價ひしなかつた。『レニンにはどこかの會合で會つたことはあつたが、詳しいことは知る機會がなかつた。トロツキーにも會つたことがあるかも知れない。』彼れの答はたゞこれだけであつた。『レニンもトロツキーも近頃著名になつたに過ぎないから。』と、私はベルンシタインの言ひたくして言はなかつた言葉を、一寸ロばしつて見た。すると、ベルンシタインはだまつて首肯いてゐたが、傍らにあつたベルンシタイン夫人が、微笑みのまゝで『つい近頃のことで……』と言葉を挿んだ。自分の良夫は四十年來社會主義運動の大立物であるのに、といふ誇りが、この時の彼女の胸中に動いてゐたことはいふまでもないことであつた。

五

ベルンシタインが一九一五年のブタペストの講演でその修正

主義のある部分を撤回したといふことを、私は嘗つてハインドマンの『民主々義の將來』のうちで讀むだことがあつた。この點について、私はこれ以上の典據はなかつたが、また別に反對の材料もなかつたので、私はベルンシタインは、ハインドマンの記るしてゐるとほり、彼れの修正主義の『ある部分』を撤回したものと信んじきつてゐた。そしてどの點を撤回したかについて私は久しい間知識慾に渇してゐたので、私は早のみこみに『どの點を』と聞いて見た。『決して』とこれもまた意外な問ひだといつた風に、『ニイー』といふところを聲高にして、ベルンシタインが私に語つたところによると、ハイドマンがこの點について書いてゐるところは何の據りどころもない風説であつて、彼れのブタペスドの講演はたゞ彼れの一八九九年の修正主義を繰返したに過ぎないものであることがわかつた。否なそればかりではなしに、彼れはその傍らにあつた『社會主義の假説』の新版を開いて、私にそこを讀んで見給へといひながら、序文のところを指した。彼れの指したところには次のように記るされた。過去二十一年間の經驗はたゞ彼れの修正主義の意見を强めたに過ぎないと。(Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemkratie: Neue verbesserte und erganzte Ausgabe, S. 5) 勿論彼れの修正主義が果して過去二十一年の經驗によつて證明されたかどうかは別問題であるにしても、少くとも過去二十一年間、或はハノーバアの會議の後、今年のゲールクツの會議に至るまでの獨逸社會民主黨が彼れの修正主義の、何よりの雄辯なる辯護者として立つてゐることだけは疑のない事實であつた。

六

カウツキーを彼れのシャールロッテンブルヒの家に尋ねたのは、ベルンシタインと別れてから、三四日してからのこと、九月になつたばかりの雨の日であつた。こゝも五階建ての家で、そのうちの最上層、殆んど屋根裏だと思はれるほどの一角に、カール・カウツキーの標札を見た。ベルを押した時に、ベルンシタインの家ではベルンシタイン夫人か出て來たと同じように、カウツキーの家では、カウツキー夫人が取次に出て來た。『私の良夫はあなたを待つてゐる』といひながら愛憎よく私を彼女の良夫の書齋——書齋と應接間とを兼ねた——へと導いた。やがてカウツキーが入つて來た。獵服のような上着と、土方の着るようなズボンと、スリッパとを穿いた彼れ、寫眞で見た彼れよりは輕るい感んじのする、そして夫婦ともに氣の置けない、物足らないほどにさつぱりした、この人がマルキシズムの側の矢釜ましい家だとはどうしても思へない、カウツキーと、その夫

人とを、私は最初の瞬間から親友に會つたような思ひで見ることができた。カウツキーは一八五四年プラーグに生れたので、チェック・スロバカイ人であり、また今年既に六十七歳になるわけである。全面殆んど鬚髯に包まれてゐるところはどことなくマルクスの面影を髣髴せしめるが、『ムーア人』――マルクスを彼れの友人はかう呼んでゐた――の面影でなくて、矢張り正眞正銘のチェック人として見えた。彼等夫婦の間には三人の息子があつて、このうちの二人は社會主義者であり、他の一人は技師であつて社會主義者ではないが、選擧の時だけは社會黨に投票することにきめてゐるのだそうである。何れも今は獨立の生活を送つてゐるのでこゝの家はカウツキー夫婦と、そして伊太利の女社會主義者から預つてゐる十六になる小娘との三人暮らしであつた。カウツキー夫人の話によると『母は非常な賢婦であるが、この小娘は早くから墮落して』困まつてゐるのだそうである。『日本にも電車はあるか?』といつて私をなやませるかと思ふと『私は社會主義は大嫌ひだ』といつて老カウツキーを笑はせて見たり、また私とカウツキーとの脊較らべを強制して見たり、この『墮落』した小娘は私たちの會談中を通じて終始彼女のだ目振りを發揮してゐた。カウツキーも、夫人も、私よりは餘程脊の小さい、普通の日本人よりも脊の短い、小造りの二人であつた。

二つの書齋には、獨逸語、英語、佛蘭西語の、而も古典的な書物が一杯に積み重ねられてゐた。そしてこの書物だけがこの家の唯一つの私有財産のように見えた。

七

私とカウツキーとの話は自然に獨逸の現狀についてのこと、就中獨立社會黨の態度と社會化問題の二つについての二、三の問答から始められた。社會化問題については私は別に詳しく書く機會があらうと思つてゐるが、獨立社會黨の態度も、私にとつてはこの國へきてから、最大の興味の一つであつた。しかし分裂後の獨立社會黨は、チノヴヰエフのいつてゐるとほり、純然たるカウツキー黨といつてもいゝであらう。クリスピエンやヂツトマンやの諸君は嘗つてカウツキー除名までも計劃してゐたことがあつた位ひであるにしても、また今日の獨立社會黨の實際の表舞臺の指導的政治家はブライトシャイドとヒルフェルディングであるにしても、これもチノヴヰエフの唱破してゐるところに從へば、こゝ等の指導者の諸君の口から吐き出される言葉で未だ嘗つてカウツキーの書物に書かれてゐないものはないと。(G. Sinowjew, Zwölf Tage in Deutschland, S. 24)従つてカウツキーの態度はそのまゝ獨立社會黨の態であるとい

つていゝであらう。最近においての獨立社會黨は益々この傾向を明かにしてきた。そして益々共産黨から遠ざかるとともに、それだけ多數派社會黨に近づきつゝある。『われ〳〵は過去一年有餘の間、多數派と提携してきた』といふ前置きをして彼れが獨立社會黨の機關雜誌の最近號で書いてゐるとほり、多數派と獨立派と、この國に於いての二大社會黨の共同綱領の必要を繰返して私に説いた。こうなると、多數派と獨立派との區別がどこにあるかといふことが疑問になつてくる。私は『フオルヴルツ』でカウツキーの一論文（Karl kautsky, Zum Gorlitzer Parteitag.-Vorwärts, 11. Sept. 1921）を讀むで早くからこういふ疑問をもつてゐたので、私は先づカウツキーにこの區別を問ふて見た。彼れの答は私の豫期してゐたとほり、資本黨と提携するか否かといふの一點にある、といふことであつた。そこで私はまたベルンシタインに話したとほり、協同內閣もまた階級鬪爭の一方法ではないかと問ふて見た。『全くその通り』だとカウツキーは答へた。その瞬間に私の思ひ出したのは幾年か前の第二インタナショナルの會合でミルラン入閣問題が討議の中心問題となつた事件の記憶であつた。『私の記憶にして誤りがないとしたら、一九〇〇年の巴里會議と、それからその後のアムステルダムの會議でこの問題がチョオレスト獨乙の社會民主義者との間に討議を鬪はせた時に、あなたは反對の決議文の提出者であつたかと思ふ。』私はこういつてカウツキーの答を求めた。『巴里會議で私の決議文が通過したことは事實であるが、あれはたゞミルランなる個人が入閣したことについての問題で、社會黨と資本黨との提携の問題ではない』……『この協同內閣の問題は、巴里會議の決議文にもあつたように、主義の問題ではなくて、戰術の問題である』カウツキーはこういつて、彼の今日の立場が二十年前のそれと何の變化もないといふことを明らかにした。『あなたはレニンの批評をどう考へますか？』と私が問ふた。『どの點を？』と彼れが反問した。『あなたを變節者だといつてゐる點を』と私は答へた。『レニンが私を變節者といふてゐる第一の典據は私の舊著「權力への道」であるが、あの書物は反つて私の今日の意見を證據立てるために殘つてゐる。』カウツキーはこういひながら問題の書物をもつてきて私に示した。カウツキーの指したところには次のように書いてあつた。"Die Sozialdemokratie ist eine revolutionare, nicht aber eine revolutionen machende Partei." (kautsky, Der weg zur Macht, S. 57)『私は最初から社會民主主義は革命主義であることを主張してきたが、同時にそれが、革命製造主義でないことをも主張してきた。』こういつてカ

ウツキーはまた他の頁のところを私に示した。私はこれより先き既にこの書物は讀むでゐたので、そしてこの點についてのレニンの非難の據りどころのないことを考へゐたので、私は直にカウツキーの說明に賛成の意を表した。

八

私たちは次いで巴里コムミユーンのことや、マルクスの謂ふところの『無產階級の革命的獨裁政治』の意味や、それからそれへと興味ある話を續けた。巴里コムミユーンと一般選擧權の問題についてのレニンの辯明は不得要領だと私は思ふ。』私の方からこういふと、『レニンは重要な點を曖昧にしてゐる』とカウツキーが應じた。『しかしレニンの國家論だけは、マルクス主義の國家論を明瞭に組織してゐるかと思ふ。』私は次にこういつてレニンの國家論に話題を移した。しかしカウツキーに從へば、マルキシズムは結局國家の廢止を主張するものであること、レニンの說いてゐるとほりであるが、レニンの國家論は決してマルキシズムを正當に解說したものではなかつた。ハインクツヒ・クノウの國家論こそ遙にマルキシズムのそれに近いものであつた。そしてカウツキー自身も、マルキシズムの立場から國家論を書く考をもつてゐると。

『私はレニンも知つてゐる。トロツキーも知つてゐる。ともに珍らしい有能の材である。ヂノヴヰエフやその他のボルセヴィキの他の指導者たちとは數段の違ひがあるように思ふ。がしかし彼等の意見と政策とは、全然間違ひだ!』こう私に語つたカウツキーは、その著書の一冊を增すごとに、ボルシエヴヰズムに對する彼れの批評の酷烈さを增してゆく。先きに『無產者階級の獨裁政治』を著してレニン主義とマルクス主義とを全然區別した彼れは、その『恐怖主義と共產主義』のうちでは、レニン一派の共產主義をもつて、そはマルクス主義ではなくて『韃靼的社會主義であるとまで論じた。(kautsky, Terrorismus und Kommunismus. 1919, S. 152) 彼れの最近著は、ボルジエヴヰズムに對する彼れの痛擊を更に最高所まで導ひた。『國家的奴隷制度――それがボルジエヴヰキ的共產主義の頂點である。』と。(kautsky, Von der Demokratie zur Staats-Sklaverei. 1921, S. 122) また同く、ボルシエヴヰズムとは、無產階級の獨裁政治 Diktatur desproletariats ではなくて、無產者階級に對する獨裁政治 Diktatur über das Proletariat であると。(S.70) 否な彼れに從へば、ロシア今日の大飢饉も、單なる自然の働きの結果ではなく、ボルジエヴヰキの失政と無關係に考へられるものではないと。(S. 5)

十

私はこゝにカウツキーが、レニンの謂ふところのマルクス主義の裏切者であるか否か。またトロツキーの謂つてゐるように、彼れがマルクスをもつて『トルストイや佛陀のような絶對的人道主義者』となしてゐる（Leo Trotzky, Terrorismus und kommunismus: Anti-kautsky. 1921, S, 74）か否かを知らない。がしかし私に殘された印象は彼れの心持ちが、右翼の方に向つてゐるといふことであつた。私は今日獨逸に、そして或は今日の世界に生殘しつゝある。二人の老社會主義者、然り、嘗つては正面の論敵でもあつたカウツキーとベルンシタインとの間に、どれだけの區別が現存するかといふ疑を抱きながら、二時間ばかりの會談の後に、カウツキーの家を辭した。そこでカウツキー一人を殘して、私はカウツキー夫人と、伊太利からの『墮落』した小娘との三人でハレンゼー郊外へと車を走らせた。（伯林にて、九月）

近代的精神の崩壞

長谷川如是閑

一　人間至上主義

人類が、神若くは自然に對する全的服從の生活から、人間的自覺に基く所謂人本的生活に移つたことが、人類の歷史に幸福と光榮とを持ち來したことは、中世の暗黑な歷史から近世の光輝ある歷史へと目を移したもの丶等しく認めない譯に行かない事實である。然かも、此の幸福と光榮とに輝いた近世の歷史が、現代に及んで如何なる經過を示してゐるかに注意したものは、所謂人本的生活の結末について、聊か悲觀せざるを得ないであらう。

近代的精神の特徵は、――幾多の方面から說明されてゐるが、私の今必要とする範圍內に於てこれを云ふならば――人間的意識に最高權威を與へやうとする氣分を、生活のあらゆる方面に於て、內藏せしめて居り、又發露せしめてゐる事であつた。これは、社會的に觀れば、社會過程について人間的考察の進んだ結果、今の言葉でいふ「社會目的」の意識を人間がより科學的持つに至つたといふことになのである。卽ち生活は、絕對的、超越的の存在――殊に人格的存在――によつて、人間の利害を超越して目的つけられるものであるといふ思想から、生活を人間の意識的構成による目的に向つての過程とするに至つたのである。この近代的精神はいふまでもなく、中世の神秘的支配の信仰が、人間的意力を壓迫して、社會は、敬虔な迷信者と、橫着な噓吐きとの支配下に歸したことに對する人間力の復活であつて、必然の過程

でもあり又人類に幸福を齎したものであつたのである。此の時代に於て、人類の生活に、前代に於て見ることの出來なかつた多くの精神的乃至物質的收獲があつた。尤も此の收獲の多くは、今日の成金に於ける富の收獲と同じやうに、その收めた果實そのものが、收獲者にとつて(或る意味から)殃でなかつたと云ひ得る場合が甚だ鮮ないのである。それは勿論、果實そのものにそれだけの毒素を含有して居るからでなく、寧ろその果實とその收獲者との關係から發生する現象に過ぎないのであるが、近代の幸福と光榮とが、その歷史の區劃毎に不幸と汚辱とに終つたことは、近代の歷史の幕切れを、何時も何等かの形の悲劇にしてしまつてゐるのである。さうして、現にまだ幕切れに達してゐない舞臺面を觀ても、矢張り同じ結果に終り相に見えるのである。

私が、此の論文に於て試みやうと企てゝゐるのは、右の近代的悲劇が、人類に何を訓えてゐるかに就ての概括的の考察なのである。

二　民族的精神の勃興

先づ第一に、近代的の特徴を有してゐると稱せらるゝ民族的精神について考へて見る。近代に於ける此の民族的精神の勃興は、中世の世界が、全人類的なる教權の支配に歸したことの反動として、當然の事相なのである。基督教の勃興に伴つて生じた地上に唯一つの神があるといふ信仰の普及は、羅馬帝國の崩壞に伴ふ國家的支配の帝國の分解を機會として、これに代る宗教的支配の世界的帝國の建設となつた。地上たゞ一つの神があるといふとは、即ち地上にたゞ『一本の劍』があれば足りるといふ、政權に對する教權の優越の信仰に歸着した。そこでは、各國民の民族的存在は無視されて、彼等はたゞ一樣に、一人の教主の支配の下に集められた團塊に過ぎなかつた。

かやうな生活が、信仰の進化に伴ふ教權の分解と共に崩壞するのは當然のことであつた。さうして、その分解は、各民族の解放である外はない。民族的精神の勃興は、こゝに於て必然的である。さうして、この民族的精神は、その以前の世界的支配の下に於て當然出來上つてゐた地方的支配を國民的に統一する傾きを持つたことは極めて自然の順序である。さうしてそれは所謂封建制度の破壞となつて現はれたのである。

この封建制度の破壞が持ち來した精神は、必然に、地方的支配に對する國家的支配の優越である。支配の生活、及び支配の精神からいへば、小さい支配は、大きい支配に對して全く劣位を占めなければならない。それは形式の上の劣位ばかりでなく、內容的に劣等でなければならない觀念上の理由がある。それは丁度多神教の支配が、一神教の支配に對して劣位であるといふ觀念上の理由と同じである。然かも支配の生活乃至精神は、決して人類の生活そのものを意味し又は包含してゐるものではない。支配の生活と、人類自身の現實の生活との距離を、最も顯著に證明してゐるものは、中世の市民の生活である。彼等は、自己に對する支配が、餘りに空漠として全世界的であつたお蔭で、——言ひかへれば、支配が自分達の生活に、その直接の力を加へるには餘りに擴大されてゐたお蔭で——各自の生活を、それ自からの生活様式に就て發展せしめることを得たのである。それは所謂ギルドの生活であつた、その結果、彼等の生活と、その生活の產物とは、後代に見る事の出來ないほど、彼等自身の生活に依據し、又彼等自身の生活の創造であつたのである。然かも當時の支配の生活は、市民の生活が彼等の生活そのものに即してゐたのと正反對に、徒らに偉大にして空虛な支配であつたのである。この空虛な支配を、現實にすることの出來たのは、中世的小支配(世界的大支配の結果發生した建封的支配)を、近代的大支配(國家)に統一せしめた爲めであつた。かくして一方で空虛な世界的支配の分解すると同時に、他方で地方的支配は民族的のそれに擴大されて、有力にして實際的な支配を建設せしめることが出來たのである。

そこで出來上つたのが、近代の精神的産物として最も尨大の外觀を有する國家主義そのものであつた。

三　國家主義の成立

近代精神の最も大きい特徴の一つを爲してゐる國家主義は、世界の舞臺面に於ける芝居としては、まだその最後の幕に達してゐないのである。從つてそれが喜劇であるか悲劇であるかを豫言すること、はすべて豫言といふことを好まない私の敢てし得ないところであるが、然し今日までそれが演出し了つた各齣について考へて見ると、近代的國家主義は、それ自からの脚色のうちに、屢ゝ自己を破壞せしめる經過を包含せしめてゐるのである。

そのことを說くには一向手間暇を要しない。近代國家主義の最も偉大の現はれがルイ朝の佛國であつたとは、誰れもいふことであるが、その近代的奈良朝式文明の華を咲かせたルイ帝國の旺盛期に於て、フランス國民は、一方で輝きわたる文化の大花火を打ち上げながら、他方に於て、その花火打ち上げの爲めに、破産に瀕し、墮落に傾き、崩壞に向つて突進してゐたのである。而してフランス國民にして、若し、その際民族的活力を喪ひ切つてゐたならば、恐く彼れはフランス革命といふ大芝居を歴史の舞臺に演出することなしに、隣國の歐羅巴強國の獅子の爪に八つ裂きにされてゐたのであらう。フランス人が、滅びて行く國家を慘酷とも無法とも思はれた荒療治で持ち堪えたことは、世界の各國民に、國民的活力の自信を與へて、そこでも彼處でも、固定と頽廢との爲めに危くされてゐる國家の持ち直し運動を起さしめたほどであつた。

それは通常國家主義の崩壞と云はれてゐるが、さう觀ることが果して當つてゐるか、何うかそれは後刻の問題として兎に角國家的統一の結果が産んだ國家全盛が、そこで一段落を告げたには違ひなかつた。勿論フランス革命は、民族的

精神の頑固な塊を藏してゐたことは事實であつた。一旦頂點まで行つた國家主義を倒した革命も、その根抵に牢固な民族的精神を持つてゐるといふ點で、その後の轉化を思ひやることが出來るのであるが、然し同國が後に如何なる轉化を取つたにしろ、革命は、國家主義的精神の亢進に對する痛擊であつたに相違ない。實際それは、國家的存在の爲めの犧牲となつた個人の解放であつた。そこから、必然に國家主義に次ぐところの個人主義の勃興となつたのである。

四　個人主義への轉化

個人主義も亦、近代的精神の最も有力なる特徵の一つである。それは集團的生活を觀念化した國家主義とは、正反對の立場にあるものでありながら、その近代的である點で、あらゆる近代的なるものに共通の要素を含んでゐることを知らなければならない。

民族主義乃至それと双子である國家主義は、民族的個體を無視した世界的支配と、民族的個體を分解せしめた封建的支配とに對する反動であつた。卽ちそれは民族的乃至國家的個體の支持に外ならない。それは空疎な全的支配に對して、個體自からの支配の主張である。それは分化の第一過程である。この分化の再分化は、國家的個體の中にある人間的個體の發見でなければならない。この經過は畢竟、一貫した近代的進行である。始めに向けられた進路を辿れば必然にそこに行くことになるのである。

これと伴つて、近代の思惟の生活が、『自己』の發見に向けられたことは、哲學史が、生活史の從屬物であることを立證してゐる。然かも此の哲學史上の『自己』は生活史上の『個人』のやうに、徹底的態度を採つて進むことを得ないで、何時までも一つところを低徊してゐるとは、思惟の生活が、行動の生活のやうに流動的卽ち創造的であり得ない證據にもなる。

思惟の世界のことは暫らく措いて、行動の世界に於ける個人の展開が、如何に進んだかについて觀察して見ると、同じく近代的特徴を持して押し進んでゐることを見出すのである。それは丁度、國家が教權に對して働いた働きを、個人が國家に對して働いてゐるのである。全的の世界的支配が國家を殺すことに對して、國家が自個の生存を主張したと同じく、こゝでは、全的の國家的支配が個人を殺すことに對して個人の生存を主張するのである。

かくの如く、此の運動は、個人が自己の上に全的の支配の存在することを否定するのであつたが、その否定は、支配そのものゝ否定でないことは云ふまでもない。教權の支配に對して國家の支配が主張された時にも、その新たに要求する國家的支配なるものは、從前のそれに變つたものではなく、畢竟同じものを誰れが振ふかといふ問題に過ぎない。從つて國家の支配は、教權の支配より善かつたり惡かつたりといふだけの違ひに止まる。個人が國家の支配に對して反抗した場合にも、それは、各自の支配が國家の支配に優るか劣るかの問題で、國家的支配の墮落したのに比べては優りもしやうし、國家的支配の最も優れたものに比べたら劣りもしやうといふものである。そのことは、希臘時代の政治的經驗が腹藏なく後代に證示してゐる通りである。即ちそれは、個人支配は、國家の全的支配に優ることもあり劣ることもあるといふことである。そんなあやふやのものを、血を流して奪ひ合ふといふことだけでも、社會進化を、人間の意識目的に依據せしめる近代的信仰の根據は動搖しない譯に行かないのであるが、それも後刻に讓つて、こゝでは、個人的支配の性質は、從前の支配の性質をそのまゝ受け次いだもので、從つて、前車の覆轍を踏まなければならない必然の運命にあることを認めて置けば好い。

國家的支配の行き詰まりは、前にも一言した如く、個人生活を犧牲としての國家的繁榮に基いてゐた。そしてその繁榮は、必ずしも惡い意味の、社會的の生活亢進のみを意味してゐるのではなく、例へばルイ朝のそれの如く、文化建設

の意義をさへ立派に充たした繁榮でもあつたのである。個人的支配の進行も亦全くそれと同じ經路をとりつゝある。而かもそれは、一般の自覺の發達が、文化的生活に及ぼした偉大な影響を加へて、その文化は、形こそ異れ、それ自からの標準に於ても亦全時代を通じての標準に於ても、疑もなく高級を占めることの出來るものであつた。而して又それ自からの崩壞にまで昇りつめるものでもあつた。

個人的支配即ち個人主義的社會制度の完成は、その支配の性質が、國家的支配のそれを全然同一根柢にあるものであつた爲めに、支配は、此時代に於て、個人の個人に對する支配にまで進んだのである。それは先づ、國家主義的[illegible]治の崩壞に伴つて發生した個人的勢力の自然狀態に發程した運動だつたのである。さういふ運動の先驅であつたフランス革命前のルソーの思想によれば所謂『自然狀態』は公正　平和　で平らかにされてゐる世界であつた。で地上の不公正と暴力の勝利とを排除する爲めに『自然に歸る』ことが要求された。さうして、個人の上に掩ひかぶさつてゐる暴壓の支配を取り除けば、そこは個人同士の自然狀態が取り戻される理窟であつて、それは、公正と平和の世界であるべき筈であつた。さうして事態はさういふ經路を取るべく押し進められた。

然るに、取り戻された個人同士の自然狀態即ち個人主義的社會狀態は、實際の自然狀態が取るべき進路を取つて、ルソーの空想による自然狀態を取らなかつた。從前、國家的發展の爲めに妨げられた個人的產業は、國家的支配の取り除けによつて勃興したが、元來集團的生活の方式であるところの人間の產業が、集團の意識に乏しい個人の單獨の動機に支配されることになつた爲めに、機會と資本とを有する個人が無限に發展する代りに、その兩つのものを持ち得ない個人は、無限に蹴落されることゝなつたのである。そこに自然狀態に於ける物理的法則が働いて、公正の代りに、經濟的不公正が各個人に分布されたのである。さうして出來上つたのが現代の資本主義である。

五　資本主義と個人主義

個人主義は、經濟的見地から云へば資本主義に於て完成させられたかの如くであるが、その實、近代的事相に於て、相次いで起つたものは、それぞその前のものを打ち壞はしてゐる如く、この資本主義も亦、結局は、個人主義の崩壞で進みつゝあるのである。

それは、自然主義的經濟狀態が、それ自體、本質的に經濟現象の客觀的法則を尊重する結果である。此の客觀的法則は、社會的物理の法則なので、自然界の物理とは內容的に別なものには相違ないが、然し近代經濟學の一般に說明してゐる通り、又近代社會學の或る一派の指摘してゐる通り、社會現象の客觀性は、或る點まで、物理現象の客觀性と共通のものを持つてゐるのである。で經濟を自由主義──客觀的にいへば自然主義──の根據に置くならば、經濟現象の客觀性を尊重するほど、その狀態の完成が期せられるのである。實際資本の蓄積はさうして成就され、擴大されたのである。資本主義經濟を可能ならしめるには是非とも必要な合本的組織は何であるかといへば、それは個人所有の資本を何人の所有でもない──法人卽ち假想人格の所有であるところの──客觀的存在物たらしめる方途なのである。さうしてその資本集團の運動は、何人の意志でもない集合意志によるといふことは、それを客觀化する有力な方便なのである。それは、出來るだけ、個人的心意を、經濟的法則の上に直映せしめまいとするのである。卽ちそれは、資本經濟を、個人的衝動の滿足たることから引離さうとする運動なのである。かういふことが個人主義そのものゝ目的と合致するものであるか何うかは、考へるまでもないことである。

而かも、かういふ客觀的存在物──誰れの爲めに蓄積されたものであるかわからない富──にまで進んだところの近

代的生活の進化を、私は、假りに、次ぎのやうに圖式して見る。

（イ）世界——國家——個人——物質

此圖式を一見して誰れも直ちに氣付くことは、此順位は、人類の自然界に於ける進化をそのまゝ顚倒したものであるといふことである。即ちそれを下から、

（ロ）物質——個人——國家——世界

といふ風に進むのが、人類の實生活の歷史的進行なのである。物質があつて個人があり個人が集つて國家を爲し、國家が集つてこれが人間の生活の考へ得られる當然の進化である。

然るに人類の支配生活の歷史はこの考へ得られる順位を顚倒して、世界が先づ完成し、それが崩れて國家が發生し、次ぎに國家が崩れて個人が完成し、完成した個人は、次ぎに物質にその地位を讓るといふ進化を採つてゐる。この不可思議の顚倒は、私のその圖式が何と說明してゐるものであるかを詳にすることによつて解釋される。

圖式(イ)を構成するに到つた私の記述は、既に斷つてある通り、支配の形式の進化なのである。各の人類はそれ〴〵彼等の生活を生活してゐるうちに、いろ〳〵の支配が、彼等の社會意識の進化に伴つて發生し、それが彼等の生活を羈束するのである。これに反して圖式(ロ)は、社會生活の客觀的進行を示してゐるのである。人類の集團は、その生活を、自然の進化の法則たる單純より複雜に、複雜より合一に押し進める事實上の順序なのである。即ち(イ)の圖式にいふ世界なり國家なり個人たり物質なりは、觀念的のそれであつて、圖式(ロ)に於けるそれ等は現實のそれをいふのである。羅馬時代の世界的大帝國は、支那の『天下』が世界であつたのと同じ意味の世界であつて、實際の世界とは違うところの觀念的の世界だつたのである。それに次ぐところの教權の支配が建設した世界も、一つ政治圈內の國家的集團であつた

ことは、支那の『天下』と同樣であつた。それが崩れて出來上つた國家も、實は支配階級の私的組織──今の會社等よりもつと私的性質を帶びてゐたといひ得られる──だつたのである。『朕は國家なり』といふルイ十四世の言葉は、よく近代國家──フランス革命前の國家──の私的性質を說明してゐるのである。その次ぎの個人に至つては、その私的性質は、一切の個人主義的制度が、すべて私的のものを尊重し神聖にする──例へば所有權神聖の觀念の如き──ことでも明らかである。最後の、物質即ち資本が、物質といふには餘りに抽象的存在であることは、經濟學の說明を持つまでもなく常識でも考へ得られることである。それは經濟學の指摘してゐる通り、物資でも、貨幣でもなく、『信用』といふ觀念的存在物の變形なのである。

から考へると、近代の踏み來つた進化が、世界──國家──個人──物質と進んでゐるに拘らず、その排列に於ける世界なり國家なり個人なり物資なりは、何れも甚だ具象性に乏しい觀念的存在に過ぎないことを發見するのである。であるから、支配の記錄である歷史を見ると、人類はそれ等のもの〻各を經驗し來つたやうに見えるが、事實人類は、その一つをも滿足に經驗してはゐないのである。即ち(ロ)の圖式に於ける如く、物質から個人に到り、個人は部分的集團(國家)に至り部分的集團は合的集團(世界)に到るといふ經過は、過去の歷史ではなく、將來のそれなのである。

六　具體的生活と觀念的生活

然らば、何故に、將來の歷史がそのやうに甚だ顯著な客觀的眞實性を以て、私達の意識に訴へるのであらうか。私達は人類が(ロ)の圖式によつて進行しつゝあることを、眼前に行はれた事相のやうに、何人も疑ふことの出來ないものとして信じ切つてゐる。

その理由は簡單である。前にも一寸觸れたやうに、人類の具體的の生活の進行は、所謂『歴史』に現はれてゐるところの進行と離れて――時には全く別の系統を採つて――進んでゐるのである。この具象的の生活は、生活の『觀念』が、如何なる形を取つて現はれやうが、それに無頓着に、事實上の進行を採るのである。一方に(イ)の圖式に於ける『世界』が建設されやうが、それが崩れて『國家』が出來やうが、人類の具體的生活は、たゞそれらの形式に煩はされるだけで、それらの形式を必然の根柢として形成されてゐることはないのである。例へば中世の封建國家に於ても、市民の生活は、それとは別なギルド式の生活に於て發展して行つた。日本の戰國時代の歴史を見ると、全國民は戰爭ばかりしてゐて、米を作つてゐるものなどは一人もないやうに見えるが、その實日本國民の多數は、武士階級の戰爭などには無頓着に――たゞそれに煩はされつゝ――米を作つてゐたのである。さうしてその時代の日本國の存在は、米を作つてゐた百姓によつて支持されてゐたのであつて、戰爭をしてゐた武士によつて支持されてゐたのではないのである。それにも拘らず、所謂『歴史』といふものを見ると、當時の日本は、戰爭を專業とする武士が支持してゐたかの如く見える。常識で考へても、戰爭ばかりしてゐては、喰つて行く途のないのは明かで、喰へなければ日本の國家も成り立たないのは一層明かであるのに、日本國が戰爭ばかりで支持されて行つたかのやうな『歴史』を讀んで、何人も怪しまないのは、(イ)の圖式の觀念的生活が、各人をそういふ反常識的心意に育て上げた結果で、確かに觀念的生活の成功なのである、然かも實際の人類生活は、生活の支持によつてのみ支持される、といふ解り切つた道理の支配を受けるべきものである。その實際の生活に於て、人類は、事實、物質から個人に及び、個人から集團に及んでゐるのである。その進化現象の自然の進行の認識から、遂ひに全的に及ぶといふ科學的信仰が成り立つた譯である。

がこの現實の生活を、人類が何の程度まで經驗してゐるかは、明確に定めることは不可能である。例へば集團の生活

の完成を見るべき國家の生活は、觀念的のそれは、歷史上、幾つも〲出來ては滅び、出來ては滅びたが、それを以て誰れもそれによつて人類が國家生活を完成せしめたと認めてゐるものはない。然かも如何なる集團の生活が、國家生活の完成であるかについては、古來思惟の生活に於て、いろ〲のものが出來上つてゐるに拘らず、實際に現はれたものは一つもない。無論生活は流動であるから、如何なる生活にも完成といふことはあり得ない。國家生活の完成といふことも、觀念的國家として、ルイの國家が完成したとか、德川の國家が成り立つたとかいふ意味であり得るに過ぎないのであるが、具體的の生活に於ては、人民の生活それ自體に於て、國家的生活――集團的生活の或る基點をさう名つけるならば――が成り立つてゐる譯である。それは所謂『國家』的生活の方になくして、人民の生活それ自からに存する事實なのである。例へば、前の例の戰國時代に於ける日本國の存在は、歷史が國家的存在として記述してゐる武士階級の戰爭の生活になくして、當時の百姓の生活に存するのである。戰爭の爲めに日本國の滅びなかつたのは、たゞその百姓の生活の健在に依據したのである。で事實に卽した(ロ)の圖式に於ける國家は、この百姓の生活の組織その物を指すものなのである。さうして、それは村落に根抵して、一郡、一國、一道、而して日本に及び、隣國に及び、世界に及ぶべき生活系統なのである。足利氏滅び織田氏起り、豐臣氏滅び德川氏起るといふ所謂國家の興亡は、卽ち(イ)の觀念生活の系統に屬する支配生活の事實なのである。さうしてそれは、それが亡びても必ずしも國家は亡びない、それが興つても必ずも國家は興らない、云はゞ衣服の肉體に於けるが如き關係に在るものである。

七　近代的精神の旋回運動

更らに近代生活に戻つて、右のやうな考察の下に、近代的精神の進化を觀る時は、その所謂近代精神に培はれた諸相

が具體的な人類の生活の上面を流れてゐる水の波紋のやうなものに過ぎないことを認めない譯に行くまい。即ちそれは、人類の現實の生活を、或る點まで煩はしつゝ而かもそれと離れて動いてゐる空氣なのである。それは觀念生活の特質として、その觀念の根據を何程か喪つても、尚ほ嚴然として、人間腦髓の裡に壯麗な樓閣を築えさせることの出來るものなのである。或は、その根據を失ふことによつて、愈その腦裡の樓閣を壯麗ならしめる必要を感じるのである。

といふのは、私自身私の細い筆一本で、さういふ人類の生活を薙ぎ倒すことが出來ると信じてゐるものと思はれては大變な誤解である。人類は、人類の記憶に止まつてからでも、七八千年の間、さういふ觀念の生活を、具體的生活に並行せしめて守り立てゝ來たのである。(その邊から辿ると、(イ)の圖式の上部に、今一つ『宇宙』が加はるのである。)それほど人間に大切であつた生活の一系統は、今後何千年間、今まで通り、そこに人間の全部を住まはせるか解つたものではない。でその重大な心理的事實は、先づ永久に、私達の生活に影響する強い力として存在することを承認しなければならない。それが私達の具體的生活に對する地位は、戰國時代の百姓の生活に對する戰國武士の戰爭に比較すべきものである。かやうな歷史的事實は、過去に起つたものを無視し得ないやうに、將來に起ることをも計算に入れない譯に行かない。多くの社會改造家の名案が、思惟の世界の產物たるに止つて、現實界に現はれて來ないのは、此の計算に於て違算があるからである。社會的構成は、思惟の生活の論理的構成のやうに單純にこしらへられたり、こわされたりする譯には行かない。私の本論に於ける態度は、近代的精神として現はれた此の觀念生活の系統の成立と崩壞とを指摘して、その歸向を求めんとするに過ぎない。

その意味で、以上說き來つた經過を追ふて更らに考察を進めた時に、私は、近代的精神の自己破壞が、結局循環的に、大きい輪を作つて旋回運動を試みてゐるものゝやうに觀察されるのである、といふのは、國家を亢進せしめた運動が、

個人の高調によつて打ち勝たれ、個人の高調が物質の支配によつて打ち勝たれた結果、人類の具體的生活に受けた變化が、社會意識に及ぼした影響は、多少とも還元的性質を帶びてゐることが觀取されるのである。

國家的亢進の結果出來上つた大國家はそれ〳〵國家的分解の方へと働き出して、さもないまでも、大帝國的意識の減退となつて、次第に分化的に進み、そこまで行かないものも、その傾向への進行によつて時局に應じない譯に行かない狀態である。而して、それは人民の實生活に於ける生活基點を、大きく統一することによつて安定せしめる代りに、分解的に安定せしめる傾向と一致して、政治思想の上に、重大な影響を及ぼさうとしてゐる。

此分化には、地方的の分化と、職業的の分化との二傾向がある。その後者の場合は、明かに中世に於けるギルドの生活への――或る變化を以ての――復歸であることは誰れも認めてゐることである。地方的の分化は、資本主義の生活樣式が東洋と西洋とのそれをさへ、一つ生產物の供給によつて統一すべく進んだ影響をうけて、實生活の地方的分化は寧ろ其維持に努力しなければ、これから益々統一される傾きもあるのであるが、觀念上の傾向としては、大規模の代表制度を採る政治組織の不信用から、地方的分化と、職業的分化とによつて、その弊を矯めやうとする傾向がある。實生活に於ける中央文化に對する地方的反感も亦、輕視することは出來ない。都會集注の中央集權式の文明は、都會生活の種々なる難點を發生せしめた爲めに、分權式に移るべく當然の勢を作らうとしてゐる。

なほ一層重大なことは、前に云つた、資本の客觀性の歸着である。途方もない大財團の發生は、それを個人の何人にも歸屬せしめることを許し得ない事情を齎み、一方で個人的財產が膨脹するに比例して、その個人とその財產との間の黏着性が失はれつゝある。個人とその財產との黏着性の喪失は、或は租稅の形で法律となつて現はれ、又財團の管理に關する法律となつて現はれ、更らにその沒收的課稅をさへ將來合法と考へるべき形勢を馴致せしめつゝある。これは個

人主義の行き詰りが社會主義に轉化すべき自然の物理を諳示してゐるやうなものである。

こゝに於て、前に擧げた所謂近代的精神の所産の或るものは、殆んど跡方もなくなるべき勢にある。即ち始めに云つた通り英雄の支配に始まつた人間至上主義は、個人の支配の行詰によつて、全く悲劇的の最期を遂げたといつても好いのである。

人間至上主義は、人間的自覺に始まつたのであるが、それには確かに人間の自覺を過信した誤ちを含んでゐたのである。近代の理智主義と連絡を持つところの自覺の過信は最近の心理學の研究だけでも、それを打ち壞すに十分なのである。本能の研究から無意識の研究に進み、殊に所謂墺太利一派の無意識心理學に刺戟された思想の下に於ては、社會的意識目的によつて社會を目的づけるといふ近代的信仰は、其の前の神又は英雄の意識目的によつて、社會を目的づけるといふ信仰にも增して力を失はなければならなかつた。のみならず、無意識の心理や、それと相待つて發展した衝動の哲學に根抵して、社會意識の上に、神的乃至英雄的動機を容れる傾向をさへ產んだ。その過度の還元は、近代精神の前期を為した神秘的思想の近代精神に對する反抗的反動であつて、如何に力強く起つても、それは畢竟悲壓的現象である。がそれも人間至上主義、人間的意識主義に對する謀反の片割れとして可なり有力に働くべきものである。

近代的精神の悲喜劇的最期が何を語つてゐるかは、こゝに於て疑問の余地がないのであるが、この崩壞にも亦、一般の崩壞と同じく、それに內在してゐる抵抗力の働くことを知らなければならない。柱の折れる時にメキ〳〵といふ響を起すのは、その內在的抵抗力の最後の叫びなのである。近代的精神の崩壞に對する支持は、人間至上の哲學即ち意識と論理の哲學の建て直しに於て有力な味方を見出してゐるのであるが、それらの點については他の機會に讓つて、こゝにはたゞ社會事質の必然的な經路を、觀念生活の建て直しによつて防ぎ得るものでないことをいふに止めて置く。

無生物から人間性へ

理學博士　三枝彦雄

一

現代の卓越したる物理學者プランク（Planck）は自然法則の體系の唯一絶對的統一卽ち所謂科學的世界像の整齊と言ふ事を主張して居る。されどプランクの主張する自然法則の體系には、生物の生活現象に就ては、これを全く考察の外にして居る。それは我々科學者が常にそう考へて居ることである。卽ち總ての物理的現象は、或る種の微分方程式に依つて表はされ、そして夫等の現象の推移は、それ等の微分方程式を解く事に依つて、明らかにされるが、我等の生活現象は、それらと全く別種のものであつて、科學的思索の外に置いて來た。卽ち所謂人間性、例へば人間の意志の如きものは、科學的思索とは、全く沒交渉のものであると一般に考へられて居る。

されど私は、自分の科學的研究の結果と、人間性に關する思索との類推的考察から、人間の意志と言ふものも、必ずしも、周圍の條件に無關係に或は却て周圍の條件に逆行する如き方向に働くものでは無くして、意志の轉向は主として周圍の條件卽ち環境に從ふて、恰も無生物に於ける現象の如くに現はるものであるのではなからうか。我々人間の意志は周圍の條件に依つて左右されるものでは無い。全く人間に特有な作用であると信じて居るのは、意志の作用と、無生物に於ける現象との類推的考察に於て不充分であつたからでは無からうかと言ふ事を信じたいように思ふ。私は人間の意志の如きものも、又無生物現象と同一に取扱はる可きものであると信じようとする意味に於て、石原純博士が玄土三月號に於て述べられて居る、自然法則そのものに神の姿を仰視することは最も至當なそうしてまた最も自然な道であると思ふ。そうして自然現象そのものを措いて神の奇蹟をいづこに求むることが出來よう、と言ふ事を信じたいと思ふ。そしてそれが可能であるかどうかは、唯科學的研究とは生物現象との更に深き類推的考察の將來に俟たなければならないのではあるが、併し若し強いて私の今懐いて居る思索に基い

て之れを大膽に豫想するならば、私はプランクの主張する自然法則の唯一絕對的統一へ、更に、生物現象少くとも私が以下述べようとする、人間の意志の作用の如きものも繰り入れらる可きものではなからうかと思ふのである。

二

私がそう云ふ觀念を懷くに至つた科學的研究とは、どんな現象を言ふのであるか。これは前述の思想を首肯する上に於て、先づ其の概要だけでも述べなければならないものである。人間性に對する類推的考察を力強い基礎の上に、立てる爲めには、出來るだけ廣い範圍に亘つて、無生物に於ける現象を示すのが、論理の確度を增す所以ではあるが、然しこゝでは、主として專門の物理學の立場から、夫等の現象を示すのに止めて置きたいと思ふ。

電氣の絕緣體(一)に電壓を加へて、それに電氣を與へる、即ち充電をして放置して見ると、最初に加へた電壓は其の儘の値を保つては居ない。即ち絕緣體から電源(二)をとり去つた瞬間から、電壓は次第に降下して、遂に或る時間の過ぎた後に、或る低い一定電壓に止つて居る。此の電壓の降下の割合は、最初に加へた電壓に比例して增して行く、そして最初に加へる電壓が或る値以上になると其の降下の增す割合を減じて、また以前の樣に最初に加へる電壓に比例して、以前の降下の割合よりも少なる割合で增して行くのである。そして遂には、高度の電壓の許に、絕緣體は破裂されて、所謂火花放電をなし終るのである。この電壓の降下割合、降下の割合の減少を來す電壓の値等は絕緣體の相違に依つて、著しく相違して居るし、また電壓降下の割合は温度の變化と言ふ樣な周圍の物理的條件の變化に依つて著しく變化して來る。温度が上昇すると、一般に、電壓降下の割合は增すのである。斯樣な現象を時效果と名付けて居る。

上の現象から考へて見ると、絕緣體に電壓を加へて、其の儘の値に保たして置きたいと思つても、絕緣體は、其の儘の電壓を受け入れては吳れない。勿論電源を繼いで置く間は、其の儘の電壓になつて居るが、一度電源をとり去ると、上に述べた樣に電壓は次第に降下して來るのである。そして絕緣體夫れ自身に特有な電壓まで降下して、その値を保つて居るのである。そして、加へる電壓の增大とか、周圍の物理的條件の變化とかに依つて、また夫々特有な變化を示して居る。然し結晶して居る絕緣體では同じ晶形に屬して居るものは、電壓降下の割合には大小があつても、同じ範疇に屬する樣な變化を示して居るのである。

次に上の場合と全く反對な事を絕緣體に就て行つて見る。即

ち絶縁體に電壓を加へて充電して、之れ大地に繼いで(三)或る時間の間放電する。即ち先きに充電した電氣をとり去つて見る。(此の時絶縁體に於ける、電壓は零となる)そして大地から遮斷して、放置すると、先きに加へられた電壓は零となつて、悉く電氣はとり去られた樣に見へたものが、時間と共に次第に現出して、或る一定電壓に上昇して、其の電壓を保つて居るのである。この現出した電壓は充電や放電の時間が一定であれば、最初に加へて充電した電壓に比例して増しに行き、既に述べた時効果の場合と同じ樣な形式で、充電電壓の或る値からは、其の増大の割合を減じて、やはり、充電電壓に比例して増して行くのである。そして之等の現象が絶縁體の形狀とか、周圍の物理的條件の變化とかに依る變化は、時効果の場合と全く同樣である。此の現象を殘留電氣と名付けて居る。

この現象を考察して見ると、時効果の場合と全く反對な性質が考へられて來るのである(勿論物理學的考察に於ては、之等の二現象は同一の原因に依るものではあるが)。即ち絶縁體に電氣を與へて、其の絶縁體に特有な量だけ持たした後は、これから電氣をとりさつて、全く奪ひ盡したと見ゆるのに、實は然らずして、尚電氣は依然として殘留保持されて居る。即ち絶縁體が一旦電氣を保持したならば、夫れを奪ひとる事は、そう容易ではないと言ふ事になる。勿論充電した絶縁體を大地に繼いで、放電する時間を長くすれば、殘留する電氣の量は減じて行くけれども、一旦充電した以上、其の電氣を悉くとり去る事は、極めて長時間を要するのである。

また絶縁體に電氣を與へて、次第にその電壓を高め、次に、これから電氣をとつて、次第にその電壓を下げる。更にこれに前とは反對の電氣を與へて、次第にその電壓を高め、次に、それから電氣をとつて、その電壓を下げる、斯樣に正負兩方の電氣を與へて循環的に充電と放電とを繰り返すと、絶縁體は履歴(四)現象を惹起する。そして一充電と次の充電との間の時間及び一放電と次の放電との間の時間が短い時は、どんな低い電壓を加へて、循環的に充電及び放電を繰り返しても、必ず履歴現象を惹起する。即ち現象は常に非可逆的である。されど充電と充電との間及び放電と放電との間の時間を長くして、一充電に依る上述の如き時効果及び一放電に依る殘留電氣の作用が殆んど消失して、各々次の充電及び放電に何等の影響をもたらさない樣にして、循環的に充電及び放電を繰り返す時は、更に別種の履歴現象を惹起する。即ち此の場合に於ては、既に述べた時効果や殘留電氣の増大の割合を減ずる電壓までの電壓の許では、此履歴現象は起らない。即ちそれは全く可逆的現象である、されど

循環的充電及び放電の最大電壓が上の電壓以上に增すと、非可逆的となつて、履歴現象を惹起するのである。そして履歴現象を示す履歴曲線[五]が包む面積は、絶緣體を循環的に充電及び放電する間に失はれた電氣のエネルギー（勢力）を表はし、それは熱として消失するものである。

以上は私が玆に主として示したいと思つた、類推的考察に引用す可き、無生物に於ける現象の概要である。

三

上の如き無生物に於ける現象が、どんなに、人間性例へば意志の如きものと結び付いて來るか、その爲めに私は、意志の作用に對する心理學考察をして見なければならない。

心理學に依れば、[六]意志動作は客觀的及主觀的の兩方面から研究する事が出來る。客觀的研究と言ふのは、外部に現はれた動作を客觀的の現象と認めて、それの起發及び變化の力、時間及び空間の三關係から研究して、意志動作の形狀及び法則等を研究するのである。主觀的研究と言ふのは、これを意識内に發はる丶主觀的現象と認めて、これが意識的分解を試みるのである。この兩方面の研究は相互補充して意志動作の完全なる說明が成立するのであつて、全然獨立分離する譯では無い。

私が類推的考察をしようとするのは、主として、上の客觀的研究と名付けられたものに就てゞある。それは恰度既に述べた無生物に於ける現象の外部への現れと同等であるからである。また心理學者に依つて、主觀的と名付けられたものは、恐らく、無生物に於ける上述の現象の發はる丶内的作用と比較するものであると思ふ。從ふて、意志の作用の主觀的と客觀的とは、全然分離獨立する事の出來ない原因と結果との關係にあると見るのが至當であると思ふのである。

今、數人が集つて或る問題に就て論議をして居る時、其の内の大多數は正であると強く主張する。そして殘りの人も正である事を内心考へて居るが、あまりに正論の追求が激烈であるが爲めに、其の人は否であると主張したくなるし、またそう主張もする。この時其の人の意志動作は、極めて興味深きものであると思ふ。内心正論を懷きながら、それに反對する。その反對を主張する度合は、正論の追求の激烈さに比例して烈しくなつて行くが、正論派があらゆる材料と論證とに依つて、正論を極度に主張すれば、上の反對者は、次第に内心の正論を現はして、反對主張を弱めて行く、そして如何ともなし得ない樣になつて始めて、嫌々ながら正論に賛成するのである。斯樣に内心正論派でありながら、正論派の追求のあまりに大であるが爲めに、それに反對すると言ふのは、意志の選擇が自由であるが爲めに、

外見、環境に反對し、また自身の內心に反對したのであるか、或は、其の人の固有な必然的意志の作用に依る動機から來たものであるか、それは極めて興味深き問題である。

心理學によれば、(七)意志動作の起る心理的原因は極めて複雜で、其の全部は吾人の意識中に明白に現はれない。或る小部分の働は明白なる意識即ち統覺內に現ずるけれども、之れに聯關した多くの作用は朦朧不明瞭の狀態を呈して、之れを捉へる事が出來ないのみならず、殆んど覺識を脫する事もある。然も明白なる意識の範圍內に起發する事柄は、此の朦朧不明の範圍から規定さるる場合が甚多い。そしてこの朦朧不明の範圍內に起る事は、又一方に於て環境から規定され、一方にをては、遺傳及過去の經驗から規定されるものである。斯樣に諸方面から規定されて意志動作は成立するものであるから、よし或る意志動作に對する心理的原因が不明であつても、原因がないと斷ずる事は出來ないのみならず、自由に動作したと言ふ自覺があつても、その自覺に依つて其の動作の自由であつた事を斷ずることは出來ない。それは客觀的研究に依つて反對さるる場合が尠くないからである。

私は、內心正論を懷きながら、正論派の追求のあまりに烈しき爲めに、敢て反對したと言ふ意志動作は、その環境に主として規定されたもので、遺傳とか過去の經驗とかの必然的のものから規定は極めて尠ないものであると考ふるのである。何となれば一旦環境に反對した樣に見へるが、實は然らずして周圍の迫求甚しき爲めに、却つて自由意志の動作を喚起せしめたのである。即ち此の場合環境が意志撰擇の自由を與へて、自由意志の動作に依つて自身の內心にまでも反對せしめたのである。遺傳とか過去の經驗とか、から來る必要的意志の動作は、その場合反對の度合を規定するものであると考ふるのである。何故ならば、そふ云ふ場合に於ては、總ての人が多少なりとも、そう云ふ反對の動作に出づるものであつて、人に依つて反對の度合の異なるのは、其の人の必然的條件の多少に依るのであるとするを妥當と考へるからである。されば、私は一見必然的條件、即ち遺傳とか過去の經驗とか云ふものに依る必然的規定に、主として原因されて、意志動作が現はれると言ふよりも寧ろ、主とし一環境に原因されて自由意志動作を現はすと見て、必然的條件は其の副として働くものであると信じたいのである。

また、甲が乙に例へば金錢を與へようとする。其の場合乙の動作はそれを受けるか受けないかにある。それを受けなかつた場合に二つの場合がある、一つは、義理とか、或は其の代の事情の爲めに好意で受けない、此の場合は勿論環境に依つたもの

で論外であるか、甲の好意に反して受けない場合がある。この場合乙の内心はそれを受けると好都合であるが、惡意を含んで拒絶するか、或は好意的に受けない。この場合の乙の意志動作は惡意的であれ、または好意的であれ、それは環境が原因して自由意志を働かしたのである事は、充分に首肯し得る事と思ふ。次に乙が受ける時にも大體二つの場合がある。一つは直ちに受ける（受ける爲めの條件がある時とない時とがある）、これは極めて明瞭であるが、結局は受けるが初めは辭退する。それが好意的形式であれ、惡意的形式であれ、一旦は辭退するが、種々の經過の後受けるのである。内心受けたいが、然し拒絶するか、或は遂に受けるかのその交渉の程度は、必然的規定に依るものであるが、拒絶する、受けると言ふ動作は環境に原因された意志動作と見るのが妥當であると思ふのである。

四

内心贊成であり、また受けたいが、それに反對し、また一旦拒絶するが遂に受けると言ふ意志的動作は、主として、環境に原因された結果であつて、其の論爭や交渉の程度は必然的規定に依るものである事を述べた。これ等の意志動作の現れは恰度既に述べた絶緣體に於ける時効果に相當して居る。絶緣體は電氣を流通させないで、それを蓄積するのがその本性なのである。然し電氣を與へた場合に、其の儘の電壓を保たない。併も電氣石の如きものにあつては、與へようとする電壓に對しては、殆んど零に等しい様な低電壓に於てのみ保たれるのである。そして絶緣體が與へられた電壓に近いものを保持するか、または殆んど零に近き電壓にまで降下するかは、主として其の時の物理的條件即ち生物に於ける環境に原因された内的變化に基くものである。そうして、電壓降下の割合及び究極に於て保持する電壓の大小は絶緣體の種類に依つて相違し、併も結晶する絶緣體に於ては、其の結晶形の種類に依つて特有な狀況を示す事は、意志動作の場合の遺傳と云ふ樣な必然的規定に依るものに全く相當して居ることが首肯される。

然し甲乙の金錢授受の場合に於て、乙が一旦受けた上は、假令受ける場合に、好意にあれ、惡意にあれ、初めは拒絶したにしても、他の丙から所望されても、そう容易には出さないのが普通である。出してやりたいと内心思ふて居ても、容易に出してやらない。勿論卽座に丙に與へる場合はある。出す場合にしても、交渉の結果少しづつ出す、そうして或る量だけ出した後は、それ以上出さない。そして究極に出す所の量は、乙の所持量に比例するのである。併も或る量以上に所持量が増しても、乙が外に出す量は最早やそれ以上には比例的に増さない。内心出

してやりたいが、容易に出さないとか、或は交渉の結果出すと云ふ意志動作の現はれは、環境に原因された自由意志の動作であつて、全く出さないとか、次第に出す割合、或は究極にまで出した總量の程度は、必然的規定に依る意志の動作に基く事は、乙が受くる場合の心理學的考察と全く同樣である。

この場合の關係は既に述べた絕緣體に於ける殘留電氣の現象とよく相當して居る事が推論されるのである。絕緣體が一旦電氣を受け入れた上は、これを大地に繼いで電氣を奪ふとしても、その悉くをとり去る事は容易では無い。大地に繼いで電氣を奪ふ時間を長くすれば、それに比例して、殘留電氣は小となる、即ちとり去る電氣は增して行くか、或る時間以上に繼いで置いても、とり去る割合は、次第に減じて行く。又絕緣體へ殘る電氣にしても既に述べた樣に、大地から離した瞬時には、電壓は零であるが、次第に時間と共に現出して、遂に或る一定住に止むのである。併もとり去る電氣の量にしても其の後現はるる電壓にしても、最初に加へた電壓に比例して增大して遂には、最初に加へた電壓が或る位以上に增すと、殘留電氣は增す割合を減ずることとは、恰度最初に加へる電壓が乙の所持の量に相當して居るのである。そして乙が丙から交渉を受けると言ふ一つの命題や其の時の環境が殘留電氣に於ては、絕緣體を充電し、それを大地に接續して居る時間及び其の物理的條件に相當し、意志の必然的規定が絕緣體の種類に比敵するのである。

自然界に起る現象は一般に非可逆的である。そして總てのエネルギーは夫等の過程に於て熱として消費さるるのである。併も我等の生活に於て繰り返さるる種々雜多な動作も、また非可逆的である、從つて其の間にエネルギーは熱として消費される。例へば山を登つて、次に下山して、出發點に戻つて來た時、外見それは可逆的の如くであるが、決してさうではない。登るに費された勞力は、下山に依つては恢復されないで、エネルギーは熱として消費されて終ふ。併もその時の疲勞の程度はそれ以前及び其の時の狀態の如何に依つて、著しく相違するのである。また例へば甲乙の二人が同樣な手段に依つて、同程度の犯罪を犯したとする。甲は前犯者であつた爲めに、刑に處せられたが、乙は初犯で然も過去の善行の爲めに刑の施行猶豫を受けると云ふのは、甲乙の過去の歷史に關係した現象であることをも示して居る。是等は共に既に述べた履歷現象に相當する生物的現象であることは充分に首肯し得ると思ふ。

又或る人が事業を企て、或る方法に依つて進んだが、滿足する樣な方向に發展しない。その爲めにまた異つた方法をとつたが、未だ滿足する樣な方向に行かない。更に他の方法と云ふ樣

に、種々雜多な方法を繰返して居る内に、資本は全く消費してしまつた。そう云ふ場合に於て、その事業の發展の如何とか又は失敗の程度は、其人の過去の經歷の如何とか或はその當時の經濟界の狀態等の所謂環境に依つて著しく相違することは、常に目擊する事實である。そしてその人をして、種々雜多な方法を繰り返へさしめた意志の動作は、主として其の環境に原因して居ることは疑はないことであつて、或る方法に執着して失敗の度を深くすると言ふ樣な動作は、必然的規定と見るのが妥當であると思ふ。勿論轉々として方法を繰り返すと言ふ事は、僅少は其人の必然的規定に依るにしても、主として環境に依ると見て差支へは無いと思ふ。そしてそれは、また、履歷現象と其の現れを同じくするものであると言ふのである。

五

上に述べた絕緣體に於ける諸現象と意志動作等との類推的考察は、無生物的現象から人間性への考察に就て、私が今懷いて居る概念である。そしてそれは極めて不完全であつて、更に考察す可き餘地が充分に認められる樣に思ふ。然し私は、上に述べた事に依つて、絕緣體に於ける諸現象が、人間性と云ふ樣な全く異つた問題に向つて、類推性的考察が可能であると云ふ觀念を喚起することに少しでも役立つならば、それは極めて滿足する結果であるし。そうでなくても絕緣體の現象を多少でも了解して、他山の石として認めらるゝことが出來れば、それで充分なのである。

近來全く異つた現象間の類推的考察が著しく行はれて、併も極めて重要な結果を示して居るものが多い。殆んど無生物に近いアミーバーの研究から細胞の分裂が唱へられ、種の進化を生み、ダーウヰンの進化論は完成された。そしてそれは人間の生は現象の一つの現れである所の勞働問題等に類推された（改造五月號に於て福田博士はアインシュタインの相對性原理に於ける四次元の非ユークリッド世界を生み出した、ミンコフスキーの世界の一座標は時間をとつて居ることから、利用—費用—餘剩の經濟理論は利用—費用—時間—餘剩の經濟理論は、利用—費用—時間—餘剩の經濟理論でなければならない、そして時間を經驗的世界（此の名稱は福田博士の論文の內には明記してない）の一座標とすべきであるとして、價値や厚生が時間なしには論じられないことを主張して居る。

此の論文の最初に於て述べた、プランクの所謂自然法則の統一整齊と言ふ事は、總ての物理的現象を同一の規範の許に包有しようと言ふ企であつて、從ふてそこに總ての物理的現象の類推的考察の可能性を認めて居るし、更に深く總ての物理的現象

は同一範疇の許に取扱はるゝものであることの可能性を認めなければならない。また實際物理學理論の近代的發展の跡を辿れば、それはどんなにプランクの主張する方向に進みつゝあるかが首肯さるゝのである。(ヌ)現今の物理學は昔日のそれの樣に、總てが判然とした區分に置かれては居ない。熱や光や電氣は同一のものになつてしまつた。電氣と物質とは相離ることの出來ないものになつた。我々物理學者の取扱ふ對象は最早や物理的空間と、其の內部にあつて物質の組成分にある原子核と電子との個々の力學的及び電氣學的性質と、之等の集合の爲めに現はるゝ種々の性質との外にはない。そして夫等の間にエネルギーの移動する際にあらはるゝ現象が即ち自然現象の全體であると考へられて居る。

　從ふて自然法則の體系の統一と言ふ事は、架空の妄想として退ぞけることの出來ないものと思はなければならない。そして既に述べた樣な別種の事柄の間に於ける類推的考察や、私が主張したいと思つて居る無生物的現象から生物的現象への類推的考察が、可能性を少しでも認められ得るならば、私は自然法則の體系へ生物的現象をも加へることに依つて自然法則そのものに神の姿を仰視することが最も妥當であり、また最も自然な道であると言ふ意味が、明瞭に首肯される樣に思はれてならない。

　私は、我等の意志の動作がその環境に主として原因される、恰度自然の現象がその物理的條件に支配さるゝのと同樣に——ことを主張した。勿論それは遺傳とか過去の經驗とかからの必然的規定に拘束さるゝことはあつても、それは多くの場合寧ろ副作用であると考ふるのである。從ふて我等の生活は、その環境に支配さるゝことが極めて切であることが首肯かれる。されば我々は、我等の生活を向上せしめて、意義ある文化的生活を營む爲めには、其環境を如何に撰擇しどんなに轉向せしめることが必要であるかと言ふ問題に向はなければならない。私は自然の現象が何等の虛飾もない自然の條件に從ふて、極めて麗はしい姿としてそして極めて美妙なリズムを以て、私共に教へて居ることを考へて見なければならないと思ふ。自然の現象を仰視したときに、どこに汚れたる虛飾があらうか、どこに僞りの聲を聽きえようか、それは純白であり、澄んだ聲でなくて何であらうか。

我等の環境は自然の如く、しかし原始的でなければならないと言はなければならない。そこには僞はらざる藝術がある、そしてその環境に依る我等の意志の動作の現れは、自然法則の體系と同じ範疇の許に置かるるものであることに依つて、それはまた麗はしき藝術である。そこに我等の求むる科學と藝術との融合が認められる。かくして我等は、麗はしき文化の姿を仰視し、そして我等の生活は全き文化的生活として、生の誇と歡喜とが見出されるのである。

註

(一)絶緣體とは電氣を流動せしめない物質を言ふ。例へば硝子、雲母、結晶體としては水晶の如きものである。

(二)電源とは電池の如く、電氣を貯へて、それから電氣を出し得るものを云ふ。

(三)大地とは地球のことであつて、電氣を持つてゐるものを地球に繼ぐと、その電氣は地球の方へ流動して、そのものは電氣を失ふ。

(四)履歴現象とは、以前又は以前及び現在の經歴がそれ以後の事柄に影響して起る非可逆的現象を云ふ。

(五)履歴曲線とは、現象が非可逆的のものとして推移して來た徑路を表はした曲線で、一般に其の現象の始めと終りが結び付けられた曲線である。

(六)文學博士松本亦太郎氏著實驗心理學十講四四九頁

(七)仝四六四頁

(八)博文館發行最近理化學の進歩、五頁

理學博士石原純氏執筆物理學理論の近代的發展、三頁、

新刊紹介

□アンナ・カレーニナ(原白光譯)トルストイの大著アンナ・カレーニナ・を全三冊に分ち譯せる完結篇である定價二圓三十錢、新潮社發行)

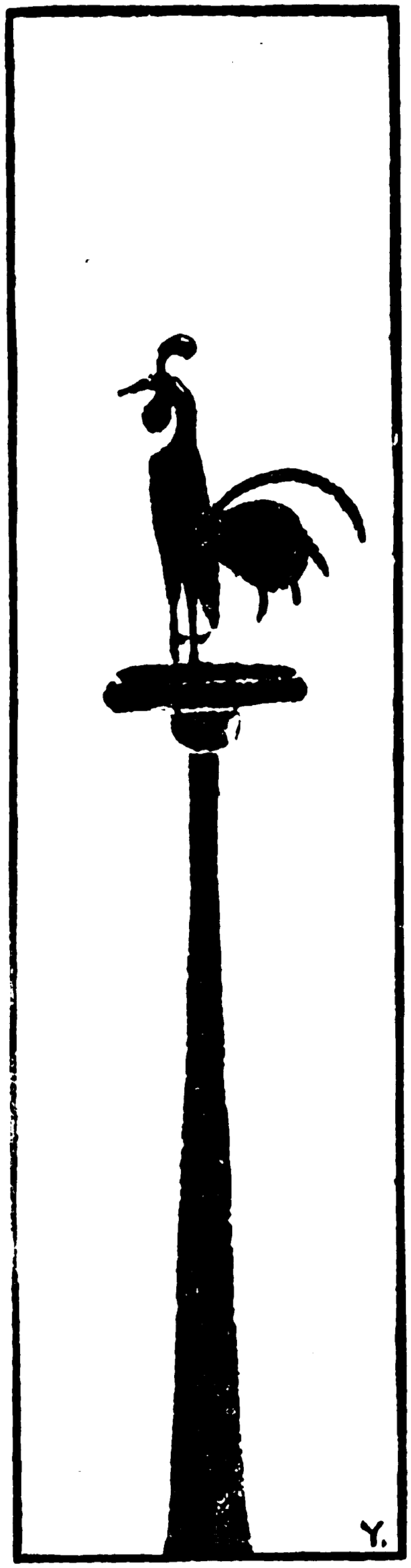
□ホイットマン自選日記(高村光太郎譯)アメリカに存する偉大な詩人ウォルト・ホイットマンの自選日記を譯したるものである(定價金二圓八十錢、叢文閣發行)

□英國文學研究(英文學會)帝大英文學會大正九年度講演及論文集である(定價金壹圓二十錢、研究社發行)

□英國米學校巡り(特田宗太郎著)戰時の英米兩國の育英の事の巡覽記である(定價金壹圓六十錢 博文館發行)

□成國民道德と個人道德(菊地謙二郎著)世論の喧囂を招ける著者の講演を錄出せるもの(定價八十五錢、新光社發行)

□豐臣氏時代丁篇(德富猪一郎著)近世日本國民史中朝鮮役の上卷である(定價金二圓八十錢、民友社發行)



産兒制限と性の考察

ハヴエロック・エリス

(次に掲げる産兒調節論の學者は、性的衛生が人生に於ける中心的な、最大重要な事柄であることを西洋文明國に知らしめた點に於て、歐米科學者中の第一人者である。ハヴエロック・エリスは其生涯を科學的な、公平な、性の研究に委ねた人で、歐羅巴、亞米利加、及び濠洲に知識と教育とを普及させると共に、一方進歩を阻害し、一般的な悲慘の原因である禁制や偏見を打破つた處の、六卷に亘る大著「性の心理」の著者である。されはハヴエロック・エリスが産兒調節を以て、文明の大なる手段とする說は、長日月に亘る[illegible]た探究と研究とに基き、事實に對する最も深い尊敬によつて支持せられ、科學及び文學に對する彼の一切の努力の特徴たる、かの公平な發見の則の上に基礎を置いて居るのである。ハヴエロック・エリスは、歐洲の有識者の中で、現在及び將來の文明の最も偉大なる啓蒙者の一人とされて居る人である。──マーガレット・サンガー)

『産兒調節』とは――數年前マーガレット・サンガー夫人及び其の少數の友人に依て發明せられ――今日一般に、性交に際して有意的に姙娠を防止することに對して用ゐられて居る名辭である。此名前は新しいものであるが、行爲そのものは新しくないどころか、恐らく極めて古いものである。世界中のあらゆる地方で、姙娠の防止を目的として居つたらしい古い習慣が發見された。けれども普通に、その目的は、姙娠の防止に依らずに姙娠の結果が成長するのを防止することによつて達せられた。廣く世界中に行亙つて、單に比較的低級な文化を有する人民の間のみならず、東西の最高文明國の間に於てさへも行はれた墮胎及び嬰兒殺しは、卽ちそれである。けれども近代に至りては、墮胎も嬰兒殺しも歎ばれぬような傾向になつた。卽ち子供が出來るまゝにして置いて、出來た後にそれを亡すよりも、受胎を防止した方がよく母親の健康に對する危害も、これによつて避けることが出來るといふことが、感ぜられるようになつた。更に亦、近代に至つては、誕生前と後たるとを問はず、若い人命の破壞に反對する人道的感情が發達した。此感情がどんな風に發達したかは明かでない。總ての近代國民は、戰爭を是認してゐる、意識的な生命はまだ持つてゐないと云つても好いようた生物を殺すよりは、戰爭といふ手段に依て、成長した人間を無殘に殺す方が遙かに恐ろしいことは云ふまでもない。けれども近代人の感情はさういふ風なので、吾々は此矛盾を意とせずに、たゞ戰爭を歡迎する人を其儘にして置くより外はない。とにかく今日、吾々が人口制限の必要を感ずるに際して、合法的に承認せられた唯一の手段であり、同時に、精力を最も節約する確實な方法は、受胎の防止、若くは『産兒調節』の他にはないのである。

産兒調節が、近來に至つて、世界中の最も緊急な問題となつたことは何故であるかといふ質問が起るかも知れぬ。産

兒調節は在來、或時々に、世界の或部分〳〵で重要な問題となつたことがあるには相違ない。人口は、時々、明白に理解せられぬ或事情のために突然増加し、その結果として國境外に溢れ出して四邊を荒廢させるか、その國境内で飢饉と病氣とのために死滅するか、又はその増加を防ぐ何等かの方法を見出すより外はなかつたことがある。けれども十九世紀の前半に至つて、此人口増加の勢は、世界中の文明種族及び彼等の支配の下にあつた、他の劣等種族の間の一般的な繼續的な傾向となつた。そして文明が齎らした狀態に適順することが出來ず、文明と接觸して却つて衰微した、文化程度の低い民族だけが主たる例外であつた。

近代社會の狀態が何故に人類の途方もない増加を來したかについては、主な理由が二つと、さほど重要でない理由が幾つかある。

第一に、近代の人道主義的感情は、人口制限の古來の手段、即ち墮胎や嬰兒殺しを抑制する傾向を作り、それが多少成功したことゝ、同時に、以前では多くの國々で年少者、特に繊弱な年少者の生命を奪つた、悲慘な生活狀態を緩和したことゝである。第二に、そして恐らく一層重大なのは、人道主義的傾向と相伴ふて——理想的境地を距ること、なほ遠きにもせよ——科學的組織と醫學衛生とが、人間の生活狀態を著しく改善したことである。數年前にインフルエンザが一度流行しただけで、大戰より以上に多くの人を殺したこと、又大抵の國々に於ては、防止し得べき嬰兒の死亡率が猶ほ非常に高いといふことは事實である。けれども世界の衛生的組織は、在來よりも遙かによくなつて居る。生命と健康との保健狀態は、一世紀以前とは比較にならぬほど、改善せられて居る。以前は何千何百萬人と殺さずには已まなかつた多くの流行病が、今日では全然絶滅したり、又はさほど甚しくないものになつて居る。近代的な運輸の方法を以てすれば、在來は不可能であつたような遺方で、飢饉に對抗し、それを防止することも出來る。東西を通じて、曾ては何

世紀もの間、人口を殆ど靜止的な狀態に留めておいた力が、忽ちにして一掃せられた。此科學的近代化の過程の意義を日本に於て力說することは不必要である。

斯樣に、在來の狀態の下に於ても、人口制限の方法を採ることが望ましく、時には必要でさへあつたこともあり、さういふ方法を採らぬ場合には、自然が人口制遏の、無慈悲な、殘酷な方法を用ゐたこともあるのであるが、周圍の狀態が人類の蕃殖に極めて好都合となり、さういふ蕃殖に備へる土地が少く、人間の生活資料が缺乏してゐる今日に至つては、人口制限に關する有意的な人爲的方法が、昔より遙かに必要なのである。有名な米國の科學者イー・エム・イースト教授は、若し近來の增加率が繼續するならば、合衆國の人口は、一世紀足らずの內に一億を超過し、生存競爭は吾々の想像し難いほど、激烈を極めるであらうといふことを最近に陳述した。高度の出生率が、無智や疾病や極めて高い死亡率に依て無効にされてゐるために、人口が久しく靜止狀態にある支那のことをも、吾々は考へることが出來る。けれども支那が科學的に近代化せられ、教育が普及し、衞生的組織が一般的となり、その結果として人口が、合衆國又は日本と同じ率で增加するとしたらどうだらう。然し、斯樣な高度の出生率は到底維持されるものでなく、一世紀に遠く及ばぬ中に、自然が殘酷な、荒廢させる方法を振ふか、又は人類が必要なだけ徹底的に、人口制限の有意的な方法を適用するほどに賢くなるか、どちらかであらう。科學的にして同時に人道的なるその方法としては唯一つあるのみである。それは卽ち產兒調節である。

產兒調節の方法は、明らかに人爲的であり、有意的なものであるには相異ないが、それが不自然と呼ばるべきものでないことは記憶して置かなければならない。それは自然それ自身も、より高等な動物の場合ほど、緩漫な、無意識的なそして大ざつぱな方法で行ふた順應の作用を、意識的に、敏活に、そして注意深くに應用したものに過ぎないのであ

る。下等動物の場合には、極めて多數の有機體が生産されて、僅かに其一部分が生存するに過ぎない。高等動物の場合には、生れる子供は少數であるが、その中の大多數は生存する。鯡は一時に七萬の卵を生むが、人間の女で一時に一人以上の子を生む者は稀である。けれども鯡の子は魚類や鳥類や人間のためにあらゆる方面から襲はれるに引かへて、人間の子供は、長い懷胎期間や乳兒時代や子供時代を通じて、注意深く保護せられて居る。此兩極端の間には、ありとあらゆる段階があるが、そのあらゆる段階を通じて、進化の度に隨つて、個體を益々尊重し、個體を少く生むと共に、個體の質を改善し、その生命維持に努める傾向は一貫して居る。されば、吾々が愼重な産兒調節を行ひ、家族の大さを嚴密に制限するのは、自然が何百年間かゝつて、徐々に、覺束なく、其意識的に求めて來たことを、有意的に、且つより高い進化の度にあてはまるように行ふてゐる譯である。

此自然的過程は人間の間にも猶ほ行はれて居るらしい。多くの學者は低い出生率は、高度の文明の自然的産物であつて、それは家族を制限しようとする努力とは全然無關係に働くものであると主張して居る。或點に於ては歐洲中の最高文明國民とも考へらるゝ佛蘭西人の間の出生率の低下は、産兒調節の方法が未だ知られなかつた十九世紀の初頭に始まつた、といふ説もある。此説に確證を與へることは困難であるし、是は或は根據のない説かも知れぬ。けれども吾々は文明の結果として高度の神經的發達を遂げた（そして文明とは畢竟此事を主として意味するとさへ云ふことが出來よう）人々は、たとへ自ら子供の多からんことを望んでも、容易にそれが得られないものであることを知つてゐる。高度の文明國民は、此點に於て、高度に文明化した個人と酷似して居ると云つて差支ない。のみならず、低い死亡率は、高級文明の最も確實な伴侶の一つである。（佛蘭西人の高い嬰兒死亡率は、個々まだ彼等が高級文明國民と稱するに足ぬことを示してゐる）。何故ならば、其成員を適當な健康狀態に置くだけの智力のない人民は、高級文明人とは云ひ得ないか

らである。英國では、一世紀前から見れば、個人の壽命は十年間を增した、(平均四十一歳が五十一歳となる)、そして其半世紀の間に、此個人の壽命の延長に伴ふて、十九世紀前半の特長であつた過度の繁殖力が減退し、且つ家族の收入を增すための小兒勞働も亦、減少したのである。本年度の調査によれば、大英國の最近十年間の人口の增加は、在來の記錄に比例のないほど低く、僅かに四分七厘であることを示して居る。是は大戰の結果だとされて居るが、大戰に依る損失は他の方法——移民の休止、健康の改善等——に依て補はれて居る以上、增加率の低下は、動かすことの出來ぬ低下的傾向の一部と見なければならぬ。何故ならば、十年以前に遡つて見ると、此前の調査も亦、それ以前の記錄に例のない最低のものであつたことが見出されるからである。佛蘭西、亞米利加合衆國、加奈陀、ニウ・ジーランド等、他の國々で最近に行はれた調査も亦、大抵同樣の傾向を示して居る。濠洲及び南亞弗利加の如く、猶ほ人口の增加し得る餘裕ある一二の國々——但し是とても一時的の現象に過ぎない——の外、文明が高まるに連れて、出生率の低下するのが一般的傾向である。

近頃シー・イー・ベル氏は其著『出生と死亡の法則』の中に、有意的な産兒調節は、斯樣な傾向に殆ど何等の影響をも與へて居らぬこと、且つ是は下等な生活と劣惡な狀態とは、生殖力を增すると共に死亡率をも增加せしめ、高級な生活とよき環境とは——生活改善を促進して一般に文明を進歩させる原因である、高度の神經的發達と相伴ふて——生殖力と共に死亡率の減少をも齎らすといふ、自然律の結果であると主張して居る。良種の馬は繁殖力の少いことも、文明の進歩に伴ふ出生率の減少並びに死亡率の減少と、全然同じ種類の現象である。故に吾々が出生率を低下せしめようとして働く時、吾々は取りも直さず、自然の遣る通りに、文明の水準を引上げるために働いて居る譯である。ベル氏でさへも、有意的に出生率を調整しなければならぬと信じて居る。吾々は、盲目的に働く所の自然にのみ、此過程を一任し

て置く譯には行かない。吾々は自然の過程を指導して、可能なる限り、最も劣弱な者には、なるべく繁殖させぬようにし、量に於ては種族の増加を緩漫にすると共に、質に於てはそれを改善するように努めなければならぬのである。

斯様に吾々が今や偉大なる自然的事實に當面して居ることを信ずるならば、人類の質を改善する上に最も重要な自然的過程を、さほどの困難や浪費を經ず、より秩序的に、より有効に遂行する企てとして、産兒調節の意味を一層十分に解し得ることが出來る筈である。或國民の資質を吟味する試練の一つは――それは必ずしも最良のものでもないかも知れぬが、異常に激烈な試練法である――戰爭の崩壞力によく對抗し得る能力如何である。最近の大戰中に於ける歐洲の諸國民の運命を調べて見れば、その結果は教訓に富むで居る。戰爭の勃發と共に、最高の出生率をもつ歐洲諸國即ち露西亞、ルーマニア、ブルガリア、セルビア、匈牙利、伊太利、墺太利、西班牙、芬蘭、獨逸は衰亡の兆を示した。此中には、戰爭のために極度の悲慘に陷つた國々が網羅されて居ることは云ふまでもない。のみならず、此中には、戰爭のために重大な禍害を被らなかつた協商列國ははいつて居ないのである。更に亦、特に最高の出生率を有する最大のそして最も人口の多い國に、極端な軍隊の頽廢が先づ起つたことにも注意せねばならぬ。して見れば、高度の出生率は戰爭のために有利などころか、却てその邪魔になることが分るのである。高度の出生率とを結合させなければならぬと主張する向もあらう。然し高度の出生率を有する國民は、能率の高い狀態には居らぬ。高度の出生率は未成熟か、不完全な文明か、一般的な無能の表徴であるか、又は（希臘人の時代から時々あつたように）急激な産業的膨脹の結果としての、一時的の現象であるか、どれかであつて、さういふ場合には、強固な政府のある國に於てさへも、能率は低く、勞働時間は長く、小兒勞働や、社會的悲慘や、無産階級の間に於ける不安や墮落や、乳兒及び小兒死亡率が高いのを常とする。

産業的膨脹と伴ふて、近年の日本には、かういふ傾向が多く見られた。出生率が低下するのと正確に同じ程度に

能率の增進することは確かである。有名な獨逸の經濟學者ロツシャーは、久しい以前に、高度の文明國の、文化程度の低い國に對する優越の主要原因は、先見の明に富むことゝ、婚姻と出產とについての自御力にあると述べたが、吾々はこの彼の言葉を以て結論としたいと思ふ。

斯樣に世界中を見渡せば、出生率低下の傾向が、有意的な調節の結果であるかないかに拘はらず、國民にとつても種族にとつても有利なものであることを窺ふことが出來るのである。或強い國民が、一度び過度に蕃殖する時代を通過することはあるにもせよ、最も強い國民は、最高の出生率を有する者でなく、最も弱い民族は、高い出生率を有するのである。のみならず、出生率の低下は、周到な選擇的努力の結果でない場合ですら、單に國民の資質を高めるのみならず國民を形成する個人の資質をも高めるように思はれる。是は和蘭で明白に認められた。けれども產兒制限によつて、それが與へ得るだけの十分な利益を得んがためには、優生學的目的に添ほうとする有意的な調節を行はなければならないのである。產兒調節が、まづその方法を知る有識な、優良階級の間に必ず行はれて、無智な、無頓着な、資質の劣る人々は幾らでも生むがまゝに放置して置かれるといふことは、當てずつぽの產兒調節に對して常に放たれる批難である。產兒調節の初期に於ては、是は已むを得ないことである。けれども、產兒調節が絕えず、益々廣く且つ下層階級の方に行はれて行くことは確かで、結局これは殆ど一般に普及するに相異ない。斯樣にして是が一般的となり、高尚な社會的責任感が、遺傳上立派な種族を生產するに適しない階級や個人の蕃殖を大部分防止するようになつたならば、病弱な身體で無考へに生殖する、あとの少數の人々を制遏することは容易であらう。

種族や國民を離れて、家族及び個人の問題になると、產兒調節の問題は遙かに單純なものとなる。國民的問題としての產兒調節は、政治問題と絡まり合ふことが多く、種族的問題としての產兒調節は、今なほ不明の所も無いではない譯

傳的傾向の優生學的研究と確かに結びついて居る。けれども何人も、家族及び個人にとつての産兒調節の利益を理解すること出來るのである。歐洲に於ては、さういふ利益が、醫師の間に於てさへも、未だ十分に信ぜられて居らぬことは事實である。深く過去に根ざしてゐる偏見や、あらゆる種族の迷信や、人によつては、有害な新發明若しくは一時流行とさへ思ふ恐怖のために、もつとよくこの事を知らねばならぬ人々が、間違つた意見をもつてゐる。少し前に（一九二一年八月）倫敦の英國醫學雜誌上で、産兒調節について闘はされた長い討論は、産兒調節に對する贊否が相半ばしてゐることを示した。但し否定論者の方は不得要領であつたり不徹底であつたり、その論據が薄弱であつたりはしたが。

産兒調節の方法が健康に有害であるといふ假説は大に主張された。其等の方法が、有害に使用されることもあり得るのは確かに事實であるし、――殆ど何事にもさういふ弊害は伴ひ得るのである――またその方法に依ては、害を伴ひ易いことも事實である。何等の人爲的な道理をも必要としないので、最も一般的に、そして最も古くから行はれてゐる、かの×××××××方法に、特にさういふ傾向がある。多くの醫者は、かような行爲の結果としての生殖作用の遮止と、其れに伴ふ男女双方の不滿足とが、神經性疾患の原因となることが多いと主張して居る。これはいかにもさうありさうなことである、けれどもそれは此方法の必然の結果ではないこと、又あらゆる産兒調節の方法の中で、此方法が最も一般的なものであることを考へれば、かようなことが、この方法の一般的な結果だとさへ云はれぬことを附言する必要がある。のみならず、×××××××××××××、××××××××××××××××××、×××××××××××××。×××××××××××××××××。××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××」此中の孰れも、時として受胎を豫

防し損ずることはあるが、有害なものは一つもない。どの方法をも批難する批評家があるにはあるが、經驗ある醫者其他の人々から見れば、其れは根據のない臆説である。

けれどもたとへ姙娠防止の方法を使用――といふより寧ろ濫用するといふべきであらう――することの結果としての弊害や時々起る障害が、實際起る場合よりも遙かに重大なものだと假定しても、其等は姙娠の防止を怠つたがための、健康にさへ及ぼされる有害な結果とは到底比較にならぬことを忘れてはならぬ。是等の危害をまづ蒙るものは母親である。妻としての職分を滿たすには相應に適して居つても、母となるに適當な健康、體力、又は健全な遺傳をもつてゐない婦人は澤山ある。いかに激烈な産兒調節の反對論者でも――母たるに適せぬ程度については種々の意見があるにせよ――或婦人達の場合には確かに左樣であることを認めて居る。けれどもさういふ婦人に對して、避姙の適切な方法を敎へて居る國が幾つあるであらうか。さういふ婦人らが、偶々十分な敎育を受けて社會の上流に位して居るのみならず、特に並以上の智力を有する者でない限り、取返しのつかぬことにならぬうちに、其方法を知ることは少ないのである。

婦人の中には、若しその夫が子無きことに甘じさへするならば、妻たることには一向差支なくとも、母たるには不適當な人々があり、さういふ人々にとつては、産兒調節は最も重大な道德的責任である。けれども大勢の子供の母となるに適した婦人は更に僅かしかゐない。隨つて總ての母親が、其子供の數を制限し得る智識をもつことは望ましいことである。

大抵の婦人が二人乃至三人位の子供をもつことは望むらしい。然しそれ以上の子供をもつことを望へ、又はそれを切望しさへする婦人は、通例知力が劣つて居り、自然、單なる産兒の機械としても能率が低いのである。彼等の能率が低いのは、普通の婦人が、近代の社會に於て子供を育てる上に必要だと信ぜられてゐる一切の注意や庇護を、多勢の子供に十分に與へることが不可能であるといふ點からばかりでなく、母親がその體力の恢復に必要なだけの期間を出産と出

産との間におかぬ時、餘りに早く受胎されたる子は質が劣るといふことが認められて居る以上、彼等は産兒の機械としても能率が劣る譯である。斯の如く、單に子供の數を制限するのみならず、相當に間をおいて生れるようにすることも、産兒調節の重大な職分の一つとなつてゐるのである。

是等の單純な基礎的な原則は、彼方此方の少數の醫者及び哲學者仲間の先覺者によつて、二千年以前に既に認められて居つた。勿論今日に於ては、さういふ教養が普及し始め、それに對する理由も一層十分に理解せられ、且つ一層科學的に證明することが出來るようになつて居る。然るに今猶ほ、東洋にも西洋にも、文明國と稱せられるものゝ中にすら至る所に、際限のない慘害の鎖が、無鐵砲な、無考へな出産と相結合して居らぬ所はないのである。社會的に優越な階級に於てはともかくも――民衆の中に於ては、何處に於ても、婦人は間斷なき出産のために壓迫せられ、その青春を滅ぼされ、段々殖えて來る仕事と、その事だけに思想を固定させてしまふ退屈な器械的な生活に追はれながら、貧困に呪はれて行くのである。さういふ生活の悲慘な一分仔什は多くの官廳の出版物に平氣で記載してあるが、それを讀む位氣の沈むことは無いのである。

けれども或一點に於て、今日の婦人は、その運命を宇宙の一定の組織の一部分として甘受して居つた前代の婦人とは違つて來て居る。彼等は自分から進んで何の努力をせずとも、婦人に對して男子と平等の教育、職業、自由、及び責任を齎らした所の、今や世界中にその勢力を伸張しつゝある十九世紀の大運動の影響を蒙つて居る。婦人の精神的眼界は擴まり、そのお陰で個人的には何等の知識的擴大を經驗せぬ婦人でも、眼界の擴まつて來た。總ての婦人は、單に子供を生んで育てゝ、家庭の世話をするより以外に、世界には他にいろ／＼の事があるといふことを感じ始めた。同時に彼等は子供を欲しがりもして居ようが、夭死する子供をもつためにその力を費して、目的のない産兒事業の奴隸にはなりたが

つてゐないのである。婦人は、彼等が必ずしも奴隷にならずとも濟むこと、或遁れ路があることを知り始めて來たのである。彼等は、今日と異つて、母性が禍である代りに、福祉となり得ることを知るやうになつたのである。

産兒調節が婦人を大に自由にし得ることは疑を容るるまでもなく、随つて何處でも婦人が其方法を學ぶのに熱心なことも驚くに足りない。けれどもこれは、彼等の子供等にとつても同じだけの——といふより、寧ろより以上の——意味をもつて居るのである。多産のために苦勞する子供の數は、必然的に母親の數よりも多い、そして子供の場合には、苦勞は、大人の場合より一層激しく、一層遺憾なく感ぜられる、特に最も惡いことは、子供の苦勞が長く續く時は、最も幸福な狀態の下に於てさへも消すことの出來ぬ傷痕を心身に留めることである。さういふ子供らのかなり大部分が死ぬことは事實であるが、多勢死んだあとでさへ、一家族についての生存者は、もつとよく生れついた、小人數の幸福な家庭の子供よりも多いのである。随つて國民は、心身ともに貧弱な、劣等な分子から主として構成されることになるのである。

無鐵砲な、無制限の蕃殖が婦人と子供との健康、幸福、及び生命をも亡すとすれば、それは男子にも有害な影響を與へることは疑を容れない。男子はその眼の前に若い妻がずん／＼萎びて行くのを目撃するのみならず、また單に子供らのうちに滿足を見出すことが不可能であるのみならず、この多勢の、病弱な、ゴダ／＼した一家を支へて行くことが、彼にとつて堪へ難い重荷となるのである。一般に大家族の多い社會狀態の下に於ては、家内中、即ち子供も母親もみな共に仕事に出るのが常である。けれどもこれが通則となつてゐる社會では、一家の收入が、より良き狀態の上に於ける男子一人家の一家の收入にも足らぬほど賃銀が廉くなり、それと共に他の總ての方面における損害は、一家にとつても全國民にとつても、到底算卅することが出來ぬ程度に達するのである。當然大人の仕事である賃銀勞働に、子供が幼時

から服さねばならぬような所には、斷じて眞の文明は存在し得ない。若し人間の文明が動物進化の最高點を代表するものとすれば、最初からの一切の進化の傾向は、幼兒時代及び少年時代を延長し、成人の職分の始まる時期を延ばす方に向つて居つたことを認めなければならぬ。多くの原始的有機體の場合には、生存し始めるや否や、既に成熟して居るに引かへて、高等動物類に於ては、成年期が來るまでには相當の時日を要するし、人類に於ては緩漫な發達が特に著しいのである。故に吾々が子供に對して成人の職分を課し、少年時代の期間を短縮する時、吾々は畢竟、進化の幼稚な時代に人間を逆戻りさせてゐる譯である。

婦人の場合には、問題はまた趣を異にして居る。婦人も男子と同じ立場に立つて働く自由をもたねばならぬこと、最近まで男子の獨占であつた仕事の方面に於ても働く自由を持たねばならぬことは、廣く認められるようになつて來た。西洋に於けると等しく、東洋に於ても此事實が廣く承認されかけて居る――これは、これに伴隨する一切の事柄を考へて見れば、非常に重大な意味のあるものである。例へば男尊女卑が古い傳統に深く根ざしてゐる印度に於てさへも、サクールダヤナンダの新しい世界的福音は、男女の完全な平等を熱心に主張して居り、日本に於ては、理論はどうあらうとも、現に多くの產業は主として婦人によつて行はれて居るのである。けれども婦人は働く自由をもたねばならず、特に男子と同じ立場に立つて働く自由をもたねばならぬにもせよ、婦人が結婚後、自己と家族とを半餓死の狀態から救ふために働くことを絕對に强制されることは、決して望ましいことではない。子供を生み且つ育てることそれ自身が既に仕事である、のみならず、それは文明社會に於ては、熟練を以て行はれる種類の仕事でなければならぬのである。

婦人が婦人特有の仕事に携はつてゐる間に、同時に男子特有の仕事に携はつたならば、その結果は彼女自身、其子供及び種族にとつて餘りに高い犧牲を拂はされることゝなる。婦人がもしそれを行はうとするならば、彼女は野蠻人の生

活に附隨する自己防衛の方法をもたずに、野蠻人の生活狀態に逆戻りするものである。其結果は今や文明の頂點に在ると考へられて居る諸國に於てさへも、男子の仕事をするように訓練せられて居る婦人は、婦人の仕事であり、同時に未來の種族を創造することであるが故に、あらゆる仕事の中で最も重要な任務である仕事――を遂行する場合に、能率の點に於ても、熟練の點に於ても、野蠻人の女子に遠く及ばないことになつたのである。

此通り、個人及び家庭に對する關係から產兒調節の問題を考へて來ると、最後には再び最初の出發點、卽ち國民及び種族の利害といふ問題に返つて來る。吾々の最も重大視するものが、個人であるにせよ、社會であるにせよ、孰れにしても產兒調節の問題を閑却することは出來ないのである。

今私がしたように、現代に於ける產兒調節の必要を力說する者は、とかく、人類の一切の禍害を救治するといふ保證つきの、事實特許の妙藥をもつてゐると自惚れてゐる好事家のように思はれがちである。けれども實は左樣でない。人間の幸福と人間の社會組織の事業とを維持し、更に其等を遂行するには、非常に多くの精神的及び物質的事物が必要である。けれども現在に於ては、其組織の一部分――人間として生殖し且つ生存せしめ、更にそれを刺戟さへする部分――が、近來それと等しく必要な、文明の他の諸部分と釣合がとれぬほどに發展してしまつたのである。現在に於ては、人間は生活狀態を改善する暇のないほど、急速に蕃殖して居る。人間は自分の家を建てようとして居るのであるが、彼が死物狂ひの働きも追付かぬほど、家族が急激に殖えて行くのである。そこで今日、人はいかなる種類の仕事を人生の主要目的とするにせよ、それについての必須の先行條件は――決して仕事の全部ではないが、その先條行件は――蕃殖に調節と制限とを加へて、最も優良なるもののみを產出しようとする適當な注意であることを認めねばならぬのである。

ness. So it becomes reasonable and inevitable that, whatever kind of activity men put before themselves to-day as the chief aim of life, it is necessary for them to recognise that an essential preliminary condition—by no means the whole of the activity but yet a preliminary condition—is the control and limitation of procreation and a due care to breed only the best.

While a woman is engaged in this special woman's work she cannot, except at too high a cost to herself, her child, and the race, at the same time carry on the special work of man. If she attempts to do so she is returning to the conditions of savage life, but without the possession of the safe-guards which savage life offers. The result is that even in the countries which are now considered to be at the head of civilization, the women who are trained to do men's work are often found to be incomparably less efficient, and even less skilled, than savage women in doing women's work, and work which is the most important of all work because it is the creation of the future race.

We see that when we consider birth-control in relation to the individual and to the family we are in the end brought back to the point from which we started, the interests of the Nation and of the Race. Whether we regard the individual or society as the chief object of our care we can in neither case neglect the question of birth-control.

Those who point out—as I have here done—the great importance of birth-control in the present stage of the world's history, are apt to be regarded as faddists who suppose that they possess a patent medicine warranted to cure all the ills of mankind. That is not so. A great many things, spiritual and material, are needed to maintain, and, still more, to carry forward, human welfare and the tasks of human social organisation But it so happens that, at the present time, one part of that organisation—the part that permits and even stimulates human beings to breed and to survive—has of late been carried beyond other equally necessary parts of civilization. So that at the present time man is growing more rapidly than it is possible for him to make the conditions of life grow. He is trying with frantic hurry to build himself a house, but his family increases with a rapidity to which his frantic efforts cannot keep pace. The result is confusion and wretched-

while the loss in all other respects alike to the family and to the nation may be beyond calculation. For there can be no real civilization where the child is forced at an early age to undertake those tasks of wage-earning work which are the proper business of the adult. If human civilization is to represent the highest point at which zoological evolution has arrived, we have to recognise that the whole tendency has been from the first to prolong infancy and childhood, and to postpone the period at which adult functions begin, so that while among many primitive organisms the animal is an adult almost as soon as it begins to live at all, among the higher mammals many years must sometimes elapse before the adult stage is reached, and this slow development is specially marked in man. When, therefore, we impose adult functions on our young, and so shorten the period of childhood, we are in effect pushing man back to earlier stages of evolution.

With regard to women the question is not quite the same. It is becoming widely recognised that women ought to be free to work on the same terms as men, and even free to enter those sphere of work which have until recently been exclusively reserved for men. This recognition—which in all its implications is of immense significance—is spreading over the East as well as the West. Thus even in India, where the inferiority of women is so deeply based in ancient tradition, the new world-gospel of Thakur Dayananda asserts emphatically the complete equality of men and women, while in Japan, as we know, whatever the theory may be, in actual practice many industries are now mainly carried on by women. But while it is desirable that women should be free to work, and to work on the same terms as men, it is not desirable that women, aften marriage, should be absolutely compelled to work in order to save their families and themselves from semi-starvation. The bearing and breeding of children is itself work, and work, moreover, under civilized conditions, which must be of a skilled kind.

slaves to aimless child-breeding. At the same time they are also beginning to see that is not inevitable that they should be slaves; they are learning to know that there is a way out. They are being enabled to learn that motherhood, instead of being, as it too often is to-day, a curse, may become a blessing.

There can be no doubt that birth-control offers a prospect of immense deliverance to women, and it is not surprising that they are everywhere so eager to learn its methods. But it means as much—or rather, it should be said, it means much more—to their children. The children who suffer are necessarily more in number than the mothers: suffering is to children more overwhelming and more seemingly hopeless than to adults, and, worst of all, the sufferings of children, if prolonged, leave scars on their souls and bodies which, even under the happiest conditions, can never be obliterated. It is true that a large proportion of these children die, but even then the survivors per family tend to be more numerous than the members of smaller and happier families that are better bred. So that the nation tends to become largely composed of its feebler elements, impoverished in body and soul.

If the results of reckless and uncontrolled procreation destroy the health and happiness and even the lives of both women and children, they cannot fail to be disastrous also to men. Not only must men see their young wives swiftly fading before their eyes, not only is it difficult for them to find any satisfaction in their children, but the burden of providing for this large, sickly, and carelessly managed household becomes almost intolerable. It is true that under the social conditions in which large families are common the whole family, the children as well as the mothers, tends to go out to work. But in a society where this is the rule wages sink so low that the gains of the family may not equal the gains of the man alone under better conditions,

intervals between their births.

These simple and fundamental principles were understood by a few enlightened physicians and philosophers, here and there, as long as two thousand years ago. To-day no doubt such teaching has begun to spread, and the reasons in favour of it are better understood and more scientificially demonstrable. Yet there are no countries, not even the countries which we commonly regard as civilized, in the West or in the East, where we may not see on every hand the endless chain of evils which is, connected with random and reckless motherhood. Everywhere among the masses however it may be in the socially superior class-women are crushed by the weight of perpetual maternity, their youth destroyed, condemned to poverty amid increasing work, in a weary routine on which all their thoughts must be monotonously fixed. The detailed misery of such lives is calmly recorded in many official publications, and there is no more melancholy reading.

Yet in one respect the women of to-day are beginning to differ from the women of previous generations who accepted their fate as part of the regular system of the universe. They are being touched, even without any effort on their own part, by the great movement of the nineteenth century, now extending its influences all over the world, which has brought to women ever more equal rights with men, to education and to work and to freedom and to responsibility. The mental sphere of women has become enlarged, and that enlargement benefits even those women who cannot be said to have personally experienced any mental enlargement. All women are now tending to feel that there are other things in the world for them to do besides only breeding and bringing up children and looking after the home. At the same time they may be eager to have children; but they are not eager to be having children always or to waste their strength in having children who are doomed speedily to die, so becoming mere

is the mother whom these evils first strike. There are many women who are equipped in a fairly adequate manner to fulfil the functions of wife, but who do not possess the health, or the strength, or the sound heredity, to be justified in becoming mothers. Even the most resolute opponents of birth control admit that this is true of some women, though there may be a difference of opinion as to the proportion. Yet in how many countries is due care taken to instruct such women in the proper methods of avoiding conception? Unless they are not only well educated and of good social position, but also of more than average intelligence, it is seldom that they ever do learn, unless perhaps when it is too late.

There are some women, therefore, who are unfit to be mothers, but may well be permitted to be wives, if their husbands are content to be childless, and for these birth-control is an imperative moral responsibility. But there are very few women who are fit to be the mothers of a large number of children, and therefore it becomes desirable that all mothers should possess the knowledge which would enable them to limit the number of their children. Most women, it is probable, would like to have two or three children; those who are desirous, or even willing, to have more seen usually to be of rather inferior intelligence and so to be inefficient even as breeding-machines. They tend to become inefficient not only because it is scarcely possible for an ordinary woman to bestow on a large family of young children all the care and attention which under modern conditions it is believed children ought to receive, but because they cannot be efficient even in mere child-production, for it is now recognised that unless the mother allows a sufficient interval between the births of her children, in order to recuperate her own strength, the child thus prematurely conceived tends to be inferior. It thus becomes one of the great functions of birth control not merely to limit the number of children but to space out the

flimsy.

Much has been said of the supposed injury to health of the methods of birth control. It is certainly true that they may sometimes be used injuriously—that is true of nearly everything—and it is also true that some methods may easily be injurious. This may especially be said of the method of .... , a common and ancient method because it involves no artificial appliances. It is considered by many physicians that the interruption of function thus caused, and the incomplete satisfaction of both parties which may follow, is a frequent source of nervous troubles and disorders. This is quite probable, but it must be added that it is by no means a necessary result of this method it may not even be a common result if we bear in mind that of all the methods of birth control this is the most general. ....

....

....

....

....

....

....

............................; neither of these methods should lead to any harmful results, although all methods occasionally fail to prevent conception. There are, also, critics who find fault with every method, but, in the opinion of experienced physicians and others, without just grounds.

Yet it must always be remembered that, even if the disadvantages and occasional disturbances due to the use—or perhaps, rather, it should be said the abuse—of the methods of preventing conception were much more serious than they are, they could not be compared with the evil results, even to health, of the neglect to practise such prevention. It

evident that there must be a control deliberate directed to eugenic ends. For it is an objection to random birth-control which has often been pointed out that it necessarily first appears among the more highly intelligent and better social class which thus learn to practise their own limitation, while the more ignorant and careless members of inferior stocks are left to produce themselves freely. It seems inevitable that this should be so in the early stage of birth-control. But it must be noted that the practice constantly tends to spread outwards and downwards, and eventually must become almost universal. When it has thus become general, and when a high social responsibility in large measure prevents the procreation of stocks and individuals who seem to be hereditarily inapt to produce a sound race, then it will be easy to apply pressure to the small remaining minority who recklessly continue to reproduce their own feeble and diseased selves.

When we turn from the race and the nation to the family and the individual, the problem of birth control becomes much simpler. The national problem of birth-control often seems to be entangled with political considerations, and the racial problem of birth-control is certainly associated with the eugenic study of hereditary tendencies which are not yet completely underestood; but all can grasp the advantages of birth control for the family and the individual. It is true that in Europe the reality of those advantages is not always accepted, not even among doctors of medicine. Prejudices deep-rooted in the past, superstitions of all kinds, the dread of what seems to some a pernicious novelty, or even a mere fashion of the moment, still distort the opinion of many who ought to know better. A prolonged discussion on the subject of Birth Control which took place not long ago in the London *British Medical Journal* (August 1912) showed about as many opponents of birth control as there were advocates, although the facts of those who took the negative side were vague or disputable and their arguments

far the highest birth-rate, was precisely the country in which complete military collapse first took place. So that, far from being a help in war, a high birth-rate may rather be said to be a hindrance. It may be argued that the high-birth-rate must be combined with efficiency. But the nation with a high birth-rate is not in a state of efficiency. The high birth-rate is either a mark of immaturity, defective civilization, and general inefficiency, or it is (as it has sometimes been even from the time of the Greeks) a passing phase due to a sudden industrial expansion, and then, even in a country with a strong government, we are certain to find inefficiency, excessive hours of work, child labour, social misery, unrest and degeneration among the proletariat masses, together with a high death-rate in infancy and childhood. Much of this has been seen in Japan during recent years in connection with industrial expansion. Exactly in the degree in which the birth-rate declines we are certain to find efficiency increasing. We may conclude with a distinguished German economist, Roscher, who stated many years ago that the chief cause of the superiority of a highly civilized state over lower stages of civilization is a greater degree of forethought and self-control in marriage and child-bearing.

Thus we see, when we look around the world, that the tendency of a falling birth-rate, whether or not it is to be assigned mainly to deliberate control, is beneficial, alike to the nation and to the race. The strongest nations are not those with the highest birth-rates, even though a strong nation may pass through a phase of excessive fertility, and the feeblest nations have a high birth-rate. Moreover, a declining birth-rate, even when not guided by any deliberate effort of selection seems not only to be accompanied by high quality in the nation but also to the individuals composing the nation. This has been definitely noted in Holland. But in order to derive from the limitation of offspring the full beneficial effect on the race which it is able to yield, it is

together with the high nervous development which encourages such improvements and progress in civilisation generally, leads to decreased fertility as well as to decreased mortality. The diminution of fertility in the high bred horse is a phenomena of exactly the same kind as the decreased birth-rate and the decreased death-rate which accompany advance in civilization. When therefore we work to lower the birth-rate we are working on the lines of Nature, to raise the level of civilization. For even Mr. Pell believes that we must seek deliberately to regulate the birth-rate. We cannot afford to leave the process entirely to Nature who works blindly. We have to direct the natural process and seek so far as possible to ensure that the feeblest stocks are most discouraged from procreation, so that we may be able while slackening the increase of the race in quantity to improve it in quality.

If we may believe that we are thus in presence of a great natural fact we are the better enabled to grasp the significance of birth-control, as simply the attempt to carry on in a yet more orderly and yet more effective way, with less friction and waste, what is essentially a natural process for improving the quality of the human race. One of the tests of the quality of a nation's human texture—it may not be the best but it is a singularly drastic test—is the ability to withstand the disintegrating effects of War. If we examine the fate of the various European nations during the recent Great War the results are instructive. On the outbreak of the War, the European countries with the highest birth-rate were in descending order. Russia, Rumania, Bulgaria, Serbia, Hungary, Italy, Austria, Spain, Finland, Germany. Now it is obvious that this list includes all the countries which have met with overwhelming disaster in the War. Moreover, it includes no belligerent country which has not met with serious disaster in the War. We may further note that the largest and most populous country, that with by

to resemble highly civilized individuals. Moreover a low death-rate is one of the most certain accompaniments of high civilization (the high infantile mortality of the French is a point at which they fall short of high civilization), for, obviously, a people which has not the intelligence to keep its members in a reasonable state of health can scarcely be regarded as highly civilised. In England the individual's expectation of life is ten years more (51 years instead of 41 years) than it was half a century ago, and during that half century this progressive vitality of the individual has been steadily accompanied by a decrease in the excessive fertility which marked the early part of the Nineteenth Century and was associated with the passing phase of child labour to add to the family income. The Census held this year showed that in Great Britain the increase during the last decade is only 4.7 per cent., the lowest yet recorded. This has been attributed to the Great War but that loss has been compensated in other ways—by absence of emigration, improved health, etc.—and the decline in rate of increase must be recognised as part of a steady onward movement: for when we go back ten years we find that at the previous Census the rate of increase was also the lowest so far recorded. So it is also in most of the censuses that have been recently taken in other countries, in France, in the United States of America, in Canada, in New Zealand. Except in one or two countries, like Australia and South Africa, where there is still ample space for the population to expand and this phenomenon can be but temporary-the general tendency is for the rate of births to fall as the rate of civilization rises.

Lately it has been argued by Mr. C. E. Pell in his book, *The Law of Births & Deaths*, that deliberate birth control has scarcely any part at all in this process, but that it is really due to a natural law by which low living and bad conditions produce increased fertility as well as increased mortality, while better living, and a good environment,

unconscious, and rougher methods. In the lower animal stages, a vast number of organisms are produced and only a small proportion of them survive; in the highest animal organisms few offspring are produced but the majority of them survive. A herring may produce 70,000 eggs at a time; a woman seldom produces more than one at a time. But while the young of the herring are preyed upon from every side by fishes and birds and men, the human young are carefully protected during a prolonged gestation, infancy, and childhood. Every gradation is found between these two extremes, and we see that throughout there is a constant tendency to attach more and more importance to the individual, to produce ever fewer individuals with progress in evolution but constantly to improve the quality of the individual and to bestow greater care on its preservation. So when we exercise a careful birth control and strictly limit the size of the family we are only doing deliberately and carrying to a higher stage of evolution, what Nature in a slower and more fumbling way has been unconsciously seeking to do during millions of years.

It is probable that this natural process is still at work even in Man. There are many investigators who maintain that a low birth-rate is a naturl concomitant of high civilisation and that it works quite independently of any deliberate efforts to limit the family. It is claimed that the fall in the birth-rate of the French, who in some respects may be considered the most civilised people in Europe, began early in the Nineteenth Century before the practise of birth-control was generally known; this claim is difficult to prove and seems to me probably baseless. But we know that individuals who have reached the high nervous development to which civilization tends (and in which, indeed, it may even be said mainly to consist) seldom have large families, even though they may wish for them. It is reasonable to suppose that highly civilized nations can scarcely fail in this respect

population, and that when they were not adopted Nature put into operation her own ruthless and cruel methods of keeping down the population, much more are deliberate human methods of limitation now required when the conditions have become so favourable to human multiplication, yet at the same time the available space on the earth for such multiplication become so limited and the available means of human subsistence so contracted. It has been lately estimated by a distinguished American scientist, Professor E. M. East, that if the recent rate of increase should be continued the population of the United States in less than a century will be over a billion, and the struggle for existence more terrible than anything we can yet imagine. We may also consider China when the population has long been almost stationary because the effects of a high birth-rate have been nullified by ignorance, disease, and a very high death-rate. But consider what the results would be if China were to be modernised on scientific lines, education to be universalised, hygienic organisation to become general, and the population in consequence were to expand at the same rate as that of the United States or of Japan. We know, however, that this high rate of increase cannot be maintained, and that long before a century has passed, alike in the United States and in Japan, either the cruel and devastating methods of Nature will again assert themselves or else Man will have acquired the wisdom to apply, with the thoroughness required, deliberate methods of limiting the population. There is only one such method that is both scientific and humane, and that is Birth Control.

It is important to remember that although the method of birth control is distinctively a human and deliberate method, it cannot be termed unnatural. It is merely a conscious, rapid, and carefully adapted way of securing an adjustment which Nature also has secured, with the growing perfection of life up the zoological scale by slow,

peoples of a low stage of culture who have been unable to adapt themselves to the conditions introduced by civilization, but, on the contrary, have withered away at its touch.

There are two chief reasons, with others doubtless of a secondary order, why modern conditions have led to so prodigious an expansion of the human species. In the first place, modern humanitarian feeling has worked towards the suppression of the ancient methods of limiting population, abortion and infanticide, with a certain degree of success, and at the same time softened the harsh conditions of existence which formerly killed off in many countries a large proportion of the youthful population, especially the feebler part. In the second and probably more important place, hand in hand with the humanitarian tendency, scientific organisation and medical hygiene—faras they are from having yet reached their goal—have immensely improved the conditions which render human life possible. It is true that a single epidemic of influenza, a few years ago, killed far more people than the Great War, and that there is still a vast and preventible infantile mortality in most countries. Yet the hygienic organisation of the world is far better than it used to be; the sanitary conditions of life and health are incomparably better understood than they were a century ago. Many epidemic diseases that in former centuries were fatal on a great scale are now abolished altogether or reduced to unimportant dimensions; it is possible by modern methods of transport to meet and check famines in ways that formerly were impossible. Alike in the East and in the West, the influences which once kept the population almost stationary, even for centuries, are being rapidly swept away. It is unnecessary, in Japan, to emphasise the significance of this process of scientific modernisation.

Thus we see that if under former conditions it sometimes became desirable, and even necessary, to adopt methods for limiting the

and infanticide, which have been, very widely practised throughout the world, not merely among the peoples of a rather low stage of culture, but even among the highest civilizations of the East and of the West. In modern times, however, the tendency has been to discourage both abortion and infanticide. It is felt to be better to prevent the conception of a child than to allow it to be formed and then destroy it. Moreover, risks to the mother's health are thus avoided. There has, further, been developed in modern times a humanitarian feeling against the destruction of young human lives whether before or after birth. How this feeling has arisen is not altogether clear. All modern nations believe in war and it is obviously much more terrible to destroy brutally an adult human being by the methods of war than to suppress a creature that can scarcely be yet be said to have any conscious life at all. But such is the modern feeling, and we must leave those who accept the desirability of war to reconcile themselves to this inconsistency. Nowadays, when we find it necessary to limit the population, the only legitimately recognised method, as it certainly also is the method most economical of energy, is the prevention of conception, or "birth control".

It may be asked why it is that birth control has become in recent times a question of such urgent importance all over the world. No doubt it has been important before, from time to time, in one part of the world or another. Populations have, now and again, from circumstances that are but obscurely understood, suddenly increased, and as a result either burst over their frontiers, spreading devastation around, or have perished from famine and disease within their boundaries, or have been compelled to find some method of checking their increase. But during the first half of the nineteenth century this tendency to increase began to become general and constant among the more civilized races of the world and those other races of a somewhat less civilised stage who happened to be under their rule; the chief exceptions have been

BIRTH-CONTROL

By. Havelock Ellis.

(The author of the following essay on Birth Control has done more than any other one scientist in Europe and America to awaken the civilization of the Occident to the central and primary importance of sexual health in human life. Havelock Ellis has devoted his life to the scientific and impartial study of sex, and is the author of "The Psychology of Sex," a great work in six volumes, which has spread enlightenment and education among the people of Europe, America, and Australia and in breaking down the taboos and prejudices which have hindered progress and produced widespread misery. Havelock Ellis advocacy of Birth Control as the great method of civilization is based, therefore, upon long and profound investigations and study, supported by the deepest respect for facts, and is based on that far-sighted impartiality which has marked all his efforts in science and literature. Among enlightened Europeans, Havelock Ellis ranks as one of the greatest prophets of the civilization of the present and the future.—Margaret Sanger.)

"Birth Control" is the name—invented some years ago by Mrs. Margaret Sanger and a few friends—now commonly used for the deliberate prevention of conception in sexual intercourse. Although the name is modern, the practice itself is not; it is, indeed, probably very ancient. In various parts of the world old customs have been found which are supposed, with more or less probability, to have for their object the prevention of conception. Usually, however, the end has been otherwise attained, not by preventing conception but by preventing the survival of the product of conception. Thus we have abortion



小泉八雲

野口米次郎

灰色で音の無い雨が留度無くしとしと午後の庭に落ちる。十年も以前ならこれは僕得意の詩境だが、今はいたづらに疲れて居る。心が懶い。欠伸一つもするのが關の山だ……

側の新聞を見るともなしに見ると、僕の眼は小泉八雲といふ文字に觸れた。『八雲が死んでからもう十八年になる』と僕は獨語した。『そうして見ると、僕が最初米國から歸つてから最早十八年だ』と附加へた。朝から懶かつた僕の心は急に勢付いた。僕の前に追憶の場面がさつと開けた。僕の心はふた昔以前に溯つた。僕は思想の世界（心の世界といつてもよい）に時と場所の拘束がないことを喜んだ。歸朝當時僕は八雲に是非遇つて見たいと思つた。また八雲が人を嫌うなら無理に遇ひたいとも思はぬと考へたりした。然し八雲の死を聞いた時の僕の驚愕は十八年後の今日でも容易に想像することが出來る。僕は彼の死を帝國ホテルの食堂で聞いた。僕が一友人と一所に血の滴るステキを食つて居る際中であつた。僕はその時、八雲が嫌つた西洋館で彼の死を聞くのは所を得て居無いと感じた。自分の餘りに西洋化し過ぎて居るのを彼の死が罵つたやうにも思つて、心に深い恥しさを感じた。僕はその時確に、『軍艦の一艘や二艘は無くしてもよいから彼を生かして置きたかつた』と叫んだ。その頃は日露戰爭の眞際中であつた。僕のこの言葉がビトランドのヘルン傳中に引用されて居ることを知つて居る人があるであらう。日露戰爭は濟んだ。日本は軍艦一艘も失はずに濟んだが、小泉八雲先生は死んで仕舞つた。然しだ、過去十八年間には幾艘軍艦が廢艦になつて居るか知れやしない。日露戰爭當時活動し

た軍艦などは今どう成つて居るか知れたもので無いが、八雲の文字は十八年後の今日でも生きて居る。十八年は愚か百年も二百年も立つても生きるであらう。彼の文學は永久に死なぬであらう……

僕は今雨の庭を眺めて居る。庭には八雲が好きそうな古い井戸がある。また彼が好きそうな百日紅も一本あつて花が散り終つて居らぬ。雨は灰色の空氣でそれ等のものを包んで居る。僕はしきりに八雲のことを取り留なく考へて居る。この日本間で床の間に八雲の好きそうな皆川淇園の小幅、愉快げに眠つて居る達磨の畫幅を懸けて、僕が八雲のことを考へて居るといふことは、如何にも所を得たことだと思つた。僕が今彼のことを思つたからとて、彼は決して僕を嫌はぬであらう、僕の心と彼の心との間に何物も置かれて居無い、互に意氣が疏通して居るとも思つた。

僕はふと庭の中央に植えてある松の木を眺めて、それから眼を手洗鉢の方へ移して、その下に蹲つて生へて居る杜鵑花を眺めると、どす黒い葉の下に赤い小い花が一輪見へた。何んであらうかとじつと見ると、それは薄ら寒い十月に枯れても仕舞はない朝顏の花であつた。『美しい勇氣！あなた、何んぼう正直！』と僕の背後で、片言まぢりの日本語で朝顏を褒めるもの丶聲がすると思つた。僕は驚いて振り返つた。誰れも居なかつたが、確に聲は八雲であると思つた。彼はこうゆう片言の日本語を使つた人である。

僕は小泉夫人から彼の挿話を澤山聞いて居る。朝顏に對する八雲の愛は大なものであつて、毎度彼はそれを眺めて喜んだ。咲き初める時分の愉快は、葉が段々黃ばみ花の輪が小さくなつて咲き終る時分の彼の悲哀を一層悲しものとした。ひしひしと迫つて來る天氣の寒冷にめげず踏み留まつて居る『美しい勇氣の朝顏』『何んぼう正直の朝顏』に對する彼の感嘆は深いものであつた。彼は家の女中共を、小い朝顏（その他何んなものでもを『あなた、あなた』と呼んで驚かした。ある朝八雲の家に居た一老人がこの冬空の下で一段の勇氣を振つて居る『何んぼう正直の朝顏』を摘り取つて仕舞つたことがあつた。八雲はそれを發見して、老人を殘酷だと罵つて終日怛いて居たそうだ。又彼

の熱帶的情調が彼をして日本の竹を愛せしめたといふことは自然である。彼は庭内の竹の周圍を日に二度も三度も歩いた。特に竹の子が一夜のうちに幾尺も高く延びた有樣を見た時の彼の喜びは一入であつた。然し、ある日植木屋がはいつて女竹の一二本を邪魔だといつて切つた時の如き、だれでも亂暴に竹を傷付けるものがあると、血相替へて怒つたそうだ。彼は欠點とまで思はれる位に、自分の感情を隱すことが出來ない無邪氣な正直者であつた。感情の上では彼は終生子供であつた。彼位自然の呼吸と脈搏に直に反應する敏感性を賦與された文學者は無いのである。彼は自然の心を以て自分の心とした。彼は自然と共に泣きまた笑つた。彼は表現の形式からいふと散文家のなかに入るべき人であるが、精神の上から見ると彼は極めて柔軟な極めて微妙な詩人であつたのである。

八雲は草花に對すると同樣の愛を虫類に注いた。彼等が人間に痛められるを見た場合、彼は自分の肉體的苦痛さへ感ぜざるを得無かつた。また彼等が自らの仕事に努力する有樣を見た場合、彼は人類の努力に對すると同樣の敬意と稱賛を彼等に捧げた。故に僕には明瞭に、彼が如何に大な興味を以て蟻を眺めたかを理解することが出來る。彼は庭内の地面に新聞紙を延べて終日せつせつと仕事する蟻の群を見て暮したこともあつたそうである。彼は蝴蝶も愛した。また彼は蛙も愛した。その證據はいくらも彼の文章のなかに發見することが出來る。彼の書齋の障子は硝子戸であつた。ある日一疋の青い奇麗な雨蛙がこの硝子戸の上に座つた。雨蛙が腹をぺつたりと硝子の上にあてた樣子が面白いといつて、一日ぢうその書齋に閉籠つて誰れにも硝子戸を開けさせ無かつたことがあつたそうだ。『蛙は愛らしい。蝦蟇も愛らしい。私が西印度に居た時分雇つた下男は毎晩蝦蟇を抱いて寢たものだ。蝦蟇は無邪氣な動物だ。お前は決して蝦蟇を虐めてはならない』と彼はよく長男の一雄君に語つたそうだ。彼はまた一茶の『手をついて歌申上げる蛙かな』を喜んで口吟んだそうだ。僕は彼が東海道の燒津に避暑中、夫人に送つた日本語の繪入り手紙を幾通も見せて貰つたことがある。如何にも天眞爛漫な無邪氣な子供じみた手紙であつた。僕の英譯したそれ等の手紙がビスランド編纂のヘルン書簡集に載つて居るから讀

んで貰いたい。その中の一通を紹介すると、文句は『小・カワイ・マ・テンキ・ワ・コトバナイ・かづを・ヨキ・ペンキヤウ・シマス・カワツタ・アリマセン・やいづ・パパ・カラ・』の簡單なものであるが、一言葉一言葉の間に小い角出した蝸牛の繪が入つて居る。そして下の方に大な角出した蝸牛の頭がによきつと出て居る。又上の方にも大な蝸牛が『好い天氣ですね』といつて這つて居る。蛇も這つて居る。『くわつくわつ』と家鴨も歩いて居る。また蟇蝦が儼然と座つて『如何にもいゝ天氣だ』といつて居る。あゝ何等の無邪氣さ！その初心な單純に對すると、僕の心は一種の恥しさを感ずる。彼は立派に手を振つて天國に入り得る老人であつた。老人といつても彼が死んだ時は五十幾歲で、文學者としてはその圓熟期に入つたばかりであつた。もうそろそろ僕自身も彼の死の年齡に接近して行く。恥し乍ら僕には彼の無邪氣が欠けて居るやうだ・・・

八雲は一雄君を戒めてこういつたそうだ、『蜂の巣を御覽。何んなに耐忍と時間を費やしてそれが出來たか知れない。如何なるものでも、萬止むを得ざる場合の外、それを傷付けるのは罪惡だ。蜂の勉强を御覽。人でも虫でも鳥でも、一生懸命に勉强して居るものを無意味に邪魔したり殺したりしては罪惡でなくて何んでせう。』彼は蝿でさへ殺すのを喜ばなかつたそうだ。彼は書齋は西日のため非常に蒸暑く、蝿がいつもたかつたそうな、『蝿ですよ』と大聲で人を呼んで追出させたが、決してそれを殺させ無かつたそうだ。若し蝿が筆持つ手の周圍を飛びさへせなければ、少しも彼等を嫌はないといつたそうだ。今日とは異つて開ケぬ時代の西大久保で、夏の夜は蚊で一杯であつたが、彼はその不平はついぞ云つたことが無かつたさうだ。讀書や書き物は彼の夜の仕事で、夏の夜など餘りに靜かなので、そつと戸を開けてはいつてもそれを一向に注意しない一心不亂の八雲の有樣はまるで狂人のやうであつた。驚くことは、彼の周圍に血を鱈腹吸つてまるまるく成つた蚊が澤山飛べないのでごろ〳〵して居るのを見ると、彼は散散食はれたに相違ないが少しもそれを感じなかつたやうに見へたそうだ。彼が仕事中の熱烈な態度は彼に何物も外に見る餘裕を與へなんだのである。この熱烈のうちに全精神を沒頭して、初めて彼に名文があつたのである。

彼が晩年『耳無し抱一』を書いた時などは、何かの靈に取付かれて居ると見るの外は無かつたと聞いて居る。彼が自分の文章の精神を體驗しやうとして、『抱一！抱一！』と暗夜に叫ぶ彼の聲が如何に物凄く響いたであらうかは容易に想像される。ひつそり閑とした眞夜中に、尖から生きた血がぽたり〳〵と滴れるやうな筆を除々と走らす孤影悄然たる獨眼の小泉八雲を想像して、この『耳無し抱一』を讀んで見給へ、誰れでも名工の靈氣に觸れずには止ゐるであらう。讀者の中には、彼の晩年の作より寧ろ初期時代（日本に於ける）の作を喜ぶものが澤山居るであらう。彼の初期時代の作には、探報記者（レポター）が筆頭する熱中と心醉がある。日本人としてそれに觸れて悪い心持がする筈は勿論無いが、藝術的には散漫で自由すぎる。藝術的感受性を彼は浪費し過ぎては居無いであらうか。僕一箇の趣味からいふと、是非共彼の晩年の作に向はねばならない。その中に浮動して居る藝術の品質は、彼の書いた名文『蓬萊』の春の如く永久に若くまた老いたものである。文字の歩みは除々だが一歩一歩に詩の輝きを持つて居る。僕はその言葉少なの祝福に抱合せられることを喜ばずには居られない。

今熱烈な書齋の仕事から解放された八雲を想像すると、密雲が急に破れて青空がぱつと顯はれる有様に比較することが出來やう。又氣六づかしい澁面の冬が過ぎて小鳥が歌ふ春のうらいしさにも比較することが出來やう。年老いた彼の靈の半面には子供の無邪氣が五色の虹の如く綺を描いて居る。書齋を出た八雲は人間の最も幸福なものであつた。書きものを離れると彼は全然異つた人間となり得た。彼に二種の笑があつて、一種は柔和で深い婦人的の笑で相手の心持を靜かに溢かした。そして他の笑は人生の苦痛を忘れて仕舞ふやうな騷々しいものであつた。この騷々しい笑を放ち乍ら彼は寂しい書齋を出た。かう云ふ時には家中のものが彼と一所に成つて笑つた。彼は笑つたばかりで無く、不思議に獨創的な滑稽まで語つた。彼の幽靈談を讀むと、何處かの隅に騷々しい笑が俄かに靜寂な微光を後に殘したといふ暗示を感ずることが出來る。僕は容易に彼が騷々しく笑つて子供達と一所に庭内で鬼子事する一幅の繪畫を描くことが出來る。又彼等と共に浦島太郎の童謡を口吟む有樣を想像

することが出來る。若し夕日豊かに西の空を燒いた時であつたならば、彼は夕燒こやけを歌つてぴよん〳〵跳廻つたであらう。彼の晩年は日露戰爭當時であつたから、書齋を出て書きものを忘れた彼は、『廣瀨中佐は死したるか』を大な聲で歌つて家の廊下を、西洋人としては背の低い身體をゆすぶり乍ら爪先で飛び歩いたそうだ。あゝこの奇人傳中の人小泉八雲先生今は無しだ

想像力の點から批判すると、八雲以上の文章は昔でも今でも澤山發見することが出來るであらう。彼の作品の大部分は最上級のジョルナリズムたり得るのみであるかも知れない。彼は對象物を繪畫的に傳へた所謂スケッチ・ライターで、彼の作品は或は水彩畫に或はエッチングに或は日本の木版畫に比較すべきものであらう。然し之れで澤山ぢや無いか。要は彼が如何に自分の本領を立派に仕遂げたかで彼が文學者としての價値は決せられると思ふ。彼の死後曾ては友人であつたと自稱する米國費府の眼科醫師グールドといふ男が、彼を解剖臺に載せて殘忍な刄物の使ひ分けを見せた。僕はその畫の出版されした時、一文を草して、八雲を辯護した。然し今日から考へると、グールドのヘルン傳は隨分愉快な讀物であつて八雲を完全に理解する上に有益な一書たるを失はぬといふことも出來やう。グールドは八雲の敵として顯はれたけれども、彼もまた八雲の『歡迎する敵』の一人に外ならなかつたであらう。實際今日から見ると、八雲はグールドの爲め何等の傷を負はされては居ない。グールドは八雲の無箇性を力說して、八雲の心の空虛なことを說いたが、僕の所見を以てすると、この心の空虛な點が八雲の八雲たる眞實の特調だと思ふ。青ずんだ鏡のやうな心の空虛位文學者に取つて尊いものが外にあるであらうか。八雲に心の空虛が鏡の如くにあつたればこそ、對象物を詳細に微妙に自分の鏡に上ぼし得たのである。八雲の無箇性といふことをグールドは彼の欠點として摘示したけれども、僕は『八雲の無箇性』に對して敬意の脫帽をするものである。八雲の持つて居たやうな無箇性ならば、僕も喜んでその所有者となるものである。眞實なる意味に於て無箇性なるものは、普通の俗物が想像し理解するやうな弱い物でない强うないもので無い。無箇性の一面には大な箇性が住んで居る。グールドは八雲の反面の箇性に對して盲者であ

つたのである。實際個性の批判力無くして、八雲の如き作品を創造し得られる理由が何處にある。無個性で受入れた對象物を内面に隱れて居る個性の力で生長せしめるといふことが眞實なる文學者の仕事だ。そしてそれが小泉八雲の仕事であつた。

八雲は生前一友人に送つた書簡のなかにかう書いたことがある。『僕の友人は僕の敵より一層危險だ。敵は無限の微妙さで網を紡いて僕の行くことを欲しない場所から遠ざからしめる。そして僕は無意識に敵から助けられる。敵は僕をして考へるといふことの上に絕對的に必要な孤獨を維持せしめる。祝福は敵の上にあれ、僕を嫌ふ有らゆる人間に永久の光榮あれ。』八雲はまさか死後にグールドが敵として大な段平を振りかざして顯はれて來るとは想像しなかつたであらうが、グールドに對しても敵としての讃辭を書いて殘したものともいふことが出來る。僕も八雲の『敵への讃辭』かく暗示を得て、『敵を愛せ』と題する一文を書いたことがある。序であるから今その一節を引用させて貰いたい。

『貪慾な烏が田畠の表面を徘徊するのは、權兵衛が蒔いた種が實り始めた證據で無くて何んであらう。最も適當に了解するに敵なるものは君の人格或は思想の顯現がネガチーブに逆に反對に出て來たものに外ならぬ。丁度權兵衛の種を啄ばむ烏と成つて現はれたやうに。敵とは何んだ？君の潑溂たる生氣を說明する最も有力な證人である。君の友人が君を百曼駄羅讃美するよりも君が眞實なる敵が一句君を攻擊した方が遙に君の價値は證明される。君は敵の兇猛獰猛なる容貌に對し、又恐ろしく苦い言葉に對して感謝せねばならぬ。君は敵の落す一滴の藥品の力で、君の眞實なる特質が卽座に表面に浮き出るのであるから君は君だけで完全で宜い。卽ち君は敵を得て初めて『完全なる君』と成ることが出來るのである。君の敵は(外面では何んなに見へやうとも)君の爲めに顯はれたものだ。云ひ替へると、何んなに彼が君を輕蔑罵倒するにもせよ、又何んなに君を負傷させやうとするにもせよ、彼は君の創造したものに外ならぬ。彼に毒惡な性質の呼吸を吹込み怨恨害心の活動を誘つたものは卽ち君である。彼の存在は君に拂ふ敬意の表現と見ねばならぬ。君は彼が君の特質なる意義を否定するのを見て心よく微笑して然

るべきである。彼の否定するものは、即ち逆に反對の側から君を是認して居るのだ。彼は君を殺して而も君を生かして居るのだ。そして彼を作つたものは誰れでもない即ち君だ。君の知らない間に。君の見へない半面が即ち彼として君の面前に出現したに外ならない。僕は敵の嘆美者である。敵の嘆美者であるのは即ち僕自身の嘆美者であるからである。僕は極端の箇人主義者である。僕はそれを誇るものだ。僕は敵を持つて居ることを一生の光榮と考へて居る。僕の存在は僕の敵が説明して吳れるのを喜ぶ。』

小人物が大人物に猫撫聲して友人關係を作らうとする。これは古い歴史を持つた人類の一職業だ。然しそれ以上に古い歴史のある職業は『大文學者に對する小文學者の嫌惡』である。この商賣は生血をがぶがぶ吸ふ高利貸と同様最も有利な商賣だ──小文學者が名聲を得る一番の名案だ近道だ。ブラッククラッド・マカジンが今日人に記憶されて居るのは何んのお蔭だ。キーツを攻撃したからではないか。クオタリー・レビユウも同様、テニソン攻撃で名聲を上げたといふことが出來る。グリスウオルドがポーを攻撃しなかつたならば、誰れが今日彼の名前を記憶して居るものが居やうぞ。米國の一內務大臣ハーランもウヰトマン攻撃のお蔭で今日まで名前を殘して居る。そして費府（ヒラデルフヰア）の眼科醫師も八雲攻撃の一書でその存在を認められるに至つたのである。リ・ガリエンはこんな小詩を書いて居る。

『君は愚かな冷罵と慘酷な虛言で
シエレーの心を刺し得たと思ふかね？
ウオヅウオス、テニソン、キーツ、
立派に君は彼等を殺したと思ふかね？
實際、君は失敗して居る。
失敗が何んだ……世間は云ふても君の名前を記憶する。
それは名聲だ！野良狗と云つて
『名聲（フエーム）』の後から吠えまはるといふことは。』

僕は小泉八雲の靈が何處でグールドといふ敵を持つたといふ幸運を喜んで居るであらう。僕の眼に顔を不細工に赤く曲取の

——（小泉八雲）——

眼玉を凝に剝いて居る敵役グールドの醜惡面が見えて來るやうに思はれる。八雲は何處かで『敵はどん／＼殖える。僕の存在をもつと大くせよ』と叫んで居るであらう。勿論、彼が前記敵の美德を友人に書いた直接の動機は、無意味に甘い追從の言葉で墮落させる友人から離れて孤獨の境地建設になつた。孤獨を崇拜する點では僕自身も決して八雲に劣らないと信じて居る。嘗て自分の理想を默想の僧侶を借りて一篇の詩に謳つたことがあるその詩の中に『一點集合に寂しき人、自然の本能に生き焰の如く燃ゆる』の言葉や、『倫理や人生の偶然事は彼に最早や存在せず沈默と祈禱の秘あるのみ』の言葉もある。書齋のうち文學の外何物も知らない小泉八雲は斯る人であつたであらう。僕は彼を想像すると、秋の眞夜中に寂しく天空に懸つて居る一箇小い星の姿が胸に浮んで來る。

僕は嘗て八雲を文化六年に死んで居る上田秋成に比較して、孤獨の厨子で悲しく輝いて居る。『二つ夜陰の姿』と叫んだことがある。文學の上でも八雲は秋成に共鳴する所がなつて、雨月物語から『菊花之約』と『夢應の鯉魚』とを英譯して "A Japanese Miscellany" この中に納めて居る。彼等兩人は共に沈默に生きた生命を發見し、耳語する影のなかに幽靈の美德を認めた。半ばの幻想と半ばの現實に誘はれて、文藝の寶玉を夜陰の裡に拾はんとした。人間の住む世界は彼等に取つては餘りに物質的であるから、彼等は之れから逃げやうと他めた。勿論時代が異つて居るから、秋成の現實世界に對する嫌惡は八雲のそれのやうに鋭い舌を持つて居なかつた。百十年も昔の日本のことであつたから、時代から受けた人の印象は今日の如く野卑粗雜で無かつたであらう。今日のやうに社交などゝいふ僞善的名稱で橫行する『人を邪魔する』職業も、文化時代には空中をぶん／＼唸らなかつたであらう。さうして見ると秋成の方が八雲より遙に時を得て離れた人間だともいふことが出來やう。

書棚から本を降ろして秋成の隨筆膽大小心錄を讀んで見るとこんな文學が發見せられる『…又南禪寺の昔の庵の有つた所へ、小庵を建てゝ七十三歲の春移り申した。大阪から金五七兩で上つたが、今年で十六年、なんでやら暮した。蘆庵（歌人小澤蘆庵）が勸める人寄せしたら、用意金は三年になくすべし。多く

たり、焼米の湯のんだりして惜しからぬ命は生る事じやが、書林が頼む事をして、十兩十五兩の禮を取つて十二三年は過したが、もう何も時來ぬ故に、煎茶のんで死を極めている事にや。『秋成は酒と煙草と文學者と金持の四つを嫌ひぬいて、七十幾歳といふ長命で死んだ日本文壇の鬼才だ。小泉八雲が日本の文化時代に産れて居たならば、上田秋成と成つたかも知れない。彼等兩人の相違は私には時代と環境との相違であるとのみ見へてならない。彼等兩人共幼少の頃から不幸の路を辿つたといふこともよく似て居る。秋成は藥者の子で、年の行かない時分から孤兒の悲哀を嘗めた、そうして八雲も秋成に劣らない不運の星の下で生長した。憐れなる上田秋成は、八雲のやうに『渡行すべき東方の日本』を持たなかつたので、時の人を呪ひ茶を飲んでは現實世界と共に自分を忘れた。八雲が太平洋を越へて、美の理想境を日本に求め得たといふことは時代の祝福であつたであらう。又日本も八雲を得たといふことは實に天の賜物で無くて何んであらう。彼は日本が最も要求する時代に日本へ來たのである。

八雲の名著『怪談』の中に『蓬萊』と題する一篇がある、その中に、『西から悪い風が蓬萊に吹きすさむ、そして南洋三、魔法的霧圍氣は萎縮する。日本畫家の風景畫を横に渡る長い輝いた雲の帶のやうに、それが今は綾布となり帶となつて逡巡する。其等鬼氣の斷片の下、君はなほ蓬萊を發見することが出來る。記憶せよ、蓬萊はまた蜃氣樓とも呼ばれる、——幻想は理解されべきで無い。そしてこの幻想は消滅し行く、繪畫と詩と夢とのうちの外、再びそれは顯はれまい。』八雲の蓬萊——老いて不思議な影が記憶の如く深くなり。牛乳色した幻想が巨大な蜘蛛の巣の如く懸つて幽靈の如く衰へ、千年も萬年も年取つた靈の悲みと喜びは詩歌の荒廢のなかに失はれて居るであらうと思はれる八雲先生の蓬萊の嶋は、千八百九十六年に彼が出雲の松江を去つた時亡びた。松江から熊本へ移つた時には、彼の蓬萊は全然亡びて居なかつたかも知れないが、彼が熊本から東京へ出た時には、確にその影も形も見えない位に滅亡して居たであらうと思ふ。であるから彼の東京生活は孤獨の生活であつた。寂しい自分といふ孤城の戸を堅く閉ぢて、何處の外部からでも惡い騷々しい風が吹きこんで來るのを拒絶した。彼は西大久保の

家と本郷の大學とを結付ける一本の道だけ知つて、その他の道を知らうとはしなかつた。彼は午後の散歩でも人の通らぬ寂しい場所を場所をと撰んで歩いた。

午後散歩の地として彼は雜司ケ谷落合地方を撰んで、毎日二時間位人の注意せぬ隅々を見廻つたそうだ。一雄君や夫人が一所でも、餘り口もきかず、夢路を辿る思想の人として歩いたそうだ。寺さへ見れば必と入つて、地藏の石像などは詳細に眺め川の側では立止つたりした。恐らく落合や雜司ケ谷にある寺や神社で八雲が知らなかつたものは無つたそうだ。習慣として彼は着物のポケツトの中に手帳を入れ、想來れば何處でもかまわずその手帳に書入れたものだ。こうゆう用意を毎日積んで。一年間に出版した書物といへば高々三百ページ位に止まつて居るから、彼の文章に金石の響がある理由も容易に想像される。二十年前の雜司ケ谷や落合は八雲の氣に入つたほど靜寂の地で、思想の神が住んで居たであらう。然るに開けた今日は何うだ。郊外といへば名前は美はしく聞へるが、共實貧乏人の避難場に外ならない。若し八雲が今日まで生きて居たならば、何處に理想の散歩地を發見するであらうか。東京市内の墮落と共に郊外も墮落して仕舞つた。郊外の風致は八雲の所謂惡い風の爲めに蹴られて仕舞つた。

それにしても八雲の西大久保も隨分と惡化したものだ。僕は今でも最初に受けた西大久保の印象を忘れることが出來ない。僕が初めて西大久保を訪問したのは何んでも八雲の葬式後四五日目であつたと記憶して居る。その時何處をどう通つて小泉家へ行つたかとんと僕の記憶に無いが、歸朝したばかりの際であつたからでもあらう。僕は言葉に語られない程愉快な印象を受けた。僕はその時、こうゆう靜な樹木で蔽はれた祈禱の地こそ文學者の住居に相想しいと思つた。その比較を倫敦郊外に求めるとすると、差詰めキーツで有名なハムステツドだらうとさへ思つた。小泉家の門をくゞると、僕は其處で二三人の植木屋が樹木を堀つて居るのを見た。この光景が十八年後の今日でも一々明、瞭に心の眼に浮んで來るのを覺える。僕の古い帳面を開けるとその時僕が聞いた小泉天人の談話としてこうゆうことが書いてある。『故人の心に適ふ樣に萬事を計らふ積りで、墓地に故人

が生前愛した草や木をこの庭から移すため、今現に植木屋が仕事をして居ます。故人は雑司ケ谷の鬼子母神社面影橋あたりを好みました。竹や樅の木を愛しました。また和蘭陀ゲンゲも大變好きでした。苔や小な草花が敷き詰めて居るのを非常に好みましたから、墓地でも故人の好いたものを一杯敷きつめたいと思ひます。故人は出來上つた庭園を破壞するといふことを喜はないだらふといふ說も出ましたが、他より買つたものを墓地へ植えるよりは、自分の日頃感じた草や木を持つて行た方を喜ぶだらふといふことに決しました。』云ふから、小泉家の誰れかの談話として、『先生の葬式をした瘤寺は久しい以前から往來せられた寺であつたが、いつの頃であつたか寺に一本高い杉の木があつたのです。その木を寺で切り倒しました。すると先生は自分の腕を切られたやうな心持がした斯ゝる無慈悲なことをする寺の所置は言語同斷であると怒つて、それ以來は寺へふつつり行かれなくなつたそうです。又此の家から見えるが、彼方に隣の屋根があります。この屋根が以前は木の爲めかぶさつて見えぬ位でした。隣の主人がその木を切つて貰つて仕舞ほふとしました。木を切り初めました。先生はそれは惡いことだといつて抗議を申込まれたそうです。殊に其時には夫人が姙娠中で木を切る音が胸へ響くであらうといつて、大變心配せられ、隣の主人に金を遣るから切ることを中止して貰ひたいと申込んだ所が約束濟みの事故今更爲方なしと斷つたそうです。先生は非常に不平でそれ以來隣の主人とは口をきかなかつたさうです。』

帳面を數葉はねると僕の感想が書いてある。その中にこう云う言葉がある。『僕はヘルンが死なねばならぬならば好い期節に死んだと思ふ。何故なら、彼は秋を愛した、日本の秋を愛した彼は寂寞の詩人であつたからである。ヘルン自身は孤獨其物であつたと云ふてもよいのであつた。僕は彼は瘤寺で埋葬式を行はれて滿足であつたらうと思ふ。瘤寺は彼が愛した寺で、嘗てその近隣に居住して居た時代に、瘤寺の墓地を研究して『死の文學』を草した。彼はその文中に書いて居る。『僕はこの墓地を徘徊することを好む。それはこの墓地に生へて居る大樹の壯大な幽明と厭世記も老いた沈默とが、人をして都會とその雜音とを忘れさせ、夢を時と場所以外に走せらせるからでもあろうが僕が

この墓地を愛する理由は、此處は美で滿ち此處には大な信仰の詩が發見せられるからである。』ヘルンは瘤寺の墓地にある卒塔婆や戒名などを研究してその文中に入れたが、今では淨心院法與八雲居士となつて、他日また外國の文學者で第二のヘルンが來たならば、彼の戒名も飜譯せられて第二の『死の文學』中に入れられることであらう。』

雨はなかなか止みそうに無い。庭は一面に煙つて灰色の霧で包まれて居る。靜かだ。僕の心の中に八雲の追憶が留めど無く湧き上つて來る……

追憶の鎖索がぐるつと廻ると今度は東海道燒津の海岸だ。八雲の言葉を借ると、荒い灰色の海そのまゝの色した蜥◯のやうに燒津が佃領して居る。此處は八雲が晩年の避暑を兩三回繰返した一村落だ。僕が八雲に關する材料蒐集の爲め燒津を訪問したのは最早や十一二年前に屬する。今でも八雲の宿をした資賣屋の亭主音吉は生きて居るだらうかと思ふと、頑丈作り赭色した『善人音吉』が僕の眼前にひよくりと顯はれて來る。とんくと足音荒く歪んだ梯子段を上つて、僕を八雲が夏中借りて居た二階の部屋へ案内する。部屋は四疊十疊十二疊の三間で、疊は眞赤に古びて緣はまるで白茶けて居る。部屋の隅にある恥かしそうな粗末な床の間には、石版刷の應擧の虎が掛物になつて居る八雲が夫人へ片言交りの日本語の手紙で語つたやうに、僕は八雲がさぞ蚤に虐められたことだらうと思ふと、何んだか急に足がむづくするやうに感ずる。間も無く、八雲が夏中毎日食はされた鰹の刺身が膳に載つて下から運つて來る。燒津は有名な鰹の漁場だ。

僕は今音吉と一所に燒津の村廻りをして居ると想像する。八雲が住持から龍舌蘭とかいふ蘭の一株を貰らつたといふお寺を訪問し、八雲の『漂流(ドリフテング)』で有名になつた天野甚助の欄が祝込めてある鎭守の社を通つて、今我我は大な丸石で作つた素敵に立派な海岸の壘壁の側に起つて居る。音吉は語る、『先生は水泳の達人でした。二時間乃至一時間も五度每日水に飛込まれました。勿論その長時間を泳ぐのでは無く、水上に浮いて居られたのです。頭や爪先や先生の太鼓の腹』がよく海岸から見へました。

我々日本人とは異つた水泳振りで。頭を上げ手や足を櫂のやうに用ゐられました。この漁師町の誰れよりも先生はもつと水泳の名人でした。まるで魚同樣でした。先生は水泳中でさへ煙草を口から離され無かつた。夜の暗い晩など、先生は何處らまで泳かれたらうと思つて見ると、急に遠方で葉卷の火がぽかりと光るのを見ました、——思ひがけない場所で螢が光るやうでした。』僕は急に周圍が暗くなつて來るやうに想像する。海岸を打つ浪の音は高い。海上は眞黒な空の幕が降りて來て包んで仕舞まつたやうに想像する。眞黒な遠方にぽかりと火が一つ光つた‥‥あゝ、それは水泳して居る八雲の葉卷の火だつた。

八雲の一篇『燒津にて』と題する文章を開けるところゆう文字が書いてある。『‥‥この原始的空想は日中より夜分にもつと力強く起るだらう。如何に生き生きと燐光の夜に潮水の光が燃つたり光つたりする、——如何に爬虫類的にその冷やかな炎色の微妙な變轉が見へる。こんな夜の海にもぐり込み、青黒い暗中に兩眼を開き、各動作に從つて起る不思議な光の噴出を注意し給へ。水中で見ると、一々光つた點が宛も眼を開けたり閉ぢたりするやうだ。こんな瞬間に於ける人の感じは、丁度何か奇怪な感性なる或物で包まれ、——各部に於て感じ見る欲する或る生きた實質即ち無限無窮の柔い冷たい靈(ゴースト)のうちに引懸つて居るやうだ。』この八雲の言葉で、彼が如何に夜の水泳を喜んだかは容易に想像することが出來る。彼の目的は『無限無窮の柔い冷たい靈』との接觸を體驗するにあつた。夢の人小泉八雲はいつも體驗を主張する現實家であつた。

今僕の想像はこれまで眞黒であつた大な海がさつと明るく成つたと思つた。さうすると今度は風が吹いて來た。大波が壘壁の上まで上つて來た。八雲は一心に壘壁の下で天野甚助といふ老人の漂流談を謹聽して居る。八雲は書いて居る、『大な波が已に山と高まつてのし掛かつた。百碼も離れて、雷の音地震の響を立てゝ彼が崩れ、傾斜面一杯にその飛沫が撥ね揚つて我我兩人の顔に跳ね上る。長い打ち碎けか濟む度毎、引退く礫の音はまるで全速力で走る鐵道列車の音だつた。』八雲は甚助の談話を聞き乍ら怒れる海上を片眼で眺めた。彼はもの淒く微笑した。

僕の想像の場面は更に一轉して、僕はまたもや音吉の店に上

り框に腰掛けて晉吉と話して居る。八雲の言葉を信ずると、燒津は『神の村落』だそうだ。彼は書いて居る、「そして燒津の生活は確に數世紀前の生活である。人々もまた舊日本の人々で。子供――善い子供のやうに正直親切、欠點と思はれる程の正直さ、離れた世界のことは何も知らず、昔ながらの傳統と昔の神々に忠實である。」然し彼れでも燒津の海岸に一度起つて、左の方遙かに凸立する富士の尖峯を眺めたならば直にその崇拜者とならずに止むまい。晉吉と話し乍らふと後を振返ると僕は想像する。

僕は八雲の文章『晉吉の達磨』で馴染みな紙の達磨さんに顏を合はせる。果して一眼が無い。八雲は每度燒津出發の際、晉吉に過分なお禮を遣つて店の達磨に黑い一眼を入れることを樂みとしたそうだ。僕の後に座つて居る寂しい一眼の赤い達磨はきつと第二の八雲が來て、直樣一眼を入れて貰いたいと思つて居るだろう。第二のヘルンがそう急に來るものか、――燒津へばかりでなく日本の何處へも。日本といふ蓬萊嶋は確に世界地圖から今では失はれて居る。待つたからとて到底來やしない第二小泉八雲を待つより、我我日本人の間に第二八雲を作る方が早道だそうだ、それより外に方法にあるまい。

前にいつた如く八雲が熊本から、帝大講師として東京へ入つた時彼の美はしい夢は粉微塵に粉碎されて仕舞つた。彼の蓬萊島は失はれて仕舞つた。彼が如何に東京生活を呪つたかは、彼が友人に與へた種々の手紙の中に書いて居る。千八百九十七年八月米國のヘンドリックに送つた手紙の中にこう書いてある。

『この東京、この嫌はしい東京では極の時たまの外、日本的印象は得られない。……遠方からは恐ろしい齒磨楊子のやうに見える電信柱の幾哩が不快な印象を與へる。幾里といふ水道鐵管――幾哩も幾哩も幾哩も――が續いて、主要な町の交通を邪魔して居る。……町が降りしきる雨に溶ける、水道の鐵管は沈む水道の鐵管を埋める穴が醉拂ひを溺らし遊びずきな子供を吞み込む。町中で蛙が驚くべき歌をうたふ。こんな荒蕪と混濁のごたごたの中で藝術と時と永遠を考へるといふことは困難だ。詩人の聖靈（ホリ、ゴースト）は東京に居ない、『敷物（カーペット）、ピアノ、窓、窓掛（ウインドー）、樂隊、耶蘇會堂！僕は大嫌ひだ。そして白いシャツに洋服、あゝ眞平だと呼んだ手紙もある。それから又こうゆう言葉もある手紙に書

いてある、『この不快な東京で僕は蟬のやうな氣がする。篩に入れられて居る、啼くことが出來ない。時には僕はこの先きの夜の外は、最早や歌ふことが出來まいぢやないかと思ふ――たつた一の音律しか持たない鈴蟲のやうに、』そうだ、其處だ、八雲が東京へ來てからの文章は、不思議な鈴蟲の夜々奏でる一音律だ我我はその單純な灰色の歌を聞いて喜んだ。然し、八雲自身は自分の音律の價値を疑つて居た……

出雲時代熊本時代の八雲は外界の色彩と情調を取入れるに多忙であつた。然るに東京に來ては外部から迎へ可き舊日本が無いので、彼は自分で『熱火の筆』は亡び八雲の文字は終結したと思つたであらうが、彼の心の中には少しの餘地が無い位に舊日本で、一杯に成つて居るのを氣付がなかつた。彼は東京へ來て、文學者としての蒸溜期に入つたのである。――腦中の舊日本を蒸溜彫琢して彼の文藝を完成せしめる時代に入つたのである。蒸溜期には誰れでも自分自身の聖殿に閉籠らねばならぬ。世界や人間と遠ざかつて陰密に思想の香を焚かねばならぬ。そして精神的錬金術の魔法で、自分の靈をして、宛も五色の眞珠が抒情的の光を放つ螢の如く、內面から燦然と光澤あらしめねばならぬ八雲は東京時代に、少しも意識せずにこの蒸溜期の苦行を實行したのである。そして彼の苦行は八冊の著書と成つて後世に殘つた。勿論文字の數からいふと、この八冊は左程驚くべき文藝の仕遂げでないかも知れないが、これ以上を八雲から何うして望むことが出來やうぞ。實際筆を取るといふことは八雲に向つては非常な苦痛であつたに相違ない。筆は遊戲物としては神聖すぎると信ずる眞實の文藝家で、書きものすることを苦痛と思はぬ人が何處にある。八雲は滴る自分の血で文章を書いた。書物は彼が自分の生命で築いた墓場の紀念碑だ。彼は血と歌とを吐いて死んで仕舞ふ杜鵑だ。彼は自分を亡ぼして麗はしい香を放散する反魂香だ。藝術の火を採らうと墓地に飛込む夏の蛾だ。

八雲は日本へ來て間も無く一友人に與へた手紙の中にこう書いて居る、『熱火の筆』を口に語るのは麗はしい。僕は云ふと失つた。日本では熱火の筆があつては其用が無い。日本には何等の火が無い。すべての物が柔かで夢のやうで靜かで青白く生氣無く穩かで不明瞭で陰鬱で幻想的た、――蓮が常食の國、――殆

と眞實の夏が無い國だ。期節が弱く幽靈的だ。日本に熱帶があると想像して吳れ給ふな。おゝ、熱帶がまだ僕の心の絲を引張つて居る。僕の領域は雅典國にあつた、西印度諸島にあつたスパニツシユアメリカにあつた。僕の夢は古い頽れかけた葡萄牙や西班牙所屬の都會を去來し、アマゾンやヲリノコ河を溯り、そして誰れもが未だ發見したことが無いロマンスを見出すことであつた。』なる程最初の間彼は日本の灰色の情調と綠の色合を理解することが出來なかつたかも知れない。僕が畫家の口から聞く所に依ると、若し畫家が灰色の繪の具を使ふことが出來ないと、その畫家は日本の風景に對しては失敗の人だといふことだ。僕にはその理由は明瞭だ。影と耳語が交叉して記憶と幽靈が生きた靈の如く生きて居る綠色の日本を外國人が宗全に理解するには多少の年月を要するであらう。八雲は一篇『綠色心理學（ゼンテュアー・サイコロッー）』と題する文章で、綠色の知覺は赤や靑や黃に對する識別の後に發達すると書いて居る。彼が日本へ來た當時には、この審美的知覺の點では差程進步して居なかつたかも知れない。然るに日本婦人に結婚して、灰色の情調に接觸して日本的心の色彩を理解するに至つた。それから日本といふ見知らぬ國は彼に對してぱつとその胸襟を開いた。彼が若し日本の婦人を妻としなかつたならば、恐く彼は一兩年の滯在で日本を辭したかも知れない。又彼は日本をかくも理解するに至らなかつたであらう。八雲が夫人に負ふ所は非常なものと云はねばならぬ。

雨はまだ止まない。日も段々暮れて來る。庭に漲る灰色の霧は黑色に變つて行く。小泉八雲に關してまだ〳〵語り盡さない所があるやうだと後で向くと、形は見へないが、『‥‥もうそれで澤山だ、お前は沈默の美德を口にし乍ら隨分な多辯家だね』といふのがある。八雲の靈かも知れぬと思つて、僕はそつとして兩眼を閉ぢた。南無三、恐れ入つた。嗚呼沈默のことだ。孤獨の寂しさ僕を見捨るな。お湯が沸いたそうだ。さあ、一浴び飛込もう。しとしと降る雨、遠慮なくいくらでも降り續けろ。



自傳（5）

片山潜

アイオワ大學時代

此大學は黑人と貧白人の爲めに設けられた大學であるのにも拘はらず、全校の教授及學生等が黑人の生徒を取扱ふのに不公平なことは僕の常に不快を感じた。加之、既に記せし如く學科の程度高からず又勞働の少ないが爲め始終生活に困難を感じた、即ち僕が轉校を決心した次第であつた。

僕は此處から殆んど二千哩もあるアイオワ洲へ移らうとしたが別に一文の貯へがあるでもないが何事にも決心を第一となし、先づ深く思慮をめぐらして決心する、此の決心する時に當り金錢の問題は拔きにして考へる。金錢が出來てから何う爲る斯う爲ると考へたのでは決して決行の出來るものでないことを發見した、何う爲る斯う爲るとは多くの人々が云ふ。之には必ず一定の條件が伴ふて居る、曰く「金錢が出來たら」「金策整はば」である。しかし米國にあつては金錢問題よりも個々の決心が第一である。米國では決心と耐忍さへあれば大概の事は成し遂げる。故に僕は常に決心を先づする、其れから實行の方法手段等を考へる、今回の移轉もさうであつた。

扨て決心はしたものゝ、どうして行かうか、二千哩の徒歩旅行は容易ではない、頗る躊躇した、そこで大久保利武から福音が降つてきた。

××××××

然るに、當時エール大學に在り特に獨逸に行かんとする一友（大久保利武）は余に金五弗を與れた、余は此金を以つて日本の陶器類を買ひ、之を賣つて旅費を作り、アイオワ洲グ

リンネルに達することに定めた、そして先づ旅装を整へてメリーヴィルを辭し、ノックスヴィルに來り友人バルカムに計り、此市中にて行商を試みんとしたるも仲々澤山の税金を納めて行商の鑑札を得るに非ざれば營業は出來ざることを確め、止を得ず當地組合派の牧師の盡力に依り、一時計店の廣告窓を無代に借り受け、此處に陳列して日曜日に教會にて廣告を爲して貰らひ、教會員に買つて貰ふこととし、翌月曜日には多少の賣上げをなし、之を旅費としてシンシナテ市へ辿り着いた。

眞夏の行商は容易ではなく、其れに經驗のない僕に取つては尙更の事であつた、僕は、シンシナテ市に着し馬車を驅つて當市耶蘇青年會館に行き、紹介狀を會幹事に出し、其目的を告げて周旋を賴んだ所が、その教會に賴るの便利なるを說かれ、僕は教會(組合派)に行き牧師に面會して賴んだ所が快諾して日曜日に廣告し、翌日教會にて賣り殘りは牧師に托してチカゴ市へ行くこととなつた、チカゴ市で働き旅費を作りアイオワへ行かんと僕は考へた、丁度此の時は七月四日獨立祭に當るので僕は青年會員等と野外運動に行き一日の快樂を貪つた、又此シンシナテ市は米國でも珍らしい市街に市場の立つ所である、青年會館の前は毎朝大市場となり、凡ゆる物品が販賣さるゝのであるが、殊に野菜果物、肉鳥魚類は地方より直接持ち來りて賣るので朝中は非常に賑はつたものだ。

× × × × × ×

チカゴ市に着すると、先づ青年會幹事スローン氏に面會して、其の目的を告げたる所が、チカゴで勞働するよりアイオワに行くことをすゝめられ、其間は鐵道切符を割引にて買へるのがあるゆゑ、之を買つて與ふべしとのことであつた、僕は、これに從つてスローン氏の斡旋で無事にアイオワ洲に達した。

余はそうした次第で。チカゴ市を去つた、與へられたる切符はアイオワ洲マーシャル市まででであつた、此處に着したるは四時頃。汽車中で疲勞せるままに、また、勸めらるゝままに宿屋に入りて一眠を貪つた。所がグリンネルまでの汽車賃を引き去ると餘す所は僅に二十仙。僕は此日が日曜日であつたから教會などに行き十仙にてパンを買ひ喰して其夕刻のグリンネル汽車を待ち受けた。

北米では汽車の切符をステーションで賣つて居ない所がある、汽車が着くと其の汽車の車掌が下りて來て停車場で切符を賣る所もあつた、マーシャル市も此の種の驛であつた。僕は一日待つて居たが、切符を賣る口が開かないから汽車中で買ふ事

と心得て、汽車に飛乗り發車して車掌より切符を買ふと一割増しと云ふので、僕は有りだけの金を皆拂ひ、餘す所は一仙銅貨一個のみであつた、此一割は所謂泣面に蜂であつた。

×　×　×　×　×　×

當時の狀況を僕は渡米案内に左の如く記してある。

余はチカゴ市を去り、アイオワ州マーシャル町に來り、汽車の都合に依り一日休み僅かに十仙の錢を以つてパンを食し、其日の暮れ方にグリンネル市に達した。余が大學教授パーカー博士の家に行き着いたのは、夕景であつて、僕の嚢中には僅かに銅一個、そして食事は其朝マーシャル町で十仙の麵麭をかぢりたるのみであつた。パーカー博士を訪ひし時に博士は余に問ふに、何ホテルに止宿するやを以つてした、余は停車場から直ちに來りたる旨を告げた。そして博士の夫人は余に晩餐をしたかと問はれたから否と答へた。そして夫人は余の爲めに食事を用意して與へた、其味の良かりしことと博士夫婦の親切を思ふ毎に今だに感慨の情に堪へざるものがある。是れ余がメリーヴイル大學を去りアイオワ大學校に足を投じたる實況である。當夜は日曜日の夕なりしを以つて、余は博士夫婦に伴はれて教會に行つた、グリンネルの組合派教會は石造にして、約千五百を收容し、如何にもキチンとした

る教會で余はそれからは毎日曜日三ケ年間此教會に通つたのである。

博士の家に在る數日、其間余は都べての家事を手傳つた、夫人は余が如何なる仕事をもなすことを知れるを賞賛した。此間、博士は各方面に手を廻し、或は當地の新聞に廣告し、又は知人に依賴して余の働き口を探してくれた、余は遂にニユートン氏の宅に一週三弗の賃銀で働くことを得た、ニユートン氏は退隱せる農夫で大學の近傍に立派なる邸宅を構へ、其壯年勞働の結果に依つて老年を送りつゝあつた、此家庭に於て余の義務は一頭の乳牛を飼ひ之から朝夕乳を搾り且つ家續きの廣き牧場に送り迎へをすると、又二頭の馬の世話を爲し兼ねて種々の家用を達するにあつた、余は始めて牛の乳を搾ることを覺えた、所が此牛は頗る我儘の牛で、余は度々之に蹴飛ばされた、しかしながら日々新鮮の濃き牛乳を與ふる故、余は忍耐して親切に之を取り扱つた、その二頭の馬は頗る偉大な者で其高さは余の丈けより高く、而かも二頭一所にあらざれば動かず、始めの程、余は非常に之が操縱に困難した、一頭の馬に乗り他の馬を連れ行くは甚だ厄介にして乗つて居らぬ馬は往々道草をなして余を困らした、然れども彼等は皆溫順で、元來馬の使用に無知なる余にもよく服從して、しかも

忠實に働いて與れた。而してネッドとウイレー（馬名）は無言の間に余に學術を教へて與れた、日々誰かゞ市場へ馬車（ニュートン氏は二臺の馬車を所有した）で行き用達をなし、且つ郵便を持ち歸る事となつてゐた。ニュートン氏は實子なく一養女があつて、よく養父母に孝養を盡して居つた、一家皆親切なる人々にて而かも極めて陽氣な家庭だ、余は此家に働くことが二ケ月餘にして家族より一言の小言を聞かず、常に家族の一員として食卓を同じうして家庭的團欒の快を共にした。

×　×　×　×　×

サテ夏季休暇も終つて、最早や九月十日となつたから、余はニュートン氏を辭して、ロビンス氏の家に移り大學に通學することゝした、余が新住居は大學校構外の恰度後ろで構内を隔つる一條の道路を以つてする、そして余はロビンス氏の家にて一日三四時間宛家事を働き食事と住居とを得る約束をなした、其仕事と云ふは、朝夕の食事を調理することゝ、土曜日の午後家内の掃除を爲すにあつた、余は仕事に馴れたるを以つて、何時も僅々二三時間にて總べて爲すべき仕事をすました、ロビンス氏は同大學出身の人で、當時大學の書記兼會計を勤められて居た、余は常に一家とテーブルを同ふして家族の一員として暮し今後三年間は此家に大學校學生々活を送つたのであつた。

大學生活の記憶から

僕が、アイオワ大學（今は改名してグリンネル大學）に入學したのは、前記の如く千八百八十九年の學年初期、即ち同年九月中旬であつた。僕は數學と希羅語が進んで居たために、無事に九十三年生（九十三年卒業生）として入學を許されクラシカル科に編入された。斯く僕が北米で大學生活を始めたのは實に今を去る三十二年前の事であつた。年は正に二十八、云はば血氣盛りの壯年時期であつた、日本は今や憲法發布を前後して新時代に入らんとする、實に日本からの便りは知らず識らず僕の如き鈍物をも奮起せしめ、歸心矢の如きものがあつた。學業を急いだことは事實にして後年僕は學業を急ぎたるが爲め不完全に大學を卒業したことを遺憾とした、僕は常に學業に於ては無理ばかりした、希臘語も、羅典語も多くは困難で、常に字典を探がすには非常に困難をした。時には一字を探すに、一二時間も費した事がある、希臘語の動詞の變化は非常に多い或る動詞は一字が二百八十幾通りに變化する、其の變化する字は字引きにはない、文典に依つて見當を附けて意味を探さねばならない、教授は一科目の準備研究に一時間半以上を費すに及ばずと云ふも、僕は往々希臘語には數時間を費したることもある。然

れども希臘語は進むに從つて幾分か容易になるを覺えた、希臘思想は云はゞ單純でプラトーの哲學も問答を以つて著されてあるから、僕は困難なるに拘はらず、希臘の研究は非常なる趣味と熱心とを以つて之に當つた。彼のソフヲクリソースのアンチゴニーの如きは僕の最も愉快に、趣味を以つて研究したドラマである。羅典はシーザーやターレンス位はよいがヴヲーヂルやシエシエロに至りては嫌やな氣ばかりして、しかも一層困難を感じた。僕は通常クラシカル生と異り希臘語の方が進んで居たために羅典語に趣味を持ち得なかつたのでもあらう。如何となれば、ヴヲーヂルはホーマーのシエロはデモスゼニスの、デコロナの燒き直しであるかの如き感があつたからである、しかも、羅典文學は多くは希臘文學の燒き直し飜譯であるかの感を免れなかつたからである。しかも羅典文章は行けば行く程困難であるかの如く感じた。彼のホーレースのヲーヅの如きは其の一例である。斯の如く僕はクラシカル科であつたために、希羅兩語に大部分の時間と能力とを消費したために、理科學は殆んど門外漢で大學の門を出た譯である。

×　×　×　×　×　×

希語と、數學とが特別に進歩して居たために僕は九十三年生に編入されてありながら、勉强科目の上記三つは常に九十二年生と同じであつた。爲めに僕は非常に不便を感じつゝ多少の不都合は無理をして、終に九十二年生に昇級して大學を三ケ年で濟ますことにした。之がために僕は寧ろ損をしたので、後年の經驗から云へば矢張り九十三年生で卒業することが得策であつたと思ひ及んだのは一切に止まらない。

然れども僕は學業の完成を急いだ、啻に日本の社會狀態の進展したが爲めのみではない、國元に老母の貧乏に苦んで居たからであつた、故に終に九十三年生と運命を共にして勉强を續けた譯であつた。僕の目的は社會改善であつた爲めに、數學には餘り趣味を持たず、其れでも野外に同級生等か機械を擔いて測量に出掛けたなどは一種の愉快を覺えて居る。又、平面三角術の研究を半圓形とインチ尺と之に鉛筆の心を出來る丈け鋭利にしたものとを以つて三角術の問題を解決したなどは一寸面白き研究法で、而かも實際的であつた。北米大學當時の研究時間は、一日の研究科目三時間で一週十三時間を平均學生の研究時間としてゐた平均八十點(百點を滿點とす)以上にあらされば科外の研究時間を増すを禁じてあつた、僕は一回羅典語の餘分研究試驗に落第した爲めに、歷史科を止めねばならなかつた。之が一生涯に落第した第一で、次の落第は世渡りに落第した。日本で失敗したなど何れも苦き落第であるが、大學での落第の端は餘分の研

究を禁じられた丈けで濟んだが、世渡りの落第は妻子と分れて益々生活の困難をせねばならないので落第の罰はなか〳〵重くるしいものに感ぜらるる、世に落第のない社會を作りたいものだ。少なくとも落第の結果、落第者及其家庭の困難せぬ社會にしたいものである。僕が大學校へ來たのは當大學の呼びもの歴史の敎授パーカー博士であるのと、同校出身で會計のロビンス氏宅に居るの便宜があるのであつた、ロビンス氏の宅への居候は日本人では僕が始めであつたので相當よい待遇を受けた。が、僕は交際に下手なのと口無調法で出鱈目にシャベルことが出來ず、又お世辭をあやつることも出來ず、只勉强をするのみであつたが、學級生徒としての交際はしたから、、大學生活の氣分を味ふことを得た。

× × × × × ×

北米大學の敎育は餘程實際的であるようだが、僕はいま殆んど何も覺えて居らない。卒業後大學で學んだものを直接利用したことはない、六七年間も毎日〳〵研究した希臘羅典語の書物は一冊も開いたことはない、何の爲めに勉强したかも解らない。もしも僕が理科や近世語學及近世文學でも研究したならば、ます〳〵、年を取るに從つて成就したであらうが、僕が大學で學んだ書物で今覺えて居るものもなければ、直接役立つたものもないが、大學校生活をして間接に、其結果を感ずるものはある、少なくても二三はある。

第一は、圖書館を利用して或る特殊の問題を研究する方法、平たく云へば習慣である、在大學中僕は最も多く且つ廣く圖書館を利用した一人であつた。他の學生の質問を受け、又多く指圖を與へたり、殆ど何等の知識なき一科題を携へて圖書館に入り、數時間、又は數日を費して、何物かを得ることは、是は慥かに大學校の賜物である。僕に取つて圖書館は、蜜蜂の花園の如きもので、蜂が蜜を種々樣々の花瓣に求める如く、僕も一度圖書館に或る研究問題を以て這入れば、必ず此問題に對する蜜を友人の書籍中から執り、之を携へて出ることが出來たのであつた。

第二は、討論の恩惠である。僕の渡米案內に左の如く討論會の經驗を記してある。

× × × × × ×

毎土曜の午後、無論家內規定の仕事を終つた後（充分の時間あり）では運動場（キャンパス）に出て、球遊びをなすか、又は運動室に入りて適宜の機械體操をなし、夕食後より文學會（僕の屬したものをクリストメシアンと云ふ）に必ず出席して演說討論等凡ゆる文藝の練習をなした、余は討論を好み必ず何れかのサイ

ドを取り論戰を爲した、余は此の文學會に於て三年間、毎土曜日の夜訓練されたることの大なることを知る、この會は大學生有志の組織するものだ、しかも實地訓練が目的である故に、總べての事務は、米國國會規定の會議法に依つて處斷する故に、啻に、辯論活用の知識を得るのみならず、事務處辦の方法その他も幾分養ふことを得た。啻は、此の會で交際をすることも覺えた、余は、今日大學教育中、此會が與へたる結果に依つて、最も多く益しつゝあることを深く感ずる者である、書物の研究は大學にあらざるも學び得るが、三年間此の會にて得たる教育は他に於て得られざるものであつた、余は如何なる問題を構へても、余が愚見を即時に吐露し得るやうになつたのは此會の賜であつた。

× × × × × ×

討論會の終りに、一つの愛嬌として、且つは學生平日如何に世間の事に注意を拂ひ居るかを試むる一方法として『三分間演説』なるものがある、之は議長が會員をいきなり指名すると、該會員は起立する、之に向つて演題を投げて、其意見を三分間にて述べよと命ずるので議長の與ふる演題は大抵時事問題を捕へ來つてするのである。初年生は非常に苦しむが、二三四年生となるに從つて三分間を利用して即時に立派な演説が出來る、演題に就いてどれだけの內容ある演説が出來るか、それは實に學生等の進歩の程度を計ることが出來る唯一の考察である。

第三は、僕が個人的に校長ゲーツ博士から得た教訓で、僕の處世哲學となつた一事である。校長は、毎金曜日の朝大學の公會堂で二十分間ばかりの教訓的演説を爲すのであつた。短くはあつたが、頗る有意有益の話をいつも聞かされた。或る金曜日の演説の內容を摘錄すれば、

「人間は小成に安んじてはいけない、何時までも進歩發達せねばならない、多くの人々の人生觀には限りを附して居る、何れ丈け出來たればよい、此れ丈け爲したらばよい、何時まで働けば此れ丈け儲かる、此丈けの財産が出來るから其れでよいと、云はゞ皆隱居腰である。彼等は進歩的生活の價値を知らない、人生は經驗の生涯であつて又進歩の生涯でなければならない、小成に安じてはいけない、人生生活は趣味あるものたらしめよ。

昨年、此れだけ事を爲したらば、今年は之が經驗となり土臺となり、昨年以上に仕事が出來ねばならない、昨年あれだけの困難に堪へ忍んだならば、其が經驗となり、教訓となつて昨年に倍する所の困難にも堪へ忍ぶ資格の人となり、一層努力して事にあたらねばならない。人生の總べては、其人物の人格を築き上げる資料である。一冊の書を讀めばこれを基礎として

此れ以上の良い書を讀む資格が出來ねばならない、人間の過去の總べての經驗は、其將來の資料となさねばならない、此が進步的生涯である。此の如く人生を觀察すれば一失敗、一困難に遭遇すればする程、將來より大なる困難と失敗とに應戰する根底が層一層强固になる、從つて困難や失敗に出逢ふ每に舊倍の勇氣とより多くの耐忍力とが出でて來る。

世には困難に耐へ得ず、失敗に落膽して何事をも爲し能はざる者がある、今日の監獄に在る者の多くは、困難や失敗に耐へ得ず無謀の行爲に出でたる結果のものである。困難すればするほど、又失敗すればするほど、然り、逆境に居れば居るほど勇氣と決心との强くなる者にして、始めて世の中と戰ひ、進步することが出來るのである。」と云ふような意味の話であつた。此の教訓は、僕の人生觀を一變した。今までは前記の如く小成的であつた、困難や苦痛を遁れんとすることが目的であつた。實に腰掛的隱居的であつたことを發見した。これからは此話が僕の處世哲學の基礎を爲したのである。此の如き處世觀を持つた以來と云ふものは、僕は一失敗、一困難に出逢ふ每に、層一層勇氣が出るように思はれて、失望とか落膽とかせぬやうになつた。

頭字の人とのラブの成立?

由來北米の大學生活ほど呑氣なしかも愉快なものはない。無論八九割までは親達の脛を嚙りつゝあるお坊チヤンではあるがしかし血氣旺盛の青年で世の中の風波に揉まれて居ない純朴なる無經驗なる、而して知識を求めに來て居る青年どもが多數に集合して共同生活をやるのである。兄弟姉妹の關係より云へば、四人兄弟で何時も一番の若蔵、若しくは嬢さんが新たに入學し、兄貴分は今年を終りとして、社會に出でんと何れも皆紳士淑女の氣分に、兄イ姉イ氣取りで萬事の振るまひをなす、教授等も多少の自由放任主義を四年生には應用するので一層の自由を見せつける。

× × × × × ×

兄弟及姉妹關係を結ぶのは、新入生との關係で定まるが、一年生と二年生とは、お定りのやうに仲が惡るい、二年生は一年生の新參者をイヂめる、僕が一年生の時或る朝のことである。僕等のクラスはトマホークといふ頭巾を、お揃ひで冠つて登校すると之れを嗅ぎ付けた二年生の者は、校庭の廣場に勢揃ひをして、進擊を開始し頭巾を奪はふとするので、こゝに一大活劇を演じ、男女入り亂れて二、三十分も戰つた頃、授業開始の鐘が鳴つたので、双方に分れ、相笑ひ、握手し合つて教室へ駆け込んだことがあつた。かうして一年生と二年生は仲が惡る

い、が一年生と三年生と二年生と四年生は仲の好いことと兄弟姉妹に等しい、之れは傳統的遺傳的にからである。學生と教授との關係は至極親密であつて、家庭を持つ教授は、一年に一度はきつと我々を招待してくれた、そればかりではない、クリンネルの在住民で大學と關係のある人や、子女を通學させてゐる父兄や、卒業生などの家庭から、往々招待を受ける、その一夜は放浪者を家庭の暖い雰圍氣に抱し包んでくれた。時にはクラスのものが宴會を催すこともある。或る年ハーローエンの夕暮れ、我々はクラスの宴會を開いた。こんなときは面白い馬鹿な眞似をして遊ぶのが例であつた。男女の學生が大きな林檎の皮を長く續けてむいて、それを高く揭げ頭の廻りを三度廻はして後ろへ投げるとエービーシーの何れかの頭字の形になる。この頭文字の人と結婚するといふので、其の夜は大騷ぎであつた。

×××××××

とにかく北米の大學生活は至極氣樂な呑氣な愉快な生活であつて、やつとながら及第すればそれで滿足して、あとは一生懸命に遊ぶ、遊ぶのに忙しくて、教授から叱られることも度々あつた。當時は、尚北米は自由國であつて、帝國主義の氣分は今日のやうに濃くなかつた。北米が帝國主義に傾いたのは西米戰爭後のことである。だから學校は全くの治外法權であつて、警官の支配下に無いから、隨分と學生は惡戲をやつたものだ。僕が三年級の頃、今から考へると頗る興味の深い經驗を甞めたことがある。學業は困難であり、勉强もしたから、既に歸國した舊友岩崎清吉に多少の金を送つてくれるやうに賴んだ處が岩崎は快く承諾して、廿五弗宛送つてくれた。

それで食事は、學生俱樂部ですまし、室代丈けを稼いだのであるが、一月になつて其の送金が屆かなかつた。僕は餘分は金もなく食代が一杯であつた。嚴寒の一と冬をストーブに薪を燒かなかつた。その寒さは今でも骨に耐えて忘れない。ロビンス氏は自分の薪を焚けと云つてくれたが、遂ひに焚かず、暇さへあれば圖書館に通つて暖を貪つた。しかし食事時には、何處も〆切るので行くところがなく、閉口した。時には零度以下十三度にも下がつた。夜は机上のランプに双手を押し當てた。その冬に依て僕の體力と耐忍力は鍛練された。時には日曜に僕が室に歸つて見ると、ロビンス氏が密かにストーブをたいてをいてくれたことがあつた。さうした瘦せ我慢を通し、春になつて再びロビンス氏に乞ふて働かせてもらつた。六月になり、將に學期の終らんとする頃、岩崎から廿五弗送つてくれた。その夏、ムーデー氏は、氏の郷里ノースフヒールドに學生夏期大會を開くことになつた。僕も招待を受けた。十日間は向ふで遊ばせて

くれる。ノースフヒールドまで行く旅費は岩崎のくれた廿五弗と、僅かな貯金でタップリあるが、さて夏期大會後の休暇をどう暮らすか、歸途の旅費をどうするか、之れが頭を惱めた問題であつたが、働いたらどうにかなるだらうと背水の陣でいよいよノースフヒールドへ向つたのであつた。

ノースフイルドの夏

ノースフイルドが夏の探凉地として良好な所であることは茲に喋々するまでもなからう、既に屢日本の紙上にも喧傳せられてゐる。ムーデー及サンキー兩氏は、當時既に名聲世界に鳴りその老成功を樂しむ時代にあつた。ロンドンからマイヤーと云ふ牧師が此夏やつて來て宗教の熱を吹いたが、其は學生夏季學校が卒へてからであつた。

僕の旅行は何時でも背水の陣である、着桑の時はメキシコ弗一個を所持して上陸した、メリーヴルに着いた時は旅費が足らず借金して汽車賃を拂つて來た。アイヲワ大學に行つた時は大枚銅貨一仙を所持し、而かも空腹を抱えて着いた。此のノースフイルドに來た時も嚢中僅かに二三弗であつた。若い時は呑氣なものだ。家内奉公に經驗があると云ふだけが僕の唯一の賴みであつた。乾度、何かあるだらうと度胸を決めて、先づ着後の十日間は普通の學生等の如く遊んで見た。しかし心の底には多少の不安が蟠つてゐた。それでもまあ呑氣に樂しんで見た。

そこには三十五名の日本の學生が集つて居つた、僕は驚いたがロハで十日間居候が出來ると云ふので、何れも皆自分の金を使つて夏場に遊ぶ學生等があるから喜んで來た者だと見える。此の三十六名中後年に至り、多少でも日本で頭角を現はしたものには市原盛宏、千葉鑛藏、福岡秀猪、神谷三郎（後紐育領事を勤む）小林光藏、三好重彦（退藏の一子）石川源太郎、小崎成章、松方某（侯爵の一子）樺山某、津田某などであらふ。神谷と市原は最う過去の人になつた。其他は存命だらう。何分彼等は當時血氣盛んな奴等で、われ／＼ジャップ學生の泊つて居たのは、マークワンドホールとて一番大きく、そして一番立派な學校寄宿舍であつた。食堂で各大學生が皆代る／＼イエルを（相言葉とでも云ふか）呶鳴る、日本學生三十六人も一とつ食卓に居つて牛馬の如くだまつてゐたのでは相すまぬ、肩身が狹いといはれて千葉鑛藏が音頭取りて何か下らぬ者をやつて見たが下手なものばかりで、僕は只其痩我慢の意氣を贊成した所が、翌日マークワンドホール前の廣場でベースボールをやつて居ると見物をしてゐたジャップは一塊りになつて、千葉、神谷、福岡などがエールカエールのブルーホワイの校旗と誰かゞ日の丸の日本國旗とを並べ立てゝ居たが、何か彼等ジャップ間に爭

論を始め果てはツカミ合ひナグリ合ひ旗の取り合を初め、日本國旗（日の丸）は滅茶々々に引き裂かれた。幸ひにしてエールの校旗は満足に破滅を免れた、之を見て居つた白人のエール學生が、エールのイエルをジャップの面前で、さも愉快氣に吹鳴つたが、僕もジャップの一人であるから、少しく恥かしさを感じた。そして。日本人の如何にもコセ〳〵することを遺憾に思ふた。此少しの事にも短氣を起して、前後忘れてかかる振舞をなす、しかも堂々たる大學生である、下劣の振舞と云はねばならぬ。

× × × × × ×

一日、我が邦人だけノースフイルドの裏手の小丘の松林中に辨當を携へて、親睦會を催した。此の日石川源太郎（當時青年會學校生）が頗る愉快のジョークをハジメタことは一興であつた。服部多助（成瀬仁藏の令妻の弟）は頻りに植物學の講釋を僕に向つて為た、そして一日の愉快を盡して歸つた。

田中正造と伊藤はゴマカシヤ

我夕、當地有名のラウンタップなるイーストホールの上方に在る圓形の小丘に集りを催した、此のとき頗る早口に英語演說を試みた一人があつた、此の男は明治學院の校長井深梶之助たるもので あつた、早やロでさつぱり解せぬ英語であつた、僕の隣りに立つて聞いて居た二人の米老人相互に何語で話して居るのかと囁いてゐたが、英語だらうよ、日本ミツションスクールの校長だと云ふからと一老人は云つた。我々は或る日ムーデー氏に發聽になつた。ムーデー氏は當地貧農家の一子より身を起し、世界に名を揚げたる福音傳道者で、之にサンキーといふ一種賢人が歌をうたひ、冷靜なる柱石の如き知能を以つてム氏を援助した為めに、非常なる斯道に成功せる者である。

ムーデーの人物は僕は客間と臺所とのムーデーを知る故に客間のみのムーデーを知る者とは意見が違ふ。ムーデーは賢がしく、狡猾なる男である。一見我が田中正造生寫しの趣がある。ムーデーも田中も同じく隙目で、其眼力の銳敏なることは非凡である。兩人の同様の目は共通の性質を現はし、其世の中の人情を洞察し、人をあやつること人並に越へて巧者である、正直質直を裝ふこと兩人共に巧妙であるが、兩人の目玉は之を覆ひ隱すこと能はず、只膜目なるが故に之れほどに見えない。而かも一種の愛嬌を示すので、人を胡麻化すことが出來る、普通人は之を看過して只外形の親切と同情とを見るのみ、顏は異つてゐたが伊藤博文の目も亦同種のもので其コザカシさを現はしてゐる。

× × × × × ×

扨十日間は夢の如く愉快に暮れた。他の同邦人は皆行く所があり、安心して殘りの夏を暮すことが出來るも僕は氣が氣でない。いろ／＼、手を盡した結果は、仕事の全體を監督するジョーチ爺さんを探がし出した。此の人は當地の農夫でムーデー氏の幼友であつた關係から、イーストホールの監督兼ジャニトルを女學校の學期中はやるので、夏は全體の監督をやつて居た。至極親切た爺さんであつた。何か出來るかと聞いたから、何でも出來ると云つた。それならばベースメントへ行つて洗濯を爲る處から玆に僕は洗濯屋となつたのである、千人以上も來て宿つた共シーツ、ピロ・ケースを洗ふのであるからなか／＼の仕事である。

いよ／＼身仕度をしてベースメントへ下りて見た所が、既に三人の男が働いて居つた。三人兄弟であつて、何れもマウンヴエルノン學校生で、夏場働いて學資を作り、學期中勉强するのであつた。彼等の名前をヤローと云つて蘇國人であつた、三人とも滑稽が好きで、一と夏僕は彼等と愉快に面白く暮した、洗濯屋の外に澤山の靑年男女が働いて居つた、皆學生であつた、僕等の居るマーリランドホールの働人の本部であつた、女學生どもが我々の食事を整へて與れた。皆若い學生、呑氣な者どもで我々は仕事がすみ、晩飯が濟んでからの時を面白くをかしく過ごした。

いよ／＼洗濯物が洗ひ終つたころに第二のノースフイルド大會が何時もの如くあつた、今度は爺さん、婆さんたち信者の大會であつた。僕が洗濯をなして居る間、屢クックの手傳をなし、ケーキを燒いたり、パイ、プデングをこさへたりして彼等の評判を得たので此信徒大會ではクックの一人となり、パイやケーキをこさへる役を勤むることゝなつた、これが終へると僕の評判を聞いて、ムーデーの甥でアンバート・ムーデーといふ男がノースフイールドホテルの監督をして、僕に來てクックを爲ろと云ふので、僕は九月始めホテルでクックをなし大學に歸る旅金が出來たから、ノースフイールドを辭してグリンネル大學へ歸つた。隨分夏中は儲けたが、女學生共と一つになつてワイ／＼と働いたり騷いだりして使ひもした。其でも大學を出る時に持つてきたより幾分多くの金を持つて歸校した、ノースフイルドにをる間に、一人の女學生と特に懇意になつて隨分面白かつたが、此女學生は洗濯屋の二番兄弟と結婚することゝなつた。

其の女、遂ひに來た女

其の女は、千九百四年セントルイス萬國博覽會のときに、その四人の子供を連れて僕に逢ひに來たが、夫のヤローは牧師となつてセントルイス市に居たのだ。

今でもノースフイールドの生活中忘れられないのはその夕な

夕なの情景である、わびしき入り日と、色彩ある雲の形とである。ノースフイールドは、西南向きの小丘の上に在る前はコンダクチカット河が流れ、其向ふは高原のやうに山又山であるが、入り日は遠くヴエルモント州の山の向ふに落ちて行く。僕は仕事を終へて、マーウヲントホールのフロンの緣側に椅子を構へて休息しながら恍惚として眺めたが、毎晩でも飽きないやうに、そして毎晩の風光がそれ〴〵異つて見える。その時々刻々の模様が妙に變化するので、僕の如き田舍ペイの朴訥者に取つても繪畫的趣味と多少のローマンチツクの情緒を催さゞるを得なかつた。僕はもう一度、夏のスフイルドに變化多き入り日を樂しみたいと思つてゐる。

シニヲルイヤーの一年

今の北米大學なるものは、餘程變化してるであらうが、三十年前の北米大學は餘程自由と曖昧があつた。僕の卒業したグリンネル大學も、今はなか〳〵驕つて居る。建物も立派になつた、キヤンパスも廣くなつた、學科の程度も高尙になつた、併し卒業する人物には殆んど變りはない、たゞ事物が複雜になつただけである、圓滿な學者が出て來るに違ひないが、萬事機械的であるから眞の人物發成の上から云へば、今も三十年の昔もさしたる變りはないのである。

シニヲイルヤーは大學生活最後の年である。學生間に於ても模範たるべき義務を負はされて居る、從つて教授からも我々ミニヲルスは紳士的待遇を受けるので何となく大人になつた樣な氣持になる。

學科の點より云へば、三年生が一番生きた研究をする。三年生は各專門の頂上でクヽリであるかの如く一番興味がある、クラシカルコースを取つて居ればプレトーノやアリストル、アリストコネースなど面白い趣味深遠なるものを研究する。

然るに、シニヲルイヤーになると、一般的學問であつて大學生全體が皆一つのクラスで勉强するのである。一年生の時は學生皆大抵同じものを學ぶから一つに勉强するが、二年、三年は各專門に分れるから近世文學の人と理科の人、古文學の人とは別々に勉强して、教室で一所にはならない。ところがシニヲルになると、學生が皆一教室に集り、三年振りで一つに勉强する。哲學應用、經濟、政治學等を一所に研究する、此の時我々の力量を比べるとクラシカルコースの人々が一番である、古いものばかりに頭を突き込んで三年間も居つたのだから世事には疎とい筈であるのに世間が一番明るく、一番世才が發達して居るものである。

× × × × × × ×

秋、冬學期は無論勉強はやるが、春學期になると卒業の準備やら、交際やら四ケ年の兄弟姉妹が最う直きお分れするといふので、名殘を惜しむとでも云ふか、頻りに宴會などに招待されたり、又色々の會合があつて面白く生活するのである、僕は無論喰ふために毎日働いて居つたが、それでも重荷の希羅兩語の研究が終つたから科學の準備に時間を取られないので、遊んだり交際する時間が餘程殖えた。

僕はシニヲルイヤーに獨逸語を研究した。フレンチキヤナダアンの教師であつた、僕は獨逸語の研究を非常に面白く感じて熱心に研究し其文法に最も多く趣味を持つてゐた。卒業式の時に僕はよく出來たと云ふので、ゲーテの全集を賞與として貰つた、二千人からの學生の前で報告して貰つたのだから先づ名譽と云ふことが出來る、小學第一年生の試驗の良成績と云ふので、鉛筆一本貰つたことがあつたが、これまでで前後二回の賞與を貰つただけである。

卒業式は數日を費して仲々面白い、コーポレーション・デインナーと云つて大學校卒業生、及關係者が一堂に會し校費で立派な會食をするのである。三年生が之には必ず給仕することになつてる、僕は卒業してからノースフィルドへ行つた、僕は大學を卒業したらば歸國する考へであつたが、在大學中に研究の

慈母が死去せる報を得てから、今三年勉強することとしたのである。一生涯の遺憾とするところは明治十四年の夏、母に別れてその存命中に再び相見る能はざりし一事である。

社會主義の研究

僕の英語は街路で拾ひ集めた英語で、亂暴な英語である。僕の北米に於ける教育は極めて速成で、しかも粗製濫造である、從つて文學とか、修辭學とか、文法にさへも餘り重きを置かない位である。從つて萬事を急いだ故に、小說などはヒマ人の手にする慰み物であると考へて讀まうともせず、又、手にしたこともなかつた。然るに或日のこと、さういふ意味をロビンス夫人に述べた。すると夫人は（大學出身で仲々學者である）大に辯解し、且つ親切に小說を讀むの利益なることを說かれた。僕は夫人の勸めに依つてジョーチエリヲットの傑作と稱せらるゝアダムビードを讀んだ、ところが一二週間位ひは僕の良心が汚されたやうな氣持がして、何うしても忘れられなかつた。殊に少女が親なし子を林で產み、之を木片に埋めて逃げかけたのが、其泣き聲が耳に止つて逃げ出せず、泣聲が止んでから逃げたこと、少女が明日の死刑を待つ夜、傳道師の婦人に懺悔する一節は、三十三年の後の今日も依然としてあり〳〵と記憶して居るが、しかし僕は之を手續きとしてエリヲットの全集を讀み

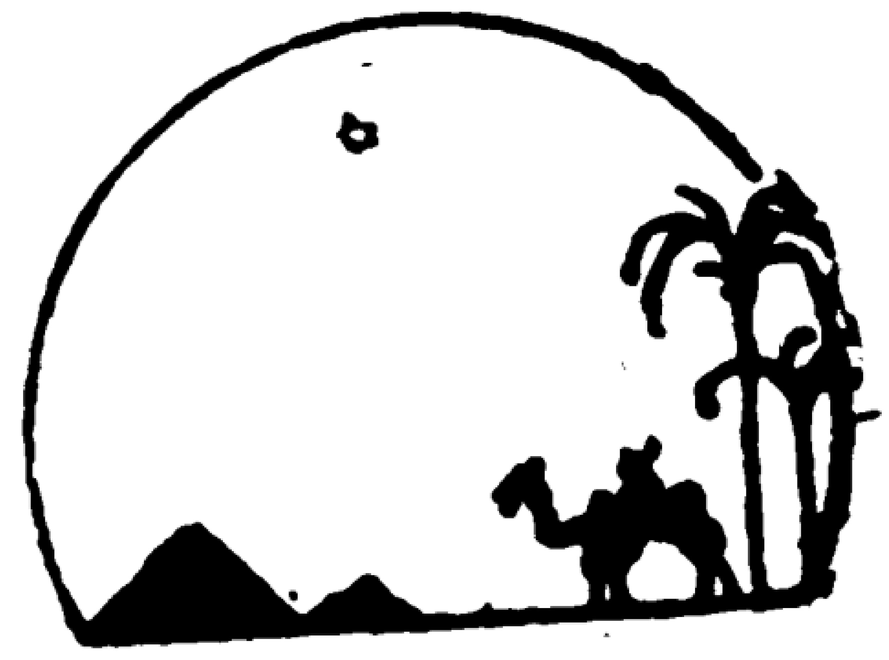
續いてデツクンスのあらましを讀んで、エリヲツトの懺悔語り實に讀者の膽をエグルように刻み込んで、殆んど忘れられない、それから僕は小說が好きになつて社會運動を始むるまではよく讀んだが、矢張り小說は時間を費すものだ。

×　×　×　×　×　×　×

僕が、社會問題に趣味を持つ様になつたのは、何でもメリーヴイルに居る頃からである、此時に僕はクリスチアンユニヲン(今のアウトルツク)を讀んで居たが、イリー教授がよく社會問題の事を書いた。僕は非常に趣味を持つて讀んだ。すると僕がグリンネル大學へ入學した年の暮れに、イリー博士はソーシアル・アスペリト・オブクリスチアニチーとか云ふ一書を著はした。僕は讀んで非常に面白く感じた、二三冊を買ふて友人に與へた位いである。此の時分のイリー博士は仲々大膽であつた、自ら社會主義者を以つて名乘りはせなかつたが、主義者を以つて自任してゐる口調で書かれてあつた。イリー博士は今のウイスコンシン大學へ行き、社會問題に趣味を持ち、しかも勞働者に非常の同情を表はしたと云ふので大學理事が裁判沙汰にせんと云ふたので、イリー博士はパンを奪はれては大變と思つたのか、其れ以來は猫の如く頭かくしになり風化したが、僕の在學中は、實に社會主義や勞働問題解決の紹介には熱心で雄辯であつた。

愈々僕が社會主義者になつたのはシニヲルイヤーの時、應用經濟の一科として社會主義を一期間研究した。其の參考書を見る間にアトランデツク月刊雜誌にフエルデーナンドラセールの傳がのつてゐた。之を讀んでからのことである。故に僕が社會主義者となつたのはグリンネル大學の賜物であると云ふことが出來る。さうして僕はグリンネル大學に感謝するものである。

(つゞく)



雜記

エッキス

ダンテの宇宙觀

先頃六百年祭があつたのでダンテに關する追憶等が我國の雜誌や新聞の上に許多見えた。其中には見なかつた樣であるが、ダンテのコスモロジーを神曲其他彼れの著作から研究したものが二三外國の書籍雜誌の中に在つた。數多いダンテ文獻の中には他にも許多あるであらうが、私の見たのはオックスフォードのシンガー氏の科學史論文集第一卷の中のものと、去六月の Nature にドライヤー氏の、九月の Naturwissenschaftliche Wochenschrift にエンゲルハルト氏の書いたものとの三篇である。Routledge版の神曲の英譯の註にも隨分詳しく書いてゐるが、上記のシンガー氏のとドライヤー氏のとには說明的な圖が附いてゐる。當時の科學思想としてはアリストテレスのアラビヤ譯がラテンに重譯されたものが全盛であつたのである。神曲等ダンテの著作が同時代のさういふ科學思想をよく代表してゐることを見るのである。地球が球體で宇宙の中心に位し、次に月、水星、金星、太陽、火星、土星の七曜の軌道が、地球を中心とする七個の同心球の上に在る。これらの七球が「玉葱の皮の樣に重なり合ひ、第八球に諸恆星が在り、第九球が prime mover で二十四時間で一回轉する。他の週轉は漸次遲れ、月

の二十四時間五十分に至るとする。夫等の相違で歳差だの諸惑星の伏合などが生ずるとしたのである。かういふダンテの宇宙觀は、享保から寛政頃の我國が、天經或問だの、暦算全書などで支那から傳へてゐたものと全く同一であることも亦一の興味であらう。支那は明末清初に恰も夫等を南欧の宣教師から學んだのであつた。支那及日本に於ては上記の九球を九重天と云ひ（古き九天の稱は所謂四方四隅中央で九球の義とは同じくない）、第九球のプライム、ムーヴーを宗動天と云ひ、なほ第十球の凡てを包容し靜止せるものを常靜天と名けてゐた。同じ天動説でもトレミーのアルマジエストはダンテの頃伊太利では理解されてゐなかつた。

一（　）一

ヘルムホルツの誕生百年

去八月三十一日はヘルムホルツの誕生百年に當つた。其日にヘルムホルツ紀念號を出したDie Naturwissenschaften にはヘルムホルツを生理學者として、物理學者として、電氣化學者として、認識論者として、實驗室内の實驗家として夫々、フォン・クリース、ヰリ・ヰーン、ネルンスト、リール、ゴールド・スタインが書いてゐる。眼科學者としてを Erggelet 氏が書く筈であつたが原稿が間に合はなかつたさうである。ヘルムホルツの仕事はかやうに多方面に渉つたが、これらの諸稿で見ると、それらの仕事に自ら一貫した面目が窺はれるやうである。醫學の中には耳や目の研究に、最も多く物理學の知識を要する方面に向ひ、又夫は同時に心理學、認識論に誘ふ問題であつたのである。生理學に於てもデユ、ボア、レイモンなどゝ共に生活力といふやうなる不明なる概念を除去するにつとめて、精密なる數學的法則を求めてゐた。自然の合法性を求めるといふことがヘルムホルツのウォツチ、ウォードであり、有名なエネルギー不滅則の論文の冒頭に自然に於ける因果の法則に就て述べたのが夫を表はしてゐる。これらの點からヘーゲル、シエリング以後哲學と科學との背馳したのを再び結びつけ、カントに復歸せよと云つたので、彼は哲學界に於て新カント派の宗と呼ばれた。然し、かやうに彼れが因果律を基礎としてゐることから、

ヰーンは、ヘルムホルツを以てクラシカルな物理學の殿將と呼んでもゐるのである。ヘルムホルツの死後、輻射論や原子論が物理學の新しい場面を開き、其中には統計論や公算論が基礎となり、ヘルムホルツが守つた樣な因果律や論理的建築が鞏固な基礎を與ふることがなくなつたといふのである。ヰーンやボルツマンが是等の新しい場面を開いた人々であるが、因果律其者がやはり公算の範圍であると云つた方が、より近代の經驗論の見方であらう。ヘルムホルツはカント哲學の復活者であるが空間論に於てはカントの先天觀念論に反した經驗論を取つてゐた。リイマンと共に非ユークリツド幾何の可能なることを示した先驅者である。ユークリツド幾何と非ユークリツド幾何とを經驗に依つて選擇せしめるとしたので出る。これらが今日アインスタインの空間論に於て極めて新しい意味を持つやうになつた。

又彼れの認識論上の論文のみを集めたものがシュリツク及ヘルツの編輯で、同じく彼れの誕生百年の紀念として今度ユリウス、スプリンガーから出版された。

ピザ斜塔の實驗の史實

ガリレイがピザの斜塔から重輕異なる二つの物體を落して夫が同時に地に達することを公衆の前で示して、アリストテレスの物理學が輕重物體の落下に本來遲速の差があるべきことを云つてゐるのは間違であることを明かにしたといふのは物理學の歴史上有名な一挿話である。此話はガリレイの弟子のヴイヴイアニがガリレイの傳記に書いたのが根源になつてゐる。近頃ガレリイ傳記の研究者として有名なウオール氏は此話の眞否を疑ひ、かやうに顯著であるべき事實が同時代の他の文書の何れにも記されてゐないのを見れば、ヴイヴイアニが其師の仕事に光彩を添へやうとした作り話であらうと斷じてゐる。ゲルランドの物理學史にはこのウオールヰル說を踏襲してゐる。昨年頃の Science にガリレイが斜塔のどの邊からいかなる物を落したであらうかの若說を二三見たことがあるが、去十月の School Science and Mathematics にカジョリー氏は、伊太利でナショナル、エヂションとして近年出版したガリレイ全集を調べてガ

リレイの書いたもの丶中にピザ斜塔に於ける實驗の記載のあることを述べてウォールヰルの抹殺說を駁してゐる。ニュートンの林檎の傳說などもヴォルテールがニュートンの姪から聞いたとしてその「英吉利からの手紙」や「ニュートンのフイロソフイーのエレマン」などの中に書いたので傳播したのであるが事實か否かは分らない。近頃アインスタインの挿話として有名な、高い所から落ちた人の話なども、窓からか、屋根からか、或は其話が全然虛構でないかなどが或は後世の疑問とならないとも云へぬ。

ロシヤの科學者

現在のロシヤの科學者の窮狀が九月の Nature に二回出てゐた。ロシヤの科學者自身の通信であるといふ。ソヴイエツト政府が科學はブルジョアの道具であるとして科學者の研究に少しも同情がない、科學者は僅少の給料を受けるばかりであるから生活が保障されない、僅に着替を賣つてパンに代へてゐるが、着替のないものに至つては悲慘を極める、この三年間にロシヤの教授及科學者で餓死したものが某所に於て四百二十八といふ記錄があるさうである。マキシム、ゴルキイが之に就て次の樣に書いてゐるといふ。「科學は人間の知慧の王冠である、それは人間が自分の肉と血とで創造した太陽である。科學者の仕事はヒユーマニチーの財產であり、科學は最高の利他主義の領域に在る。科學者は人間の中の最も價値あるもの、社會の最も生產的なものとして考へられなければならない。科學者の早死といふことは國の大損失である。最近數ケ月の科學者の死亡表を見るならば、此國の科學的勢力の損失のいかに大なるかを見るであらう。此割合で續いたならば、ロシヤは遂に其腦髓を失ふこと丶ならう。自由なる科學は政治に獨立でなければならない云々」と。かやうにゴルキイがソヴイエツト政府に訴へて政治に冷淡なる科學者を酷遇するなからんことを求めてゐるが、ソヴイエツト政府に更に之に耳を假さないといふ。科學の研究が、人道主義、利他主義の所有物であることは今更繰返すまでもないやうであるが、トルストイが、科學者は地球上の蟲の數を數へたり、象の卵の有無を調べたりしてゐると云つて、科學の人生に

無用なことを嘲けつたこともある。然しながら當は、其故に科學者自らには研究題目の選擇といふ事があり、或は科學の爲の科學と云ひ、或は人生の爲の科學と云ふ。所謂科學のプロレタリヤ化が、昨日まで工場の一徒弟であつたものが高等な學校の長となり、素養の如何を問はず凡て十六歲に達したものは大學の學生となり得ると云ふ樣なるものである場合には、少數者のみが創造し得、享愛し得られる樣な科學の運命は知るに難くない。混亂時代の藝術の運命に於ても史上幾度の例があるであらう。ウエルズの入露記には、ロシヤの科學者は文學者、藝術家よりは幸福で、某の古い宮殿に働いて居る科學者四千人と書いてあるといふが、ロシヤの科學者自らの稱する所に依れば、ウエルズのは案內者に引廻はされただけの觀察であるから、事實を失してゐる。眞の科學者は漸次に死絕えつゝあるので、所謂四千人は消防學舞踏學など、數へた種類の科學のそれであるといふ。是も亦「科學のプロレタリヤ化」であるが、卑近な實利といふことは科學の生立ちとして決して相應しないものでないであらうが、科學者自身が Primo vivere, deinde philosophi を繰返してゐる狀態ではそれが有趣味に發達することは困難であるであらう。

新刊紹介

■支那傳說集（木下杢太郎著）材を主として支那小說中より取れる興味多きもの最近の好著と云ふべきである（金二圓五十錢精華書院發行）

■勞農革命の建設的方面（ニコライ・レーニン著、山川均山川菊榮共譯）全篇を通じて極めて冷靜に、社會主義的革命の建設的方面を極めて實驗的に極めて懇切に說く、蓋しソヴエット政治を實際を知らんとする者の必讀すべき良著（定價金壹圓五拾錢三德社發行）

■結婚生活（永島直昭譯）ストリンドベルヒの中下女の子と共もに貴き彼の生活を語る作として知らる（定價金壹圓五十錢新潮社發行）

■アッシジの聖クララ（二階堂眞壽著）アッシジの聖クララを眞摯に描き出せるもの（定價金一圓三十錢叢文閣發行）

■幼年（佐藤春夫著）星以下氏の短篇數篇を集む（定價一圓五拾錢　新潮社發行）

■大佛開眼（長田秀雄著）氏最近の長篇戲曲（定價一圓貳拾錢　新潮社發行）



惠まれたる性の爲に（四）

醫學博士　永井潜

十

そこで更に觀察の方面を變へて、男女の外力に對する抵抗を見よう。先づ男と女とどちらが強いかと云ふ問題に就て觀察された結果を述べて見たい。此點は特に注目すべきものであつて若し強いて男と女とを比較した場合、公平な立場より婦人の方が男子に勝つて居ると云ふことを言ひ得るならば、それは則ち此の婦人の抵抗力が強いと云ふことであると思ふ。是だけは確かに男女の兩性の區別に於て深い有機的根抵を有せるものであつて而かも婦人が男子よりも遙かに強味があると云はなければならない。

『弱き者よ、汝の名は女なり』とは有名な詩句である。併しながら是は人間から弱く見えるのであつて、若し造物主の眼から見たならば、『強き者よ、汝は女なり』と言ひ得るであらう。其點に就て是から少しく述べて見たいと思ふ。一體男と女と生れる數を比較して見ると、遙かに男の生れる方が多い。之は各國を通じ各分野に亘つて、色々地理的關係を見渡した所で何處にも共通な現象である。男の方が餘計生れる、比較の數の割合は所に依つて隨分違つて居るが、兎に角男より女が餘計生れると云ふやうな所は先づ無いのである。然るに大人になつた人口を比較して見ると、大抵の所が、殊に文明國に於て比較的女子の數が多くなつて居るのである。尤も其點に於ては多少例外はある。例へば日本の如きは、依然として男子の方が多い。斯くして文明國では女子の超過と云ふことが大變な問題になつて居る。他のことは一面殖民の際男子の專ら國外に移ること、一面には男の死亡率の高いことから說明が與へられる。即ち生れるのは男が餘計生れて、生き殘つて大人になつて居る所のは割合に女子の方が多いと云ふことはどうして起るのであるか。是は非常に大切な問題である。

然し是は極めて簡單に說明が出來ると云ふ人もある。何であるかと云へば男と云ふものは外界に對して生存の爲に非常に心身を過勞せしめる。又男子は生活狀態で放縱である。愼み深くない、さう云ふ色々な原因によりて男子をして餘計犧牲に供せしめる。從つて女子の方が餘計生き長らへて數が殖えるのである。斯う云ふ風に之を說明すべしとしたのである。是は一部分眞理があるであらう。併しながら男女の生き長らへる生に對する抵抗力の相違と云ふことは、唯簡單にそれだけの理由では決して說明が出來ないのである。戰爭があるとか、職業の危險的關係が男子に對してより容赦なく働くと云ふことだけでは決して說明が出來ない。何となれば男子は是等の生活の危險、或は戰爭の如き、或は其他日常の生活に於てより多く脅かされると云ふ事は普通一人前の人間になつて、初めて男女の間に働く所の相違である。まだ一人前にならない、非常に小さい子供の時に斯う云ふ原因が男女の數の相違を喚起す程度に於て働きかけるとは考へられないことである。然るに男女の死亡する關係の相違を調べると、其の相違は早く既に、生れると直ぐから働きかけて居るのである、即ち男兒は餘計死ぬるのである。又段々と生後三ヶ月とか半年とか一年とか云ふ風に、各年齡に亘つて死亡する率を調べて見ると、多少の例外はあるが、男子の方が常に女子に對して其率が高いと云ふことは統計に依つて疑ない事實である。今男女の生に對する執着、生存に對する抵抗力、即ち言葉を換へて言へば外界から働きかける所の戰爭、又は職業の危險以外に內に備つて居る所の、有機的の根抵に就てコリンと云ふ人の統計を示さう。

コリンの統計に依ると、生後三十分間に女の兒が一人死ぬる間に男の兒が十六人死ぬる。一時間には女の兒が二人死ぬる間に男兒は十九人死ぬる。六時間には女兒が七人死ぬる間に男兒が二十九人死ぬる。斯の如く生れると直ぐからもう既に淘汰の關係が男女に於て著しき相違がある。生れるより前に此關係を見る事が出來る、御承知の如く死產と云ふものは男兒に多くして女兒に少ないのである。有名なベルチレンが計算した所に依ると、生きて產れる子供は男兒の方が少いので、女が百に就て男兒が、國に依つて違ふが一〇四、一〇六と云つたやうに百に就て四人か六人は多い、大體の平均から云へば此位の關係に在る。死產に就て統計を見ると、女兒の死んで產れる百に就て、男兒の死んで產れるのは百三十六と云はれて居る。男と女とは胎內生活をやつて居る時から著しい相違があつて男は女より死に易いのである。俗に謂ふ男は育ち惡いと云ふのは、決して間違つて居ない。深い經驗から來た所の傳說である。

同じような統計がローセルと云ふ人に依つて現されて居るが、其結果に依ると生後一日間に死ぬる割合は女兒百に就て男兒が一二八、第二日目は女兒百に就て男兒一三六、第三日目は女兒百に就いて一三四、四日目には一四三、五日目には一三七、第一ケ月目には一二〇、二ケ月目には一二三、三ケ月目には一二一、四ケ月目には一一六、斯う云ふ風な統計が擧げられて居る、何時でも男の方が女より餘計死ぬるのである。

そこで產れて直ぐ男の兒が餘計死ぬると云ふ原因は、簡單に說明が出來やしないかと云ふことを考へた人もある。男の兒の頭蓋骨は女の兒よりも一般に大きい。胎兒の身體と云ふものは一般に頭が大きいのであつて、楔(くさび)のやうなものである。であるから頭さへ出れば後は易々と出來る。頭が一番出るのに困難である。さう云ふ譯であるから頭の大きい男の兒が生れる場合には苦痛が多い。即ち壓迫される。比較的狹い產道を通り越す場合に機械的に壓迫される。斯う云ふやうな關係は女兒に於ては割合に輕い。さう云ふ影響は生れた後に繼續して、或程度迄無理をして出て來た爲めに、男の兒の元氣が衰へ、窒息死を起すと云ふようなことで餘計死ぬのではあるまいかと云ふ意見が現れたのであるけれどもさう云ふものであれば、是は男女の性的の區別が斯の如く男兒を死に傾かしめると云ふよりも、寧ろ一時の環境的の關係と云ふものが働いたものだと言はなければならぬ。併ながらそれだけの原因ではないことは、唯今申したローセルの統計に依つて、男兒が餘計死ぬるのは、啻に生後數時間或は一日、或は二日三日と云ふやうな短い時ではないのであつて、十日でも、一ケ月でも、二ケ月でも、三ケ月でも或は更に言ふならば一生を通じて、ズツト男子の方の死亡率が女子よりも割合に多いのである。即ち男兒の方が女の兒よりも餘計死ぬるのは、有機的に、性的の區別の上に、死亡率の高低と云ふことの根ざしを有つて居ると考へなければならぬ。さう云ふ譯であるから、男が十萬人女が十萬人生れると假定して、生後一年の間には男の方が二千六百七十七人だけ少くなるのである。段々年を取る程益々男女の生き長らへ、反對に云へば死ぬる側が違つて來る結果、六十七歲になると、其男女の差が極端に達して、六千七百三十九人だけ男の方が少なくなると云はれて居るのである。

此の生に對する執着、生命を脅す所の色々の關係に對する抵抗力が、婦人に於ては男子よりもより大きいと云ふことは、其他の色々の關係からも說明さるのである。例へば、長命をする者の統計を取つて見ると、何時でも、男よりも女の方が多い。長壽を保つ者に男が少ないと云ふことは、爭なき事實である。

吾々は同じ立場から之を解釋する事が出來るのである。或は又病氣に對する抵抗力である。之を調べて見ても、或病氣は成る程婦人の方が餘計冒される、例へば生殖器の病氣であるとか、或は又チフテリヤの如き、或は又癌の如き、比較的女子の方が餘計罹る。併ながら、さう云ふ少數の例を除いては、大抵の病は男子の方が罹り易い。のみならず病氣に依ると婦人の方が罹り易い事があつても、死亡する關係を見ると、矢張女子の方が割合に低い。チフテリヤは女の兒の方が男の兒より特別な關係から危險である。チフテリアに罹ると、息の通ふ途、喉頭が女子に於ては小さいから容易く塞がる、即ち窒息を起す原因が女子に大である。斯様な特別な場合を除くと、傳染病に對する抵抗力は婦人の方が強いのである。さう云ふことを考へて見る時に吾々は女子の生に對する執着力と云ふものは、男子のそれよりも遙かに強いものであると云ふことを言はざるを得ない、即ち前に述べた如く、弱き者よ、汝の名は女なりと云ふ言葉は、身體の大きさとか力とか云ふことからして、人間が之を表面的に觀察して述べた所の言葉であつて、生物學的根柢を標準として述べるならば、少なくとも生存に對する根強い力に對して、『強き者よ汝の名は女なり』と言はなければならぬ。

婦人は斯の如くにして、或意味に於て天の恩惠を受けること男子よりも大なるものがあると云はねばならぬ。例へば遺傳病に就て考へて見ても、或病氣は男子には現れて女子には現れないと云ふ場合がある。女子の身體に遺傳的關係を起すべき物質は傳へられて居りながら、それが女子に現れないで男子に現れる。即ち病氣の父から娘を通して男の孫に傳はると云ふ場合が幾らもある。娘には現れないで其娘の生んだ子供の中の女兒に現れないで男の子に現れると云ふ場合が幾らもある。例へば血友病と云ふものゝ如きは、是は血液が血管の外に出た場合に固まると云ふのが普通の性質であるけれども、此病氣は固まらないで何時迄も流れて出るから、少しでも傷を受ける　非常に危險が起る、さう云ふことは婦人の身體には、絶對にないことはないが極めて少ない、男子にのみそれが遺傳して出て來るのである。是は女子に取つては非常に必要な事柄であつて、此血友病が婦人に屢ゝ起るならば、婦人が月々定つた出血をする場合に、此血友病の爲めに生命を犠牲にしなければならぬことを喚起するから、さう云ふ病氣があつてはならぬのである。

斯く婦人が生の脅威に對して根強いと云ふことは、婦人の體を構成せる細胞が、まだ老衰せず生々の元氣に滿ちて居ることを語るもので、此の點も又夫れが子供の體に近似することを示すものであり、是れと同時に婦人の大切なる天職たる生殖と云

ふことと離るべからざる關係を持つて居ることの證據である。況し人間の如く子供が母の胎内に、非常に長く宿つて居る場合に於て、此生殖の働に對する婦人の力、婦人の影響は、膝下の教育と云ふが如き精神的關係を措きて單に有形的にのみ考へたばかりでも相當に大切な意味を持つて居る。即ちさう云ふことを十分に成し遂げしめる爲めに必要なる働が婦人の身體の上に十分に現れて居るのである。唯有形的の關係から言ふならば、先に述べた如く、婦人は腹の人で男子は胸の人であると云ふこと、又婦人の子供らしいと云ふことも子供と同化し子供を養育するに大切な性格であり、且つ又婦人が生の脅威に對する抵抗が強くして、よく生を保ち從つて生殖作用を安じて十分に行ふ事が出來ると云ふことは、皆同一の立場から説明する事が出來るのである。

十一

人は往々婦人が小供に近いと云ふことを以て男女の優劣を論ずる根據とする。小供に近いと云ふことは原始的の狀態である。原始的の狀態であると云ふことは卽ち婦人の位置が男子に比べて低いと云ふ證據であると、如何にも尤もらしく論じ立てるのであるが、それは果して眞理であるか、深く考へなければならぬ問題である。其の子供性に近いと云ふことが果して階級が低いと云ふことを意味するかどうか。一面から言へばさう云ふ風にも考へられる。けれども、吾々は必ずしもさう考へられない理由を持つて居る。

頭蓋骨を御覽になると、ゴリラの子供と人間の頭蓋骨とは非常に能く似て居る。さうしてゴリラの親になると人間とは非常に違つて居る。此頭蓋骨を人類學的に比較して優劣を定めさせると、誰でも親の方が劣等である、と言ふのである。或は尖頭が前頭葉の發達の不可なることを意味するとか、或は顎の骨が子供は優しく出來て親のゴリラでは強く出來て居るとか、總てゴリラの子の方は親のよりは人間に近いのである。して見ると、小供の時の狀態から大人の時の狀態になつたことが、必ずしも發達向上を意味して居るのではないのではないか。エリスの如きは切に斯う云ふことを述べて居るのである。一體有機的生活が、一番圓滿具足せる性を現すのは、所謂胎内生活をして居る時である。胎内生活はエデンの樂園にある寵兒の生活である。之に反して胎外生活に於ては、其有機體は自分の生存を維持して行かなければならぬ。彼れは自分の額に汗して、自分のパンを得なければならなくなるのである。そうして其の爲めに必要なる色々の變化を蒙るのである。謂はゞ蕾の時が一番美はしいのであつて、蕾が段々開くことは、既に老衰凋落の第一步なる

けたのである。段々と花が開いて行く所に已に凋落が始つて行く、生存の維持の爲にする努力は自分で自分を衰退さして行くのである。其の爲に蒙る身體の變化は必ずしも向上を意味して居るのではない。恰も蕾が綻(ほころ)んで花となつてやがて散り失せる樣に、圓滿具足せる胎內生活から出發して變化し爛熟して、一步一步死に向つて進むのである。さう云ふ立場から考へると、前にも述べたやうに、人間が段々と子供の時から大人に移り行くー例へば頭蓋骨に就て考へて見ると、子供の時の頭蓋骨から假に大人の頭蓋骨に移り行くと、頭蓋部顏面部の比例が段々變つて來て、顏面部が下顎骨の發達に依つて、大變に大きくなることが、必ずしも進步であるとは云へないのである。顎の問題は生存の問題である。爾の額に汗して爾のパンを造るに必要なる問題である。女子よりも男子に於て此の顎骨が發達することは神に近づくと云ふよりも、寧ろ神に見放されて獸類に逆轉しつゝあるものとも云へるのである。斯かる立場から論じて見るならば、婦人が何時迄も子供性を有つて居る、何處迄も蕾であるに反して、男子は段々と其子供性を遠ざかつて、早く花が咲いて早く散つて行く。即ち婦人より男子は早く老いるものであると斷定せなければならぬ。生の港を出帆して死の港に向ふ船の早さが、男子に於ては早く彼岸に到達するものであると解釋しなければならぬ。

次に又子供の時胴體は長い、手足は短い、婦人の體も之に類似して居る。大人になると胴が比較的短くして手足が割合に長くなる、併しさう云ふ事柄が果して直ちに進化を意味するかどうか、人は一時それを以て進化であると解釋しようとしたのである。そこでさう云ふ目安から今度は色々の人種に就て胴と手との比較をして見た。一番胴が短かくして割合に長い手足を持つて居るのは進化の度の高い人種であると云ふ風に考へた。然る所事實斯樣な身體を有つて居るのは黑人であることが分つた。其點に於て一番子供性を保つて居るのは吾々黃色人種である。白色人種は其中間に位するのである。白人中心主義の人類學者が手足の長いと云ふことは恐らく歐羅巴人に於て見るべきであらうと考へて、博物館に入つて色々の骨を取つて比較した結果、意外にも黑人が一番長いと云ふことを見て大に失望したのである。若し人間性の發揮と云ふことが段々子供性を去つて大人の狀態に行くと云ふことに依つて、十分に發揮せらるゝものとし、それが即ち人間性の向上であると看做すならば、黑人が一番進化して居る人間であると言はなければならぬ。斯樣な譯であるから、婦人が子供らしい性質を持つて居ると云ふことで、婦人を賤しみ、男子よりも原始的の狀

態に在るものと速斷することは間違つて居る。のみならず或意味に於ては其子供性を持つて居ると云ふとが、即ち婦人の誇でなければならぬのである。何となれば子供性を持つて居ることは若いと云ふことを意味する。子供性を段々離れて行けば行く程個體は其の若々しさを失つて、さうして、老衰の域に近づいて行くのである。故に、婦人の身體が何時も若さを保つて居ると云ふことは、前に述べたやうに、婦人は其種族の生殖と云ふことを掌る非常に大切なる天職を發揮する爲めで、總ての生の脅威に對する抵抗を保持し、美しい若さを保つて居ることが、婦人の婦人たる所以である。

十二

人は又た知識の器官たる腦髓の重量が、男子に於て婦人に優越して居る點を捉へて、往々男尊女卑の正いことの論據とする。成る程男子の平均の腦重が女子の夫れに比して重いのは事實である。併しながら是を以て直ちに男子の知力が女子に優れて居ると云ふ證據にはならない。鯨の腦重は七〇〇〇瓦あるが、人間の腦重の平均は男一四三一瓦、女一二二四瓦である。然らば此を以て直ちに鯨は人間に優て居ると誰人か速斷し得やうぞ。鯨の腦重が人間のよりも重いのは、全身が大きいからである。即ち斯る場合には體重を腦重に割り宛てゝ始めて、腦髓の大小輕重を比較することが出來るのである。鯨の體重は七千四百萬瓦である。そこで腦重を一とすると之に對する體は一〇五七一になる。即ち鯨の腦髓は僅かに體重の一萬五百分の一にしか當らない。然るに人間の體重は男平均六萬六千二百瓦であるから、腦重一に對する體重は四十六となる。即ち男子の腦髓は體重の四十六分の一に當るもので、男は鯨に比して遙に重い腦髓を有することが分かる。同じ算法で婦人の腦重と體重とを比較して見ると、體重の四十五分の一に當るもので、男子よりも女子の方が比較的重い腦髓を有つことになる。加之毫も活動を行はない脂肪組織が、婦人では男子よりも餘計にあるのであるから、之を差し引いて、眞に活動すべき體成分に腦重を割り宛てて見ると、益々婦人の方が有利となつて來る。併し斯る結果が出たからと云つて、直ちに婦人は男子に優れて居ると考ふるも亦大早計である。何んとなれば、よし腦髓の比較的の輕重が確實に定まつたとした所で、夫れが直ちに知力を測る尺度にはならぬ。腦髓の作用は、獨り量の問題でなく、夫れよりも大切であるのは質の問題である。解剖家の研究によると、偉人であつて隨分腦重の輕かつた人もあれば、之に反して凡庸の徒で重い腦の所有者もあつた。單に腦重の比較によつて男女の優劣を決定せんとするのは、其の着眼點が

から正鵠を失して居る。

　男と女とは、人間と云ふ一圓球を等分した半球である。勿論何れを優り何れを劣ると云ふことは出來ない。而かも男の花には其の花の特色があり、女の花には其の花の美さがある。吾等は宜しく其の特色美點を十分に互に了解し、互に尊重し、玆に始めて圓滿なる人生觀と幸福なる社會生活を營むことが出來るのである。

十三

　以上述べ來た所を綜合して考へて見るとどうしても婦人の大切なる天職は、何處迄も腹の人たることである、腹に蔵められて居る所の此大切なる器官に依つて、圓滿に且つ最も十分なる程度に於て、其生殖と云ふことの天職を行はなければならぬやうに其の身體が作られて居る。將來と雖も、矢張り此點は動かすべからさる婦人の特色でなければならぬ。のみならず文明が進んで、文化の程度が高くなれば高くなる程、婦人をして婦人らしからしめる婦人性と云ふものは、益々十分に現れて來るのである。而して夫れは生殖腺の内分泌によつて起さるゝのである。斯く考へ來るならば、曩に述べたやうに、生活體をして生なき物より貴からしむる最大切なる點である所の『常に老いつゝ而して常に若くある』と云ふ生殖の働きをなさしめなければならぬ。即ちそれは一個人の生活を若返らして行く上に於て非常に必要であつて、而してそれが婦人の力に待つ事最も大なるものがあると同時に、又一個人が寄つて以て出來る所の團體的の生活の上に於ても、矢張り其理法が適用されなければならぬと思ふ。澤山の人が寄つて而して社會を形成して居る、此國家社會は即ち一の活きた有機體であると謂ふ事が出來る。此有機體が舊くなりつゝ而かも同時に新であつて、常に生々潑溂たる元氣を保つて行くとの上には、婦人の力が非常に大なるものがある。而して婦人は何に依つてそれを成し遂げる事が出來るかと云へば、即ち婦人が其生殖と云ふ最も大切なる仕事を、最も眞面目に、最も完全に遂行することに依つて出來なければならぬのである。換言すれば一國の運命一民族の將來の休戚を決すべき大切なる問題は、即ち一に繫つて人口問題にあると信ずるのである。人口問題に關して一面に於ては其民族、其國家を形造つて居る所の民衆が良い性質を持つて居り、さうして又數が多いと云ふことが必要である。此大切なる問題の鍵を握つて居る者は何であるかと云へば婦人である。

　斯る立場から考へて見て、一家一社會の問題も、其の根柢に溯つて見れば、少なくとも生物學的の立場から論ずると、婦人と男子との結び着き、即ち生殖と云ふものが、主要となつて居る

のである。已に述べた如く生物を左右して居る二つの大なる力は飢餓と戀愛とである。飢餓は自分を維持して行くに必要なものであり、戀愛は自己の種族を永遠に保つて行く上に必要なる事柄である。而して此戀愛が、他愛主義博愛主義と云ふことを喚起する原因となり、飢餓は利己主義の原因となるのである。戀愛と云ふことに依つて、初めて人は他人に對して自分の美はしい我性たる同情、博愛と云ふことの第一歩を喚起するのである。斯くの如くにして家が出來子供が出來、社會が出來て來るのである。而して其戀愛關係は、動物の如き下等なるものに於ては夫れが下等であればある程衝動的、瞬間的、現在的であつて、一時の滿足で其問題が終を告げるのである。けれども、人間の如く精神生活が旺盛になり、其生活が複雜になればなる程其者の結び着きが一時的、衝動的でなく永久的になつて來る。是が卽ち道德倫理教育の根柢である。そしてそれが又一家一國が成立つ基礎をなすものである。斯の如き關係を考へる時に愈々益々吾々は此生殖と云ふものに對する男女兩性の意義の深遠なることを考へずには居られないのである。

實に今度の大戰爭に依つて世界は大なる手を見出した。而して其の大なる手は『婦人』であつた。而かも其の大なる手は獨り戰に於て大なる手であつたのみならず、戰禍の悲慘な幕が閉された今日に於て此大なる婦人の手が、世界が蒙りたる大なる戰の傷手を癒すべく、今後最も重大なる任務を帶びて居るものであるのである。『婦人の自覺』と云ふとが此點に於て最も大切である。例へば生殖問題の如き、或は人口問題の如き、由來此等の重大なる問題は或る意味に於て忘れられて居つた。恰かも吾々が日々太陽の恩澤を受けて居ながら、其恩澤が餘りに直接であり、餘りに日常の事であるが爲に、忘れて居つたと同じであつた。然るに段々文明が進んで來て、人間の生活を複雜ならしめ、其一面光の強い所も、又影の暗い所も漸く判るやうになりかけた其所に、今度の大戰爭が起つて、人種衛生學上から見て歐羅巴現代の民族に大打擊を與へ、何十年何百年と云ふ間、容易に癒す事の出來ないやうな疵を被らしたのである。斯の如くにして、人は人種衛生の上に今後如何に施設して其の大なる疵を癒すべきかに就て深く考を廻らさなければならなくなつて來たのである。勿論戰爭より前に已に近年に至つて其の必要を論ぜられて居つたのであるが、戰爭が起つて更に其聲が高くならんとして居るやうな次第である。

かうした立場から考へて見ると、所謂婦人の解放は今にして最も焦眉の急務である。併ながら此の婦人の解放と云ふことが、若しも誤られたる解放、卽ち性の根本義を辨へず徒らに女

子をして直に男子と同一ならしめんとして、例へば婦人本來の最も大切なる天職たる生殖生産と云ふが如きことを無視し、其の重大な意義を沒却せるが如き解放であるならば夫れは實に由々敷間違であると思ふ。婦人が一個の人間として男子と同權であると云ふことを主張して、男子と同じ意味に於て、社會的生活に於ける權利を要求すると云ふ意味に於て、婦人の解放が叫ばれるならば夫れは勿論至當である。獨逸の諺に Jedes hat sein Recht. sowohl Ambos als auch Hammer.（砧も金槌も共に權利を主張する事が出來る）と云ふことを言つて居る。婦人と男子の問題は蓋し砧と槌の如きものであると思ふ。成る程槌の
みの仕事が眼立つて見える。併しながら此の二つの物は金屬を鍛錬すると云ふ意味に於て、同じ權利、同じ力を持つて居ることは申す迄もないことである。其意味に於て今後の婦人は大に自覺して婦人解放を叫ばざるを得ないのである。而して今こそ夫れを叫ぶべく最絶好時である。パンカーストを中心とせる六百萬の英國婦人は此の好機を捉らへて首尾よく婦人解放の中心問題たりし參政權を把握したのである。

然らば則ち婦人が從來の屈從束縛を脫却して社會生活に於て自己の權利を主張し、自己の力を表示して男子に對抗すると云ふ場合に、抑々何を土台とし、何を立場とすべきか。私は信ずる、婦人は宜しく婦人の先天的、有機的體制に於て、深い深い根さしを持つて居る所の生殖と云ふ尊い仕事に依つて、更に具體的に言ふならば、人種衛生的等の問題に對して十分なる自覺を持つて、之を立場として自己の權利を主張し又自己の要求を十分理由あらしむべきである。而して其の爲には先づ以て婦人が自己の天職に就て自覺する必要がある。私は斯かる立場から、現代の日本婦人をして、社會衛生或は人種衛生の問題に於て、婦人が如何に大なる自覺を有たなければならぬかに就いて單に其の一端を擧げて見たいと思ふのである。

各種の統計表を見れば我國の男女の死亡率と、西洋に於ける男女の死亡率との間に、甚だしい相違があると云ふことが分る。例へば婦人が生殖を掌る一番大切な年齡、即ち先づ二十歳から四十歳迄の間に於て、我國に於ける婦人の死亡率は男子の死亡率よりも明かに高いのである。然るに泰西の文明國に於ては極めて少數の例外を除いて、何時でもどの年齡階級を通じて見ても男子の死亡率が常に婦人の夫れよりも高いのである。而して何故に我邦婦人の死亡率が斯く男子に比して高いかと云ふに、其の原因の最も重きをなすものゝ一は確に結核である。結核に對する英國と日本との男女との比較表を一見しても、結核が我が婦人の死亡率を高からしめる所の、最も大切なる原因た

ることが直ぐに分かる。而して是れ實に吾が邦に於ける婦人の虐げられたる生活の一反裡である。家庭に於て最も粗食に甘んじ、最も心神を過勞することを以て唯一の婦德と考ふる時代は已に過ぎ去つた。工場に於て羊の如く柔順なる女工を、資本家の犠牲とすべき時代は已に過ぎ去つたのである。

其の他生產率死亡率の比較表を見ても、吾が邦の生產率は、今や將さに其の絕頂に達して漸く低下の勢に移らんとしつゝあると共に、死亡率は依然として向上の勢を示しつゝあつて、少なくとも諸文明國の如く低下せぬことが分かるのであるが、斯る關係は何れも皆婦人が自分の天職を全ふして、自己の權利を完全に主張せんとするに當りて、先づ以て如何なる方面に於て自覺し、如何なる方面に向つて努力を向けなければならぬか、如何なる點に婦人運動が活動しなければならぬかと云ふことを痛切に告白しつゝあるものであると思ふのである。私共は斯かる點に於て現代の日本婦人が從來の日本婦人の爲に、將來の我國家の爲に、自覺され、一日も早く人種衞生の爲に活動されんことを心より希望して止まないのである。殊に又近時我が邦に於ても産兒調節と云ふ美名の下に、享樂本位の逃避主義が滔々として對岸の新大陸より輸入せられつゝあるが、斯る大切なる問題は婦人として、最も十分に最も愼重に之を批判して輕々しく之に眩惑されないやうにありたいものであることを特に切言したいのである。自分は決して產兒調節の無理解なる反對者ではない。否な眞の產兒調節は、人種衞生上國家の經營上最も大切なる仕事であることは言ひたいのである。而かも自分の最も憎み最も恐るゝのは、產兒調節の假面を被つて、國家を呪ふ妖魔である。苟も此病毒に感染せんか、國家は早晩衰頽顚覆を免るゝことが出來ないことは、過去の歷史が之を語つて居る。而して獨り眞に自覺せる婦人を有する國家のみが、よくこの妖魔を擊退し、この病毒に對して免疫者たることが出來ることを念ふ時私は悚然として筆を擱いて現代の日本婦人に向ひ、國家の將來の爲に躊躇の眼を向けたくなる。

自然に從ふが故を以て、美はしきが故を以て、浮雲の如き現世の富を造る能はさるが故を以て、久しく虐げられたる惠まれたる性よ、今ぞ卿の目醒むべき時が來た。曉の鐘は既に鳴り響ひて居る。法律も、政治も、敎育も、宗敎も、其の他あらゆる社會生活は、男女同權を目標として根柢より改造せられねばならぬ。而して是れ實に男も、女も、國家も、民衆も、性の根本主義に徹底し、生殖の尊嚴を崇敬することによりて、始めて行はれるのである。而かも此の徹底と崇敬とは、惠まれたる性が、其の惠まれたる所のものを眞に自覺することによつて始めて其の第一歩を進めることが出來るのである。（完）

日本社會民主黨の創立者

——片山潜・安部磯雄・木下尚江・西川光二郎・河上清——

堺利彦

明治三十四年、今から丁度二十年前、日本社會民主黨といふ政黨が創立された。そうして即日解散を命ぜられた。誠にアツケない事件であつた。然し、これが日本の社會運動の歴史に於いて、極めて顯著な一事件である事は、何人も確認する所である。實は、日本の社會主義運動が此の時から初めて本當に起つたと云つてもいゝ。その當日、社會民主黨の宣言及び綱領の全文が『萬朝報』其他の數新聞に掲載されて、忽ち發賣禁止に遭つた時、それが如何に一般社會の人心を刺激したかは、殆んど今日から想像の出來ないほどであつた。

私は今その宣言綱領の内容や何かについて話さうとするのではない。それには又外の時機があるだらう。私は只、その顯著な一事件の直接の動力となつた人々、即ち社會民主黨の創立者六人について、かれこれ思ひだす事を書き綴つて見たいのである。今や日本の社會主義運動は、その形體に於いては依然として何等の發達をも許されてゐないが、その實質に於ける二十年間の進歩は、可なり著るしいものがある。從つて此の際に於いて、當年の先驅者六人がどんな人物であつたか、そして其後どんな行動を取り、どんな運命に遭つたかを考へて見るのは、相當興味のある事でもあり、又まんさら無益な事でもあるまいと思ふ。

社會民主黨の創立者は、片山潜、安部磯雄、木下尚江、西川光二郎、河上清、幸徳傳次郎（秋水）の六人で、幸徳以外の五人は今も猶ほ生存してゐる。然し其の五人の中、現在の日本社會主義運動に直接の關係を持つてゐる者は一人もない。木下、西川、河上の三君は皆な其の節を變じて、穩健な紳士、若しくは善良な市民、若しくば崇高な道士となつてゐる。安部君は早稻田大學に隱棲して、『社會主義者』たる事に變りはないが、運動上には全く無關係の人になつてゐる。只だ一人、××××

×××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××。以下、各人について少しづゝ話して見る。

（私自身は、社會民主黨禁止の後、初めて其の運動に參加した者である。）

二　木下尚江

『君は雄辯家である、君の演說は、其組立でも修辭でも抑揚でも、大に心を凝したもので、決して一語一字も苟くもしない。……

『特に君の演說に敬服するのは、其婉言緻辭に富むことである。……故に君の演說を聞く者は、時には巧妙な淨瑠璃を聞くが如くに面白く、時には危險な輕業を見るが如くにハラ〳〵思つたことが有るであらう、古人の「擒縱自在」の一語は、君の演說を評して餘りがある。

『君は雄辯のみならず、又文筆に長じてゐる、每日新聞紙上で、論說も書けば三面雜報も書く、社會政治文藝に關する評論隨筆を書く、國文を作る、和歌を詠む、近々の內に小說も書く筈ださうだ、多藝多能、口も八丁手も八丁である』

『君は通人である、通人といつても放蕩の事ではない、君自身は酒も飮まず煙草も吸はず、隨分と頑固な基督信者である、而も君は能く世相人情に通じて居る、酸も甘いも嚙み分けて居る人だ』

『君の辯護士時代は知らないが、數年來の君の生活は極めて質素で、綿服の着流し、朴木齒の下駄、麻布の廣尾から銀座まで、每日テク〳〵歩き通つて居るのは、ポツト出の書生のやうだ、年齡は三十五六』

以上は『週刊平民』の『同志の面影』の中にある、秋水の評言である。其の並びに筆者も亦た斯う書きつけてゐる。

『予が最も多く君に取る所は其熱誠である、而して予が大いに君に望む所は、其熱のいよ〳〵熱誠ならん事である』

『君の演說には甚だ多くの滑稽がある、君は演壇に立つて自在に聽衆を笑はせる術を知つて居る、其術たるや、實に巧妙を極めたもので、人をして殆んど其術たる事を感ぜしめぬ

『或時、君は其演說について予に語つた事がある、あゝして笑はせて置いて、其あいた口の中にヒョイと苦い丸藥を投げ込むのだと、如何にもソウであらう、遙に甚だ多くの滑稽を弄してゐた君が、忽ち嚴肅の態度を取つて、其丈高き體軀を直立せしめて、其長き兩手を以て其胸を打ち叩きながら、燃ゆるが如き其腹中の情感を吐き盡す時、聽く者覺えず其聲と色とに醉はされて、讃嘆歸依の心を起すに至る』

『君の本色は人を笑はせる前の術にあるのではなく、人

はしむる後の誠に在らねばならぬ」

彼は信州松本の生れで、『五兩二人扶持の足輕の伜』であつた。若くして辯護士となり、普通選擧運動か何かの間違から暫らく長野監獄の未決監に入れられ、そこでバイブルを讀んでクリスチアンとなり、無罪出獄の後、東京に來て每日新聞記者となつた。田中正造翁の鑛毒事件には殊に肩を入れて奔走盡力してゐた。彼が『如何にして社會主義者となりし乎』については、彼れ自から斯う云つてゐる。

『余は初め少しく法律を學びたり。而して全く之を信じたり、既にして法律權威の淵源に向つて疑念湧出するものあり、偶然にも從來輕蔑せる耶蘇教を通じて「神」テフ思想を得るに至り、一段の安意を得たりしなり、斯くて余は四海同胞主義の熱心なる信者となりしも、生存競爭の地上の悲劇は神學の解釋すべき所に非ず、天地の矛盾は新に發見せられて心中の煩悶殆んど名狀すべからざるものありき、之を慰藉したるものは則ち社會主義の經濟論なり。斯かりし後、顧みて聖書を繙けば一切の疑問は基督の人格中に誤解せられ、其言論行動の中に悉く説明せられあるを見、愕然として驚き、欣然として喜べり、故に余の信仰は「基督敎的共産主義」にして又た「共産主義的基督敎なり」』

木下君は、安部君、片山君などのアメリカ系統には何等の關係もなかつたが、クリスチヤン・ソーシヤリストたる點に於いては同一であつた。そして社會民主黨の禁止以後、最も花々しい社會主義協會員として運動を繼續し、平民社の運動に對しても、初めは外部から熱心にそれを援助し、後には殆んど社内の人として働いてゐた。衆議院議員の社會主義候補に押されたる事も、東京と前橋とで二度あつた。小説『火の柱』『良人の自白』などは彼をして殆んど一個の流行小説家たらしめた。勿論、謂ゆる文壇は少しも此の門外漢の傾向小説（若しくは社會小説）を認めなかつたが、クリスチヤンの青年男女間などには大モテであつた。『良人の自白』は自傳小説で、丁度この頃の『死線を越えて』くらゐの人氣があつた。『火の柱』は社會運動小説、戀と信仰との煩悶を語つたものであつたが、とでも云ふべきもので、其の筒袖を着た主人公篠田は即ち著者自らを理想化したのであつた。

文章に於いても、演説に於いても、運動上及び社交上の態度に於いても、彼は常に幾分キザといふ批評を受けてゐた。作爲の跡があるとも云はれてゐた。然し一面には、殊に青年男女の間には、最も熱誠な人、嚴肅な人として崇拜されてゐた。何しろ社會黨中第一の才人として、安部君よりも、片山君よりも、幸德君よりも、寧ろ一層人氣のある花形役者であつた。

平民社が沒落したのは、前に云つた通り、政府の壓迫と財

の困難との外、內部の紛紜が一つの原因であつた。その內紛は主として、基督教的社會主義と、物質主義的社會主義との不折合であつた。そして前者の勢力を代表する者が即ち木下君であつた。

平民社が沒落したあとは、一方西川光二郎君の『光』と、一方に石川三四郎君の『新紀元』との對立になつた。前者は『平民』『直言』を其まゝ繼承した形で、幸德、堺等がそれを助け、後者は新たに基督教的社會主義を標榜した者で、安部、木下、等がそれを助けた。然し實際上、『新紀元』の主筆は木下君であつた。

斯くて木下君等は『新紀元』の城に據つて、『社會主義は物質的基督教也、基督教は精神的社會主義也』といふモットーを振りかざして、盛んに說教的演說、若しくは演說的說教などをやり、又盛んに田中正造翁の鑛毒事件運動を助けたりして、一年間ばかり可なり花々しい活動を續けた。

其の間に電車賃値上反對運動が起つた。日本社會黨、國家社會黨、其他の人々が提携して『市民大會』が開かれた。第一大會は明治三十九年四月十一日、日比谷公園の芝山で開かれ、山路愛山君が會主であつた。第二大會は同月十五日同處で開かれ、堺利彥が會主で、田川大吉郎、加藤時次郎の二氏が司會をやつた。其の第二大會のクヅレが兇徒聚衆事件を起して、日本社會黨から十名の被告を出した。それから猶ほ第三大會をやる事になり、今度は木下君が會主で、上野公園から日比谷公園までの途上で開會するといふ計畫であつたが、それは禁止されてオジヤンになつた。此の時の木下君の意氣込はスバらしいもので、一つ『沈默の威嚴』を示してやると云つて、自から大示威運動を指導する腹案を立てゝゐた。

所が、丁度その頃から木下君に『精神上の變動』が起りはじめた。大々的に豫告してあつた『新紀元』の夏期遊說も中止にする、日本社會黨からも脫黨するといふ次第であつた。それより少し前、『新紀元』を助けてゐた德富健次郎君も、『心裡に革命を起して』『新紀元』の小說を中止した。精神主義者の病癖が頻々として現はれた。

そこに前記の『日刊平民』の話が起つた。西川君は『光』をやめ、石川君は『新紀元』をやめて、皆が再び大合同で日刊をやる事になつた。然るに木下君は其とき最早や社會主義者ではなかつた。彼は『新紀元』の終刊號に『懺悔の辭』を載せ、『新紀元は兩頭の蛇なりき』『新紀元は一個の僞善者なりき』彼は同時に二人の主君に奉事せんことを欲したる二心の佞臣なりき、彼は同時に二人の情夫を接續せんことを企てたる多淫の娼婦たりき』

と云ひ、『嗚呼うるはしきかな天國の門』と云ひ、『踏みゆく道のなど斯くも狹く險はしきや』と云ひ、其の謂ゆる『狹く險はしき』然しながら確かに無事安全なる、宗教の道と、小說の道とに進んで行つた。斯くて木下君は永久に社會主義運動から離れてしまつた。

其の後の木下君は、天理教を探り、法然親鸞にあこがれつゝ、猶ほ小說を書きつゞけてゐたが、結局、岡田式靜座法の長老となり、書かず、語らず、只だ『三河島の聖者』として行ひすましてゐた。

明治四十四年、大逆事件の後、『實業之日本』の紙上に、久しぶりで木下君の文章が現はれた。それは彼が社會主義から靜坐に『向上』した心的經路を語つたものであつた。筆者は其とき、『實業之世界』の紙上を借りて、少しくそれを批評した。其の批評を少しこゝに摘錄する。

『僕は又木下君が「政治問題、社會問題などに對して、余は全く別の立場に在る。從つて見解が全く一變した」と云つたとて只サモソーズに申上げる丈の事である。木下君は元々中等階級の人である。それが姑く平民勞働者の代表者として立ちかけて居たが、今又元の中等階級の立場に戻つて、傍觀的態度逃避的態度、獨善的態度になつたのだと見れば、何んの事はない善く分る。

〔木下君は「基督教徒として此の一身を日本の國土に貢獻したい」といふ念願で東京に出て來た。「此の念願を政治的方面に實現したいと着眼」して「社會黨の創立に參加した」。然るに「此の若き義人は實は名聞利達の情慾に驅られて、行方定めず漂浪する盲目の餓鬼に過ぎないことを見た。」それから「日夜懊惱して居る最中……母の死に依つて、多年の暗き夢から醒めた。」それから「東京を捨てゝ上州の山へ行つた」「原始に歸らねばならぬと思つた禪僧などを夢想した。」「大和の丹波市まで天理教を尋ねて行つた。」而して今は岡田さんに依つて實に其(靈肉今現、心身一如)の道に觸れる事が出來た」然るに木下君は其間ツイ一度も生活の不安、若しくは危險に就いて、懊惱した事も煩悶した事も無いらしく見える。……木下君の出處進退は、いつまでも必ず高尙幽玄なる動機から出て居るらしく見える。

『僕などは社會主義者として常に我が生活の不安と危險とに就いて思ひ煩うた。……

『こんな風に、自分等の行爲を周圍の境遇から割出して考へる癖の者に取つては、ツイ人樣の事も同じ様に考へて見たくなる。……現に元社會主義者の中に、僕等は一身一家の事情

上、どうも仕方がないから、當分猫をかぶるのだと、アツサリ打明けて話す人が隨分多い。

『然し……或人には他の種々な理由に依つて社會主義を棄てたと云つて居る。そして其の理由は、多くは宗教的、若しくは倫理的の色彩を帶びて居る。……

『唯心論的、理想的、若しくは精神主義的傾向を有する人は、自分で自分を客觀して批評する事が出來にくい、そういふ人は、自然に周圍の境遇に動かされながら、どこまでも我が自由意志、若しくば神の御心で動いたと思ふものである。そこで……自由意志に依つて社會主義を棄てたと思ふ者は、倫理的の理由を附し、神の御心に依つて社會主義を棄てたと思ふ者は、宗教的の理由を附する事にある。從つて本人の意識としては、社會主義を止めたが爲に、一層高尚な人間になつたと自覺する事になる。……

『……失禮ながら僕等は矢張り木下君をも此連中に編入するの外はない事になる。……木下君が「日夜懊惱」したと云ふのは、本人の意識としては宗教的煩悶であつたらうが、我々から見れば、矢張りそれが生活上の煩悶であつたのである。木下君が「眞の立場を發見せねばならぬといふ事を」「眼前唯一の生死問題」としたと云ふのも、我々から見れば、矢張りそれが熱心に安全な立場を求めて居たのである。木下君は「予の態度に就いては内外に種々の非難があつた。舊同志の間には政府から金を貰つたのだらうとの嘲弄さへもあつたさうだ」と云つてゐるが、……當時同志の間にそんな嘲弄は無かつた。只、木下君も矢張り幾分か、少くとも知らず識らず、危險を避けたのだらうといふ批評はあつた。……………

『以上、木下君ともあらう人に向つて、甚だ失禮な批評ではあるが、僕の方にも亦少しく諒察を仰ぎたい點がある。社會主義をやめた人は、堂々として其のやめた所以を世に發表する自由を有して居るが、社會主義をやめぬ人は、其やめぬ所以を十分に言明する自由を有して居らぬ。然るに其の自由を有して居る人が、幾度も〳〵繰返して、是れ見よがしに其の自由を利用しては、其自由を有せぬ人は、聊か侮辱せられたかの感を生ずる。そこで……せめて側面からなりとも、不自由の中に僕がの自由を便りにして、一本だけは參つて置きたいと云ふ氣になる。

『今一つ木下君に恕して戴きたい點がある……僕の批評は其の(木下君の)超人高士の後光を取去つたと云ふ點に於て、甚だ亂暴狼藉の次第ではあるが、然しそれに代つて、今度は僕等が義人烈士の後光を身に添へようと云ふ譯ではなく、僕等は

只諸君と共に、常に境遇に制せらるゝ弱き人間たる事を以て滿足せんとするのである。………』

それから何年か立つて、筆者はフト四谷の通りで木下君に行きあつた。彼は新宿終點のパン屋に開かれる靜坐の會に行く所であつたらしい。例の筒袖の着物を着て、髭をムジヤ〳〵とはやした所は昔しの儘だつたが、頰べたの肉が盛りあがるように膨らんで、腹なり腰なり丸々と肥ふとつた所は、如何にも立派な體格で、さすがは健康專門家たと感心した、そして、惡口は云つて見たりするものゝ、久しぶりに會つて見ると、やはり懷かしい氣持がして、暫らく無邪氣な立話をして別れた。

最近に木下君は田中正造翁の傳記を出した。先日改造社で、フト其の本がテーブルの上にあつたので、序文だけ讀んで見た。相變らず『敬虔な』『嚴肅な』字句を使つて、『懺悔』が披瀝されてあつた。(未完)

新刊紹介

□家出の前後(千家元麿著)戯曲、家出の前後、知らない土地の二篇を收む(定價九十五錢、叢文閣發行)

□東山夜話(成瀨無極著)短篇、斷腸記、思ひ出、雜言、南支印象記、四の夜話を收む(定價一圓五十錢、東京京橋加賀町一〇內田版株式會社發行)

□愛の惱み(石丸梧平著「結婚生活」への續編、(定價貳圓參拾錢、內外出版株式會社發行)

□空地裏の殺人 木下杜郞著)戯曲空地裏の殺人以下和泉屋染物店、醫師ドオバンの首を集めたもの(定價九十錢、叢文閣發行)

□彼女は去り行く時(克比古著)第一輯 自由の樹蔭(定價一圓六十錢、濱松市旅籠五〇宣傳社發行)

□三年間(チエホフ著、秋庭俊彥譯)チエホフ全集の五、短篇三年間以下谷間、檢計者を含む(定價一圓貳拾錢新潮社發行)

□妹の結婚(藤森成吉著)氏最近の長篇小說(定價一圓五拾錢、東京牛込神樂町二丁目十一番地叢文閣發行)

自叙傳（三）

大杉榮

一

高等小學校の二年を終る少し前の事だつた。或日先生から、大澤と大久保と僕と三人に、其晩先生の下宿を訪ねるようにと云はれた。

『何んの用だらう。』

三人は心配しだした。先生に自分の家へ來いなぞと云はれたのは始めてだつた。が、いくら三人が首をあつめて見ても、それが何の用だかは、どうしても見當がつかなかつた。それだけ三人は猶心配した。

三人はどこかで待合せて、びく／＼しながら、地藏堂町の先生の下宿へ一緒に行つた。

先生はにこ／＼してゐた。そして自分でお茶を出してくれて、かしこまつてゐる僕等に無理々々にあぐらをかゝした。

『こんど此の土地に中學校が出來るんだがね、どうだ、皆んなはいつて見ないか。』

先生は眞黒な顔の中に白い齒を見せながら切りだした。中學校が出來ると云ふうはさは僕等もうす／＼聞いてゐた。しかし、それがまださうはつきりした話でなかつたやうなのと、高等二年を終へれば直ぐはいれるなぞとは知らなかつたのとで、僕等は大してそれを問題にしてゐなかつた。三人はどう返事していゝのか分らんので、暫くの間默つてたゞ顔を見あはしてゐた。

『高等二年を終へれば直ぐはいれるんだがね、ほかのものはとにかく、君等三人だけは僕が保證するから是非はいつて見な

いか。家へ歸つて先生がかう云つたからと云つて、よくお父さんやお母さんと相談してごらん。』

僕等は急にうれしくなつた。そして、もう中學校へはいつたやうな氣になつて、「しかし此の事はほかのものには話ししないやうにね』と云ふ先生の注意もうはの空で、大喜びで家へ歸つた。

先生は、僕等には始めての師範出の若い先生だつた。それまでの先生は、尋常四年の時の島先生を除けば、皆ないゝかげん年とつた先生ばかりだつた。そして先生は、僕等とほんとうに友達になつて遊んでくれた、始めての先生だつた。『僕』なぞと云つたのも先生だけだつた。

先生は來ると直ぐ高等一年の僕等の組を受持つた。先生の眞黒な顏は最初僕等にあまり受けがよくなかつた。ちよつとこわさうに見えたのだ。が、此の先入見は、唱歌の時間に直ぐ毀されて了つた。今までは女の先生ばかりがやつてゐた唱歌までも先生が受持つたのだ。それだけですら既に先生の上に、或る人望と好奇心とが加はつた。そして其の最初の時間は實に奇觀なものだつた。

兵隊のやうにからだのいゝ、胸を前につき出して、眞黒な顏の先生が、オルガンの前に腰かけた。僕等は其のオルガンからどんな音が出るだらうかと待ち構へてゐた。オルガンの音は優しい顏の女の先生のと別に變りはなかつた。が、其のやはり眞黒な、毛もしやくしやの、大きな指が、少しもぎごちなくはなく器用にそして活潑にキイの上を走るのが、先づ皆んなを愉快がらした。

やがて先生が歌ひ出した。眞黒な顏一ぱいに廣がつた大きな口から、教室ぢうに響き渡る、太いバスが出て來た。おちよぼ口をして聞えるか聞えないやうな聲を出してゐる、女の先生の聲ばかり聞いてゐた僕等は、それですつかり先生に參つて了つた。そして皆んなは非常に愉快になつて、出來るだけ大きな口を開けて、出來るだけ大きな聲で歌つた。

そして、これは特筆大書しなければならん事だが、僕は此の先生にだけはたゞの一度も叱られた事がなかつた。

それだのに、どうだらう、僕はかうして二年間も隨分可愛が

つてもらつた此の先生の名さへも忘れて了つてゐるのだ。

先生から中學校行きを秘められた事は、堅く口どめされてゐたのにも拘はらず、直ぐに皆んなの間に擴がつた。そしてそれと同時に、中學校が出來ると云ふ事も確實になり、高等二年を終へたものは直ぐにはいれると云ふ事も知れ渡つた。僕等と同じ級からの入學志望者も大ぶ出來た。そしてそれらのものから僕等三人は一種の憎しみの的となつた。

四月のはじめに、僕は中學校の假校舍になつてゐた何んとか寺へ入學願書を持つて行つた。受付の事務員が、暫らくの間それを讀んでゐたが、やがて『あんたは年が足りないから駄目です』と云つてそれを突つ返した。僕は泣きさうになつて家へ歸つた。

學校の入學規則には滿十二年以上とあつた。そして僕の願書には滿十一年十一月とあつた。一ケ月足りないのだ。僕はくやしくて堪らなかつた。父も母も『そんなに急ぐには及ばんから來年の事にするさ』と云つて慰めてくれるんだが、僕はどうしても思ひきる事が出來なかつた。皆んなが『ざまあ見ろ』と云つてあざ笑つてゐるのが、直ぐ目の前に見えたのだ。

僕は滿十一年十一ケ月と云ふのを十二月となほして、もう一度中學校の事務所へ行つて見た。

『よく勘定して見ると十一ケ月ぢやないんです。十二ケ月です。十二ケ月なら都合十二年になる譯なんだから、それでいゝでせう。』

僕は一生懸命になつて、自分の生れた月の五月から始めて六七八九……一二三四月と十二まで指を折つて見せて其の確かに十二ケ月になる事を力說した。

事務員は笑つてゐたが、『とにかく相談して見ませう』と云つて願書を受けつけてくれた。僕は其の翌日又行つて見た。そして要するに、一學期間は皆んな假入學を許して、九月からほんとうの生徒になるんだからと云ふので、僕は入學を許される事となつた。

中學校には僕等三人のほかに同じ級から二十名近くはいつた。が、其の半分は本入學の時に篩ひ落され、あとの半分も大部分は二年へ行く時に落されて了つた。そして其の殘りの一人

か一人も三年に登る時に落されて了つた。

二

此の十三の春は、からだの上にも心の上にも大きな變化を僕に齎らした。

或日、偶然僕は僕のからだの或る一部分に、うぶ毛ではない黑い毛の密生して來てゐる事を發見した。僕はそれが非常に恥かしかつた。これは僕と同じ年の友達には勿論、一つ二つ年上の友達にもまだ見ない事だつたのだ。僕は幾度も、或は便所で、或は自分の室で、窃つとそれを××××××××××した。が、いつの間にか又それが前よりも、もつと×××××して來るのだつた。

これと殆んど同時頃に、僕はほんとうの自慰を覺えた。前にお花さんとやつたほんの遊びが、こんどは×××××××××××××なつたのだ。

それ以來僕は机の前に長い間座つて本を讀む事が出來なくなつた。一時間も座つてゐると、×××××して來て、どうしてもじつとしてゐる事が出來なかつた。そして一日に二度も三度も自慰に走つた。

勉强家だつた僕はすつかり怠けものになつて了つた。

僕は父や母が少しでも猥りがましい事をしたり、そんな話しをしてゐるのを見た事も聞いた事もなかつた。

從卒や馬丁が女中とふざけてゐるのはよく見た。馬丁はほかゝら通つて來るのでそれ程でもなかつたが、從卒は書生か下男同様に泊りこんでゐるので始終女中とふざけ合つてゐた。從卒の室へはいつて行つて、從卒と女中とが今相撲を取つてゐるのだと云ふところを見た事もあつた。又、女中が眞赤な顏をして、息をきらしながら、着物の前を合せ合せ從卒の室から飛び出て來るのにぶつかつた事もあつた。やがて此の女中は其の從卒の子を孕んで宿にさがつた。

僕等がゐた片田町の裏の小人町（おこひとまち）と云ふのは淫賣町だつた。片田町の一方のはじの、西ヶ輪に近い部分も、やはりさうだつた。日曜の夕方そこを通ると、きつと酒に醉つぱらつた兵隊が、眞白た女の頸にかじりついてゐるのが見られ

た。

一度、馬丁に連れられて、西ケ輪の何んとか温泉と云つたお湯屋へ行つた。眞白な頸の女が大勢はいつてゐた。男も二三人まじつて見えた。馬丁は僕に待つてゐろと云つて、自分一人其の中へはいつて行つた。男と女とが湯船の中に入りまじつて、キヤツ／＼と云つて騒いでゐた。僕はいやになつて、馬丁がとめるのも聞かずに、一人で家へ歸つた。

が、僕自身は女の友達とはだん／＼に遠ざかつて行つた。

學校が別になつてめつたに會ふ機會のなくなつた光子さんは、折々其の小さい弟を連れて、夕方近くに練兵場へ散歩に來た。彼女はたしかに僕に會ひに來るのに違ひなかつた。其の弟を連れて來たのもそこへ出る口實に違ひなかつた。僕は彼女の姿を見ると直ぐに練兵場へ走つて行つた。二人は一二間まで近よつてかすかな微笑を交せば、それでもう事は十分に足りるのだつた。彼女はそれで滿足して歸つた。

光子さんと僕との間は要するにたゞこれだけの事に過ぎなかつた。僕は光子さんと交したたゞの一と言も覺えてゐない。一と云ふよりも寧ろ、お互に言葉を交したと云ふ程の事も嘗つてなかつた。それでも二人は、少なくとも僕の心の中では、立派な戀人同士だつたのだ。

其後僕は彼女がどうなつたか知らない。彼女の姉さんは、やはり彼女と同じやうに美しかつたが、貧乏人の子の秀才が勉強するには其のほかに方法はなかつた。新潟の師範學校にはいつてゐた彼女もやはり其の姉さんと同じ運命に從つた事と思ふ。

光子さんの姿が見えなくなつたあとで、或はやはり其頃であつたかも知れないが、其の小さな妹を連れて、やはりたしかに僕との單なる微笑を交すために、練兵場へ散歩に來た女の子があつた。警察署長の娘だつた。

やはり僕はたゞの一度も言葉を交した事はなかつた。そして彼女と向ひ合つて立つたのはたゞ次ぎの場合の一度だけだつた。

僕は父の使ひで署長の官舎へ手紙を持つて行つた。玄關で取

次ぎを乞ふと、ふいと彼女が出て來た。彼女も僕も眞赤になつて何んにも云ふ事が出來なかつた。僕は默つて手紙をさし出し、彼女も默つてそれを受取つて奥へ走つて行つた。

彼女は唇の厚くて赤い子だつた。

僕は彼女といつ、どこでどうして知つたのか覺えてゐない。そしてたゞこれだけの間柄に過ぎなかつたのに、不思議にもまだ其の名を覺えてゐる。

お花さんもお禮さんもいつの間にか僕の頭の中から消えて了つた。

お花さんはどうしたのか覺えてゐないが、お禮さんは柏崎へ行つて了つた。其のお父さんが、金鵄勳章の叙勳にもれたのに不平を云つて、柏崎の聯隊區に左遷されたのだつた。

此のお禮さんに就いてだけはまだ後日談がある。

中學校にはいろんな種類の人間がはいつた。僕等を一番の年少者として、もう三四年も前に高等小學校を卒へて自分の家の店で坐つてゐた二十近いものまでもゐた。もうすつかり農村の若い衆になりきつてゐるものもはいつて來た。新潟や長岡の中學校の食ひつめものもゐた。

それらの年長者がいろんな事を僕等の間に輸入した。學校が始まつてから間もなく、寄宿舍にゐる二三の年長者等が、十三四の七八人の生徒を連れて、女郎屋へ遊びに行つた。これは直ぐ學校に知れて其の年長者等は退校になつた。それ以來、さうした方面の事は全くなくなつた。

そして生徒の間に直ぐに一番の勢力を占めたのは、他の中學校を流れ歩いて來たごろつき連中だつた。此の連中は皆な一人づゝ極く年少のそして顔の綺麗なのを其の親しい友人に持つた。彼等はお互に指を切つて、其の血をすゝり合つて、義兄弟の誓ひをした。

一年の間は僕もまだそんな事は知らなかつた。が、二年の末頃になつて、やはりそれを覺えて、指を切つたり血をすゝつたりはしなかつたが、一人の弟を持つた。

此の風習は其後二年も三年も僕につきまとつた。

煙草を吸ふこともやはり其頃に覺えた。

父がいつも吸つてゐる中天狗と云ふのをちよい〳〵盗んでは吸ひ覺えた。そしてしまひには父が大事にしてしまつてゐる葉卷までも盗みだして吸ふやうになつた。

三

中學校にはいつたのと同時頃に、高等小學校の坂本先生と云ふのが、主として軍人の間から寄附金を募つて、講武館といふ柔道の道場を建てた。

軍人の子は大がいそこにはいつた。石川もはいつた。大久保もはいつた。又、前に云つた威海衛の戰爭の時に一週間山の中にかくれて出て來なかつたと云ふ評判の、そして凱旋すると直ぐ非職になつた脇田と云ふ大尉の子もはいつた。脇田は僕なぞと同じ級で年は二つ程多く、からだも大きかつたが、僕等は其の親爺のせいで馬鹿にしてゐた。が、或時彼れの自身の口から、彼れのほんとうの父は何んとか云ふ人で、金澤で大久保利通を暗殺した一人で、しかも其の最初の太刀を見舞つたのだと聞いて、少し彼れを尊敬したい氣になつた。勿論僕もはいつた。

此柔道は隨分よく勉强した。午後と夜と代る〳〵あつたのだが、僕は殆んど一日も缺かした事がなかつた。殊に寒稽古には三尺も積つた雪の中で亂どりをやつた。成績も非常によかつた。そして一年半か二年もしてからは、そこでの餓鬼大將になつて了つた。毎年秋の諏訪神社のお祭には、各々の町から山車が出た。そして其の山車と山車とがよく喧嘩した。鍛冶町の鍛冶屋連が此の喧嘩に負けて、翌年の復讐を期して、十人ばかりが入門した。皆んな僕なぞの足くらいもある太さの、恐ろしい程瘤や筋の出ばつた腕を持つた、二十前後の若い衆ばかりだつた。先生は僕を其の相手に選んだ。ちよつと彼等に握られると、腕の骨がくだけるかと思ふ程に痛かつた。が、彼等の腰と足とは子供のやうに弱かつた。僕はそれにつけこんで彼等をころころ轉がしてやつた。皆んなは喜んで僕を先生の代理にしてゐた。そして折折小刀なぞを作つて持つて來てくれた。

そこでは又棒も教はつた。繩も教はつた。棒は殊にお得意だつた。今でもまだ棒が一本あれば二人や三人の巡査が拔劍して

來たところで敢て恐れないくらいの自信がある。

幼年校にはいつてからの第一の暑中休暇に、坂本先生の其の又先生の森田と云ふお爺さんから、或傳授をするから一週間はかり泊りがけて來いと云ふ迎ひが來た。

お爺さんは新發田から二里半ばかり隔たつた次第濱と云ふ海濱にゐた。で、僕は海水浴がてら行つて見た。お爺さんはもと通りちよん髷を結つて、もう腰がすつかり曲つてゐた。それでも行くと直ぐ、前にも道場でよくやつたやうに、棒の相手をせられた。お爺さんが木太刀を持つて、僕が棒を持つてそれに向ふのだ。お爺さんのかけ聲はこつちの腹にまで響くやうに氣合がこもつてゐた。そして其の太刀で棒を押へるやうにして、ぢり〲進んで來られると、僕はちよつと其の棒を動かす事が出來なかつた。

お爺さんは目がわるくて自分で書けないからと云つて卷物になつてゐる『目錄』を持つて來て、僕に寫さした。東方の摩利支天、西方の何んとか、南方の何んとか、北方の何んとかと、云ふやうな事があつて、呪文めいた片假名の何んだか譯のわからん事の書きつけられた妙なものだつた。そして其の最後は、此の『目錄』を傳へられたとの系圖のやうなもので、源の何んとかから藤原の何んとかに、と云ふ十幾つか二十幾つかの名が連られてあつて、最後に源の何んとか森田何兵衞殿へとあつた。これがお爺さんの名なのだ。そしてお爺さんは、此の系圖のおしまいに自分の名をいれて、其のあとへ大杉榮殿と書くように云つた。

片假名の呪文は何んの意味だかちつとも教へてくれなかつた。が、人が見てはいけないと云つて、裸で土藏の中にはいつて、あて身や何にかを教へてくれた。

其後此のお爺さんは、父のところへ來て、兵隊に玉除けのまじないをしたいからと云つて、大分手こずらしたと云ふ事であつた。

此の柔道は荒木新流と云ふ、實はもう古い流儀のものだつた。

其後坂本先生は、僕が最初の入獄を終へて始めて家を持つた時、こんど上京したからと云つて訪ねて來た。これは後で間接に聞いた事であるが、實は父と相談して僕を說得しに來たのだつたさうだ。が、そんな事は少しもなしに、今でもまだ折々訪ねて來ては昔しばなしをして行く。

『どうしたつて、そんな病氣になる筈はないんだがね……』

僕が肺の惡い事を聞いて先生は不思議がつてゐた。そして先生發明の曲伸法と云ふ運動方法を勸めてくれた。最近に僕は此の曲伸法で獄中で大たすかりをした。

先生はもう五十を餘程越してゐるのだらうが、昔し僕が知つてゐる三十幾つかの頃の、小造りであるがまんまると太つた、色つやのいゝ顏の先生其儘でゐる。そして今でも、小石川の其の修養塾のそばに道場を造つて柔道の先生をし、又夏は子安邊で水泳の先生をして、毎年の冬隅田川で寒中水泳を催してゐる。

此の柔道から少し遲れて、擊劍も教はりに行つた。晝の柔道の時間を其の方へ廻はしたのだ。流儀の名は忘れたが、先生は今井先生と云つた。

先生は大兵肥滿の荒武者で、大きな竹刀の中に電線程の筋がねを三四本入れてゐた。一種の國士と云つたやうな人で、昔し星亨が遊說に來た時、車ごと川の中へほうりこんだとか云ふ話もあつた。最近にも大倉喜八郎の銅像の除幕式の時、そこへ飛びこんで行つて大倉をなぐるのだと云つて意氣ごんでゐたさうだが、皆んなにとめられて果さなかつたさうだ。

僕はそこで荒ぽい、竹刀の使ひかたの大きな擊劍を教はつたので、其の幼年校にはいつて、おもちやのやうな細い竹刀でほんのこて先きだけでチヤン／＼やるのが實にいやだつた。

學校では器械體操とベエスボオルとに夢中になつてゐた。そしてかうして一日とび廻つては、大飯を食つてゐた。

十三の正月から十四の正月までに、背が五寸延びた。そして十四から十五までに四寸延びて五尺二寸何分かになつた。

四

中學校の校長は、先年皇子傅育官長になつて死んだ、三好愛吉先生だつた。

僕等は先生を孔子様とあだ名してゐた。それは先生が孔子様のやうな鬚をはやしてゐたばかりでなく、何にかと云ふと直ぐに孔子様孔子様と先生が云つてゐたからでもあつた。先生は眞目面な謹厳其者のやうな顔をしてゐた。そして主として論語によつて倫理の講義をしてゐた。

たしか二年の始め頃だつた。或日先生が、倫理の時間に、皆んなの理想し崇拝する人の名を尋ねた。秀吉も出た。家康も出た。正成も出た。清麿も出た。そしてだん／＼順番が廻つて僕の番になつた。

僕にはまだ、實は、理想崇拝すると云ふ程の人はなかつた。それにいゝかげんに誰れかの名を云ふにしても人の云つた名を又云ふのはいやだつた。誰れにしようか、と考へて見てもちよつと新しい名が浮んで來なかつた。そこへ僕の番が來たのだ。僕はすつかり困つて了つた。

が、とにかく立ちあがつた。するとふいに、最近に買つて讀んだ、誰れだかの西郷南洲論を思ひだした。僕はいゝ見つけものをしたつもりで、『西郷南洲です』と答へた。

先生は一と廻りして了つたあとで、皆んなの答へたそれ／＼の人に就いての批評をした。

『なるほど西郷隆盛は近代の偉人だ。或は、日本の近代では一番の偉人であるかも知れない。が、彼れは謀叛人だ。陛下に弓をひいた謀叛人だ。そして此の謀叛人であると云ふ事は、よしそれがどんな事情からであつたにしろ、又ほかにどんな功勞があつたにしろ、到底許される事は出來ない。況んや其の謀叛人を理想し崇拝するなぞとは、以てのほかだ。』

先生の僕の答に對する批評は大たいこんな意味だつた。そして最後に先生は、皆んなの理想し崇拝しなければならぬ人物として例の孔子様をあげて大いに其の徳を稱した。

僕は此の批評が非常に不平だつた。僕が讀んだ本では彼れの謀叛は陛下に弓をひいたのではない、謂はゆる其の何んとかの下にかくれてゐる姦臣共を逐ひ拂ふための謀叛だとあつた。僕もさう信じてゐた。しかし先生にかう云はれてからは、そんな

事はもうどうでもよくなつた。許されようが許されまいがそんな事はもう問題ではなくなつた。とにかく彼れは偉らかつたんだの一點ばりになつた。そして家へ歸つて又西郷南州傳を讀み返して彼れをすつかり好きになつて了つた。

此の西郷南州傳は更に僕を吉田松陰傳や平野國臣傳に導いた。そして其のどんなところが氣に入つたのか忘れたが、とにかく平野國臣は何んだか非常に好きだつたやうに覺えてゐる。

三好先生は深川先生と云ふのを敎頭に連れて來た。小柄の綺麗な顔に頬髯を一ぱいにはやした先生だつた。

先生は一年の時の倫理と英語を受持つた。倫理には、長い間續けて郡司大尉の千島行の話を聞かされた。先生の英語は、發音が綺麗で、今までの小學校や和塾の英語の先生のとはまるで違つた、い丶發音だつた。

博物や理化の先生もやはり學士であつたが、意地わるなので、僕等は其の學科に興味を持つ事が出來なかつた。

お爺さんだつた習字の先生は、いつも僕に、よく手本を見て書けばうまく書けるのだから、ぞんざいに書いてはいけないと云つて注意してくれた。が、僕には、どうしてもお手本の一點一劃を其の通りに見て書くと云ふ事が出來なかつた。そして此のぞんざいのお陰で、今でもまだろくに字の恰好をとる事が出來ない。

圖畫は最初は鉛筆畫で、あとで毛筆畫になつたが、一年から二年までの間に數へるくらいしか描いた事がなかつた。まるで描けないし、それに大嫌ひだつたのだ。

學校の勉強はまるでしなかつたが、成績は英語が一ついつでもい丶くらいなもので、あとは皆な乙ぞろひだつた。そして三分の一程の席順にゐた。

僕が一年から二年へ超へる時に、虎公が高等小學を終へた。虎公の家は、虎公とお婆さんと二人きりで、どうして食つてゐたのか知らないが、相變らず貧乏だつた。虎公はしきりに中學校へはいりたがつてゐたが、どうしても駄目らしかつた。僕は虎公が可哀さうで堪らなかつた。そしてとう／＼一策を案出してそれを虎公に謀つた。それは僕が使つた本は皆な虎公にや

るから、虎公は其の伯父さんから月謝だけ出してもらつて、學校へ行くがいゝと云ふのだつた。

虎公は非常に喜んで、直ぐそれをお婆さんに話して、伯父さんに相談に行つた。伯父さんと云ふのは典獄を勤めてゐた。

が、虎公の運命はもう、其の餘程以前にきまつてゐたのだつた。彼れは伯父さんの家から泣いて歸つて來た。中學校へはいりたいなぞと云ふ非望を叱られて、近々に函館の或る商店へ小僧に行くようにと命ぜられて來たのだ。

僕は虎公の此の運命をどうともする事が出來なかつた。二人は相抱へて泣いた。そして僕は大將になるから、君は大商人になり給へと云つて、永久の友情を誓つた。

虎公と僕とは記念の寫眞を撮つた。そして僕は母にねだつて、暖かさうなフランネルのシャツとズボン下とを作つてもらつて、それを餞別に送つた。

僕は大將にはなり損ねたが、虎公は果してどうしてゐるか。彼れの本名は西村虎次郎と云つた。

虎公が行つて了つてから直ぐ僕は幼年學校の入學試驗を受けた。そして虎公にも誓つたやうに、自分の寫眞の裏には未來の陸軍元帥なぞと書いてゐたが、試驗のための勉強はちつともしなかつた。そして見事に落第した。

五

其の夏始めて一人で旅行に出た。

最初は東京までのつもりで、十圓もらつて出かけたのだつたが、それが名古屋までとなり、大阪までとなつて、大旅行になつて了つた。

越後はまだ直江津までしか鐵道がなかつたので、新潟から船でそこまで行つた。汽船や汽車に乘つたのは勿論、そんなものを見たのも、それが覺えてから始めての事だつた。

山口の伯父が四谷にゐた。威海衞で戰死した大寺少將の邸を買つて、其のあとを普請したばかりのところだつた。伯父は大佐で近衞の何聯隊かの聯隊長をしてゐた。

『よく一人で來た。』

伯父は僕の頭を撫でゝ、父でもめつたにしてくれない程の可

愛がりかたをしてくれた。伯母も『榮、榮』と云つて自分のそばを離さなかつた。

従兄が二人ゐた。弟の哲つあんは病氣で學習院の高等科を中途でよして、信州の方へ養蠶の實習に行つてゐた。女中共は此の哲つあんの事を若様と呼んでゐた。兄の良さんは中尉になつたばかりで、綺麗な花嫁のお繁さんと一緒に奥の方の離れにゐた。士官學校の教官をして、陸軍大學校の入學準備をしてゐたのだ。

女中共は僕を越後の若様と云つた。そして僕が何かするたびに何か云ふたびに袂で口を蔽ふては笑ひこけてゐた。お繁さんは（僕はお姉さまと呼んでゐたが）其のたびに美しい目で女中共をにらみつけるやうにしてゐたが、やはり其の可笑しさを隠しきる事は出來なかつた。

洋食の御馳走が出た。越後の若様はどうしてそれをたべていゝか分らなかつた。新發田にはまだ洋食屋もなく、家でゝも洋食なぞをたべた事がなかつた。で、皆んなのする通りにビステキか何んかを漸くの事でナイフで切つて、それを口に入れたが切りかたが大きすぎたので口の中で一ぱいになつて、どうともする事が出來なかつた。皆んなは笑つた。そしてお繁さんだけは、いつまでも〳〵、僕の顔を見ては思ひ出すやうに笑つてゐた。

僕はお繁さんを日本で一番の美人だと思つた。お繁さんの姉さんも綺麗だつた。そして此の姉さんは、田中と云ふ騎兵大尉の、陸軍大學校の學生のところに嫁つてゐた。

僕は來年は必ず幼年學校の試驗に及第してうんと勉強して陸軍大學校にはいるんだときめた。

お繁さんの里の、飯倉の末川と云ふ家へも行つた。山田の家の心地よさに醉ふてゐた僕は、末川家の更に幾倍もの贅澤に少々驚かされた。

家は上と下とに二軒あつた。下は妾宅で上は本宅だつた。長男が一人本妻の子でしかもそれは馬鹿で、あとは皆な男も女も綺麗な、もと烏森とかにゐたと云ふ妾の子だつた。お繁さんも其の姉さんも勿論此の妾の子だつた。お繁さんの下にもまだ女

の子が二人ゐた。そして下の家には妾とそれらの女の子とだけがゐた。皆んなは其の妾を自分のほんとうのお母さんを、榮ちやん〵呼んでゐた。

食事時には、ふだんは男ばかりゐる上の家へ皆んなが集まつた。僕も行けばきつと此の上の家の、西洋室の應接間にはいつて、ソフアの上に横になつてゐた。

僕は此の家で始めて電話と云ふものを知つた。又、お繁さんの姉さんの手で始めてピアノと云ふもの〵音を聞いた。僕は此の家の皆んなが、其の綺麗でそしてお上品な中に、どこかしら冷たいものを持つてゐる事に氣がついた。が、それでもやはり、其の贅澤な生活を味ひに、時々遊びに行かない譯には行かなかつた。

末川家は鹿兒島の家老の家柄で、其の主人はもと海軍の主計監とかをしてゐたと聞いた。そして其頃は實業に關係してゐたやうだつた。山田家では最初此の家との緣談があつた時、妾の子ではと一時躊躇したのださうだが、川村中將とか高島中將とかゞ中にはいつて、無理にもらはして了つたのだのとかと聞いた。其後、今の皇太子や皇子達が川村大將の家にゐた頃、良さんの子供等はよくそこへ遊びに行つて、熊だの象だの〵おもちやをもらつて來た。

良さんは今少將でどこかの旅團長を勤めてゐる。そしてお繁さんの姉さんの方の田中は、中將になつて今ワシントンの太平洋會議に陸軍代表の主席として出てゐる。ついでに云ふが、山田の伯父は、とうに中將で豫備になつて、今は和歌山に隱居してゐる。

名古屋と大阪とでは名古屋では、父方の親戚を、大阪では母方の親戚を歩き廻つた。

が、其のどちらでも、商家や農家ばかりなので、そしてつましい家ばかりなので、一向面白くなかつた。そして直ぐ又東京に歸つて、一ケ月あまり遊んでゐた。

六

此の旅行は僕に金を使ふ事を覺えさした。それまで僕は、小遣錢と云ふものは一文ももらつた事がなく、いるものは何んで

も迄で持つて來たのだつた。しかしもうそれでは濟まなくなつた。

中學校は新發田から五十公野へ行く途中の、長い杉並木の間に新しい校舍が出來た。そして其の並木路の入口にある小料理屋風の蛇塚屋と云ふのが、僕等不良連の間にスネエクと呼ばれて、皆んなの遊び場でもあり又いろんな悪事の本據地でもあつた。皆んなはよく學校をエスケエプしてはそこへ行つた。

僕は母の財布から金を盗す事を覺えた。母はいつも財布をどこかへ置きつぱなしにしてゐた。そしていり用のたびにあちこちとそれを探してゐた。そんな風で、自分の財布にいくらはいつてゐるのかもよくは知らなかつたやうだつた。僕はそれをいゝ事にして、二三十錢から五十錢くらいまでをちよい／＼と盗んだ。

が、だん／＼、そんな事ではとても追つつかなくなつた。そしてとう／＼僕は父からもらつた時計を賣つて了つた。それは銀側の大きな時計で、鍵を眞ん中の穴に入れてギイ／＼と捲はす、ごく古い型のものだつた。

それがどうしてか母に知れた。

『時計をもつてお父さんのお室へおいで。』

僕は持つて行く時計はないのだから、仕方なしにたゞうんと叱られる決心だけを持つて、父の室へ行つた。

父の裁判がはじまつた。僕は賣つたと答へた。が、其の金の行衛に就いては、どうしてもはつきり云ふ事が出來なかつた。それは、若しスネエクの事を云へば、そこでのいろんな悪事、殊に例の義兄弟の事などが知れる恐れがあつたからだ。

僕は父と母とにうんと責められた。うんと叱られた。しかし、云へない事はやはりどうしても云へなかつた。

其の冬、此の不良連の親分の、其頃の最上級の四年と三年とのものから一大事を聞いた。それは三好校長が組合會議から排斥されて、不信任案の決議をされると云ふ事だつた。

僕等の中學校は、新發田町外四十何ケ村の組合立で、其の組合の會議と云ふのがあつたのだつた。此の組合會議が、往ゝ其の職分の經營の事を超えて、教育方針にまで差出口をすると云

ふ事は聞いてゐた。そして其のたびに校長がそれを駁批したと云ふ事も聞いてゐた。

僕等は組合會議がどんな差出口をしたのかも少しも知らなかつた。又、其の不信任案と云ふものゝ內容も少しも知らなかつた。そして又、其の間にわだかまるいろんな事情と云ふやうな事も少しも知らなかつた。が、とにかく組合が不埒だときめて了つた。そして校長擁護の一大運動を起す事にきめた。

翌日直ぐ、長德寺と云ふのに學生大會が開かれて、二年三年四年の全生徒は校長と運命を共にすると云ふ滿場一致の決議をした。

此の騷ぎは學年試驗を前に控へて一ケ月ばかり續いた。そして最初の同盟休校と云ふのが同盟退校の決議にまで進んだ。もうこんな學校に用はないと云ふので、ガラス戸は滅茶苦茶にこわされた。そして生徒控室にあつた机や椅子は、殆んど全部火鉢の中のたき木になつて了つた。

或る先生は、組合と內通してゐると云ふので、夜車で練兵場を通るところを袋たゝきにされた。

或日父と母とは茶の間の火鉢のそばへ僕を呼んだ。

『此の頃お前はちつとも學校へ行かんで騷いでゐるさうだが……』

父の話しは、組合から生徒の父兄に送つて來たものによつて、多少校長を批難して、明日からでも學校へ出ろと云ふやうな事であつた。

『いやです。』

僕はたゞ一言さう云つたきりで、席を蹴つて起ちあがつた。

『あの子は一たん何か云ひだしたら、何があつても聞かんのですから、どうぞ其儘にほうつて置いて下さい。』

母はしきりに父をなだめて、懇願してゐるやうだつた。

しかし此の騷ぎは、組合で不信任案を取消すと云ふ事と、校長が辭職すると云ふ事とで治まつて、生徒は校長の懇請で漸く學年試驗を受ける事になつた。

三好校長は深田教頭と一緒に、長野の中學校へ行く事となつた。其の送別會が仲町の何んとか云ふ料理屋の廣間で開かれ

た。校長は大酒家だつた。皆んなに一合ばかりの酒がついた。校長は始めから終りまで其の四角な顔をにこにこさせてゐた。教頭はお得意のいゝ聲で、其の郷里の白虎隊の詩を吟じた。

そして校長がいよ〱出發する時には、全校三百餘の生徒が、校長の橇を眞ん中にして降り積る雪の中を七里の間、新潟まで送つて行つた。

其のあとへ、廣田一乘と云ふ、名前から坊主臭いしかしハイカラな新しい文學士が來た。が、此の新校長は、來る早々校友會の席上で記憶術の實驗か何かをやつて、すつかり生徒の評判を惡くして了つた。そして、生徒が皆な素足ではいる習慣になつてゐた、御眞影を安置してある講堂へ、校長が靴ばきのまゝはいつたとか云ふので、危く排斥運動が起りかけさえした。

其の春、僕は二度目の幼年學校の入學試驗を受けた。

そして其の最初の日に、もう少しで身體檢査ではねられるところだつた。去年はよく見えた視力檢査の符號のやうなものが、下の二三段のほかは皆なぼんやりして、上があいてゐるのか下があいてゐるのかよく分らなかつた。

若い軍醫は首をかしげて奥の方の室へはいつて行つた。そして、僕が子供の時から何にかの病氣の際にはいつも世話になつてゐた、平賀と云ふ一等軍醫を呼んで來た。

『これはことしはどんな事があつても入れなけやならないんだ。』

平賀軍醫はさう云ひながら、僕の目の檢査をし直した。そして暗室へ連れて行つたり、いろんな眼鏡をかけさして見たりして、要するに合格にして了つた。

學科の方は、別に何んの勉强もしなかつたのだが、高等小學校卒業程度の試驗なんだから、やす〱と出來た。

そして官報で及落が發表される少し前に、山田の伯父から、『サカエガウカクシユクス』と云ふ電報を受取つた。



悲壯劇中の二巨人
（原敬氏と星亨氏）

高須梅溪

運命の魔神ほど、恐しいものはない。彼れは、人間が得意と光榮との頂上にある時、突如として、かすかな虚隙に附け入つて、其の冷めたい手で、滅亡と失落の底へ人間を突き落すのである。ローマの英雄シーザーが、月桂樹の枝で編んだ帝冠をアントニーから捧げられた時、其の後、間もなく、カシヤスやブルータスらのために、刺殺されようとは、豫想しなかつたであらう。フランスのカルノーが大統領の地位に上つて、偉大な抱負を實行しようと意氣込んで、光榮に輝きつゝあつた時、他日、リヨン市に於て、イタリヤの無政府主義者カセルノのために暗殺されようとは、夢にも思はなかつたであらう。運命の魔神は、シーザーや、カルノーに滅落を與ふべき機會を冷かに待つて居て、彼等の背後に咒咀の經文を誦して居るのだ。

斯うした史上の出來事は、古今東西に於て其の實例に乏しくない。恐らく、誰れもが能く知つて居ることであるが、實際それを自己の行路に照らして見て、靜かに内省する政治家は幾人あるだらうか。恐らく、其の多數はそれ等を冷めたい、夢のやうな史上の珍事として、直ぐに忘れ去るだらう。殊に政界に於て自己が第一人者の地位にある人などは「光榮の後に墳墓がある。」と歌つた詩人グレーの哀歌の心持に味到する丈の餘裕を有しないのであらう。

私は、今度原敬氏の悲壯劇について、聰明な氏が、何故得意の時に失落の芽が吹き出すであらうことに想到して自ら備へなかつたであらうかを惜む。光榮に輝く日に亡滅の運命が來るであらうことを考へて暗殺の禍を避けなかつたかを惜む。だが、それは、一國の運命を荷うて起つ政治家の最期が、概して悲劇的であると云ふことを豫め心のうちに覺悟して居た原氏に取つ

ては、或は無用のことであつたかも知れない。

私は原氏が一少年の兇刃に斃れた訃報を新聞紙上で見た時、先づ回想したのは、明治三十四年六月に於ける星亨暗殺事件である。蓋し原氏と星亨とは、其の性格の上に於て、思想の上に於て、政治的地盤に於て、戰鬪力に於て、最期の運命に於て、互に共通した點を多く持つて居るからだ。彼等は、共に政界に於ける悲壯劇の主人公である。

原氏と星亨とは、現代思想界の現實的傾向を最も鮮明に現はした代表者だ。彼等は勿論、其の胸中に理想を有しなかつたのではなからうけれども、より多く、現實の上に立脚した。將來よりも現在、現在よりも今日に生きて行かうとした。今日の世界に於て、最も尊重されるのは「力」だ。「力」を背景としない限りは、政治的に勝利を收めることが出來ない。云ひ換へると、戰鬪力の充實したものが政界に勝つのだ。理想を背景とするものや、人氣を土臺とするものは、時代によつて、盛衰があり、興亡があるけれども、自家の實力を基礎として其の目的へ突進するものゝ上には、ひとり、勝利の光りが增してゆくばかりだ。思ふに今日の世界にあつて、現實の上に活動するものは恐らく、斯うした考へを有するものが多數であらう。原も星も、此の傾向、思想を一身に大きく代表した形が見える。彼等は、最も徹底したリアリストだ。

現代政治史上に於て、其の戰鬪力を最も猛烈に發揮したのは星亨である。原氏の戰鬪力も、可なりに強いけれども、星には及ばなかつたやうだ。蓋し星の出生地は、長脇差の本場であつた上に、彼れの實父は、左官職の棟梁で俠的な喧嘩早い男であつたと云ふことが、既に星の遺傳的戰鬪力の强さを思はせる。それに星は身體が頑健で、意志が強くて、理性的傾向が多く、ニイチエ思想から得た個人主義的な色彩を濃厚に帶びて居たから、一度決心して政敵を倒さうとすると、何處までも、根底的に戰つて、最終の勝利に到達しなければ止まなかつた。

斯うして、彼れ自ら戰鬪力の强大であることを自信して、露骨に大膽に彼れの個人主義的思想の下に行動した爲めに、其の政治的生涯は、悉く爭鬪の歷史であつた。彼れは、最初、民黨が互に提携してゆくべき必要があつた時代にさへ、自由黨の猛者として、改進黨攻擊の火の手を眞先に揚げた。「僞黨撲滅」「海坊主退治」の警語は、彼れが主として發明したもので、それを標識として破壞力を改進黨の上に加へた結果は、いくらか自黨の地盤を擴張することが出來た。彼れの爭鬪史は、茲に其の序幕を開いたのだ。

其の後、彼れは、折々自分から進んで、改進黨に挑戰して、平地に波瀾を起した爲め、却て自己の立場さへも一時失はうとしたけれども、決して爭闘をやめなかつた。彼れが第五議會に於て、不人氣な相馬事件の辯護を引受けたことや、瀆職の疑ひがある取引所問題に關係したと云ふ理由の下に、直ぐに議長の地位を去るべき處決を下院から促がされた時、彼れは、敢然として「それは不當の決議だ。私はそれに盲從することが出來ない。」と云つて強く斥けた。議會は、それがため、一日の休會を決議して、自然、星の引退を迫つたけれども、星は、それを無視して、議會が開かれると、また平氣な風をして、議長席に着いた。それがため、議員の多數は、ひどく激昂して、到頭、星を懲罰に附すると同時に、代議士籍から除名して了つた。此の極端な排斥を受けても、星は、矢張、星だ。尚ほ其の爭闘を續けて、選擧區に歸り、再選を求めた。どんな抑壓力も、星に對しては無効だつた。

殊に星が最も烈しく、爭闘を開始して、思ふまゝに恐しい破壞力を揮つたのは、憲政黨内閣を打倒した時だ。此の内閣は、自由進歩の兩黨が結合して成立したのであるが、双方融和を持續することの不可能であることは、當時アメリカに居た星の眼にはつきり分明つて居た上に、彼れが内閣の一椅子を要求して容れられなかつた不平が勃發して、忽ち破壞の鐵槌を揮ひ始めた。彼れは、アメリカから歸ると間もなく、當時の陸相桂太郎と策應して、内外から、憲政黨内閣の基礎を搖がして、いろ〳〵の紛爭を起生せしめた。そして尾崎行雄氏の共和政治演說に向つて先づ痛擊を加へて、瞬く間に内閣を破壞した。續いて彼れは、突嗟のうちに、憲政黨を解散して、舊自由黨ばかりで新たに憲政黨を組織した。彼れは此の機會に壯士團を從へて、暴力の下に、憲政黨本部を乘り取つて了つて、凱歌を揚げた。これ等の實例を見ると、星の戰闘力が、どんなに强大で、猛烈であつたかが知れるのである。唯其の力が主として破壞の上にのみ働いて、建設の方面に働かなかつたのは、時期が未だ到らなかつたのか知れないけれども、彼れの缺點であり、弱味であつた。

原氏の戰闘力は、星のやうに破壞の上にのみ用ゐられないで建設の上にも用ゐられた。蓋し星の性格、傾向から云へば、どうしても、破壞作用に長じて、建設作用には長じて居ないところがあつた。それに、當時の政界は、いろいろの因習や、舊套や、情弊が少くなかつたのみならず、在來の舊勢力に代るべき新勢力を要求しつゝあつたから、星の破壞作用は、ある程度ま

で用ゐられなければならなかつた、ところが、原氏が政界に地步を占めた時代は、星の活動期よりはより多く、建設作用を要したので、原氏の戰鬪力は、一面、新しい建設への道程として用ゐられた場合もあつた。玆に原と星との異つた點がある。

だが、星歿後の政界に於て、其の後繼者となつた原氏の戰鬪力は、著しく目立つた。其の適例は、郡制廢止案を提出した場合に於ける原氏の奮戰に見ることが出來よう。此の案は、氏が二十二議會に提出して、貴族院で敗北したのであるが、氏は尙ほ屈しないで、二十三議會にも提出して、先づ衆議院に於て、勝利を得ようとした。二十二議會の形勢から察すると、郡制廢止案は、略ぼ議會を通過すべき豫想であつたが、大同倶樂部の臼井哲夫氏が突如山縣、桂諸公の內意に從つて、憲政本黨と提携すると共に、政友會の內部をも攪亂して、該案を成立させまいとした。

此の形勢の急變を見た原氏は、素早く內部の步調を整へてから、大同倶樂部の切崩しに力を入れて、關信之助、武藤金吉ら十餘名のものを同派から身方に引入れた。それがため、危機一髮の刹那を切拔けて、二十餘票の多數で、郡制廢止案の勝利を得た。だが、貴族院では矢張、失敗を重ねたけれども、一段の勇氣を發揮して、捲土重來の勢を示した。

斯うした戰鬪力ある原氏は、矢張、政敵に向つて、爭鬪的であつた。勿論、それは、星亨のやうに、暴風的ではなかつたけれども、其の顏面や、唇頭に鋭い爭氣を現はして、彼れに反對するものを冷殺しなければやまなかつた。此の傾向は、四十二議會や、四十三議會に於ても鮮明に示された。其の巧妙な討論的辯說によつて、政敵の攻擊を一排すると同時に簡勁な言葉で鋭く相手の缺點を剔つた。其處に氏の獨自の戰鬪力が現はれて居た。氏は斯うして、八面に應酬して、少しも疲勞しない精力を持つた。

だが、一面から考へると、氏は此の强い戰鬪力のために、身方から賴母しく思はれて、畏敬された代りに、政敵や、民衆の群勢から、冷酷と剛愎の化身のやうに憎惡されざるを得なかつた。それは、星亨の場合と同樣だ。星が其の戰鬪力を傍若無人に揮つた結果は、星を呪咀するものをして「猛獸の血液を混じた惡魔」「車夫、馬丁に類した賤人」などの惡罵を放たしめた。また原氏に對して强い反感を抱いて居た敵は、其の頭上に「吸血鬼」や「憲政の賊」と云ふやうな惡稱を加へた。永井柳太郎氏は「西にレニンあり、東に原敬がある。」と叫び、尾島隆二氏は「白頭魔」の名を原氏に與へた。けれども星は勿論、原氏も斯うした不評や罵詈的名稱を一笑に附した。

仄聞するところによると、西園寺公が、嘗て或人から原氏の人物について尋ねられた時、公は「原君のゑらい處は、世間の評判に少しも頓着しないことだ。」と云つたさうだ。畢竟、原氏の恃むところは、其の充實した力にあるなら、世上の人氣の如きは、どうでも宜いと感じて居たのだ。當てにならぬ人氣に生きないで當になる「力」に生きてゆかうとしたのは、星も原も同樣で二人が政界に卓出し得たのも主として、これに依るのだ。けれども彼等が、ひとしく、暗殺の禍に陷つたのも亦これに依るのだ。

思ふに、主として現實に立脚する政治家は、相應の仕事を爲すであらうけれども、眼前の事、今日の事に執し過ぎる傾きを免れ得ない。星亨は、非常な讀書家で、博覽と強記との上に於て、立派な學者として通つて行けたさうだから、勿論、相當の理想もあつたにちがいなからうけれども、彼れの生前に於ては、殆ど其の閃きさへも見せなかつた。彼れの讀書は、どの點まで彼れに有力な新思想を與へたか、どう云ふ政治的理想を發育させたか。私は未だ一度も、左樣した方面のことを聞知したことがない。

原氏は、友人と對酌して、しんみりと話すやうな折に不圖、理想の片影を暗示したやうなことを云ふ場合があつたさうだ。斯うした一例は、星亨にもある。嘗て星は、其の門下の人に十年後の對外關係を話したさうだ。だが、彼等は、公然と其の理想について言說しなかつた。理想の公表を避けた星の生涯は現實と權勢に即した足痕を印したのみだ。徹底リアリストとしての生涯に終始した丈だ。

星の時代は、未だ政界も、思想界も漸く新しい傾向の芽を示したばかりであつたから、彼れが理想的展開を現はさなかつたことは、或は止むを得なかつたであらう。けれども原氏の時代は時勢の烈しく動搖して、民衆の一部が正義と自由とを尊重して哲人主義の新政治に憧憬するやうになつたのであるから、原氏も、時勢の趨向について誠實に內省しなければならなかつたのだ。

ところが、原氏は、何處までも、現實に執着して、理想への道に一歩を進めようとしなかつた。普選運動についても、地方中產階級に反對者が相應にあるのを見て、實際の側に身方して普選の通過を妨害した。普選は、行詰つた政界に清新な空氣を注入すべき一つの新運動であるから、新代の政治家として起つてゆくべき原氏は、未來のことをも考慮のうちに加へて、普選の通過を計る方が氏自身のためにも、國家、民衆のためにも宜ね

つたのだ。けれども氏は玆に内省しないで、當面の情實に囚はれて、普選運動を揉み潰さうとした。此の事は有意義な新政治に憧憬する民衆の反感と憤激とを挑撥したやうに思はれる。

殊に原氏が、綱紀肅正問題や、文相の二枚舌事件について、自黨を辯護することにのみ力を入れて、冷かに輿論の聲に殆ど耳を假さなかつたことは、最近、最も强く現今の政治に失望して居る若き人々の激怒を惹起さしめたやうだ。文相の二枚舌事件については、當然合理的處置として、中橋氏を自由に内閣から退かしめねばならなかつた。けれども原氏は、强辯して、何處までも。中橋氏を文相の椅子に引留めて置いた。また綱紀肅正問題については、滿鐵事件、阿片事件、東京市會の疑獄事件などに現内閣も、全く責任がないとは云ひ切れないのだからこれも、氏一流の强辯のみで、輿論の糺彈を一排しようとしたのは餘りに、政友會本位に傾き過ぎて居た。斯うして尙ほ内閣の壽命を延長してゆくことは、氏自身のため、また政友會の將來のため、明かに不利であつたのだ。

それ等は、氏が星亨の議長時代に於ける剛愎な故智に學んだのであるかも知れない。氏は星の如く、傍若無人ではなかつたが、可なりに露骨な黨派的行動を示した。云ひ換へると、氏の眼中には、政友會と其の友人、子分とがあつて、國家も、正義の審判も一切ないと云ふやうな風が見えた。それは、自黨の人々に心から喝采されて、原氏の黨首振を一層鮮明ならしめたかも知れないけれども、畢竟、一時的の利益で、永久の利益ではなかつたのだ。而も聰明な原氏が、此の見易い道理に思ひ至らなかつたのは、餘り黨派心に傾き過ぎ、現實に囚はれ過ぎて居たからだ。

以上は、原氏と星亨と略ぼ共通した點であるが、他方に於ては、いくらか手觸りのちがつたところがあつた。原は、フランス風のところがあり、星は、アメリカ風のところがあつた。原と西園寺とは、其の性格の上に於て、大分異つて居るけれども趣味の上に於ては、略ぼ一致した點を以て居た。星　蠻的で、殺風景で、どうしても、木强漢としか思はれなかつた。其の風姿は、剛强で銳い眼付をして、ぢろりと人を睥睨するところは勿論、彼の戰鬪家氣分を能く現はして居たが、手觸りは、どうしても、疎野だつた。星は力のある辯舌を有したに關らず、政敵からは「鈎形の嘴を有つた怪鳥が奇聲を放つやうだ。」と罵られた。

原は、星のやうに、辯舌の上に豪放味を有しなかつた代りに、何となく、垢抜けのした手觸りを以て居た。原は、青年時代か

ら美男子と云はれた上に、容儀の修飾については、可なりに意を用ゐた。其の習癖は、彼れの晩年まで變らなかつた。また紅燈綠酒の間に於ける彼れは、何處となく、通人的で、野暮な臭氣がなかつた。

私は、曾て神田の青年會館で、星亨の演說を聞いたことがあつたが、滿堂の人々を威壓するやうな風を見せて、濁つた太い聲で、論歩を進めてゆくところは、餘り宜い感觸を與へなかつたが、讀書家である彼れが少しも衒學的なところを示さないで、寧ろ生れ乍らの野人だと云ふ故態をさらけ出して居たところは、男らしい感じを與へた。

私は、また曾て原氏の園遊會に招待されて唯一度、氏の姿を見たことがあるが、長身で背がすらりとして、顏の血色が宜く銀髮を綺麗に分けて、莞爾と笑を含んで居た具合は星亨よりも餘程、親みが深いやうに感ぜられた。人相の上から見た原は、確かに星よりも宜かつた。一國の首相として恥かしくないところが見えた。だが、星にくらべると、稍女性的の色彩があつた。或ものは、原の容貌を下品であるとか、俗臭があるとか、惡相だとか云ふやうだが、それは、恐らく、原氏が爭氣を現はした場合を指すのでなからうかと思はれる。

原氏の趣味は、紅燈趣味にあるやうだ。淺酌低唱と云つたやうな通人の世界にあるやうだ。美しい女性に對する興味は、星も四十歲頃までは持つて居たやうだが、原は、晩年まで持つて居た。彼れの若々しさは、一面、此の紅燈趣味に親む結果から來て居るのではないかと思はれる。

それに原は談話の上に於ても亦趣味を感じて居たやうだ。星は、讀書一方に趣味を集中したが、原はいろいろの客に逢つてそれ等の談話のうちから、生きた現代知識を吸收することを樂んだ。彼れは、また大臣になる以前、「淀の川瀨の水車」と云ふ踊りを十八番にして居たさうだ。西園寺公などにくらべると、原は尙ほ沒趣味、殺風景かも知れないけれども、星にくらべると餘程、趣味の潤ひがあつた。新聞に出た彼れの俳句も、野田大塊氏の作よりは、遙かに優れて居た。

趣味の上から見た原氏は、星亨よりも餘程親み易い。そして原の平民主義、政治家としての男らしい覺悟、隱忍自重の風などがある點に於て。彼れの今日に於ける成功が、當然の歸結だと云ふことを思はせる。彼れの如く、授爵の恩命に浴し得べき機會のあるものは、ともすると、華族生活に入つて、榮爵を誇らうとする風がある。ところが、彼れは、世俗が貴重するところの榮爵を歿後まで辭して、徹底的に一平民として、終始したのは、彼れの卓見を示すと同時に、下院の首領としての平民

氣分を端的に現はしたものだ。頗る心持が宜い。

また彼れが、一度、政友會に入つて以來、能く迄、其處に踏み留つて、一時の立身や、出世のために、政友會に背かうとしなかつたのは、彼れの隱忍自重を思はせる。自然の惠みの少い東北の地に生れた彼れは、自然、其の風化を受けたのであらうけれども、一面彼れの克己の力によるところが多いと思はれる。伊藤公が、政友會を去つた時、原も、金子、末松らと一緒に去るべき筈であつたけれども、彼れのみは、自重して、ひとり、後に踏み留つた。此の事が、後年、彼れをして、政友會總裁たらしむべき機緣を與へたのだ。

原氏が、政治家としての覺悟を平常から自覺して、死後の用意を怠らなかつたことは、彼れに、一種の宗教的信念があつたやうに思はせる。星は、多くの佛書を涉獵して、相當に佛教思想をも蓄へて居たやうだが、死後の用意まで思ひ到らなかつたやうだ。原は、いつ主義のために、兇刄に見舞はれるかも知れないであらうことを覺悟して、常に遺書を書いて置いたことは、彼れの決意の確乎としたところが見えて、所信のために、身命を賭することを辭しない英氣が現はれて居る。私は殊に彼れの平民的な生活が好きだ。そして原氏が星と同樣、金錢には淡泊で、子分や、後進を引立ることを樂んで、故舊に厚かつたことも私等に好感を抱かせる。

私が最も遺憾に思ふのは、星も、原も「力」の有限であることを丸で知らなかつたことだ。權勢に執着するものゝ末路が悲痛であることに思ひ至らなかつた點だ。「力」は、勿論勝利を得る上に必要ではあるけれども「力」の充實は長く續かない。いつか必ず萎靡する時がある。或は「力」の亂用から、運命の呪咀を受ける時が來るのだ。星も原も「力」の歡喜と誇りとを知つて「力」の悲みと落寞とを知らなかつた。そして權勢を追求することに熱中して、權勢の背後に必ず灰色の運命が潛んで居ることを考へなかつた。

彼等は、以上の點に於て、一種の無自覺者であつた。それに政黨の力を過重して、民衆の力を輕視したことは、自己を悲劇に導く階梯であることにも思ひ及ばなかつたのは、殊に痛惜すべき點だ。官僚と軍閥とは、星の活動と原の努力とによつて、略ぼ抑へ付けられて了つたけれども、次ぎに民衆の正しい意向を重く見ることを忘れては、龍を描いて點睛しないのと同樣だ。

若し彼等が、第一に民衆のことを考へて、正義の前に謙遜な態度と誠實とを捧げて、進退の機を誤らなかつたら、暗殺の悲劇は、恐らく起らなかつたであらう。彼等は、此の點に深い內省の眼を向けないで、其の權勢の頂上にある時、尙ほ輿論の聲に耳をふさいで、猪突しようとした爲めに、兇刄は突如として彼等を倒したのだ。私は飽く迄、暗殺時代錯誤として、許すべからざる罪惡として、強く咀ふ。けれども原や、星自らが、左樣した悲劇を挑發した傾のあることも否まれない。私は、悲壯劇中の二巨人のために、心から深くそれを悲むのである。

堂々壹千頁
特價金貳圓五拾錢

拾貳月
貳拾日
發賣

看よ

新年

◎獨逸共和國の將來を論ず

フオン・エチユアート ベルンシタイン

社會民主々義の大立物として、修正派の鼻祖として世界の論壇に重きをなす、ベルンシタイン氏が特に本社の爲に寄稿せる重要なる論文で

號の二大偉觀

ある、獨逸帝國の轉覆は我が國と共に二大軍國主義と稱せられたそして我國の法典、醫學、科學、軍事皆彼れを師父と仰いだ而も彼は蕭條たる末路を遂げた、彼は共和國としていかに國運を開拓せんとするか、眼光炬の如き思想界の大偉人は玆に母國の前途について長論策を起稿した、我國人は蓋し氏に訓へらるる所が多いだろふ。

◇レーニンの國家觀　法學博士　福田德三

我國論壇の驍將として嘖々の雄名ある博士が大苦心の長編である、彼レーニンの國家觀とマルクスの國家觀につきては我國人に知られざる尤も趣味ある問題である、マルクス研究の第一人者たる博士はレーニンの研究に於ても矢張り第一人者である、此人が堂々の陣を張つて彼レーニンを論ずる正に猛虎の山月に嘯くが如き思ひがある。

◇戲曲　雲の柱　賀川豐彦

黒人の奴隷解放を取扱つた一百五十枚の長編戲曲である、此一篇がいかに藝術的に價値があり、そして我が數十萬の讀者に向つていかに感激を與ふるか、蓋し新春の雜誌。新聞界にありて尤も異彩あり、そして他の追隨を許さない一大讀物であることは斷言して憚らない。

化哲學叢書」の姉妹叢書

文明の魁となり、且つ完璧せる新世界創成に貢献せんが爲めである。

科學の研究者は多い、而も一代の權威として深奥幽遠なる科學を指導するの大家として、西に、桑木彧雄氏あり、東に、石原純氏がある。兩氏は我が科學界に於ける、二大權威である。この兩者が愼密、周到たる用意を以て、茲に「自然科學叢書」刊行の大業を監修し、又自ら執筆さるゝことゝなつた。隨つてその内容の嚴正なるは呶々を要せず。拾數册の各書何れも現代を指導し得る權威の所産である。

尙ほその内容は次號にて詳報すべし。

過去一年の婦人界を省みて

山川菊榮

日本における婦人運動の可能性

鳴物入りの空景氣ばかりで、其實質はお話にならぬほど空疎貧弱を極めてゐるのが、吾が婦人界の各方面を通じての改善運動の正體である。本年に入つてから、新聞雜誌を賑はした婦人關係の記事は少くなかつたものゝ、其等は多くジャーナリストの筆のあやに彩られ、針小棒大的報道によつて辛うじて假想的な重大さを帶びさせられたに過ぎず、突きつめた實質としては問題とするに足りぬことが多かつたと見てよからう。今日の男子の間に於ては、實に目まぐるしいほどの勢を以て、飛躍的に思想が進歩してゆくに引かへ、婦人の側は、大體に於て男子のそれと比較すべくもあらぬほど、思想が固定的に靜止してゐるかの感がある。時として個人的に例外の例を示す人はあるとしても、それは畢竟單なる例外に留まつて、全體から見て、婦人の思想の水準が男子より遙かに低い處に留まつて、其進歩が極めて遅れたるものであるといふ事を左右することは出來ないのである。此形勢は、日本の婦人、家族制度の拘束を蒙ること未だかなりに強く、男子と同一歩調を以て、對等の個人として行動し得る境遇におかれてゐないことを示してゐるものである。實際日本では、未婚の女子は父兄の嚴重な保護監督の下にあり、既婚の女子は家事と育兒に忙殺されてしまふ上、眞個の意味での職業婦人、即ち既婚未婚を問はず、永久的な職業をもつて自主獨立の生活を營む婦人はホンの最近の産物であり、その數は未だ極めて少數なので、個人的に多少の不平はあつても、大々的に結束して運動を起す程の勢力とはなり得ないのである。職業婦人の中、特に體的勞働に從事する部分は、大部分十二三才以上、廿才以下の幼少年者によつて占められてゐる。随つて彼等の問題は要するに少年勞働の問題と一致する點が多く、獨立の永久的勞働者のような自覺や團結力に乏しいのは、一面已むを得ぬ道理なのである。

後れて起つた日本の文化は、總ての方面に於て躍進的な、變則的な進歩を餘儀なくされてゐる。勞働運動の如きも、歐米の半世紀以上に亘る長い歷史を、日本は僅々數年間の經驗に凝縮して味はうた。婦人問題の方面に於ても又同じく、今これから吾々が、歐米の半世紀以前の歷史に遡つて、同じ歲月をかけてその最初からの逐一を反復することは不可能である。世界はもはや半世紀前の世界でない、半世紀以前の歐米社會は、女性運動が發生し發達するに好適な條件を與へてゐたが、日本の現在は、家族制度の崩壞と個人主義の發達との過程を辿りつゝある點に於て、當時の歐米に事情が似たりとは云へ、一面世界の形勢の著しき變化は、此過程の十分なる發展を俟たずに、新しき社會制度への急激なる推移を促進しつゝある點に於て、事情は當年の歐米と著しく趣を異にして居る。官僚的反動思想が未だその手綱をゆるめず、ブルジョア的自由主義が發達し切らぬ間に、早くも社會主義が無產階級の前衞の間における合言葉となつたような變則的進歩は、婦人界にも朧ろげに反映して居る。要するに日本の婦人は、彼等の間に個人主義が發達し切らず、大部分が家族制度の桎梏を脫し切らぬ間に、一躍新制度へ推移し、歐米婦人が半世紀以上に亘つて、徐々に小刻みに得て來た權利や自由を、一束にして獲得する運命にゐるものではなからうか。日本の現狀に於て、婦人の團體的活動が困難だといふ事實は、決して吾々を失望させるものではない、否、それ故にこそ吾々は益々現狀打破、新制度實現の必要を痛感する者である。女性運動は、歐米に於ては、少くとも婦人の一部に多少の權利を與へるだけに發達し得た、然し日本に於ては、さうした運動の發達は不可能である、日本に於て婦人を解放する道は、たゞ○○あるのみである。

過去一年間における婦人界の收穫は、遺憾ながらさほど重要視するに足るものでないと私には感ぜられる、然しそれにも拘らず、私は一般的に見た無產階級の思想の進歩を以て、婦人を解放する社會的變化の近きを、心ひそかに思はずにはゐられないのである。

新婦人協會の活動と其改革

本年劈頭の婦人界を賑はしたものは、新婦人協會の治警第五條撤廢運動であつた。これは政治的集會に婦人が參加し、且つその主催者となることを許す條項だけは議會を通過したが、これすらも貴族院で握り潰しの運命に遭うた。吾々から云へば、治警第五條の如きは、元より時代錯誤の惡法で、無きに如かざることと萬々ではあるが、これが婦人の進歩を妨げる第一の障礙

であり少數進歩的婦人の貴重な精力を費さねばならぬほどの重大問題で在るとは考へられぬ。現在、日本婦人の間に政治思想が幼稚なのは、この法律のためではなくて、政治問題に興味をもち得るだけの餘裕のない生活の結果である。されば此の法律が撤廢されたところで無産婦人の大多數は依然として政治問題には沒交渉で、家事や育兒に忙殺されて行くに相異なく、たゞ少數ブルジョア的知識分子が政治運動に携はり得るだけの變化しか爲し得ぬことゝ思はれる。新婦人協會が此運動を繰返すことは勝手であるが、婦人矯風會の禁酒案乃至男子姦通制裁法案と同じく、提出者自身その運命に無頓着な、慣例的請願案の一つに墮することは、策の得たるものではあるまいと思はれる。

本年夏より秋にかけて、協會瓦解の噂について、その主腦者の變更と一部的改革とが傳へられた。最近平塚明子氏に代つて奥うめを氏が實權を執り、運動はやゝ急進的な色彩を帶びるかに傳へられるが、内實如何であるか？

赤瀾會の運動

社會主義婦人團體赤瀾會の誕生は、大分世人の好奇心を挑發した様子であつた。此會本來の目的は、新しいもの好き、珍らしいもの好きの新聞によつて仰々しく吹聽されるような派手な人氣取り的運動にあつた譯ではなく、極めてジミな、堅實な婦……………………………あつたのであるが偶然の事情のために新聞紙上に宣傳せられ、そのために運動上支障を來した傾が無いでもない。けれども種々の迫害や支障の中で、一番重大な、そして一番根本的なのは、何と云つても日本の婦人が家庭といふ牢の中に捉はれてゐる自由なき身であるといふ點である。日本の婦人には、今日なほ大體に於て、家庭を離れて自分といふものをもたぬ。經濟的にも精神的にも獨立のない者が多い。所謂職業婦人と雖も、此範疇を脱せぬ者が大部分である。これは吾々の運動の最大難關ではあるが、私は日本に於ては、社會狀態が根本的に一新するまで、恐らく此狀態は動かし得ぬものであらうかと考へてゐる。たゞ個人的の例外——問題となり得ぬ少數であるにせよ——の數が徐々に增加する傾向は確かに否まれない。此例外が一般的原則となる事は現下の狀態に於ては許されない。それは……………以後の問題である。要するに日本の婦人解放運動は、さうした變革以前に於ては、たゞ芽生えの狀態に留まるの外なく、赤瀾會の運動も、その……………………………………………てゆくといふ、……………………………………………ここは困難でもあり、それだ現在に於ては最も有効な方法でもあらうと思はれるのである。

メー・デーの示威運動や講演會、講習會の試み等は今更繰返すにも及ばず、他に會員の企てた仕事は、會員以外に知る必要のないことであるから玆には紹介を遠慮する。たゞ今日少數の會員が能ふ限り表面に現れることを避けつゝ運動のために××××××とを挑つて居ることだけは××なければならぬ。

ブルジョア的改良の小細工

新婦人協會及び赤瀾會以外には、團體的な婦人の運動は適々耳にふれなかつた。婦人矯風會の某女史が、日本婦人を代表して國際婦人參政權協會にはいつたといふ報道も、事實ではあらうが、婦人矯風會も肝心の『代表者』御本人も、最初から此運動に對する熱心も誠意もなく、全く無責任に、外國婦人に對するお世辭の意味で入會を受諾した摸樣であるから、元より問題とするに足りない。中流階級の生活改善の試みは、各方面に亘つて相當熱心に研究されて居るらしい。婦人の負擔を輕減する意味に於て、此試みは確かに結構なことに相異ない。然しこれとても生活の保障あり、ある程度の生活標準を維持し得る階級に於て始めて行はれ得ることであつて、その『改善』の及ぶ範圍も程度も極めて狹く限定せられて居ることは云ふまでもない。

小賣商をどうとやらするといふ世帶の會といふものも生れた。主婦が物價問題に冷淡であるとか、無智のために小賣商の橫暴を助長するとかいふ聲も聞かれる。然しよし小賣商が不正であるにせよ、大資本を擁し、大仕掛の取引によつて高度の利潤を吸收し得るがために、僅か許りの利益を爭はぬ商店は不正でないと云へるであらうか。一方から云へば、小賣商は、さうした大商店に大部分の利益を占められるので、勢ひ小仕掛の取引の中から比較的多額の利益を收める工夫をせねば生活が維持せられぬことゝなる。この點から見れば、所謂『小賣商の暴利』は、自己保護の必要手段として、資本家階級の搾取と等しく、是認せられねばならぬ。搾取を非とするものゝ眼から見れば、總ての利潤は等しく『不正』であり『暴利』であるが、搾取を是とする社會組織の中にあつて、たゞ搾取の方法や程度に異議を唱へることは畢竟無意義である。組織の缺陷を小賣商の『不正』と主婦の買物下手になすりつけて、小賣商と女房連の摑み合ひを高見で見物しようといふお役所の宣傳は、ブルジョア階級の主婦と等しく無產階級の主婦をもごまかし去るに足るであらうか。

家出、自殺、離婚

統計的に例年よりどれほど實數が增してゐるかは分らぬが、今年は若い婦人の家出、自殺、離婚等の事件が多かつたと云は

れてゐる。とにかく知名の婦人がさういふ問題で三面記事を提供したことは確かに多かつたらしい。個々の事件は別として、大體に於てさういふ事件の背景となつて居るのは、常に新舊思想の衝突と經濟問題とである。今日の婦人――特にブルジョア階級の――は、思想的には多少新しくなり、もはや親權や夫權に對する絶對的自由に甘んじようとしない。それにも拘らず、彼等はその意思を遂行するだけの經濟上の實力と精神的獨立とが伴はぬことが多い。そして茲に彼等の反抗は、無力な、弱々しい怨嗟となり、あてのない、そして脅迫的な家出や、無意味な自殺となり終るのである。私は過去及び現在に亘つて、その現狀に對して無限の不平を抱く無數の婦人を知つてゐる。けれども其等の人々の中、眞に獨力で自己の運命を開拓しようとする者はまづ絶無であると云つてよい。實際在來の日本の婦人は泣くべく――更に甘ふべく、訴ふべく――育てられて戰ふべく育てられてゐなかつた。

その無能な、無氣力な、徒らに感情的な婦人が、現在のような社會的不安の中に捲き込まれ、部分的に眼覺まされた個人としての要求を抱きながら、其の要求を貫徹するに必要な條件――戰鬪的意思と經濟的實力――を缺き、理想と現實との矛盾の間に、著しく病的に感傷的となり、些細の刺戟に忽ち異常な手段を選ぶといふことは、一面已むを得ぬ。然し一面悲慘な事實には相違ない。この點に就ては、父兄や教育者の反省も必要であるが、當事者たる若き婦人自身としては、徒らに怨嗟煩悶に鎮を腐らす暇に、腕一本で生活する覺悟を極めて欲しいものである。

今日の若い婦人は、異口同音に、愛なき結婚を呪咀してゐる。然し彼等のは、戀愛のためには富や地位を省みぬといふ譯ではなく、富や地位の上に、戀愛といふ景品を結婚の條件として要求するのであるから、謂はゞ着物も帶も欲しい、が指環を是非添へて貰ひたいといふ程度のもので、贅りの沙汰といふほかない。今日ブルジョアの若い婦人の間の合言葉となつてゐる『戀愛結婚』とは、畢竟我まゝ娘の贅澤の上塗りであり、そのヤクザな『おねだり』の一種と看做してよい。彼等にして其現狀に甘んぜぬならば宜しく先づブルジョアの家庭の殼を破つて、額に汗してパンを得べきである。

離婚數の増加も、各國を通じて、婦人の自覺に伴ふ共通の現象であつて見れば、敢て驚くにも當るまい。殊に日本のように多數が不自然な成立をしてゐる結婚は、離婚によつてその救ひ難い缺點を補つてゐるといつてよい。日本の離婚數の多いことを國民的恥辱と考へて、離婚を困難にせよと主張する向もあるらしいが、私はむしろ其反對である。日本のような結婚制度家

族制度の國で、此上離婚を困難にしておいたなら、そうした不幸な結合に終生拘束されることに堪へぬ男女の自殺、發狂、出奔等は、一層増加するに相異ないと考へる。

此項に入るべき顯著な例としては濱田榮子の自殺事件あり、白蓮の家出事件がある。然し是等は名流の家庭に關すると云ふこと以外特に重要な意味のものではない。榮子の場合は、新舊思想の衝突の跡は全く見られない。榮子其人と母親の思想は同一水準にあるといつてよいことは、戸籍の問題、財産の問題が兩者の爭の中心點であつたことに徴しても明かである。白蓮の問題とても、貴族、富豪といつた舊式な戲曲的背景を除くほか特異な點は見當らぬ。白蓮其人の態度については、種々な批難もあり、眞に自覺した婦人としては確かに物足らぬ處も多いには相異ないが、あゝした特別の社會に生れて、一種不具的な成長を遂げた『お姫樣』を、一人前の女かなぞかのように、ムキになつて論難することは、殉教者のように賞讃すると同じ大人氣なさとしか思はれぬ。要するに知名の人々の戀愛事件に特別の意義を見出さうといふのは博士が欠伸をした、華族がクシャミをしたと云つて大騷ぎをすると同じ時代錯誤の事大思想である。

國際的婦人問題

國際的に注意を惹いた事項としては、維納の婦人平和大會とモスコーの第三インタナショナル婦人大會とがある。維納の婦人平和大會は、ブルジョア婦人團體の世界的勢揃ひを意味し、モスコーのは、其反對…………………………………………………………………………もので、兩者の間には、明白な階級的色彩の相異が見られる。

世界の婦人運動は、大戰を境として參政權の方面に於ては一段落を告げ、陣容を新にして平和運動に向つたものである。然し彼等の平和主義は、平和時代における平和主義で、一度び大砲の轟きが響き渡るや否や、忽ち血なまぐさい主戰主義、愛國主義と豹變する喰せ物である。いかなる軍國主義も、いかなる帝國主義者も、この種の平和運動に好感を抱かぬ譯がない。各國の君主や大統領が彼等に對してお世辭を吝まず、ブルジョア政治家及び基督教的資本家が、盛んに彼等に聲援を與へるのも此故である。此毒にも藥にもならぬ遊戲的平和運動を、見樣見まねに猿の眞似して、日本婦人の名に於て軍備縮少を米國大統領へ致した人々もあるとかいふことは、たゞ笑つて濟すに外ない座興である。

本年十月には、米國婦人勞働組合同盟の主催による、國際婦人勞働組合同盟會が、國際勞働會議と相並んで開かれた筈であ

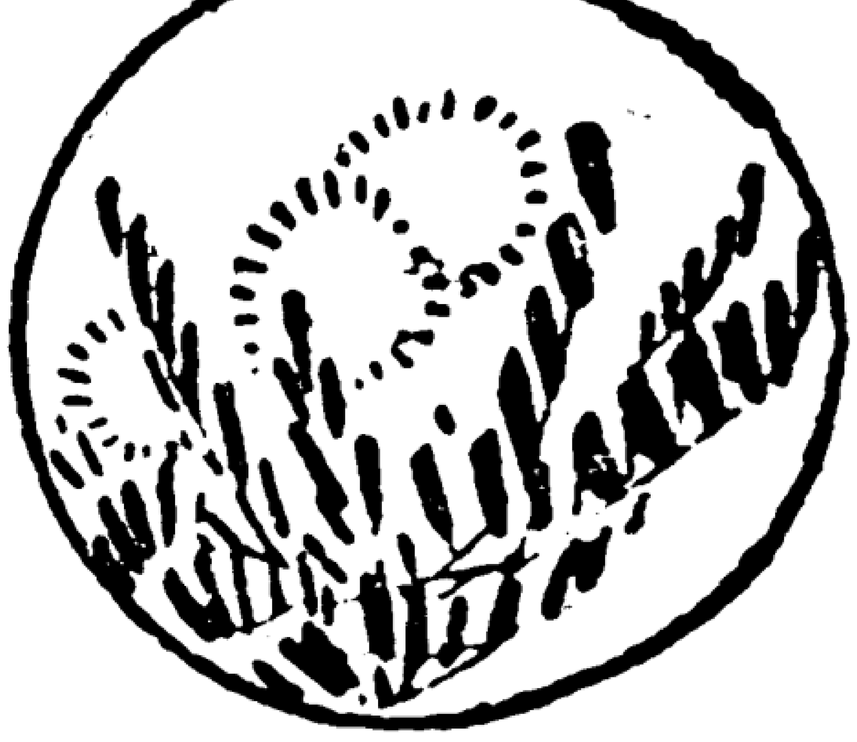
るが、未だその詳報に接してゐないが、これは改良主義、議會主義の婦人勞働運動の代表者會議ともいふべきもので、モスコーの赤色婦人大會と對照して興味ある一の現象である。

モスコーの婦人大會は、クララ・ツエトキン及びコロンタイを主腦とし、婦人の間における…………………………の討論及び決定を行うた。

ロシアに於ては、帝政時代に於ける壓制や迫害や生活難のために、婦人の政治思想は非常に遲れて居つたが、勞農政府樹立以來、四年に亘る月日の間に、主として共產黨員の献身的な活動の結果、婦人の地位大いに改善せられ、其の思想も著しく進步した。其顯著な例の一つは本年二月、バクー地方に於ける婦人大會の一つで、數年前まで、家庭外の世界を知らず、親兄弟や夫以外の男子と交際したことのなかつた婦人達が、一千二百人の代表者を大會に送つた。代表者の中には此ために、反對を唱へた夫と離婚した人々さへある。彼等は旗を押樹てゝ街路を行進し、『インタナショナルの歌』を唱ひ、婦人及び勞働者の解放に贊助する旨の決議を通過した。共產黨婦人部は、都市に農村に政黨政派を問はず、大小あらゆる婦人團體を作り、婦人の生活に直接、密接に關係ある家事育兒に關する改善問題より始めて、漸次その啓蒙開發に努めて居る。

獨逸革命の祖母ともいふべきクララ・ツエトキンが第六十五回の誕辰を迎へ、獨逸共產黨、及び第三インタナショナルの熱心な祝賀を受けたるも、國際無產婦人の記憶すべき出來事であらう。

日本では餘り知られて居らぬが、歐米の勞働婦人界では知らぬ人なき英國のメリー・マカーサー女史の死去は、本年劈頭のことであつたと記憶する。女史は若年の頃から勞働運動に關係し廿三才の時には英國婦人勞働組合の組織幹事として、ストライキの應援に、組合の組織に、勞働問題の講演に、あらゆる機會を利用して活動し、この方面における婦人界の第一人者の觀があつた。一九〇九年に入つて、更に婦人勞働者全國聯盟を作り死ぬ時までその幹事となつてゐた。戰時には、婦人雇傭中央委員會の委員たり、其他勞働問題に關する各種の公私團體の幹部となつて働いた。勞働者婦人部員としての功績も顯著なのである。夫君アンダーソン氏は勞働黨に屬する下院議員であつたが、一九一九年に亡くなつた。女史の死を記念するため、女史の知友は基金を募集して、婦人勞働運動者の養成に宛てる計畫を樹てゝゐる。女史の思想は、飽まで改良主義的議會政策に終始しては居つたが、とにかく最も有能な、英國婦人勞働運動の開拓者の一人として永久に記憶するべき人には相異ない。（一一、一一）



文藝の一年

千葉龜雄

（一）

藝術は遠心力であつて同時に求心力である。

遠心力とは何か。無窮の自由と解放とを求める高く熱い感情のあこがれである。求心力とは何か。無限大な人生の意義を深く堀り下げるところの生々活動して止まない理知の潑溂である。だから藝術の生命は、刻々の創造にあつて、停滯すること、安住するところとには無い。何故かなれば、トルストイが眞の藝術に求めた「人類に與へる新らしく生々しい感情」は、唯一、創造と精進だけによつて求められるからである。

それなら、そうした理知と感情の躍動が何を意義するかとなれば、それは藝術家そのものの自我を、全一に表現しやうとする働らきに外ならない。もしその自我の全一が、何等の苦勞もなく、やすやすと表現されるものならば此上のたやすい事業はない。けれども藝術家は生れた人類である爲に、そこに超える事の出來ない時間と空間の意識がある。その限られた時間と空間を超絶して、その刹那を通じて、永遠の相と理想を築かうとする處に、始めて數かぎりの無い受難と苦しみとが生れて來る。

（二）

理知の眼を大きく見ひらけば見ひらくほど、近代になるに從つて、人類の悩みのますます深く大きくなつて行くことが解る。それは人類の理知の眼が未だ盲いて居た時代に、人間心理のあらゆる利己と愛慾が、すつかり築き上げた不合理の世界が始めてはつきりと視野に入つて來たからである。あらゆる忌はしい傳統と、あらゆる惡むべき搾り取りと、あらゆる壓迫と忍從と……同じ平等の基礎に立つべき人類の間に、どうしてそんな不合理な差別があつて好いものか。社會の、國家の、そして人類の間に、それ等の不合理を築き上げたものは果して人類と人間の何であるか。それ等の不合理を強い信念をもつてあばき出した、藝術家の理知と、その不合理に對して強く燃え上つた感

術家の感情が合一した時に、始めて歐洲大戰以後の世界文藝を强く色つけるところの、廣い意味の人道的精神の藝術が勃興して來たのである。國際意識、世界意識、社會意識、人類意識が、峻刻にそれを潜流して居ることが、そこでは前時代を画きる著るしい特徵になつて居る。

(三)

理知から眺めた諸意識の矛盾が烈しければ烈しくなるほど、藝術家の焦燥といらだゝしさは益々深く涌き立たなければならない。その心理が卽ち、反抗の世界である。有名な「群集心理」の著者グスタヴ・ルボン氏は大戰前大戰後の世界現象を心理的に考察して「反抗の世界」を著はした。氏が政治的佛蘭西の愛國的立場からのみ一切の現象を眺める態度は、私をして大變不愉快に思はした。又た萬事に引け目のある佛蘭西人の立場から、人間心理の文化にいくらか絕望して、悲觀的な傾向を語つて居るのもどうかと思ふが、それにも係らず、大戰後の人類に漲つて居る反抗の心理を、世界の血管から如實に摑み出して來たのは確かに注目すべき考察であらう。それはワルト・ホヰツトマンが、「あらゆる不合理な力で過去に築き上げられたところのものと、その築き上げられて現存する有らゆるものとを取拂へ。そして藝術も詩も學派も神學も、みんなこれ自身の形式を押し立ててそれがさんらんと輝く時代にならぬまでは、デモクラシイは、決して反駁以外のもので自己を表現することが出來ない」と云ふやうな意味の事を力說したのと反應する。

(四)

かくの如くして、私は千九百廿一年の日本の文壇にふりかへつて眺める。この一年の日本の文壇の力點はどこにあつたか。傾向は、指標は、そして色調は。

先づ思想と技巧の傾向から云へば、大正十年の日本文壇は、やはり自然主義を基調としたところの現實主義が大勢を制して居た。尤も十九世紀以後の科學的精神の洗禮を受けたものが、現實主義の鑑札を持たずに、どこの關門だつて通れる筈はない。世界最新の傾向と見られた獨逸の表現主義が、「藝術は至高な理想の表現である」との呼號の下に生れたものであつてすら も、なほ自然を內部にとり入れた改鑄である。その繪畫も、創作も立派な現實主義のデッサンから築き上げられて居ることを見逃せないのが一種の奇觀である。

希臘の哲人だつたかは、藝術は自然の模倣だと云つた。オスカ・ワイルドはそれに反對して、得意の逆說法で自然こそ却つて藝術を模倣するものだと逆襲した。が、私はそのどちらをも否定する。藝術はどんなに自然の神髓に模倣され、また內題し

たものであつても、決して自然の模倣ではない。又た藝術はそれがどれほど自然に如實に肉迫してもそれは決して其藝術のすぐれた價値にはならない。何故かなれば、自然はそれ自身の存在だけでは、何等の意義をも示さない。ところが藝術が自然を如實に描き出す理由は、自然が秘しかくして示さないその意義を、藝術家が代つて明確に指示しやうとすることにあるからである。

(五)

かう考へて來る時に、始めて藝術は自然から獨立した一つの立派な創造である意義がわかる。そして一部の批評家に考へられるところの、藝術は再現であると云ふ理法が、跡方もなく崩れることがわかる。

だから世界を通じて現代の日本の藝術が、科學精神を潜流する自然主義であり、現實主義に土臺を置くことは當然の事である。問題になるのはその現實主義が、またその現實主義の創作が、當然與へねばならぬ約束であるところの、人生の新意義を與へる立派な創造であるかどうかである。もう一つはその現實主義を土臺として、新らしい何等かの藝術境を開拓したかと云ふことである。ところがそれに與へられた答案は、決してこう景氣のよいものではなかつた。

現實主義の徹底は理知の透徹である。それが土臺をつくるものは深く廣い人生と世界の考察でなければならない。ところが此一二年間の我文壇の創作を讀んで、誰でもに不滿を感じさするものは、この廣い深い考察の缺けて居ることではなかつたか上つ面な機智、一寸目先のかわつた思ひ付きが衆愚の評判となることに止まるのではなかつたか。でなければ一向體驗までに移入されてないところの、無省察な記錄の延長を以て、立派に登錄されてよい人生の證劵として提出する、厚かましさを背てしたものではなかつたか、そうしたものの何よりの無省察は、彼等が廣い人生の受難者として、凡てを愛するが故に凡てを享け入れ、凡てを肯定しやうとする謙遜な心境に置かれて居ない事であつた。唯だ我武者羅に思ひあがつて、自己の王國を立てやうとすることに忙いだ。謂ふ所の「私」小說や、自叙傳風の表現の多數が、そうした救はれない醜現の暴君に魅入られて居たことは、何と云ふ傷ましい時代錯誤の現はれであつたであらう。

(六)

粗末な自然の古きうつしだけで、何一つ意義のない創作が多かつたこともまだ我慢される。唯だその自然の粉本も、もしくば藝術が必らず持たねばならぬところの必然性若すらも打捨てられた、薄つぺらな想像の遊戲か、そして人生の烈しい

が、新浪漫主義など〻云ふ尤もらしい定義の下に立派に展開され翫賞されて居た傾向は、たまらない、之れは大正十年期に入つて最も著るしく目立つもので、かうした藝術こそ何等の存在性もないブルジョアの禍でなければならぬ。かうした性質の藝術が、いふ所の「清新な感情を人生に注ぎ込む」藝術の定義を表裏をなすものであることは、云ふまでもない自明の理なのである。

一方に理知の目覚めの稀薄さが、人生に探究にあたへる効果の、いかに歯痒ゆい徹底しないものであるかを見よう。これは謂ふ所の労働小説である。現代の社會に於いて、所有階級と無産階級の對立と其の地層とは、茫然としてではあるが大抵の人にはわかつて居る。それを方程式の地位に置いて、細かくその人生記録を報告するのがいはゆる労働小説と云ふものである。私はそれが小説の形式を採るのが間違つて居るとは云はない。けれども、それは夫等の小説と同様に、社會科學も、新聞雑報も同じ材料を同じ方式で取扱ひ得るならば、それなら夫れを藝術として特殊立たせる部分がどこにあるかと云ふのである。

（七）

私は藝術の永遠性を信ずるものである為に、それに宣傳の効力を少しでも意識して含ませることを絶對に否認する。反對に藝術が永遠性を持つものであればある程、無意識な宣傳の効力のますます絶大な事を信ずるからである。だから私は労働小説の作家達の藝術性を尊重することは忘れない。けれども藝術の世界は所謂全一としての視野である。たとへその題材や内容は一階級と他階級の葛藤を捉へたものにしても、眺められる精神は、やはり渾一し統合された人道的靈魂の中からでなければならぬ。搾取者團に對する無産階級の怨みが強くないとは云はない。又たその興奮と怒りが至當でないとは云はない、不純であるとも云はない。けれどもその對立は未だ社會科學の領分である。ところが所有者階級の罪悪は、それが労働階級にのみへの罪悪ではない。無窮の宏大な人道と人類の存立から見てゆるすことの出來ない罪悪の集團であると見る時に、それに對して燃え上る感情は更に普遍的に、永遠的に、更に無限に大きく廣く必然的なものでなければならない。此の感情の高潮を描くものが即ち藝術である。そこに描かれる材料が、部分的であり、職業的であり經驗的であるのは自然である。けれども本當に全人類の血管を正義の上に湧き立たせるには、そうした材料そのものより以上に、普遍的、人類的、體驗的な感情と思索が必要なのである。

（八）

藝術の取扱ふ視野は社會の組織ではない。社會を組み立てる人間の魂である。人類をよりよくする爲に撰ばれた藝術家は、まづ人類を悩まして居る害毒が、その人間の魂の何であるかを考察することによつて、始めて藝術に與ゆべきものが多いであらう。それを考へることによつて、人類は救はれ、社會は淨められる。本當に人間を熱愛する藝術家ならば、そこまで考へて、そこまで足を踏み入れずには何事も出來ないであらう。資本と富とが、どんな人間にも喰ひ入つて、どんな人間をも無殘な暴王にし向ける。その人間心理は何であるか。それを具體的な廣い人生の視野に置いて、忠實な一箇の人間探求者として眺めるところに、本當の藝術の意味を持つ勞働小説が生れて來はしないだらうか。藝術家の名目が誇りなのではない。さういふ途を歩いて行く方が、謂ふ所の勞働小説家よりも、もつと早道に、人生をより好く、より離くし得る可能性を持つと云ふのである。我が勞働小説が、さうした視野から眺められる努力を取られないのは、廣い意義の人道の熱愛が未だ稀薄な爲であらうか。それともその熱愛に燃え上るまでの感情の燃焼が力弱い爲であらうか。

（九）

けれども人生の熱愛の稀薄であることや、人道的精神に燃え上る感情の力弱いことは、あながち勞働小説にばかり考へられることではない。それは寧ろ全體の文壇を掩ひ包む雰圍氣に過ぎないのである。世界は反抗の時代である。日本もまたその例に洩れない、けれども日本目下の藝術界には、反抗の意識は極めて淡い。すべては人間にどつしりした依頼をあたへ、深邃な思索を促かす創作に乏しい。薄明な氣分、イイジイな心境、それをひきくるめる全體の定義は、現代日本全體の民族を包圍するところの、生活意力の稀薄そのものでなければならない。

思ふに現代のやうな世界の渾沌に於いて、思索の上から理知と感情をつきつめて行けば、どうしたつて確信か不安かのどれかに行きつくのが當り前である。歐洲國民の現狀はそれを語つて居る。けれども思索生活を營まない我民衆の現代では、當來への確信もなければ、さればとて大した不安も感じない。現代日本の文藝ほど、適確にそれを証明するものはないのである。民衆の一角を占める嚴肅な思索氣分すらも、何程藝術界に浸潤して居るかは可なり疑はしい。

また理知と感情が、藝術を浸す部分が稀薄である場合には、その藝術の本當の藝術的な部分をだんだんと低下すると同時に、その理知を常識的なレエルにまで引き下げる危險が起る。現代の或る戯曲が平面な談理であり、或る創作が通俗程度のべ

ンソスを持つた人情小説であり、或る創作が退屈で單調な觀念を延長したばかりの概念小説であつたりすることも、一向珍らしいこととして受け取られて居ないこと、そしてそうした作品が藝術の名で以て立派に市場に取引されて居ることは何人も知つて居る事實である。

理知と感情の破産である。

（一〇）

次に長篇小説の流行と云ふことは、それ自身に大きな皮肉を持つて居る。それは何よりも我藝術がいかに進んで居ると云つても、又そのいかに幼稚であつたかを示す指標にならねば好いと思ふのである。何と云つても我文壇に長篇小説の不景氣であつたのは、資本主義の下に横行せるジャアナリズムの跋扈が重なる原因であつたのだ。供給の法則は需要によつて支配されるからである。けれども長い間其怨嗟に押し默つて堪え忍んだ讀書界と藝術界の忍從は何を語るのであるか。それは日本人の生活が斷片的である事を語る。概して短篇は、刹那の契點によつて、人生の廣大な全圖を指示するところの技巧と觀察と機智の輕業である。豐富で、複雜で、内包的有機的な人生の全面は、どうしたつて長篇によらねばならない。だから今までそれが無くて平氣で居た我文壇は、卽ち全圓的に人生を見る大きな觀照の力を持たぬか。でなければ我民衆に、そうした豐潤な内容的た生活の興味を持たなかつた事實を自白するものである。

（一一）

劇曲が大分注目と興味を集めて來たことは、二十一年文壇の新らしい意義を與へて居る。戯曲が創作と同じ平面に置かれると共に、創作の平面的なものを、戯曲が立體的な藝術世界で創造する點に於いて相並んで發達しなければならぬことは言ふまでもない。又た戯曲は形式の上からして、創作よりもより複雜な綜合的な人生を表現し得られるので、創作以上の批判と努力が費される。それだけ創作よりもよりすぐれた、相當な價値に富んだ創作が見られたのも今年である。たゞ社會問題の取扱ひには、その點からも戯曲が創作よりも便利な形式を持つて居るのに、その方面のよい製作が無かつたのは心淋しい。が、長篇小説の出版と、戯曲と詩が創作と同じ價値に認められて來たのと、それからたとへ一部であつても、社會問題を通じて民衆の生活に觸れやうとする心熱が創作界にほの見えて來たそれ等の傾向を、二十一年文壇の注意すべき現象とすることは差支あるまい。

（一二）

文壇には無數に新人が生れる。けれども其新人が、多少とも

取りのけなく現代過渡期の文壇意識を掩ふて居るイイジイな氣分と技巧の傳統を含んで居る人々であることは淋しい。ブルジョア文學を革命することは先づブルジョア魂を全的破壞することから始めねばならない。その破壞を高調する戰士すらも矢張り文化の武器を以て、破壞の道具とするしきや外出來ないことも淋しい事である。自分では天晴れ生ツ拔きのプロレタリエエトであると自任しても、その意識の影に、いつしかブルジョア魂の隱現して居る場合のあるのも淋しい。新らしい若い日本の藝術を創造するものは、矢張りもつと自由に日本文壇の意識と傳統から解放された新人でなければならないのではなからうか。

けれどもすべては過渡期である。よくよく行詰つた廿一年の文壇にも、何等の解放されやうとする運動と意識が動いて來たらしい。唯だその脈搏のいくらか微弱であることを心弱く思ふのである。

新刊紹介

■使徒行傳餘師　山室軍平著）聖書の平民的講解として作られたものといふ（定價上製一圓貳拾錢　並製七十錢　東京神田一ツ橋五救世軍出版部）

■印陀羅の子（長與善郎著）長篇戯曲インドラの子外山の宿、時節はづれの會話を集む、

■人生（中村武羅夫著）全八部より成る長篇小說の第一部にして二卷より成る（定價各一圓四拾錢新潮社發行）

■ツアラトウストラ（ニイチエ著、生田長江譯）ニイチエ全集の第五なり（定價貳圓八拾錢　新潮社發行）

■ナショナルギルド賃銀制度及其實施の研究（定價壹圓五拾錢　協調會發行）

■社會主義の限界（定價壹圓五拾錢　協調會發行）

■僕と安田善次郞と社會（定價九拾錢　實業之世界社發行）

■實業日記（大正十一年度）體裁內容共もに理想的に作成されてゐる（定價金壹圓　實業之日本社發行）

■死をみつめて（原阿佐緒著）氏の第三歌集である純眞な突詰めた情熱的な氏の面目の躍るゝを見る（定價金貳圓　玄文社發行）

原氏兇變の社會的考察

原首相の變と後の政界

杉森孝次郎

原氏の突然の死が、純政治の見地から、どれほどの損失であるかは、必ずしも或る人々が考へるほど明白ではあるまい。氏の外政上の智見は、オムスク政府の成功を信望した一事にも例示されてをる。極東問題、極東的太平洋問題釘づけの軍備縮小問題を歡受した場合にも、その或る程度の例示はある。原氏の外政上の能力は、目下のわが國の地盤とも、世の光りとも稱すべき稀貴のものではない。そんなら、氏の内政上の能力はどうか。産業、交通、國防、教育、これらは、原氏でなくても氣のつく要務だ。最近の、貧町村小學校薄待案の後援者に、もしも原氏がなつてをつたとするなら、氏の内政能力も、卑近な黨本位のものだ。原氏の突然の死は、政友會の損失であるほどに國家の損失ではあるまい。これば、氏の目的が、濃厚に黨に存したとするならば、目的通りの結果であつて、氏自身に取つても深く恨事とすべき理由がない。原氏の突然の死は、純粹の政治的損失としては、多く言ふに足りないのだ。

そんなら、原氏の今回の變は、是認すべき事件であつたかといふに、最後の結論として、非認すべき事件だ。あの種類の直接行動は、通則として、道徳的罪惡だ。眞、善、美、聖を目的とする見地から判斷して禍害だ。なぜかといふに、あの種類の直接行動は、概しては創造の敵だ。綱記問題の奥に原氏が多少の責任者であつたと假定する。恐らくは客觀的妥當性ある假定だ。そして、淺慮の一少年が、破壞的衝動を發作した事情因としては、綱紀問題の世間の空氣があつたと假定する。なほ且つ、綱紀問題は、原氏の品性に多少の責任を有するのだ。原氏の內

體には無關係の事實だ。それから、原氏の外政上の多少の過失は、國民の意識にさほど切實な位置を占めてゐないが、原氏の智能に多少の責任を有する問題だ。やはり氏の肉體とは無關係だ。品性も智能も、要するに心だ。心の是非を爭ふ手段として、からだに手を着けることは、通例、許すべからざる最下等の劣策だ。心の力に對戰する方法は同じく心の力であるように努めるが、人間相等の正でもあり、善でもあり、美でもある。心の力に對するに心の力をもつてすることは、手數ではあらう。まぬるく感ぜられるかも知れん。失敗に終はりがちなこともあらう。痛快切實でないかも知れない。けれども、それは、さう感ずる人の責任だ。心の力に對戰する方法として、物の力をもつてすれば、いかにも要領は早いやうだが、そこに、實は、隱れたる大損失がある。飽くまでも、心の敵にむかふには、心の力をもつてするやうに決意し、努力するところに、創造は發生するのだ。思想的宣傳の必要も生じよう。同志相組むの効力も打算されよう。熱もあり、光りもある思想見解の體驗と運動、新黨の樹立、困難ながらに、これらの公明正大な、そして生産的な、すなはち創造的な個人的及集團的實行が、その板ばさみの境地から企て起こされるのだ。手段は飽くまでも文化的であり。目的は本質的優秀價の全勝であることを意識的に、且つ無意識的に、必要とする態度、之が創造者の態度だ。心の是非を爭ふ手段として、直ちに敵の身命を破壞するとを選擇するならば、選擇することを恥ぢてやめないならば、人類の生活は、迅速に原始狀態に立ち歸る。高級藝術家のなかまうちにも、專門學者のなかまうちにも、政治方面に於ける如くに、意見の差や、信念の別は多少、常にある。その差別が、敵の身命に直接危害を加へることによつて爭はれることになれば、文化一のものは、絶滅に導かれる。人間としては、形式上、外觀上の綾漫や、薄効に失望すべきでない。古語にも、君子盛德なれば容貌愚なるがごとしとある。大功は、しば〱、小利を否定する。日本の最大政黨に義憤を抱く人が、短刀一個でその義憤を發表するとあつては、あまりに短氣、短見ではないか。

議會主義と直接行動とを、あたかも二本路の岐點に出あはした旅人が、いづれかその一を選ばねばならぬ場合と同じかの如くに、唯二の採擇關係に見てをる人々がある。けれども、これは粗大なる過失だ。議會主義に代はるべきものは、腕力ではない。或ひは組合代表制の要素を含み、或ひはその他の文化的制度的要素を含む新原則、新實行であるべきだ。議會主義に代はる價値のある方法は、議會主義がなしうるよりも高度に、餘計に、人間の創造的、隨つて文化的活動に好機會を與へるものでなく

てはならんのだ。議會主義に代はるべき新方法は、議會主義の本質的目的を、すなはち責任政治、代表政治を、現存の議會制以上に達成する新制度であるべきなのだ。

事によると自分の番にまわるかも知れんといふ私憂あるが故に、或る種類の直接行動を罪惡呼ばはりする官、公人があるといふ嘲笑の聲が流聞する。しかし、社會の各人は、本質に於いて、多少、官、公人だ。火事見物の心理をば超脱したい。自己の誇りの意識に於いてもだ。

今回の場合に似た直接行動は、わが國特有ではない。內容に於いては、かなりわが國特有と見られる部分があるけれども、形式に於いては、歐米にも珍らしくない例だ。けれども、たとへばロイド・ジョージ氏が、勞働黨、自由黨、及び愛蘭の怨恨を買ふてをつた過去數年間を、毒矢事件の偶發を除いては、無事に經過したことや、クレマンソー氏やレーニン氏が、一度ばかりの災厄には遭うたれども、要するに大事に及ばずに、立派に生き延びたことや、また內敵必らずしも弱小ならざりしウイルソン氏のことなどを考へあはせても、わが國は、すこし危險率が高い。家庭、學校、社會の三機會を通じて、幼少の時代から、或る種類の直接行動が卑劣であることを、男女の兩腦心胸に徹底させる用意が肝腎だ。同時に、文化主義、自由主義、個性主義、社會奉仕主義の合理的道德觀念を、夙に養成する用意が肝腎だ。專制と、屈從と、卑劣と、暴行とは、同志だ。今日に於いて志士の形式を保存する人は、眞の志士ではない。內容上の志士は文化人だ。徹頭徹尾、絕對的に文化主義者だ。

ナザレスの愛世者が、「殺すな」と唱へたのは、親切なことばであつた。近代の「無抵抗主義」にも、深い眞理が潛んでをる。創造の名に於いて、われらは或る種類の直接行動を廢棄すべきだ。

原氏逝いて、わが政界の善後策はどうあるべきか。善後策は、客觀的必要だ。それ故に、國民は、まじめにそれを問題として解決すべきだ。しかし、この偶然の變は、原氏の政敵の本質的功績ではないのだから、原氏の政敵が、もしもこの變を、天佑の如く、神助の如くにこゝろえ、乘ずべき僥倖機會なりとこゝろえて、自進を謀るならば、醜なるが故に惡だ。卑劣だ。國家の客觀的必要に應ずべく、客觀的動機にもとづいて、國民は、この際、推他するなり、自進するなりすべきだ。鷲は、射殺された禽をば、餓えてもついばまないと喩說される。それほどの高尙、雄大、遠達の良心と剛魄とを持てばこそ、千里懸空の鵬翼をも長ずるなれ。乞食、竊盜、强盜は、いづれも政治家の誇りに達しない。しかし、既成政黨內や、老人組からは、智識も

る良心も、良心ある智識も、でさうにない。既成政黨や老人組は、段々と隱居すべき時運が、一と雨ごとに明確になる。わかい連中はどうか。實行の責任を念頭に置いて、省察する餘地があらう。年の老若、閲歴の朝野は問ふべきでない。日本再生の眞意ある人々が、歴史と社會、すなはち、自國の歴史と、現實の國際的社會とを理解し、體驗して、進んで明日の計を立てるやうに協力せよ。

戸別訪問をも辭せずに議員になつた人々、なりたがる人々は、國民が希望を屬すべき人々でない。實行政治の世界を、戸別の訪問趣味の人々に平然として明け渡してをる無責任批評者も、同じく國民が希望を屬すべき人々でない。國民の政治的再生が必要だ。それは無論、原氏の變のためにではない。しかし、原氏の變だけのためではないと同樣に、原氏の變だけを除外した、他の歴史的事實のためにでもないといふ意味に於いてだ。

ありふれた事だが

堺利彦

一

大木が仆れた。明星が落ちた。偉人が死んだ。天下の一大事だ。國家の大損失だ。イヤモウ政治界の騷ぎは一通りでない。

……………………。

……………………。

……………………。

……………………。

……。

尤も、それぞれの向に取つて一大事には相違ない。大損失には相違ない。然し、貧乏暮しの一家に取つては、稼ぎ人が兵隊に取られたのですら、矢張り一大事であり、大損失である。跡に殘された者の悲嘆と當惑と困却とは、矢張り昨今の政治家達と同じようなものである。

つまり原君の殺された事は、お氣の毒には相違ないが、あるまじき事×××ではなく、××××××つたのである。さすがに原君自身は平生から覺悟してゐたと　ふではないか。

それも當り前の事である。只ハタの連中の狼狽さ加減が滑稽を

極めてゐる。

それに、原君が刺客にやられたのだからこそ、一般人心が可なり強い刺戟を受けてゐるのだが、若しあれが病氣で死ぬるか自働車の衝突で死ぬるかしたのなら、どうだらう。社會は決してそんなに驚きはしないだらう。そして政治家連の狼狽は矢張り同じようなものだらう。現に憲政會の前身たる同志會の出來かけた時、肝腎な所で桂君が病死した。ハタの連中に取つては、あれも一大事であり、大損失であつたに相違ない。然し今となつて見れば、誰もあの時、桂君の死んだ事を、そんなに大した事と思つては居ない。原君が如何に健康であつたにしろ、いつどんな急病に罹らないといふ保證もつかなかつたらう。又原君の自動車に限つて決して衝突しないと極まつても居なかつたらう。それに原君もモウ六十何歳といふ年齢であつた。して見ると原君が如何に偉人でも、大人物でも、大政治家でも、大木でも、明星でも、あの美しい白頭をいつまで振り立てゝゐられない事は分り切つてゐた筈である。それを今更のようにアワテる連中の氣が知れない。

藩閥と黨閥と官僚閥とが、あんな馬鹿らしいアワテ方をしてゐる間に、社會の實質は時々刻々遠慮なく進展してゐる。其の…………………………。

二

一體、個人に重きを置き過ぎた物事の考へ方が間違つてゐる。大人物史觀(若しくは、歴史の大人物觀)の病ひが染みこんでゐる當世の識者、學者、志士、政客、及びそれらの意見態度に感化されてゐる多數世人に取つて、謂ゆる「大人物」の死といふ社會の表面の一變化が、社會の實質その者の大變化以上に重大視されるのは、無理のない事である。然し個人の存否が、たとひそれが如何なる「大人物」であつたにしても、社會進化の大勢に何ほど顯著な影響を與へた實例があるか。

勿論、社會の組成分子は個人である。社會の事象は總べて個人の身心を通して表現されるに極まつてゐる。從つて個人の活動が社會進化の動力であるには相違ない。殊に身心に於いて優秀な個人が強大な動力となるには相違ない。然し其の優秀な個人をして強大な動力となさしめる、根本の原因は外に在る。それは即ち、多數の個人の間に於ける諸種の關係である。個人間に社會關係があつて、其の關係上の利害を或る優秀な個人が代表する時、其の人の活動が初めて強大な動力となるのである。そこで其の代表的個人が不意に無くなると、其の社會關係が差

當り適切に代表されにくゝなるから、そこに多少の混亂と當惑と狼狽とが生ずるのは、誠に當然である。けれども、代表的個人が無くなつても、社會關係の實質は依然として儼存するのだから、間もなく自然の必要上、その關係を代表する他の優秀な人物が現はれて來る。勿論、前のと全く同じ人物が現はれる筈はないから、そこに進化行程上の變化を生ずるには相違ないが、其の變化は些々たるもので、根本の關係が變らない以上、其の關係を代表する者は大體に於いて同一な筈である。若し其の代表者が、關係を代表するといふ必然の任務を忘れて、個人的の傾向を顯著に發現させるならば、其の人は（如何に優秀の才力を持つてゐようとも）遂に悲慘な失敗を演出して、關係以外に驅逐されるに極まつてゐる。

故に、代表的大人物の急死は、社會進化の行程に對して、一時的に少なからぬ影響を與へるには相違ない。又その『少なからぬ』が『可なり大きな』ものになる場合もないとは限らない。然し進化行程の大勢上から見れば、それくらゐの事は、實は何んでもないのである。多少の曲み、多少の横道、若しくば多少の逆流といふに過ぎないものである。

歐洲大戰勃發の際、フランス社會黨の大立物ジョーレスが、其の非戰的態度の爲に愛國的の一青年に刺殺された。それは實際、一大事變であつた。然し其の刺殺がなくても、ドイツのベルギー侵入の報が傳はつた時、フランス社會黨の多數が昨日までの非戰的態度を一變して、主戰論者となつてブルジョア政府を助けた其の道行は、矢張あの通りであつたに相違ない。ジョーレス個人が、若し生きてゐたら、どんな態度を取つたらうかといふ事は別問題である。若しジョーレスが何處までも非戰的態度を繼續してゐたなら、黨の多數から排斥されたまでの事だらう。そしてジョーレスが殺され、黨の多數が熱狂的の主戰論者に豹變したに拘はらず、二三年の後には、又黨内に非戰的態度が増大し、戰後に於いてはそれが益々高潮しつゝある。然しジョーレスが今まで生きてゐたなら、此の高潮が更に急激に一層の高潮に達してゐるだらうとも考へられない。

ドイツではスパルタカス團の代表的戰士リープクネヒトが、革命騷中に政府の手で殺された。リープクネヒトは、あはよく行けばロシヤのレーニンと同じ地位に立つた筈の人物であつたが彼が生きてさへゐたらドイツの革命が無産階級の獨裁といふ處まで疾くに行つて。ゐたゞらうとも考へられない。さらばと云つて彼が殺された爲にドイツ共産黨の運動が閉塞してしまつたわけではない。今のドイツ政府は矢張り共産黨の惡夢に襲はれつゞけである。リープクネヒトに代るほどの顯著な代表者よ

まだ現はれてゐないようだが、それが爲にドイツ共産黨運動の前途に光明がないわけでも何んでもない。

ロシヤのレーニンも一度ばかり狙撃された。若しあの時、彼が脆く死んで居たなら、これこそはボリシエヰキ革命の頓挫を來したであらうとは、誰でも直ぐ考へさうな事である。實際、今のロシヤの形勢として、レーニンの存否は内外に大影響を與へるに相違ない。けれども、レーニンといふ一個人の優秀な才力であの革命が起つたわけでもなし、又あの大黒柱ばかりであの勞働獨裁政治が維持されてゐるわけでもないのだから、たとへ彼が今まで暗殺されても、頓死をしても、大體上、ロシヤ革命の進行を阻止する他の力はない筈である。英佛日米等の兵力や經濟力で是非ともロシヤを叩きつぶすと云ふなら、レーニンが何人居ても、或は叩きつぶされるかも知れないが、若しどうしても叩きつぶされない社會關係が存在してゐるなら、レーニンを殺したつて、又その代りの者を殺したつて、それが爲に叩きつぶされる氣遣ひはない。

そこで原君だが、原君の急死が軍閥や藩閥に恐慌を來たさせた事は眼前の事實で如何とも仕方がないが、それが爲に政友會の壽命に大した短縮が生ずるとも考へられないし、又それが爲に藩閥軍閥の餘命を大いに延長させるとも考へられない。藩閥軍閥を殘留させる社會關係、政友會を榮えさせる社會關係、ブルジョア階級を跋扈させる社會關係が存續してゐる以上、其の諸關係の代表者は必ずどこからか現はれて、それだけの勢力を持つ事になる。只、その諸關係がいつまで存續するかが問題である。前に云つた通り、社會の實質の進展が問題である。

三

然し、大勢上の事はそれとして、原君の死が御親類筋のあわてさわぐ意味より以外に、多少の價値を有しないわけでもない。

ジョーレスを殺し、リープクネヒトを殺し、レーニンを殺しかけた事は、ブルジョアジーの爲に可なり有力な示威運動であり、又急場凌ぎの一方策であつた。原君の場合は勿論その反對である。そして、原君の暗殺者は別段ハッキリした政治的意見をもつてゐなかつたらしいから、『反對』は『反對』でも一向有力でない。けれども、それにしても、兎にかく政界の形勢に多少の變化を與へたといふ××はある。…………

……………………。

……………、……………

……、……………………

………………………………。

組織的變革の否定としての暗殺

長谷川如是閑

日本の政治狀態は、どの方面から見ても過渡的である、元來立憲政治と云ふものは、確然と定つた限界なり、形式なりがあるかの如くに考へられてゐるのであるが、その法理的乃至、政治思想上の限界なり形式なりを、完全に具象せしめてゐる國は少ない。其點で何れも過渡的であると云へるが、日本の夫れは過渡的狀態が殊に顯著であつて、研究の對照としては、興味のある現象を呈してゐるのである。殊に爲政者の政治理想と、實際の傾向とは或點で著しく喰ひ違つた進行をとつてゐるのは、面白い。日本に立憲政治が成立んとする時、其形式を佛蘭西と英國とに則らうとした一般の傾向は、爲政者をして恐怖を感ぜしめ、それに對する防禦の陣立を一生懸命に計畫せしむる事となつた。そして夫れは可なり成功した。

日本の立憲政治を英佛の夫れに則らしめないで、獨逸の夫れに則らしめたことは、立憲政治を過渡的にしようと云ふ、意識的の目的を以つてゐたのであつた。この覺悟は、そう考へた爲政家自らも若し今日に生存してゐたならば、寧ろ不必要な努力であつたことを感じてゐたかも知れない、夫れ程日本の立憲政治は、法則を獨逸式に立てながら、寧ろ非獨逸式の發展をなしてゐる、と云つて無論それは英國式であるとも佛蘭西式でもあると云ふことはできないが、而し全體の傾向は英國式に近い運動をとつてゐるらしく思はれる　夫れは政治的動機によると云ふよりは寧ろ經濟的動機によると見るのが妥當であらう。

日本の立憲政治が成立する前に、思ひの外容易に封建制度が崩された。その時に、所謂『士族の商法』なる言葉が示してゐる通り、封建制度を組織してゐた武士階級は、相率ひて今の言葉で云ふ實業界に投じた、そうして多大の犧牲者を出した。がその内の大資本を擁するか若くば官邊との聯絡に依賴する連中は、國家事業と結付いて所謂實業界の覇者たる地位を占むるに至つた。この形勢が、日本に於ける資本主義的組織の發端として、中流階級以上を商人化する力があつた。これが日本の立憲政治

をやゝ英國流の商人の政治に近からしむる道となつた。このことは其當時に於てはどう云ふ影響を將來の立憲政治に及すか明瞭でなかつたが、今日に至ると、我國の政黨政治を稍々英國の二大政黨對立主義の夫れに近からしむる導因となつたのである。

これは我國の當時の爲政者の思ひかけないことであつた。彼等は立憲政治の名に於て專制を行ふこと獨逸のそれのような、而かもビスマアクの夫れのような政治狀態を日本に導き入れるつもりであつた。從つて段々日本の政界の英國流の意味に於ける政黨政治化することによつて、彼等も政黨主義者に改宗する事の止むを得ざるに至つた時に、彼等は其政黨を出來るだけ、非デモクラチックな組織に於て、發達せしむるつもりであつた。この目的は彼等の政黨生活以外の生活に於ける國家的努力となつて教育及警察の方面に頑固に現はれた。警察組織を專制君主の番犬である處の警察と同じ性質のものたらしめたのであるがそう云ふ事は暫らく措いて、教育の方面に於て觀察して見ても彼等が、日本式立憲政治を——否寧ろ獨逸式立憲政治を建設する爲めに非常な努力を拂つたことが窺はれる。

元來立憲國の政府は、立憲政治の反對の政府であるべき筈がないのであるから、その政府が國民に施す教育は、立憲政治と背着するが如き性質のものである筈がない。少なくとも意識してそういふ撞着した教育を施す必要を感じないのである。然るに日本の政府は、立憲國の政府でありながら、立憲政治に內心反對の政府なのである。少なくとも立憲政治的民衆の意力の發達は絕對に希はない處のものである。訝しな話であるが、夫れは日本の立憲政治が、封權の余波である處の藩閥の爭ひの結果發生したものであることの當然の結果である。

王政復古が、數箇の大藩の力で完成された爲めに、其成立後の政府に於て所謂藩閥が成立つて、封建的黨派爭ひが激甚な勢ひで新政府の中心に渦卷いた。そうして結局作戰と機會に就て拙なかつた藩閥は政府外に投り出された。我國の立憲政治は無論維新の際に自覺した今の言葉で云ふブルジョアの意識の覺醒から要求されたものには違ひないが、而も其指導者としては、政府外に投り出された件の劣敗藩閥が働いたのである。夫れは權力爭奪に敗北した復讐戰であつた。この事が立憲政治を容るゝべく政府を余儀なくした事情なのであつた爲めに、政府は當然に立憲政治に對する嫌惡を感じない譯に行かないのである。その結果表に立憲政治を容れながら、裏面に就てその實效を生ずる事を出來るだけ防ふとして、教育の力に依賴したのである。

この教育は立憲國家の國民教育が個人的自主、及地方的自主心を涵養すべき筈であるのと正反對に、そう云ふ精神を出來る

だけ壓迫せしむる爲のものであつた。それはどう云ふ教育を適當とするか、云ふ迄もなく、立憲以前の國家的精神の涵養に外ならないのである。尤もこの教育は實は遲れて發達したのであつた、維新後新教育が叫れた時には、爲政者はそんな復古的教育を施すべき何の必要も感じなかつた。で彼等は英文のリーダーを共儘日本語に譯して、教科書を作つたりして居たのである。一般社會教化としても所謂歐化主義を盛んに鼓吹して、老後は頑固親父の如く云はれてゐた井上馨侯の如きはハイカラの隊長であつた。斯くの如き狀態が、一方に於て對外關係に基く——即ち支那露西亞との關係——國民的精神の勃興と、他方に於ては民族的生活の意識の回復の內的原因とによつて、猛烈な國家的運動が起つた。當政者がよい機會として捉へたのは此復古的風潮であつた。彼等は一方に於て、對外的に國民意識の貫徹を困難とする事情に遭遇して所謂軟外交の非難を甘受する外なかつたに係らず、對內的にその國民的精神の勃興を利用して立憲政治を骨拔きとする事に成功したのである。その後の政府者の態度は何人が局に在る時でも、一貫して立憲的發達の防禦政策として採用したと同時に、その目的に叶ふ教育を强制したのである。

この傾向は、日本民族が一方にあれ程猛烈に立憲政治を要求しながら、他方に於て夫れ自らを裏切るような、非立憲な政治的行動を逞ふすると云ふ現象と引離して考へることは出來ない日本人は可なり民衆的な傾向をもつ國民であることは、その立憲政治の要求をして、左程不自然の要求らしく思はせないのであるが、その市民としての教養に於て、何等立憲的の素養を持たないと云ふことは、その間に當然の矛盾を發生せしむる譯である。その矛盾は、政府が、立憲政治の眞の擁護者であるならば教育及教化の力でこれを指導する筈であるが、之の正反對に、そう云ふ教養をなるべく防げる方針をとつてゐる。言論の自由を壓迫して、自由に意見を闘はし合ふと云ふ習慣をなるべく人民の間に成り立たしめないようにし、青年の自主的教育を壓迫して、なるべく彼を支配者の意志に依頼する、意氣地なしとしようとし、それでなければ、輿論に頓着しない豪傑式につくり上げようとし、若くは組織的行動による主張者たらしめないで、英雄的行動を尊重する個人的意力者に仕立上げようとする、それ等は同じく地方の自治を壓迫し、村落の自存の精神を、干渉によつて傷け、統一によつて害ふと云ふ政策を採ることゝ相俟つて、日本國民をどこ迄も立憲政治に不適當な國民として保存せしむるのである。

蒔いた種は收穫しなければならない、立憲的組織は、どんな

好いものでも總的である事は前云つた通りであるが、夫れでも市民の思想上立憲的組織に依賴して、政治組織なり、社會組織なりを變革せしめようと考へさせる事は、立憲政治の極めて有利た働きなのである、之れに反して、立憲國と稱しながら、立憲的の組織によつてどうする事も出來ないと云ふ觀念を一般國民に懷かせるに至つては、弊害である。非立憲的な訓育を國民に與へた結果、當然立憲以前の個人的威力の政治に思至らせると云ふ事は、立憲國として屈辱でもあり、又わざ〱立憲國に歸化したかひもないと云ふものである。その結果意力政治の信仰者が、組織的變革を否定していろ〱の直接行動に出ることがあるならば、累代の政府者はその大部分の責任を負ふべきものである。

近來頻發する暗殺は、實は今の産物ではなく、立憲以前の封建以來から維新前後にかけて行はれた暗殺と全く同性質のものである。夫れは現代の社會的不安が、各人の生活を襲つて、その心理を刺戟した事實はあるかも知れないが。その意識的心理は確かに立憲以前の心理である。大久保、森、星、大隈、阿部等の暗殺と同一系統に屬する、立憲以前の夫れ等の暗殺は、理論上から云へば、立憲政治の發達によつて、段々跡を收むるように一般國民が敎化さるべき筈のものである。然るに不幸にして、我國に於ける教化は前云つた如く、夫れと正反對のもので而かも夫れは過失によつてそんな敎化が行はれたのではなく、故意に行はれたので、頗る始末が惡いのである。政治的若くは社會的理由による暗殺が、我國に跡を絶つと云ふ事は一朝一夕の事ではあるまいが、せめて當の被害者たる政府者が、その逆の努力を試みべきであつて、少なくともその反對の努力を試むべきものではなからう。

高橋内閣批判

時勢盲及び國際盲からの超進が必要

杉森孝次郎

高橋内閣が出來た。國民教育の施設に於いて、貧町村を冷待する案は、藏相時代の高橋氏の意見でもあつたと巷説される。これが實聞であるとするならば、内閣の首腦としての氏は、昨の非を自認する必要がある。國民教育の設備をば、殊にその物質方面をば、貧町村のためには却つて富厚にする政治的、道德的、そして教育的必要があるのだ。この事自身は非常の大事でないかも知れない。しかし、現代に於ける新興國の政治家ともあらうものが、教育に無智であり、無信仰であることは、殆んど致命的缺點だ。まして、その無智と無信仰が、貧町村にむかつて誇張せらるるに至つて、時勢をもわきまへぬ政治家といはねばならん。時勢盲といふべきだ。

藏相時代の高橋氏は、國際財勢に暗かつたための失績を示した。わが最近の好景氣が、ある大いなる程度に於いて歐洲戰の結果であり、その好景氣を追うて生じた不景氣の原因が、同じくまたある大いなる程度に於いて、歐洲戰の止息であつたことは、世間の識者が指摘する通りだ。國内の景氣、不景氣の一大決定因としての國際經濟實情を看取しなかつたことは、すくなくともそれだけの國際盲であつたのだ。政友會内閣及びわが國民の大部分の國際盲は、オムスク政府の勝利を信じて期待し、期待して出兵した際に、悲慘なる反意思的自白をなした。内閣の首腦者としての高橋氏は、政治、經濟、教育、思想等の諸方面にわたつて、國際明となる責任を自覺すべきだ。

物價調節は、國民生活安定の一必要條件だ。消費組合の助成、國家社會主義、都市社會主義の智慧に屬する國營及び國家

管理、地方自治體發及び地方自治體管理の場合と範圍を新增する工夫が必要だ。最近、東京府が、ある種の商賈人に加へた制裁は、小現象であつたが、大意義を暗示する。生産者保護、消費者保護、それから仲介者が必要な限りに於いて、その仲介者すなはち商人の保護、この三方面の保護を組織あり、統一ある方法によつて實現すべきだ。公設市場の原則を完成し、擴大する努力の如きも、實行目錄中の一項たるべきだ。

國民教育費の國庫負擔額を可能的極大限にするためにも、遞昇税方を善用する餘地があらう。そもそも、國民收入の再分配の一方法として、税制の新發明が必要だ。高橋氏は、國民教育の國庫負擔案には反對意見を持つてゐたと傳へられる。果たしてさうだつたとしても、その意見は、恐らく研究した結論としての意見ではあるまい。

海軍縮小案は、目下國際的に進行中だ。わが國は、陸軍の師團を、すくなくとも半分近くに、さしあたり減却する餘地があらう。その理由と方法とについては、專門家のなかにも、少數の先覺者があるやうだ。要するに、國防の目的には忠實であり、現存軍人の失職をも生ぜぬ方法によつて、師團の約半減が企てらるべき時機だ。

國防の目的にも關係を有するが、もつと深い・永い目的にむ

かつて航空機の發達に新らしい國民的、随つて政府としてもの注意を向けべき時機も熟して來た。

黨本位の政治をば廢止すべきだ。すくなくとも國家本位すなはち國民本位の政治を決意して行へ。綱紀問題なども、黨本位の政治の餘弊たる部分を多大に含む。

勞働者及び細民の内に、教育熱を催進する方針と政策が、新國家の一大方策であるべきだ。

國境別の無衣の内實は、國際的、人類社會的思潮、實勢の多少亂脈な交錯であり、合流であることを直接に明視して、自他救濟の聖意のもとに爲政せよ。最高限の空望のやうだが、實は、これが、最低限の實要求だ。この最低限の實要求に理解と意思の示される程度に應じて、國民は、新内閣を待遇すべきだ。

單なる政變欲と、政權欲はいやしい。しかし、進化的政變欲と、政權欲ば貴い。國民に、進歩的政變欲と政權欲が旺盛であることが、一黨の存亡にかゝはらず望ましい。

兇變と政變

山川均

播いた種子なら刈らねばならぬ。播いた種子なら刈入れる權利がある。日本は今ま浪花節、俠客、義士、國粹の教育が生んだ幾多の『國士』を收穫して居るのである。

原氏の横死が日本の政治にどれだけの影響を與へるか。之は日本の資本主義的組織がどの程度まで完成して居るかといふ問題の觀測を誤らぬ人々に取つては、固より問題でない。兇變は原氏を急に偉大な平民的政治家としたようであるから、吾々も謹んで原氏が偉大な政治家であつたことを承認する。けれども如何に偉大な政治家でも、資本主義の政治的機械組織の中にあつては、幾百の小いさな齒車の一つに過ぎぬ。齒車は機械組織の運轉に故障を起こすことは出來るが、機械組織の運轉の方向を變へることも、運轉の性質を變へることも出來ぬ。

勿論、原氏はこの齒車の内の、最も大きな齒車であつたかも知れぬ。そしてこの齒車の損傷が、一時機械の運轉を妨げる力のあることは事實である。けれども機械の運轉に故障を生ずるといふ點では、是等の齒車のうちの最も少さな齒車とても同じことである。原の齒車が毀はれたら、高橋の齒車、野田の齒車で取替へるまでゝある。近代の機械組織と同じく、資本主義の政治的機械組織も出來合ひの代替品から成立つて居る。資本主義の組織が或る程度に成熟し完成した以上は、大政治家のうちの最大の政治家（ロイド・ジョーヂと云はず、ブリアンと云はず、原氏の如き！）でも、要するに幾百の小齒車のうちの最大の齒車以上の要求をすることは出來ぬ。

この齒車を目掛けて突進するのは、何時でも『外來思想』と『過激思想』ではなくて『國士』である。

彼等は機械組織の全體を知らぬ。彼等は稍々大きな齒車がぴか〳〵と光つて廻つて居るのを見て、此の齒車が機械組織を廻はして居るかの如くに思ふ。

この齒車、しかも最も大きな齒車の損傷は、少くともそれを

取替へる時間だけ、機械の運轉を停止した。しかし唯だそれだけである。元老の技師、元勳の職長が寄つてたかつて、齒車を取り替へる。

らうか。

そこで或人は、日本の政治的の機械組織を造つて居るもの動かして居るものは、矢張り技師と職長であるかの如くに考へる。然らば技師や職長は、自分勝手に造り上げた別の齒車を持つて來て差し替へるかといふと決してそうではない。近代の機械は代替部から成つて居る。技師や職長は、物置の隅から探し出して來た清浦の綵車や平田の綿繰臺を一應當てがつては見るものゝ、固より資本主義の機械組織に適合する筈はない。鋼鐵の齒車は鋼鐵の齒車で取替へねばならぬ。製作所は極まつて居る。資本主義の組織が或る程度に成熟し完成すると、元老の勢力が如何に大きく見へようとも、官僚軍閥の力が如何に偉大に見えようとも、要するにそれは、到底役に立つ氣遣ひのない古道具を、近代の機械に當てがつて見るまでのことである。

清浦内閣が出來ず、平田内閣が出來ないで、高橋内閣が出來たのは、日本の資本主義的機械組織が、或る程度に完成したことを物語るものに外ならぬ。

日本の政治的種子蒔き者は、まだ『國士』の敎養に不足であ

新刊紹介

■坂崎出羽守　山本有三著　最近發表上演して多大の好評を博せる『坂崎出羽守』以下『嬰兒殺し』『淀見峨』『穴』の氏が近業四篇の脚本を蒐めたるもの現代脚本集第一篇也（定價金壹圓、新潮社發行）

■若き泉　三島章道著）つれ〴〵に記された、紀行、感想、對話を蒐めたものである（定價一圓八十錢、東京神田表神保町大岡山發行）

■最近歐米敎育改造思潮及實際（山田敏一著）（定價一圓七十錢、東京四谷坂町一二二哲人堂）

ヒューズ案批判

華府會議の第一聲に接して

法學博士　堀江歸一

流石は米國

華盛頓會議が如何なる成行を呈するかと云ふことに對しては、世人一樣に一種の恐怖心と好奇心とを以つて、之を迎へたが十一月十四日東京日日新聞の報導した會議第一日の議事に接して、私は流石に主催國が北米合衆國であると云ふ感を懐かざるを得なかつた。合衆國の提案は要するに第一、日英米佛伊の五個國をして十年間海軍の制限を協定させ、第二、艦數と噸數とを標準として海軍の制限を實行し、第三、現在作業中並に計畫中の建造艦は悉く之を廢止し、現在の老朽艦も亦之を廢止し、現在の各國海軍力の比較は之を尊重して、英米兩國の五十萬噸に對し、日本の噸數制限を三十萬噸とするの諸點に外ならない。

右の提案が如何なる影響を我國の海軍擴張計畫に及ぼすかと云へば、其勢は甚だ大であつて、結局我國は未だ建造に着手しない戰艦紀伊、尾張、第七號並に第八號の四隻と巡洋艦四隻の造艦計畫を中止しなければならず、進んでは目下の建造中の陸奥加賀、土佐を始め巡洋艦四隻合計八隻の造艦計畫を中止し、續いて目下建造中の戰鬪艦陸奥以下の三隻と巡洋戰艦天城以下の四隻とを合せた二十八萬八千噸の建造を廢棄しなければならぬことゝ爲り、此外に第二戰線に立つ可き劣級戰艦十五萬九千八百二十八噸を廢艦することゝ爲ると云ふ話である。

日本の立脚地

日本は從來多くの機會に於て、海軍の擴張を計畫した。其理由とする所は或は日本が海岸線の永い國であるとか、貿易移民の保護に必要であるとか、云ふような點に在るが、要するに海

軍擴張の如きは、國際間の關係に於て、相對的のものであり、又勢力均衡の維持を主とするものであつて、我國が比年頻に海軍を擴張したのも、太平洋に於て、合衆國と覇を爭ふ必要に出でたし、又日英同盟の誼を重んじるの必要に基いたものと見られる。

然るに國際間の形勢に於ける變化は甚だ急激であつて、合衆國自ら海軍の擴張を制限すること丶爲れば、我國をして海軍を擴張せしめた第一の理由は自然消滅する譯であり、又日英同盟も廢棄と決定した今日に於ては、英國に對する情誼なり、又は日英同盟を存續する武器に充てるなりの考で、海軍を擴張する第二の理由は存續の價値を失つたのである。而して歐洲に於ては從來孜々として強大なる海軍力を維持し有事の際には海賊同樣の働きをする態度を示して、列國の脅威と爲つた獨逸の海軍も全滅したのであるから、列國は獨逸に對抗する勢に促されて、海軍を擴張する必要を感じない一方に、國際聯盟に信用を繋ぎ、此聯盟の下に、國際的平和の維持されることを考へる以上は、聯盟同志の間に、海軍力の擴張を競爭するが如き、全然無意味の沙汰とせざるを得ないのである。

斯く考へたならば、今日こそ列國の間に軍備の制限を實行するに就て、最も時機の宜しきを得たものとする。殊に各國共に戰爭の慘禍の如何に甚だしきかに就て、記憶の新なるものがある。或る者は親を失い、或る者は夫に死別し、或る者は柱とも、杖とも、賴む小供を殺した上に、四肢を失い、身に傷痍を蒙り、將來の生活を暗黑の狀態に陷らせた者も少なしとしない。從來歐米諸國に行はれた平和論の如きは、戰爭の慘禍を體驗したことのない人々が架空的に之を想像して、云々した抽象論に過ぎなかつたのであるが、今日唱道される平和論こそ、眞劍眞面目のものである。左ればこそ輿論を容れるに吝ならざる諸外國の政治家が總て軍備縮小の計畫に共鳴して、遂はたい次第である。

制限の標準

海軍擴張の制限は當然の歸結であるとして、偖制限の標準が列國間に公平であるかどうかの問題がある。是れは軍事專門家の研究を待たなければならないが、英米兩國の各五に對する日本の三と云ふ制限標準は海軍存置の一目的たる貿易保護の見地から考へたならば、必ずしも當を失したものではない。蓋し最近の貿易表を見ると、英國の輸出入は三十四億九千四百萬磅であり、合衆國の輸出入は二十億六千九百萬磅であり、日本の輸出入は四億四百萬磅である。然らば日本の三に對して、合衆國

は十五であり、英國は二十四と爲るのであるから、海軍制限の標準を日本の三に對して、英米兩國共に五を以つて、制限とするのは、日本に取つて、必ずしも不利益とす可き道理でないと思はれる。

日本の沿岸線の長いことや、原料品食料品の供給を海外に仰ぐことは、從來海軍の擴張を必要とする論據に充てられた。然しながら合衆國が比律賓や、布哇を沿岸線に加へ、英國が東洋南洋の諸殖民地を沿岸線に加へたならば、如何であらうか。更に英國が世界到る所から、原料品食料品の供給を受け、合衆國亦次第に同樣の方針に就きつゝある場合に、日本の原料品食料品を供給させる地方は一葦帶水の支那に限られて居ることを考へたならば、日本獨り海軍の擴張に熱中しなければならぬとか、他國の匹を超へて、之を擴張しなければならぬとか云ふ理由も之を發見するを得ないのである。

日本に對する諸外國の反感

從來日本が諸外國から嫉視され、非難された重なる原因は軍國主義を以て終始し、機會あれば他國の領土を侵略したり、侵略する準備に熱中したりしたことに存する。今日の儘で進んだならば、日本は結局世界中の憎まれ者と爲り、第二の獨逸帝國として、世界諸國の袋叩きに遭ふ可き運命に陷つたのである。幸にして歐洲戰爭後世界に平和論が起り、日本亦之に追隨しなければならなく爲つたのは、誠に勿怪の幸であつて、是れぞ天來の福音に外ならない。左るにても尾崎行雄氏を始め、民間一部人士の間に平和論や、軍備縮小論の唱出された場合に、之を一種の空論の如くに輕蔑して置きながら、外國の提案に接すれば直に之に贊成し、盲從する原内閣の不見識は驚く可く、又憫れむ可きものであつて、斯る不見識の黨に國事を託するが如きは、私の何としても不安を覺へる所である。思ふに政友會員以外の國民は此點に於て、私と所感を共にするであらう。

日本の工業力

唯一つ考ふ可き問題は日本と諸外國殊に英米兩國との間に於ける造艦能力の相違である。英米兩國の如く、多年間に亘る努力の結果として、製鐵製鋼造船諸業の發達の著しい國であれば、愈々宣戰の布告された時から、軍艦の建造に着手しても、短日月の間に之を竣成して、戰線に立たせることを難しいとしないが、日本のような上記諸業の發達の幼稚なる國では、英米兩國の同時期に建造に着手したとした所で、其竣成までに、二倍時を要するか、三倍の時を費すか、測り知れず、其間に戰爭

に於て致命的打撃を受けたならば、國家の爲めに、不幸此上もなしとす可きである。然らば我國の全權委員は此點を論據として、列國をして能く我國に加へられようとする制限の標準を緩和するの主張を爲し得るかどうか、又此主張を爲して、之を貫徹させる見込があるかどうか、會議の前途に於ける一個重要の問題たらざれば已まないであらう。

然しながら日本が以上の提案をするからには、其れは自ら國際聯盟の効果を疑つて、戰爭再來の想像することを前提としなければならぬ。平和の根本的確立を目的とする會議に於て、日本自ら戰爭の再來を想像して、之に對する準備を云爲するが如きは、日本の好戰國である事實を手もなく外國に廣告する所以と爲るのであつて、斯の如きは果して我國の爲めに謀つて、忠なるものであるかどうか、一個の疑問に屬する。其れよりも英米兩國が鐵、鋼鐵の國内に於ける産出に依頼し、戰時に於ける急速なる軍艦の竣成に恃んで、敢て自ら海軍制限を斷行し、而して之を他國に強要するものであるとすれば、我國も亦之に對抗する爲に如上の諸業を奬勵するに全力を注ぎ、平時に於て平和的産業たらしめると共に、戰時に於て軍需品工業たるの用を致さしめ可きである、此點に於て私は我國民の工業的能力を助長し完成するだけの計畫が政府の手に依つて、運らされなければならぬと考へる。

陸軍の制限如何

從來我國が軍國主義に支配され、諸事を擧げて、軍國の用に應ずる覺悟の下に、種々の束縛を蒙つたのである。外國に對して日本に誇る可きものがあるとすれど、其れは一の軍事なり、軍事的施設なりで、他に何ものもない、學術も藝術も悉く軍事に壓迫されて居ると云ふことは、内外の定評であるが、其れも畢竟、軍事が我國國計に於て、最も大なる收入を搾取して居る以上は、斯る結果を生ずるのである。富は多くのものを其支配下に吸收する、陸海軍が多額の經費を支出すればこそ、多くの人才も集まり、精巧なる機械も製造され、文明の魁をすることと爲る。然も其文明と云ふのは破壞であつて、建設でないとすれば、此位い吾人の生活に妨碍を及ぼすものはないのである。

然しながら吾人は海軍制限を以つて、足れりとするものではない、海軍を制限したならば、或る程度の破壞的資本を生産的資本に移らしめる効果はあらう、又將來に於ける戰爭の危険を遮斷して國民をして枕を高くせしめるを得るであらう。其れだけでも大なる利益を生じるに相違ないが、隴を得て蜀を望むは人事の常であつて、此外に私は從來軍事上の役務について居る

多數の具員を解放して、彼等を自由なる生產勞働者たらしめることを希望する。而して此目的を達するには、海軍制限よりも陸軍制限を以つて適切の方便とするは論を俟たない。

日本の陸軍は東洋に於て、平和を保障するの用を爲すものであるか、其れとも他の用を爲すものであるか。兵器は兇器であると共に、護國の具とも爲る。随つて我國の陸軍に對しても、其目的用法の那邊に在るやに就て、如何樣とも解釋を下し得る。然し此點は姑く措き既に海軍が極度まで縮小された曉に於て、陸軍だけ從來の儘の規模で一國に殘つたとした所で、何の用を果し得るであらうか。殊に我國の如き四面環海の國に於ては海軍の保護なくしては、一兵も之を海外に送遣し難い、其我國に於て海軍の縮小が行はれることは、裏面に於て陸軍の縮小されることを暗示するものと見て差支ないであらう。

軍備縮小と經濟

兎に角今度の海軍縮小計畫の如き、隨分急激に行はれ、殊に建造中の軍艦まで、廢棄する場合には、其經濟社會に及ぼす變動も亦甚だしいであらう。現に我國に於て政府から軍艦建造の註文を引受けることを目的として、規模を擴張した造船所の如き、能く之を平和的事業に移動させ得るや否や、若しも其れが不可能であれば、失職失業者の輩出を見るであらう。從來海軍鎭守府があり、海軍工廠があつて、多數の人や職業を吸引し、漸く市制を施行した都會の如き、果して市の面目を保ち得るかどうか、海軍々人中に多くの失職者の生じるのは、當然であるが、如何にして、彼等の生活を安易ならしめるか、共に考ふ可き所である。然し吾人は斯る過渡期に現はれる困難よりも、終局の効果に着眼し、所謂小の蟲を殺して、大の蟲を生かす覺悟を以つて、此問題に臨まなければならぬ。

要するに合衆國が華盛頓會議を召集し、軍備縮小を提議して列國に同意を求め、列國亦之に贊成を辭せないと云ふのは、一面から見れば、諸國に軍備縮小を可なりとする輿論の潮流が強く動いて居る爲めでもあらうが、他の一面から考へれば、私は之を以つて、合衆國の弗外交の成効に歸せざるを得ない。華盛頓會議を機會として、私の豫て想像した通り、合衆國の歐洲に對する債權を棒引きにさせようと云ふ議論が強く爲つて來た。然し、合衆國は之に對抗する爲めに、對歐債權の急速回收を唱へる。前者は合衆國自身の同意がなければ、債務國が幾ら主張した所で、行はれる見込はないが、後者は其債務の期限の短かいものである以上は、合衆國一個の裁量に依つて、何時に於ても實行し得られる。是れが合衆國の今回の會議に於ける強味で

あつて、以つて列國をして自國の脚下に拮伏せしめるに足る。此優勢の地位を擁して、海軍制限以外に、合衆國は何を主張して、列國の同意を求めようとするものであるか、私は刮目して將來の發展を待たうと考へる。

兎に角日本が此面積の狹隘なる國土に於て、多數の人口を給養することは、國民生活に脅迫の加へられる最大の原因であると、一般に認められて居る。斯くて對外移民の自由を請求する聲が叫ばれたり、國内に於て人口の増殖を抑制する說が唱へられたりする次第であるが、一國の面積と其上に於て給養され可き人口の數は必ずしも正比例の關係を保つ譯のものではなく、私は國策の宜しきを得さへすれば、日本今日の面積を以つて、今日よりも多くの國民を豐富なる狀態に於て生活せしめる道があることを考へる。其道は多々あるが、軍事費を削減し軍事的施設を廢止し、斯くて解放された勢力と資本とを生産上の方面に向はせるが如き慥に其一つであり、又有力なるものである。現に大正十一年度の豫算案に於て、我國の歲計に多少の緊縮が行はれるようであるが、其最も有力なる原因が海軍の既定經費に約八千萬圓の繰延を見る一事に外ならないことに徵しても、軍事費が如何に我國の財政を苦しめる所以であるかを知るに難しとしないであらう。

技術論と大局論

今日一寸或る新聞紙の雜報を見ると、日本には今建造中の軍艦が多い、殊に進水式の間際に迫つて居る戰鬪艦もあるが、合衆國には斯う云ふ地位の軍艦が少ない、斯る狀況の下に、一率に建造中や、竣成間際の、戰鬪艦まで廢棄することは、日本に取つて、甚だ割が惡いと云ふ議論があり、又補助艦に對する制限が日本に酷であると云ふ評があつた。軍事專門家の技術的知識から考へたならば、如何にも斯う云ふ割が良いとか、惡いとか議論が出るであらう、然し我國の全權には現任の海軍大臣が居り、其下の隨員にも海軍々人が居る。是等の人の働きで、割の惡いものを良くする工風もあらうが、大局から眺めたならば、私は是等過渡時代の損得などは、何でもないことであると信ずる。我國が何事にも、又如何なる場合にも小事に躊躇する傾向のあるのは、技師の技術論が勝つて、國士の大局論が負けるからである。三名も全權の揃つて居る中には、少しは大局に眼を付ける人もあらう。合衆國が既に大局論を以つて、世界に大風呂敷を擴げ來つたのである。私は日本も煩瑣なる技術論などは一擲して、大局論で應酬することを希望して已まない。

本論は十一月十四日の電報を見て、直に執筆し、寄稿したものであつて、其後の狀勢に依つて訂正しなければならぬ個所もあらう。然し私が平和を愛し、軍備を憎む初一念は如何なる事があつても動かされないのである。

軍備の縮小實現せられんとす

――新軍國主義の論據を駁す――

稻垣守克

一、米國の海軍制限案

華府會議は開會された。ヒューズ氏は開會の挨拶と同時に海軍縮小案を提出し米國の誠意を世界に向つて發表した。該案に依れば（一）十ケ年間海軍建造を中止し（二）巨大艦建造計畫を放棄し（三）老廢艦を除籍するのである。其結果英國は巨大艦約六十萬噸、米國は約五十萬噸、日本は約三十萬噸を有することゝなり、廢棄すべき噸數は英國約五十八萬噸、米國約八十四萬噸、日本約十五萬噸となる。

米國の提案より之を觀るに今回の會議は必ず或程度に於て海軍々備縮小の實を擧ぐるであらう。勿論私は國際紛爭の原因を除去することの最も必要であることを忘れないものではあるけれども、軍備の縮小或は進んで撤廢が世界改造の前提條件の一つであることを確信する。

二、平和の根本條件

平和の前提は平等である。人類團體生活の形はピラミツト形より平面形へと進む。少數支配と壓迫と搾取との繼續する間、×××續く。人類社會が自由と平等と愛との基礎の上に建設せらるゝまで改造の運動は續く。今日に於ては平和主義排斥論は人類の本能（又は性質）に立脚するよりも、より多く社會狀態――國內的に、國際的に――の不公平狀態を其基礎としてゐる。

國內に於て改造の思想が漸進的、實際的であつて革命的思想家の理論的追擊を受けると同樣に、國際關係に關しても改造的平和思想は兩面の攻擊を受ける。一面は國家鬪爭時代の國家學を基礎にしたる國家主義の方面、他面は國際的不平等を急激に改造せんとする思想である。

三　戰爭必要論の變化

今日の國際狀態は旣に國防なる語に疑を與へた。他國の侵略を豫想して始めて國防の必要がある。又今日の思想は現狀を必ずしも正義と認めない。故に一國內の社會に於ける現狀維持論を壓迫なり、搾取なりとして批判すると同樣に、國際的現在の地位に對しても橫暴なり不正なりとして攻擊する至につた。故に武力に對する國防のみならず、從來の國際法上の權利を護る意味に於ても國防なる文字の濫用を許さぬ時代になつた。

故に戰爭の必要を國防に求めず、國民生活の保障に求めんとする傾向になつた。特に日本に於て容易に之を觀ることができる。民族は食を求むる爲めに發展しなければならぬと云ふ論は理論としては尤もであるが、往々にして侵略主義に移り易い。自己の生存、自己の發展を餘りに主張することは他の生存及感情を輕視し易い。

英國は富と土地とを得た。世界を支配した。金力と武力とを持つて他民族を壓迫してゐる。其地位を保つ爲めには國防の爲めの武力が必要である。佛國は勝利者たる地位を保つ爲め、獨逸は生きる爲め、米國は其幸運を維持する爲め、日本は食を求むる爲め、其他多くの弱小民族は解放の爲め獨立の爲めに武力

必要の理由を拵へてゐる。

掠奪の結果であらうと、天然の因緣の結果であらうと、今日の幸福なる國民は其幸福を不幸なる民族に分與しなければならぬ。國際的資產階級或は權力階級の民族の其地位を護る爲めの國防軍は正義の立場より十分の批難を受けねばならぬ。又自己の發展の爲めの軍備は平等の理想を世界に貫徹せしむると云ふよりも、新しき軍國主義を醸生することになる。資產階級の民族に反省の機會を與へることなしに自ら彼等の通過したる掠奪主義に退步せんとするものである。

四、帝國主義的社會主義

獨逸のハンブルグの反對分子なる Laufenberg（ラウフェンベルグ）等の主張した外交方針は帝國主義的ボルシェビズム（Nationalbolschewismus）であつた。彼等の考に依れば獨逸を救ふ道は一日も早く共產主義の國家となし、露國と同盟し、有力なる共產軍を組織し聯合國の壓迫に對抗することである。之に對し眞正の共產黨は反對の意見を有し、共產主義の外交政策は飽くまで平和主義を採用しなければならぬ、獨逸は聯合國と平和關係に立ち、條約の履行不可能の點は妥協的に改革するに在ると主張してゐる。

ナチオナル、ボルシエビズムの運動には舊軍人等軍國主義者の加はれるもの多く、其思想は確に帝國主義の病菌を受けてゐる。彼等はレーニンの所謂世界革命の必要の誤解者であり、此思想は共産主義の勝利自身を妨害するものである。

五、民族主義の限界

民族主義の行き過ぎは帝國主義である。自己の民族の權利を遠慮なく主張する思想（Nationalisum）は他の民族の權利を輕視することになる。國際聯盟は少數民族の保護と云ふ安全瓣に依つて民族主義の希望を容れやうとした。民族主義は之に反し飽くまでも民族の範圍まで國境を擴め、民族の完全なる獨立を期し、經濟上、政治上に他の容喙を全然排せんとするものである。

大戰の終り頃より盛に唱へられたる民族主義の思想が民族の解放獨立以上に主張せられて世界協力と云ふ進歩に對する障害とならんとした。民族の解放の次に來るべきものは各民族の協合であつて、決して各民族の帝國主義化ではない。

六、日本と生存權

物質上に於て米國人は日本人より多くの天惠を受けてゐることは事實であつて、理論から云へば米國人は其自然の幸福を日本に分與しなければならぬ。然しながら實際に於て日本民族は如何なる態度に出づべきか、此れが日本に與へられた重大問題である。

日本に於ける軍國主義の思想は此處に活路を見出した。國防の觀念に依り國民を恐怖させ興奮せしめ得ざるに至つた日本の軍國主義は國民の生存の必要に新しき武器を見出した。民族の生存の必要の爲めに世界を改造することは人類の美しき理想であつて、哲學的基礎を有してゐる。此點を横取りにして、一寸借用し、新しき戰爭の理由、軍備必要の根源を説明せんとする軍國主義の巧妙に對して吾人は稱贊の辭を惜まぬ。

日米戰爭は日本にとり正義のなり、解放の戰なり生存の戰なりと宣傳した軍閥の努力は十分の效果を擧げ、軍國主義を容れ易きブルジョア階級のみならず實に一部の勞働階級及青年の間にも非常の影響を與ふるに至つた。

華府會議の招請が來た當時吾國に於ける言論界は大體に於て三種に分れた。(一）は華府會議は壓迫會議である、軍備の縮小は不可能であるとなすもの、(二）は世界の開放を實現すべし、軍備縮小すべしとなすもの、(三）は先づ太平洋、極東問題に止め、軍備は是非縮小すべしとなすものである。

故に問題となるは第二の論である。勿論世界の開放は世界改造、永久平和の前提條件であつて、人種差別撤廢、米大陸の開放、其他濠洲、進んでは世界の門戸開放、機會均等、各民族の解放を世界に向つて主張すべき最も適當なる地位に在るものは吾日本の國民である。それが世界に對する日本の使命である。故に吾人は之を主張した。主張を繰り返して世界の反省を求め、世界が吾人の理想に向つて集る機會の到來を希望した。然しながら空想家に非ざる以上此理想の急激に實現することは不可能である。日本が原料と食物とを得るに何等かの途を見出す必要のあることは吾も外國と之を認めてゐる。然しながら其方法の點に於ては必ずしも一致してゐない。軍國主義を基礎として他の土地に武力的に發展する以外に研究すべき多くの方法が殘されてゐる。

支那及シベリヤに關する門戸開放、機會均等の聲を逆に利用して、世界に向つて突進することは理論としては主張すべきであるが實際に於ては今日未だ成功せざるを豫見しなければならぬ。それが爲めに實際に達し得る部分を犠牲にしてはならぬ。軍備の縮小は實現可能である。今回の米國の提案通り實現せしめることは困難ならんも、割引しても豫想外の成功を見ねばならぬ。軍備縮小を人種問題と心中せしめんとする計畫に對して注意しなければならぬ。第二の説は人種問題の貫徹されざる時に軍備擴張論に變形し易い。吾人は如何なる場合に於ても軍備縮小を重視しなければならぬ。

七、軍備縮小より開始せよ

世界改造の第一歩は軍備の縮小である。現今英米に於ける軍備縮小論は人民の心の叫びから發し、政治家の手で取扱はれてゐる。英米の國家組織は資本主義であるから表面に現れた軍備縮小論は資本主義的色彩がある。例へば軍備の競爭は破産に向つての競爭であると云ふが如きは軍備縮小の理論を單に財政上の見地に置いてゐる。資本主義的強國の世界支配を是認する立場から觀ても既に戰爭は國際關係を解決し得ない時代になつた。資本主義國家間の戰爭は資本主義國間に於ける大戰爭を惹起し、資本主義に致命傷を與へ、勝利國に對しても利益を與へざることは今回の世界大戰が之を證明した。

日米戰爭は從來の國家觀の立場に立つて觀察しても、少しも問題を解決すべきものではない。若し日本が戰爭に勝つ場合を想像しても、日本の求むる世界改造の理想は決して戰爭に依つて實現せらるゝことなく却つて其實現の期を五十年或は百年の

後に延ばすこととなる。日米戰爭は日本の經濟的破壞を意味し、日本民族の發展の希望を永久に葬るものである。

又改造の理想より之を觀察しても、決して世界の改造に貢獻するものではない。それは美しき理想を護るが如き迷の爲めに獨逸カイゼルと等しき誤に陷るものである。

世界の改造は武力を離れて、宣傳に向はねばならぬ。强大國の武器を捨てしむる力は人類の理想の叫びでなければならぬ。軍備の縮小は人類に光明を與ふる最初の燈臺である。

新刊紹介

■日本憲法（美濃部達吉）博士が日本の憲法に就いての研究の結果を極めて系統的に著述す（發行所有斐閣定價金四圓七十錢）

■和田垣傑作集（大町桂月編）故博士の小品文、敎訓、實話、滑稽諧謔、吟咏、講演等をおさむ（發行所至誠堂、定價金三圓八十錢）

社告

菊池寛氏

文壇の雄將たる同氏は明春いよ〳〵外遊に決定した、氏は外遊中の創作、隨筆は雜誌にては唯、だ本誌によりてのみ發表さるることとなつた、新春以後の本紙がいかに陸離たる光彩を放つかを見よ。

改造社

舊約

◆福田徳三博士書翰◆學兄は將來必ず日本文壇の巨匠となられる御方と確信します漱石よりも樗牛よりも向後の青年は大兄の作に其心を傾倒するを確信します（江原宛）

一擧にして・四萬部を賣盡す●

「新約」以上の大賣行

江原小彌太作■「新約」姉妹篇■全一冊■價貳圓八十錢 書留送料金廿三錢

東京神田猿樂町 越山堂 振替東京一二九五四番 電話九段三九二一番

百版の辭

演されました。東京では伊井、河合、喜多村氏等の名優が明治座に於いて、神戸では新劇團の麒麟兒澤田君が神戸中央劇場に於て花々しく興行し、そしていつも滿員の盛況を呈した。此れ何の兆ぞ。そして拾貳月は名古屋、神戸、東京、大阪、横濱の五ケ所で上演さるることとなつている。家庭に於て、學校に於て、銀行會社に於て、諸官廳に於て、花柳界に於て、蕩々本書及び賀川氏を主題とした宗教談が試みらるるのは何と面白い傾向ではないか。風教、道德等末世と觀ずる道學者は、將に、頂門の一針として三顧するの價値がある。

中村武羅夫氏著

長篇小說 人生

■全八部十六卷

二卷とも十一月發賣

第一部(1) ■惡の門 ―四六大版三百十頁―

第一部(2) ■獸人 ―四六大版三百四十頁―

定價一冊 壹圓四拾錢づゝ

送料一冊八錢づゝ

隱れたる文壇の偉才として、一部具眼の人々をして深く望を囑せしめつゝある中村武羅夫氏が、十年の雌伏より起ち、初めて世に問はんとするの作は是れ也。八部十六卷、八千枚に垂んとする一大長篇。處女作にして同時に一生の仕事(ライフ・ウオーク)たるの意氣組に成り、落想の雄大、規模の宏壯、而して描寫の深刻、洵に文壇空前の一大雄篇たり一大傑作たり。理想主義、自然主義、虛無主義、一般人間性の中に乃至一個人性の中に包含さるゝこの三つの傾向が、いかに對立し、いかに相剋するかを全篇の主題とし、男女の愛慾を中心として、姦通、爭鬪、殺人等、人間生活のあらゆる惡と、罪と、汚れとを忌憚なく描破すると共に、それ等の一切の上に、人間の善と德と輝きとを、強く、高く、鮮かに描き出せり。第一部前後の二卷題して、「惡の門」と云ひ、「獸人」といふ。若く美しき人妻との道ならぬ關係に苦悶しつゝ、その苦悶の牢獄より遁れ出る事能はざる男、春機發動期に於ける驚くべき無慙の行爲より其の生涯を呪はれて放浪生活をなしつゝある男等を中心となし、之に配するに個性鮮かなる三人の女性を以てし、その他の人物第一部のみにて五十人に及ぶ。これ實に人間生活に於ける罪と惡との序曲にして、同時にまた、その罪と惡との底に搖動する德と善との薄明を指すところ、全篇の精神は既にこの中に生きたり。而も世の謂ゆる長篇小說の自敍傳的臭味を絕ちて、意想豐かに結構複雜を極め、東西其の類を見ること甚だ少なき尨大無比の長篇として世に現はる。まことに是れ文壇の一大驚異也。

東京牛込矢來三番地 振替東京一七四二番 **新潮社** 電話番町 八〇七番 八〇八番 八〇九番

中澤臨川著

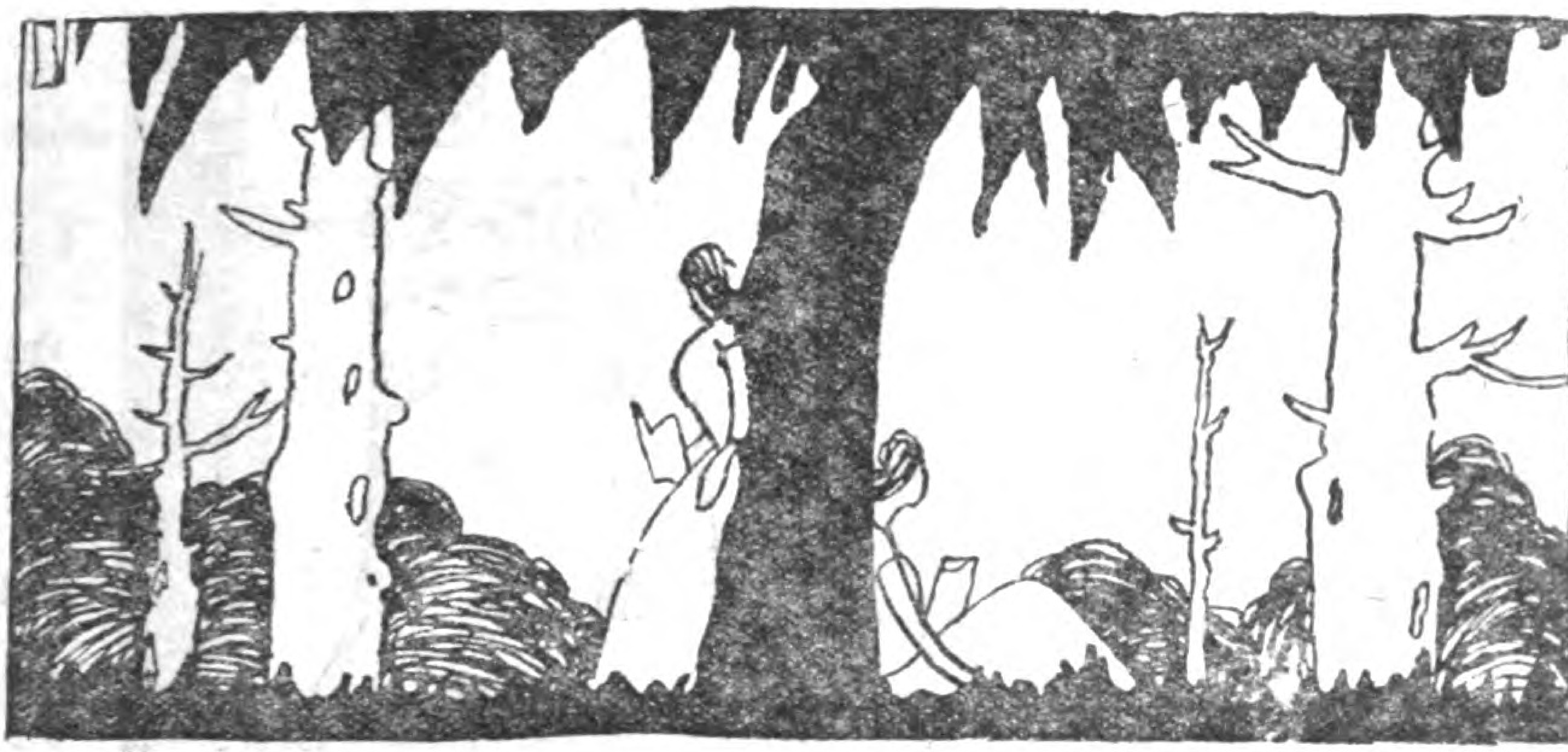
嵐の前

◆四六版函入天金
◆定價金貳圓
◆送料金拾四錢

改造社
東京市芝區櫻田備前町
振替東京四八〇二

好評 拾壹版

人格の人として、熱情の思想家であつた中澤君の「嵐の前」は本日遂に第十版を發行するに至つた、こんな氣高く戀愛を取扱つた小說が他にあらうか、そしてこんな情熱の迸りが滾々と流れる才筆が又と世にあらうか、そこに描き出だされた情熱の思想家ニイチエの一面が天才的に——純人的に——全紙に躍動しておる姿は全く臨川天來の筆にあらずんばよく能はざる所である、日本ニイチエ——中澤君の遺稿はこの一篇によつて北斗の星の如く高く光るやうになつた。



戯曲

愛すればこそ

──三幕──

谷崎潤一郎

人物

橋本牧子　或る高官の未亡人

圭之助　牧子の長男

澄子　圭之助の妹

三好數馬　圭之助の友人

山田禮二　澄子と同棲して居る男

秀子　或る小劇場の女優

その他刑事一人、取次ぎの書生一人、カフェエの給仕女一人

時　現代

所　東京

第一幕

一

場面——橋本家の一室。日本間を西洋風に飾つた質素で雅致のある部屋、中央にテーブル、三四脚の椅子、上手と下手とに出入口があり、正面向つて右手に肘掛窓がある。窓の前にデイワン、花瓶を載せたテイー・テーブル。

秋の日の午後、未亡人牧子が窓の前のデイワンに腰かけて毛絲の編み物をしてゐる。下手より書生が名刺を持つて入り來る。

(書生)奥様、あの、ちよつと、——

と云つてモヂモヂしてゐる、

(牧子)何?どなたかおいでになつたの?

(書生)はい、あの、唯今斯う云ふ人が見えまして、——

書生牧子に近づき名刺を渡す。牧子それを見ると心配さうな顔つきになる。

(牧子)(低い聲でヒソヒソと云ふ)此の人が私に會ひたいつて云ふの?

(書生)はい、

(牧子)私にかい?

(書生)はい、——決して御迷惑になるやうな事ではございませんから、どうか是非奥様にお目通りが願ひたいと申して居ります。

(牧子)(努めて冷靜に)あゝさう、では會ひませう、此處へ通して下さい。

(書生)畏まりました。(去らうとする)

(牧子)あ、ちよつと待つて、――圭之助は居るでせうか?

(書生)はあ、居らつしやいます、お客樣のやうでございます。

(牧子)どなたか知ら?

(書生)三好さんがお見えになつて居らつしやいます。

(牧子)三好さんなら構はないから、圭之助と一緒に直ぐ此處へ來るやうにさう云つて下さい。その後で此の人を通すやうにね、――

(書生)はつ、承知いたしました。

書生上手へ去る。牧子は何か考へつゞけつゝ編み物を置いて立ち上り、中央のテーブルへ來て右の椅子へかける。不安な樣子。暫くして上手より圭之助と三好數馬入り來る。二人共三十歳前後のまだ學生風の拔け切らない紳士。圭之助は和服、三好は英國風のじみな洋服。

(圭之助)お母樣、何か御用ですか?

(三好)(牧子を見て會釋する)今日は。御不沙汰いたしました。

(牧子)あゝ、三好さん、あなたも居らしつてほんとに好いところでした、――

(圭之助)(三好と共にテーブルへすゝみ、牧子の左に來ながら)何ですお母樣、一體何なんです?

(牧子)(さつきの名刺を示して)今ね、斯う云ふ人が來て私に會ひたいつて云ふのですけれど、――

(圭之助)(名刺を手に取つて見る)ふん、....(ちつと考へる)

(三好)(圭之助の手にある名刺を覗く)刑事だね、――(さう云つて或る事を連想したらしく悲しさうに眼を曇らす)

(圭之助)きつと山田の事ですよ、外にこんな人が來る譯はありませんから。

(牧子)私もさうだらうとは思ふんだけれど、でもまあどんな事だらうね、──別に御迷惑は掛けないつて云ふんださうだが、かゝり合ひにでもなるんぢやないかね。

(圭之助)かゝり合ひに?そんな事があるもんですか、私たちは山田と何の關係もないんです!

(牧子)だつてさうは行くまいと思ふ。山田とは關係がなくつても、あの子が居るんだから、──

(圭之助)おかあさん、どうか僕の前で、殊に三好君の居る前で、あの子などゝ仰つしやらないで下さい。もうあれは我が子とは思はないつて、いつかも御自分で仰つしやつたぢやありませんか。實は今も三好君とその話をしてゐたんですが、僕だつてもうあれを妹とは思つちや居ないです。あんな奴は人間ぢやありません。

(三好)まあ君、そんな事を云はんでもいゝ、さう云つてくれちや僕が困る。僕は君が澄子さんの惡口を云ふのを聞いたつて、決して好い心持ちぢやないんだから。

(牧子、)(涙ぐみながら)ほんたうに、いつも此れで困つてしまふんですよ。そりや圭之助の云ふのが尤もには違ひないんですけれど、私の身になると矢つぱりさうも行かなくつて、──あれだつて大分此の頃は後悔して居るやうですから、今にきつと眼が覺めます、兎に角山田と切れてくれさへすればいゝんだから。

(圭之助)切れるものならもう疾つくに切れていゝ筈です、眼が覺める時機は今迄何度もあつたんです。

(牧子)お前だつて、三好さんに義理を立てる積りなら、さう云ふ風に頭からあれを憎んでしまはないで、もう少しあれの爲めを思つてやつたら、──

(圭之助)僕は、お母さん、僕は決してあれを憎んで居るんぢやないんですよ、あれの爲めを思へばこそ──

（牧子）そりやさうだらうとも、それはよく分つてゐます、だけどね、女と云ふ者は一度あゝ云ふ風になると、ハタの者が手を貸してやらないぢや、中々自分で自分の身を救ひ出す事が出來ないんですよ。――なあに、あの子だつてお腹の中ぢやきつと氣が付いてゐるんだけれど、氣が付いた時分にはもうどうする事も出來なくなつて、ついずるずるに引き擦られて行くものなんだから、放つて置くといつ迄立つても救ふ時期は來ないんです。

（圭之助）しかし、私たちは今迄何度も手を貸してやつたぢやありませんか、さうしてその度毎にしくじつて居るんぢやありませんか。

（牧子）けれどもあれはあの通り情に脆い性質で、山田を悪い奴だとは知りつゝ情愛に惹かされて居るんだから、そこを察してやらないぢやいけないと思ふ。

（圭之助）情に脆いにも程があります、あんな、山田のやうな話にも何にもならない男を、假りにも愛して居ると云ふのが、僕には腹が立つんです。それほど情愛があるのなら、なぜ僕等のことを思つてくれないんです。お母様の事や僕の事を、殊にお亡くなりになつたお父様の事を、――

さう云はれて、牧子は言葉なくうつむいてしまう。

（三好）澄子さんは、決して君たちを思つて居ない譯ぢやあるまい。澄子さんは、山田と云ふ男がさう云ふ人間であればあるだけ、猶更それが不憫な爲めに捨てられないのだらうと思ふ。そこが澄子さんのいゝ所なのだ。……

書生下手より登場

（書生）あの、もうお通しゝて宜しうございませうか。

（牧子）（ちよつと狼狽して）あゝ、さうね、――ぢや、まあ何にしても會はなきやならないが、――ねえ圭之助、どんな

話だか知れないが兎に角お前も會つておくれでないか。掛り合ひがないと云つたつて、若しもの事があれば結局ないぢや濟まされないんだし、内の名前が出るやうな事があつたら、やつぱり捨てゝ置く譯にや行かないんだから。

（三好）なあに、圭之助君だつて口では強く云ふやうなものゝ、お腹の中ぢや始終心配して居られるんです。ですからまあ、此の場合何も仰つしやらずに、兎に角三人で會ふ事にいたしませう。又その上でいろ〳〵お考へもありませうから。

（牧子）ほんとに、三好さんには飛んだ御迷惑ですけれど。どうか此の上とも何分お願ひ申します。（書生に向ひ）ぢや直ぐに此れへ通すやうにね。

（書生）は、承知いたしました。

書生退場

（圭之助）三好君、君にはほんたうに濟まないな。

（牧子）今日はあなたが居らしつて下すつたので、どんなに好都合だか分りませんわ。

（三好）僕なんか一向お役には立ちませんが、――でも僕は、斯う申しては何ですけれど、誰よりも一番よく澄子さんの心持ちを理解して居ると思ふんです。澄子さんを今の境遇から救ひ出して上げる、――いや、救ひ出さないまでも、何等かの意味で幸福にして上げる事が出來れば、僕は及ばずながら、最後まで力を惜しまない積りです。それがせめてもの僕の心遣りなんです。

（牧子）それほど迄に思つて下さるのが、分らないなんて、何と云ふ情ない人間なんでせう。

（三好）いゝえ、そんな事はありません、僕の此の心持ちは、澄子さんだつてきつと分つて居て下さる筈です。僕はさ

うだと信じて居ります。

（牧子）あなたのそのお心持ちが、萬分の一でも分つて居るなら、たゞあゝして居るのでせう。いつ迄あの男に喰つ着いて居るのでせう。どうせ刑事が來るくらゐだからロクな事ではないでせうが、あの男はいつか一度は監獄へ打ち込まれるやうな人間ですよ。私はいつそ、さうなつてくれた方が却て都合が好いとさへ思つて居るのです。いくらあれが情に脆くつても、そんな事でもあれば思ひ切りよく別れられるでせうからね。

書生下手より「何卒此方へ」と云ひつつ刑事をつれて來る。三人挨拶すべく立ち上る。

（刑事）（牧子に向ひ極めて慇懃に）や、今日はどうも突然お伺ひいたしまして、飛んだお妨げをいたします。あの、何でございますか、失禮でございますが、奥様でゐらつしやいますか。

（牧子）（高官の夫人らしい品威を保ちつゝ）はい、どうも大變お待たせしまして、

（刑事）いえ、私こそ御無理をお願ひ申しまして、お會ひ下さいまして有り難う存じます。

（牧子）（圭之助を指し）此れは伜の圭之助でございます。

（刑事）はあ、左様で、――初めてお目に懸ります。

（牧子）それからあの、こゝにおいでの方は、圭之助のお友達で、帝大の理科の助教授をして居らつしやる。三好數馬さんと仰つしやるのです。――

刑事と三好とが會釋して居る間に、牧子は紹介の言葉をつゞける、

（牧子）――もう圭之助とは兄弟のやうにして戴いて、私どもの家族同樣に御懇意に願つて居るのですから、どうかお構ひなく、こゝで御用向きを仰つしやつて戴きたいと存じますが。

(刑事)(モヂモヂしながら)はい、あの、實はその——何でございます、——

(牧子)さ、どうぞお掛け下さい、

刑事に椅子をすゝめ、三人も元の席に直る。

(刑事)(腰かけながら)恐れ入ります。では御免蒙ります。——實はその、今日伺ひましたのは、表向きと云ふよりは個人の資格で御事情を承はつて來るやうにと云ふ署長の命令でございまして。それで御邪魔に上つたやうな次第でございますが。——

(牧子)はあ、(靜かに、取り澄ました態度で云ふ)

(刑事)——と申しますのは外でもございませんが、此方樣では、當時本郷の根津に住んで居りまする歌劇俳優の山田禮二と云ふ者を、御承知でゐらつしやいませうか?

(牧子)はい。一應は存じて居ります。

(刑事)(言ひ難くさうに)えゝとそれでその、——甚だ立ち入つた事をお尋ねするやうで、恐縮でございますが、その者と此方樣とはどう云ふ御關係で居らつしやいませう?

(牧子)關係と申しましても、唯今ではその山田と申す者と私共とは、直接には何の關係もないやうになつて居ります。——二年前には出入りを致したこともございますけれど、私どもの家庭に對していろいろ面白くない事などがございまして、それ以來出入りを差し止めましたのですが、——しかしそれには少し込み入つた事情がございますので、御用向きに依つてはお話致さなければならないと存じますが、何かその事に就て、お取り調べの必要でもおありなさるのでございませうか?

（刑事）實は何でございます、その山田と云ふ人間は一體平生の素行などにもいかがはしい點がございますので、かねてから警察の方で目を附けて居りましたのですが、今度詐欺を働きましたので訴へられたのでございます。就きましては、その山田と同棲して居ります山田澄子と云ふ婦人は、何か此方樣の御緣つゞき、――此方樣のお孃樣だと云ふやうな事を、世間で申して居りますので、事實どう云ふ御關係で居らつしやいますか、一應その邊のところをお伺ひ致しましたのでございます。

（牧子）（伏目がちに）それは、たしかに、澄子は私の娘でございます。――

（刑事）はあ、成る程、――さう云ふお話でございますと、此れは是非ともお耳へ入れて置かなければなりませんが、山田が詐欺をした相手と云ふのは或る高利貸でございまして、その男は山田よりも寧ろお孃樣の方を信用して、――何しろ此方樣が御實家だと云ふので、山田に金を貸したのだと申して居ります。

（圭之助）しかし、山田は何と云つたか知りませんが、母にしろ私にしろ、唯今では澄子に對しても山田同樣に、もう緣のないものと認めて居るのです。あれが今更實家の名などを擔ぎ出せる譯はないのです。

（刑事）いや、或はさう云ふ御事情ではなからうかと、お察し致して居りましたのですが、兎に角證書の上ではお孃樣が連帶債務者になつて居られますので、――それも、まあそれだけならば別に差支はございませんやうなものゝ、山田が詐欺を働いたとなりますと、勢ひ連帶者の方へも關係が及んで參るものですから、――

（牧子）（憂惧に堪へぬ顏つきでチラリと圭之助の方を見ながら）では何んでございますか、澄子が山田と一緒になつて、詐欺をしたとでも云ふやうな事が、……

（刑事）いゝえ、決してさう申すのではございません、さうお取りになつては甚だ困るのでございます、勿論お孃樣は御

存知ない事に違ひないのでございますが。……

（圭之助）全體その詐欺と云ふのはどんな事なのです？あの男が詐欺を働くのは、別に珍しくもないんですがね。

（刑事）事實は斯うなのでございます。何でも山田が寶石入りの指環などを三つ四つ持つて參つて、此れは女房——（と云ひかけて急に云ひ直す）お孃樣の物だからと云つて、それをかたに三百圓貸してくれろと云ふやうな話を致しましたので、——先程も申し上げました通り、貸す方では澄子樣のお名前もある事ですし、指環にしても定めし性の確かな物だらうと、ついさう思つたので貸してやつた、ところがその指環は實はお孃樣の物ではないので、仲間うちの女優の物をまあ盗んだも同樣の手段で、持つて來たのだと云ふ事が分りましたのです。尤も、貸した方では金さへ取れれば指環はどうでもよいのでございますが、やり方が如何にも惡辣で、最初から詐欺の目的でやつたものとしか思はれないと云ふので、そのまゝでは濟まされなくなつて參つたのです。

（牧子）（やゝ安心したやうにホッとして）ではその指環は、澄子の物でない事は確かなのでございますね。

（刑事）はい、それは確かでございます。

（圭之助）すると詐欺ばかりぢやないんですね、窃盗もやつた譯なんですね、

（刑事）まあ洗ひ立てればさうなるのでございます。それに盗まれたのも一人ではないので、同じ樂屋に居ります女優たちが、二三人もやられたやうでございますから。——御承知でもございませうが、山田は目下淺草公園の大和劇場へ出演いたして居りますのでな。

（圭之助）さあ、そんな事は一向知りません。山田が俳優になつたと云ふ事は、噂には聞いて居ますけれど、さう云ふ者になつてから以後は一切出入りをしないのですから。—

（刑事）いや、御尤もでございます、何しろあの社會はとてもあなた方が御想像なさるやうなものではないので、一種特別な、亂脈極まつた生活をして居りますのです。人の物も自分の物も見さかひのない連中が揃つて居りまして、嚴密に云へば何處迄が盗んだ物で、何處迄が貰つた物かも分らないやうな場合が多いのでございますが、――殊に山田などは今迄にも度び度びそんな事があつたと見えまして、盗まれた方でも格別氣に留めても居りませんやうですが、取り調べの模樣に依つては、窃盗罪の方も成り立つ事と存じて居ります。

（三好）それで、あなたのお考へでは、若し山田君の犯罪が成立するとなると、澄子さんの方も無事では濟まないと仰つしやるのですね？

（刑事）（三好が山田君と云つたのに對して不審さうにその顔を見ながら）はい、實は私の心配して居りますのは、窃盗よりも詐欺の方なのでございます。事實はさうでないにもせよ、證書の上では山田夫婦が債權者を欺いたと云ふ形式になつて居りますから、……

（三好）どうでせうか、それは何とかして穩便に濟ます方法はないものでせうか？

（刑事）山田の方は前々から注意人物になつて居りますし、いづれ何かの機會には相當の處置を加へようと存じて居りましたところですから、犯罪が明かになりました以上は、穩便に濟ますと云ふ事はむづかしからうと存ぜられます。――實を申しますと、此方のお孃樣が關係して居らつしやいます爲めに、警察の方でも、その點を顧慮いたしまして手控へて居るやうな次第なのでございます。ま、私の想像いたします所では、今度の事は山田一人のやつた事で、澄子樣は何も御存知ない。或は御自分のお名前が證書に載つて居る事さへも御承知がないので、別にお孃樣のお身の上を顧慮する必要はないやうなものでございますが、ただ困つた事には、山田はあれでも兎に角公園では名の知れた俳優でござ

いますし、それに關係者が歌劇の女優だとか、お宅のお孃樣だとか云ふ事になりますと、新聞などがきつと默つては居りませんので、その騷ぎの方がえらいだらうと思ひますのです。署長なども其れを非常に心配して居りまして、さうなると事件は單に一箇の山田のみの問題ではなくなつて來る。何しろお宅のお名前がお名前であるから、橋本家のお孃樣が一歌劇俳優の犯罪に關係して居られると云ふ事になれば、必ずや世間は默つて居まい、定めて何の彼のと無遠慮な批評を加へませうし、つまりはまあ、一つの社會問題にしてしまはなければ收まらないでございませうから、影響する所が極めて多きい。——と云ふやうな考へで居りますので、山田を檢擧いたすにしましても、成るべくなら御當家のお名前を出さずに濟ませたいと云ふ方針なのでございます。これで、何かさう云ふ適當な方法でもございますなら、此方樣の御意向をも篤と伺ひました上で、私の方でも職務と云ふ事を離れまして、出來るだけの手段を講じて見たいと存じますのでございますが、……

(牧子)有り難う存じます。段々とのお話で御好意はよく分りましてございます。私といたしましても、御心配に與かる迄もなく、隨分と今迄にもあれの爲めには苦勞を致しましたのですが、——打ち明けて申しますと家の恥になる事ではあり、私の口からは申しづらいやうな事ばかりで、實はもう手を燒いて居りますのでございます。

(刑事)……で、此れはまあ、署長一箇の意見と致しまして、よく御事情を承はつて來るやうにと云ふ申付けでございますが、此方樣では、お孃樣と山田との關係を、どう云ふ風にお考へなすつて居らつしやいませうか？山田がさう云ふ風では定めしお孃樣としましても、表向き御當家とは絶縁の形になつておいでの事と存じますが、しかし將來とも、お孃樣をあのまゝにしてお置きになるお考へでございませうか？さしあたつて山田が法律上の罪人となりました場合に、御當家として何等かの處置をお取りになる、——お孃樣の立ち場を顧慮してお上げになる、——と云ふやうなお考へは

ございますまいか？斯う申しては何でございますけれど、たとへ絶縁したとは仰つしやいましても、世間では中々さうは思ひませんし、その邊の所が餘程むづかしからうと存じますが。

（牧子）それはもう、何と申しましてもあれは私どもの娘でございますから、どんな場合にも絶對に係り合ひがないと云ふ事は、決して申せませんのですが、――（さう云て訴へるやうに圭之助を見る）

（圭之助）母にしろ、私にしろ、又此處に居られる三好君にしろ、澄子の問題に就いては始終頭を惱まして居るのです。正直のところ、私たちは誰しもあれをあのまゝに放つて置いていゝとは思つて居ないので、それでは第一當人の爲めにもなりませんし、亡くなつた父に對しても濟まないと云ふ事は、よく分つて居るのです。しかし、肝心な澄子自身の心持ちが其處へ動いて來なければ、當方から進んでどうすると云ふ事も、最早や今日では事情が許さなくなつて居るので、ただ可哀さうだからと云つて、此の際不徹底な愛情を示したりするのは宜しくない、なまじな事をすれば却つて當人の爲めにならないと、まあさう云ふ考へで居るのです。要するに私たちは、澄子が自分で過ちを悟つてくれて、山田と手を切つて來ない限りは、絶縁の狀態を續けるよりは外に仕方がないと思つて居ります。

（刑事）いや、それはもうさう仰つしやるのは御尤もで、何にいたせ御本人のお心持ちが大切な事は申す迄もございませんが、しかしそれにしましても、一度お會ひになつて、警察の方からも此れ此れの話があつたと云ふ事を仰つしやつて下さいまして、御本人のお考へを篤と確かめて御覽になる、と云ふやうな譯には參りませんでせうか。――或は何でございます、甚だ差し出がましうはございますが、私が此方樣の御意見を伺ひまして、御當家のお使ひ――と云ふ名目でなくとも。それとなくお目に懸つて見ても宜しいかと存じますが。

（牧子）いゑ、それはあの、――それ程にして頂かなくとも、――（圭之助に氣がねしながら）さう云ふお話でございます

なら、今迄とは事情も違つて居りますし、當人としても多少は考へるでございませうから、私から聞いて見ると云ふ道も、ない事はなからうかと存じます。實はあれも、私どもへ參れた義理ではないのでございますが、矢張り此の頃は心細いこともあると見えまして、私にだけは時々こつそりと、會ひに參つたり致しますものですから、……

(刑事)成る程、さう願へればそれに越した事はございません。此れはまあ、私から申し上げずとも御承知の事と存じますが、あの山田と云ふ人間は實際一と通りや二た通りの者ではないので、所轄署の方でもつくづく呆れて居るのでございます。俳優と申しましても始終舞臺へ出て居る風でもございませんし、云へば浮浪人も同樣で、此れ迄にも眼に餘る事がございましたので、一二度警察へ引つ張つて參りましたが、私共の前へ出ますとそれはそれは心得たもので——困つて來ると空涙を出して泣いて見せたり、さも哀れつぽさうにいろんな芝居をやつて見せまして、その圖々しい事と申したら、全く手が附けられませんのです。惡い事をする人間にもいろいろございますが、私共の經驗から申しますとまああんなのが本當の犯罪的性質とでも申しませうか、背徳狂などゝ云ふのはつまりあゝ云ふ人間のことで、生れつきもございませうがあゝなりますともう決して直るものではございません。外樣なら格別、御當家のお孃樣があゝ云ふ者の所へ行つて居らつしやいますのは、全く御名譽にも係はる事で、今度のやうな事件がございません迄も、是非とも何とかなさいました方が宜しいかと存じますのです。

(三好)(牧子の面目を取り繕ふ心持ちで)ですが、人間と云ふものは實に分らんものですね、まさか山田君だつて、最初はそんな風でもなかつたんですけれど、……

(牧子)ほんたうに、まだあの男が音樂學校に居りました時分には、將來有望な聲樂家だと云ふやうな噂でございまして、それに何か、學費に差し支へて居るとか申しましたので、私共では主人を始め皆が音樂好きなものですから、及ば

ずながら面倒を見てやつて居りましたのです。まあそんな縁故から出入りを致しますうちに、あゝ云ふ譯になりましたのでございますが、唯今もお話の通り、あれは口先のうまい男でございますし、一方は何と申しましてもまだ子供でございましたので、藝術家だとか天才だとか云ひますと、つい虚名に惑はされまして、身を誤まつてしまつたのでございます。全體私どもは最初から不贊成で、二人の仲を認めては居りませんのでしたが、餘り干渉し過ぎまして、却つて意地になられるよりはと、放つて置きましたのが悪かつたのでございませう。しかし、此れはまあ、私の慾目かは存じませんが、あれも近頃はいくらか考へても居ります様子で、内々山田には愛憎を盡かして居りながら、唯もう、前からの行き掛り上、意地を張つて居るのぢやないかと思はれるのでございます。

（刑事）お嬢様は此方へおいでになりまして、どう云ふお話をなさいますか知れませんが、――實は私の方でいろいろ取り調べました所では、何とも早や申しやうのない亂脈な、ふしだらな暮らしをして居りますので、あゝ云ふ家庭にお嬢様などが、とても一日だつて、御辛抱なされる筈のものではないと存じます。一々明らさまに申上げたら嘸かしお驚きなさいませうが、以前は兎に角、此の頃の塩梅では山田はお嬢様に對して、微塵も愛情などを持つて居る様子はございません。氣に入らないと打つたり蹴たり、随分手荒な事を致すやうでもございますし、甚しきは情婦を家へ引き擦り込んで、お嬢様を下女同様に追ひ使つて居る、――などと云ふ噂もございますくらゐで、‥‥

刑事、餘り云ひ過ぎたのに心付いて言葉を控へる。敬子は口惜しさうに涙ぐんで、うつむいてしまふ。圭之助は腹立たしげにむつとして居る。

（三好）（暗い眉を一層曇らせながら）私たちも、大方そんな事ではなからうかと想像しては居たのですが、でもまさかそれ程とは、――

(刑事)さう思し召すのも御無理はございません、しかし私は、決して好い加減な事を申し上げて居るのではないので事實さう云ふ有様なのでございます。――

(圭之助)(憤激の語氣にて牧子と三好とに當てつけるやうに)いや、恐らくは事實でせう、そのくらゐな事は有りかねないのですから、――ですが、それ程にされても眼が覺めなけりや、もうあの女にも望みはないと思はなけりやなりません。そこまで墮落すればあれだつて山田と同じ事です、もう人間もおしまひですよ。

(三好)いや、おしまひではない、ほんとうに今の内だよ、……

その言葉を聞くと、牧子はほつとしたやうに顏を上げる。

(刑事)全く、仰つしやる通りなので、お孃樣をお救ひなさるなら、今がその時機でございませう。今のうちに何とかなさいませんと、それこそ本當に意地になつて、どう云ふ風に墮落なさるかも分りませんし、得て取り返しの附かない事になりがちなものでございますから、――さう云ふ例はいくらもあることでございますから、差し出がましうはございますが、よくお考へなさいました方が宜しいかと存ぜられます。――警察の方でもそれを願つて居りますので、その方が都合が好い、と、申すのも變でございますが、實際都合が宜しいので、さうして頂きませんと、山田を捕まへる譯に參りませんものですから、困つて居るのでございます。あゝ云ふ人間は、一日も早く處分を致しませんければ社會の爲になりませんので、お孃樣との御緣が切れ次第、早速それだけの手筈をするやうに極めてあるのでございます。

(三好)しかし、緣を切つたにしたところで、連帶になつて居るとか云ふ證文の方はどうなりませう?その方の片を附けないと、矢張り澄子さんも同罪と云ふ事は免れなくはないでせうか?

(刑事)はい、それはさう云ふ譯でございます、――就きましては、まあ私の方の考へでは、いろいろ御事情もござい

ませうが、何に致せお孃樣を此方へお引き取り下さいまして、手切れ金と云ふやうな意味で、その證文を買ひ取つて頂きたいのでございます。さう願へれば貸した方でも別に文句はございませんから、山田を詐欺と云ふ事でなく、竊盜の方で檢擧する事が出來ますのです。——要するに、お孃樣に御迷惑がかゝりませんやうに、山田一人を捕まへてしまへば宜しいので、罪名などはどうにでもなるのでございますから。

（牧子）では、その證文さへ取つてしまひましたら、家の名前が出るやうな事はございますまいか。

（刑事）それはもう、誓つてさう云ふ事はないやうに致します。單に竊盜と云ふ事になりましたら、お孃樣とは何の關係もございませんし、殊に山田と手をお切りになれば、尙更の事でございますから。

（三好）ですが、さうなると何だか少し、山田君に氣の毒のやうな氣もしますね。

（刑事）なあに、そんな事はございません。お氣の毒なのはお孃樣で、山田に少しでも哀れみをかけてやる所はないのでございます。——それで、此方樣の方さへ宜しければ、今日にもあれを取り押へまして拘留いたして置きませんと、——何分どうも、家はありながら始終居所の不定な男で、始末に困るのでございます。——まあ、さう云ふ譯でございますから、どうかくれぐれも、私共の微意のある所をお察し下さいまして、何とか一つ、此の場合無理にもお孃樣を山田の手からお引き放し下さいますやうに、至急お計らひを願ひたいのでございます。

（牧子）いろいろ御注意を頂きまして、お恥かしい次第でございますが、しかし、私の一存でも計らひかねますし、後程圭之助ともよく相談を致しまして、折角の御好意に報いますやうに。——出來ます事ならば致したいと存じます。

（刑事）はあ、どうか一つさう云ふ事に、——

左の扉をノックして書生入り來る。

（書生）（牧子を見て）あの、誠に恐れ入りますが、——

（牧子）何？何か用事？

（書生）はい、恐れ入りますが、ちよつと奥様に、——

（牧子）（何か感づいたらしく、うろたへ氣味で）あ、さう、——（刑事に）あの、ちよつと失禮を、——

牧子席を立ち、そはそはした様子で、書生と共に扉の外へ去る。三好意味ありげにそれを見送る。

（圭之助）（そ知らぬ風を裝ひつゝ刑事に向ひ）どうもほんたうに、下らん事に御手數をかけて何とも恐縮です。

（刑事）いえ、どう致しまして、——ただ私も、お嬢様と此方様との御關係が圓滿な解決を告げますれば、蔭ながら御心配申上げた効がございますので、只管それを希望いたして居るのでございます。

（圭之助）いや、御厚意のある所は充分に諒解しました。御親切に對しては深く感謝いたします。私としましては、道理上間違つた事を赦す譯には行きませんが、今回は場合が場合故、或は當人も——よく納得が行くやうに懇々と云ひ聞かせましたら、さういつ迄も意地を張り徹しはしないでせうし、又われわれの義務としても出來るだけの事は致して見ませう。母も勿論、その點に就いては異議のない事と存じます。——

此の攻辭の間に、牧子再び入り來り、もとの席へ戻つてぢつと考へて居たが、此の時しづかに口を挾む。

（牧子）あの、何でございます、實は唯今澄子が參りましてございます。

三好、輕い驚きの色を示し、「扨は」と云ふ顏つきで牧子を見る。

（刑事）お嬢様が？——

（牧子）はい、何か私に、折入つて話があるとか申しまして。

—(そこぱれす[illegible])—

(刑事)あゝ左様でございますか、それはちやうど好い所で。

(牧子)或は何か、唯今お話しの事件に就いて當人にも考へがあつて參つたのぢやあるまいかと存じますが、まあ何に致せ好い機會でございますから、私からよく、御趣意が徹底いたしますやうに、申し聞かせますでございます。

(刑事)どうか何分、その邊のところを宜しく御配慮願ひたう存じます。——では私は、却て御邪魔でございませうから此れで失禮をいたします。突然伺ひまして出過ぎた事をいろいろ申し上げまして、どうも甚だ——

(牧子)どう致しまして。——斯う云ふ事は外様から注意して頂きませんと、自分たちでは氣が付かない譯でもございませんが、まさかそれ程とは存じませんものですから、つい取り返しのつかない事にもなりますので、御遠慮なく仰つて頂きました方がよいのでございます。ほんたうに、お忙しい中をわざわざお出で下さいまして、何ともお禮の申しやうもございません。どうか、署長の方へも、くれぐれも宜しく仰つしやつて下さいまし。

(刑事)はい、申し傳へますでございます。

(牧子)本人に會ひました結果、まあ何と申しますか、いづれその模様に依つてはもう一度御盡力を仰がねばならないかと存じますが、此の後とも宜しくお願ひ申します。

(刑事)どうぞ、何時たりとも御用がございましたら、署の方へ電話をお掛け下さいますやうに。——此れから私は、どうせ序でございますから根津の方へ廻りまして、山田が立ち戻つて居りますかどうか、突き止めて見ようかと存じますので、お孃様のお留守の方が、さう云ふ事には都合が宜しうございますから。

(牧子)ほんたうに、いろいろお骨折りで御苦勞様でございます。

(刑事)(圭之助と三好に)では御免下さいまし、大變失禮をいたしました。

（圭之助）や、私の方こそ、いろいろお世話様で、有り難う存じました。

（三好）此の後とも、どうか何分お願ひします。——

刑事扉の方へ行く。三人送つて出ようとする。

（刑事）いゝえ、それでは恐れ入ります、もう何卒お構ひ下さいませんで、——どうぞ、どうぞ、——

（牧子）（三好と圭之助に目くばせする）では私がお見送りするから、——さうして、澄子にちよつと會つて見ますから、——

（圭之助）ぢや、さう願ひませう。（刑事に）甚だ勝手ですが、此處で御免蒙ります。

（刑事）何卒もうお構ひなく、——

刑事、圭之助と三好に挨拶し、牧子に送られて出る。圭之助はその後で扉をピッタリと締め、三好と話しながら椅子へ戻つて來る。

（三好）澄子さんは始終訪ねて來られるのかね、

（圭之助）始終と云ふ程でもないが、此の頃はちよいちよい來るらしいんだ。いつも裏口からそうつとやつて來て、離れで母と話をして居る。——僕は成るたけ知らない振りをしてるんだがね。

（三好）昔とは大分様子が變つただらうか？

（圭之助）變つたさうだよ、僕も久しく會はないけれど、母の話では非常にやつれて居るさうだよ。

（三好）さうだらうね、刑事の話がほんたうだとすると、隨分辛い事がありさうだから、——

三好、暗然たる様子で頭垂れる。兩人暫く無言。

（圭之助）ところで君、僕は君の考へを聞きたいんだが、まあどうしたらいゝと思ふ？

(三好)どうしたらつて、君やマーザーの考へはどうかね。

(圭之助)いや、僕等よりは君の考へだ。君が第一だ。僕は正直な事を云ふと、もう澄子には兄弟として何の愛著も感じて居ない、さつきも云つた通り、僕はつくづくあの女に愛憎を盡かしてしまつたんだから。そりや、刑事の話を聞けば可哀さうだとは思ふけれども、しかし一方から云へば、そんなにされてまで山田に喰着いて居たと云ふ事は、既にそれだけでも救し難くはないだらうか?もうあの女は、今迄に立派に墮落しちまつたのだ。たとへ今日になつて後悔したところで、一度汚れたものは拭はれつこないのだ。母にしろ僕にしろ、警察からあゝ云はれれば、一應澄子を引き取るだけの義務はあるだらう、だがそれ以上の事をしてやる義務は、少くとも澄子に對しては持つて居ないのだ。僕が此の後少しでもあれの爲めに盡してやる事があるとすれば、それは要するに澄子の爲めではなく、君の爲めだ。君の爲めだと思はなければもうほんたうに、あんな腐つた人間を相手にしようとは思つちや居ない。……ねえ、君、君は一體どう思うかね?君は今でも、あゝ云ふ話を聞いた後でも、やはり澄子を愛して居るのかね?

僕は此の場合、澄子の兄と云ふよりも君の友人として、心から忠告したいんだが、あんな女にさういつ迄も未練をかけずに、いつそ男らしくあきらめてしまつちやどうかね?たとへ澄子が心を入れ換へて君の所へ頼つて來るにしたところで、それは決して君の將來を幸福にする所以でない。あの女はもう、君の妻になる資格はないんだよ。そんな事は僕の口から勸められた義理でもないし、君にしても男を下げると思ふんだがね、……

(三好)有り難う、——君の御忠告に對しては僕は有り難うと云ふより外はない。しかし、君に男らしくないと云つて笑はれるかも知れないが、僕は今でも、矢張り澄子さんをあきらめる事が出來ないのだ。僕は、君とは反對に、刑事の話を聞いてから猶更さう云ふ心持ちが募つて來て居る。——勿論斯う云つたからとて、僕は直ぐにも澄子さんが山田

君と別れてくれて、僕の所へ來てくれるものと豫期して居る譯ではない。僕はそんな事よりも、さう云ふ居待の中に居て、ぢつとそれを堪へ忍んで居る澄子さんを考へると、それがいかにも澄子さんらしく、いぢらしい氣がして、一層思ひ切れなくなるのだ。

（圭之助）けれども君、若しあの女が君の半分も君を思つて居るとしたら、さう迫されて未だに山田を捨てないで居るのは、「いぢらしい」と云つて感心すべき事だらうか？君に云はせれば「情に脆いからだ」と云ふが、情に脆いと云ふ事は、少しもあの女をジヤステイフアイする理由にはなれないぢやないか。山田と別れないくらゐなら、なぜキツパリと君を思ひ切らないのだ。「心では君を忘れずに居る」と云つたつて、そんな事が何になるのだ。のみならず、それは君に對しても山田に對しても惡い事だ。あの女が墮落したのは山田ばかりの罪ではない、あの女自身にもそれだけの缺點があるんだと僕はつくづくさう思ふよ。

（三好）それや、君の云ふ事にも一理はある、理窟から云へばさうかも知れない、しかし僕の此の感情はもともと理窟ではないんだからね。――君に云はせれば、さう云ふ弱い人間は駄目だから、墮落するだけ墮落しろと云ふのだらうが、僕はその弱さに惹きつけられるのだ。君が淺ましいと云ふ所に僕は澄子さんの美しさや優しさを見るのだ。ほんとうに若し、澄子さんがもう少し情の強い人だつたら、僕もこんなに迄思ひ迷はずにも濟んだかと思ふ。それを思ふと、僕は澄子さんのあの優しさがつくづく恨めしいやうな氣がする。なまじ僕の事なんか考へないで、きれいさつぱりとあきらめてくれたら僕も今頃は疾うに忘れて居られたらうし、澄子さんだつてそんなに迄荒んでしまう事はなかつただらう。山田君も捨てられないが僕の事も忘れられない、――その矛盾したところに澄子さんの性格があるのだ。僕にはその心持ちがよく分つて居る、それが分つて居る爲めに僕もどうしても、思ひ切る事が出來ずに居るのだ。君の云ふやうに、

山田君も悪いが澄子さんも悪いと云ふなら、僕だつて悪くないことはない。或は悪い第一は僕かも知れない。僕と云ふものがあればこそ、澄子さんも思ひ切つて山田君を愛する心にもなれず、ぐづぐづな生活をして居るんだとすれば、その責任は僕にあるのだ。僕は君とは立ち場が違ふのだ、僕は澄子さんの堕落を聞いても、自分を責める理由こそあれ澄子さんを責める氣持ちにはなれないのだ。

(圭之助)それなら僕は君に尋ねる、——君がそれほど自分の責任を感じて居るなら、なぜもう少し積極的に出てくれなかつたのだ？澄子があんなに堕落するのを、なぜ今日まで放つて置いたのだ？なぜもう少しキツパリした態度に出て、自ら進んで、君がそれ程愛する女を山田の手から奪ひ取らうとしなかつたのだ？

(三好)でもさうすれば、僕の頭の中にある澄子さんと云ふ人の、美しいイリユウジヨンは壊れてしまふ。——今も云ふやうに、僕は澄子さんのいぢらしい所が好きなのだ、情に脆い氣質がいゝのだ。僕は何處までも其の氣質を尊重したい。澄子さんが山田君を捨てないで居るのは、やはりさう云ふ優しい氣質の現はれなんだから、それを僕としてむざむざ打ち壊す事は出來ない。かりにも家庭の反對を排して三年の間連れ添つた男を、——たとへそれがどんなに悪人だからと云つて、さう譯もなく振り切つてしまへるやうなら、そんな人なら。もう澄子さんは僕の戀人ではなくなつてしまふ。

(圭之助)けれども君、それぢやいつ迄経つたつて君も澄子も無意味な苦しみを續けるばかりだ。そんな感情は、まるで中學生のセンチメンタリズムだ。僕はさう云ふ態度は、人生を弄ぶものだと思ふ。戀愛ばかりでなく、生活と云ふものに對して、眞面目な勇氣がないのだと思ふ。

(三好)だから僕だつて僕が悪いと云つてるぢやないか。——悪い事はよく分つて居るのだけれども、……しかし僕に

これ以上どうする事が出來るだらう？假りに勇氣があるとしても、若しその勇氣を奮ひ起せば、その時既に僕の戀愛は破れてしまふ、さうだとしたら僕は一體どうすればいゝ？何か君にいゝ考へでもあるのなら何卒敎へてくれ給へ。僕は澄子さんを愛するればこそ、默つてぢつと澄子さんを山田君の手に委ねて居るのだ。さうしなければ僕の愛は成り立たないのだ。僕がさう云ふ苦しい愛に陷つたのは、或は僕の身の破滅かも知れないけれどもそれもどうも運命だから仕方がない。ほんたうに僕は相手が惡かつたんだよ。相手が澄子さんでなければ、もつとシツカりした强い女なら、僕も斯うまで女々しい男にはならなかつたんだらうけれど、――

(圭之助)ぢや、君も澄子の感化を受けたと云ふ譯だね。

(三好)感化を受けたのか、或はもともとさう云ふ性質があつたので、それで澄子さんが好きになつたのか、まあ孰方だか分らないが、兎に角僕の心持ちは誰よりもよく澄子さんが理解してゐてくれると思ふ。澄子さんは今、僕の側には居ないけれども、しかし離れて居る爲めに猶更さう云ふ理解を通して、二人の魂は何處かで觸れ合つて居るやうな氣がする。離れて居ると云ふ事が、一層お互ひをよく理解させ、お互ひの愛を深めて居る。――それは成る程、煎じ詰めれば一種のセンチメンタリズムとも云はれようが、斯う云ふ特殊な戀愛もあると云ふ事を、君は認めてはくれないだらうか。僕は決して、君の云ふやうに人生を弄んで居るのぢやない。惡いとすれば僕の人生全體が惡いのだ、僕としては此れより外にやり方はないんだから。

(圭之助)いや、つい話が議論に外れてしまつたが、僕は今君を掴まへて戀愛論を鬪はしたつて仕樣がない。そんな事よりは實際問題として、今後に處する君の意向を聞きたいのだ。今日の話の模樣に依つては、澄子は或は、當人の欲すると否とに論なく此の家へ引き取るやうになるかも知れない。若しさうなつたら、――さつきも云ふ通り僕の口からは

決して勸められないが、君は澄子を貰つてくれるつもりだらうか？

(三好)そりや、貰いたいことは云ふ迄もない。けれども僕はまだ當人に會はないうちから、此處でハッキリした事は云ひたくないのだ。正直を云ふと、僕もいつかは、斯うして離れて居る間に二人の愛がだんだん深められて行つて、遂には離れて居られないほど熱して來る時がありはしないかと、それを空頼みにはして居たんだが、……若し澄子さんが此の家へ引き取られて、僕に會ひたいとでも云ふやうだつたら、兎も角會はしてくれ給へな。會つて見た上で二人の心が自然にそこまで動いて來たら、二人にそれだけの勇氣が出たら、僕もどんなに嬉しいか知れない。さうなる事を祈つては居るが、若し不幸にして澄子さんも山田君の事を思ひ切れないし、僕にそれを動かすだけの力がなかつたら、僕は依然として今の狀態を續けるばかりだ。君に笑はれても何でも、何處までも女々しく、思ひ切り惡く生きるばかりだ。

(圭之助)ぢや、澄子の方で進んで會はうと云はなければ、君の方から會はうとはしないのだね。

(三好)あゝ、――今此處に來て居るんなら會ひたいやうな氣もするけれど、向ふに會ふ意志がないやうだつたら、會つたところで仕樣がないもの。――それに、僕の方から云ひ出すのは澄子さんを陷れるやうな風にもなるし、山田君にも惡いしするから、――

牧子、左の扉より入り來る。一人は急に會話を止めて、彼女の樣子を見守る。

(牧子)(やゝ愁眉を開いたやうな顏つきでテーブルに進み、椅子に腰かけ、一と先づ安心したらしい溜息を洩らしながら)やつぱりね、私の考へた通りだつたよ、――

兩人無言、猶も彼女の樣子を見守る。

(牧子)――會つていろいろ話を聞いて見ましたが、さつき刑事の云つた事はみんな本當だと見えるね、澄子もそれまで

まあ今度はよくよくだと思つたのか、今朝も山田と大分激しい云ひ合ひをして、何でも體中を二三箇所とか打たれたさうだが、——そんな事だつて、今までついぞ話したことなんぞなかつたんだけれど、今日は珍らしく何も彼も打ち明けてね、で、まあ、私に會ひたくなつたもんだから、こつそり內を拔け出して來たと云ふ話なのさ。

（圭之助）（念を押すやうな口調で）で？——どうしたと云ふのです？

（牧子）わたしもいつもと違ふから、「さうお前のやうに、ただ喧嘩をしたから逃げて來たとか、會ひたくなつたから會ひに來たとか云ふだけの事ぢや何にもならない。それぢやいつだつて同じ事だし、そんな事ばかし繰り返して居るんぢや、私の方でも眞面目で聞く氣にはなれないから、お前にしつかりした考へがあつて來るのでなけりや、もう會ひに來てくれないがいゝ」つて、よくさう云つてやつたんですよ。——するとどうしたのか急にほろほろと泣き出したりしてね、刑事の來た事なんかも話してやらうかと思つて居ると、それを當人の方から云ひ出して、實はそんな事があるので、自分も今度と云ふ今度は考へて居る。自分も今日までは、山田の爲めに盡すだけの事は盡して來た、もともとあゝ云ふ行き掛りで一緒になつた事ではあるし、世間に對する意地もあるから、今更らちへ歸れた義理ぢやないと思つて、隨分出來るだけの我慢はした。山田が自分を愛して居ないと云ふ事も疾うから分つて居たんだけれど、誰に訴へる術もないので、とても口には云へないやうな侮辱を受けながら、ぢつと今日までは堪へて居た。しかし、山田に愛がないと云ふ事は——外の事なら兎に角として、それだけはどうも我慢がしかねる。愛してさへくれるなら、惡人であつても構はないし、監獄へ入れられようとどうしようと、自分は何處までも喰着いて行く。場合に依つたら自分も一緒に墮落してもいゝ。けれど愛されても居ない上に、犬猫同樣に扱はれて、たまに歸つて來ると外の女を連れて來ては、その女の居る前で自分を打つたり蹴たりする。——それもいゝが、此の頃では自分を玉に使つていろんな惡い事を企らんで、いやだ

と云へば威嚇かしたり賺かしたり、それでも承知しないと散々責め苛んでヒドイ目に遇はせる。「私は自分が罪人になるのは仕方がないとして、その爲めにお亡くなりになつたお父樣や、お母樣やお兄樣に御迷惑を掛けるのが、死んでも申譯がないやうな氣がして、——」と、まあさう云つて話すのだよ。

(圭之助)今になつてそんな事を云へた譯でもないと思ひますが、——しかし、さう云ふ風だと實際は刑事の話よりもつと非道い事があるのかも知れませんね。あれでも刑事はいくらか遠慮して居たのかも知れない。何かよつぽど見るに見かねた事でもなけりや、あゝして態々やつて來る筈はないでせうから。

(牧子)そりや、澄子にしても泣いて私に話すくらゐだから、——あの子があゝ云つて來るくらゐだから、外にもいろいろ云ふに云はれない譯があるに違ひないのさ。

(圭之助)それで、ただそれだけの話をしに來たと云ふんですか。

(牧子)ま、最初の當人の考へでは、一應話を聞いて貰つて、私の方で何と云ふか、——此方の出樣一つで自分の腹をきめる積りで居たらしいんです。あれとしてはお腹の中ぢやいくら後悔して居たにしろ、今更あまり勝手な事も云へないと思つて居るだらうし、——「お母樣やお兄樣には、今まで大さう御心配をかけて申譯がございません」と云つて、今度始めて我を折つて詫まつては居るのだけれど、それ以上のことは云ひ出さないのさ。それでまあ、さう云ふ話なら實は私の方も此れ此れの譯で、お前の最後の考へを聞きたいと思つて居たんだから、此の後どうする積りなのか云つて御覽と云ふとね、「もう山田の所へは歸らない積りです」つて、きつぱりとさう云ふんだよ。自分はさんざ我が儘を通して來たんだから、お母樣やお兄樣が相手にして下さらないでも仕方がないし、合はせる顏がないやうな氣もするから、此の先どうするかまだ極めては居ないけれど、たとへ自分は獨りになつてももう決して山田の所へは歸らない積り

だ。もう二度と再び山田には會ふまいと思つて、出て來る時に置き手紙を書いて來たんだつて、さうまあ當人は云ふのだけれど、…。

（圭之助）ですが、その决心が本當だとしたら、なぜ今までにそこまで考へなかつたのか、それが不思議だと思ひますがね。急にそんな事を云ひ出したつて、又ぐづぐづになつてしまふんぢやないでせうか。

（牧子）當人に云はせると、もう今迄にも幾度となく决心はしたんださうだが、山田はほんたうに得手勝手な卑屈な男で、不斷は澄子をイヂメてばかり居る癖に、少しでもそんな素振りが見えるとガラリと態度を變へて、どうか勘忍してくれろと云つて泣いて頼まれるもんだから、ついその儘になつてしまつたんださうだがね。澄子にしたつて、そんなにされゝば矢つぱりいくらか愛情があるのかとも思つて、情に引かされて居たんだけれど、もう今度こそは欺されない。つくづく山田に誠意のないのが分つたと云つて居るのさ。今までは假令へいぢめられても何でも、山田を捨てるのは道でないと思つて居た。しかし此の頃の様子では山田は自分が居る爲めに猶更惡くなるやうだし、結局自分も山田の惡事に加擔しなければならなくなる。もうさうなつては一緒に居るのは善くない事だ。山田の爲めにも自分の爲めにも、决して正しい道でない事が分つたと、云つて居るのさ。そんな譯で今度は餘程事情も違ふし、自分でもよくよく考へたからこそ、决心したんだと思ふんだがね。

（圭之助）お母様は、それで何とお仰つしやつたんです？、

（牧子）私にしても、遅蒔きながら當人が其處に氣が付いてくれたのは何よりだと思つて、お前がほんたうに眼が醒めたのなら、私の方にもいろいろ考へた事があるのだけれど、私の一存では何とも云はれないし、ちやうど三好さんもおいでになつて相談して居る所だからつて、待たしてあるんです。

(圭之助) 三好君が居る事をお仰つしやんたんですか？

(牧子) えゝ——云つては悪かつたか知ら？——私もどうかとは思つたけれど、でも聞かれたもんだから、——

(圭之助) 何と云つて？

(牧子) いゝえね、實はお前の事に就いて、今もみんなで相談して居る所だと云つたら、誰方が居らつしやるんですつて聞くもんだから、——

(圭之助) 三好君の話が出たのは、ただそれだけですか？

(牧子) (云ひにくさうに)三好さんは、此の頃も始終いらつしやるんですかとか、どうして居らつしやいませうとか、——話のついでだもんだからそんな噂が出て、——いつも大變お前の事を心配して居らつしやる、有り難いと思はなければいけないつてさう云つてやりましたら、——(三好に向ひ)私に會つて下さいませうかつて申して居りますのですが、………

(三好) 會ひませう、……どうか會はして下さい、…………(圭之助に) ねえ、會つてもいゝだらう。

(圭之助) 君に會はしてくれろなどと隨分勝手だとは思ふけれど、君が會つてくれると云ふなら、——誰が會ふよりも君が會ふのが、澄子の心持ちを知る上には一番都合がいゝのだから、君の御好意に甘へるとしよう。

(三好) いや、好意と思はれては僕が困る、僕は誰の爲めよりも自分の爲めに會ひたいのだから。——出過ぎた事を云ふやうだけれど、若しお差支へがなかつたら、澄子さんのお身の上に就いては、どうか暫く、一切を僕に委しては貰へまいか。いろいろ君の御忠告もあつたけれど、僕の澄子さんに對する考へは今も精しく話した通りだし、澄子さんの方はどうであるにしろ、僕の心持ちは永久に變らない積りだから、どうか僕の爲めを思つて、一任しては貰へないだ

らうか。若し承知して頂けるなら、僕と澄子さんと、先づ二人だけで會つて見たいと思ふんだけれど、………

(圭之助) 君がさうまで云つてくれるのを、僕は何とも云ひやうはないさ。君に云はせれば君自身の爲めかも知れないが、君の力で救へるものなら、何卒澄子を昔の澄子にしてやつてくれ給へ。あんな腐つた人間だけれど、君の愛情でどうかなるなら、眞人間にしてやつてくれ給へ。今となれば僕はただ、さう云つてお願ひするばかりだよ。母にしたつて勿論異議はあるまいと思ふ。

(牧子) (感謝の涙を浮かべながら) ほんとうに、あれもあなたに對しては散々失禮ばかりして置きながら、こんな事を申せた譯ではあるまいと存じますけれど、お會ひ下さればまあどんなにか喜ぶでございませう。もう何も彼も、あれの一身に就きましてはあなたにお任せ申しますから、どうなりと宜しいやうに導いてやつて下さいまし。から申しては餘り私の身勝手かは存じませんが、まあ圭之助も申します通り、あれの性質は三好さんが一番よく理解して居て下さいますし、あれもあなたに會ひたいと申すくらゐですから、あんな風でも、いくらかあなたのお心持ちが通つて居るのとも思つて居ります。ほんたうに、今となりましては全くあなたのお情に縋るより外、あれが此の後幸福になれる時はないのでございますから。………

(三好) どう云ふお心持ちで僕に會ひたいと云はれるのか、お目に懸つて見なければ分りませんが、――若しうまく行つて澄子さんを幸福にする事が出來れば、それは同時に僕の幸福にもなるのです。僕こそ澄子さんに救つて貰ひたいのです。此の會見がどうかさう云ふ結果になることを、僕は心から祈られずには居られません。僕はあなた方が、澄子さんを「あんな人間」とか、「墮落した女」とか云ふ風にお仰つしやるのを、何より悲しく思つて居ります。

(牧子) (感激して) そのお言葉を聞きましたら、あれはどんなに感謝いたしますでせう。あなたこそほんたうに、――

母よりも兄よりも澄子を愛して居て下さるのです。それ程に思つて居て下さいますのに、どうして澄子が感じないことがございませう。もうあれも今迄とは違つて居りますから、きつとあなたの御親切を身に泌みてお受けする事と存じます。

（三好）あゝ、どうかさう仰つしやらないで下さい。——萬一此の事がうまく行きませんと後で、一層悲しくなりますから。

（牧子）うまく行かないなんてそんな事がある譯はありません。きつと大丈夫でございます、

（圭之助）三好君、澄子は矢張り君の所へ戻つて來たんだよ、きつとさうだよ、——君もいつものやうでなく、もつと勇氣を持つてくれ給へ。

（牧子）ではあの、此れへ呼んで參りますが、直ぐに會つて下さいませうか？

（三好）はあ、

（牧子）私どもは彼方へ行つて居りますから、宜しい時に仰しやつて下さいまし。

（三好）承知しました。

（圭之助）ぢや、萬事君にお賴みするから、——

牧子は下手へ、圭之助は上手へ去る。三好獨りテーブルに凭つて暫く待つて居る。程經て下手のドーアより澄子入り來る。面やつれのせゐか實際の歲よりはずつと更けて、二十六七に見える。地味な、着古るした服裝。たつた今泣いたばかりで眼の周りを腫ればつたくして居る。部屋へ這入ると直ぐに三好と顏を見合はせ、又直ぐに極まり惡さうに面を伏せて、重い足取りでテーブルの傍まで行き三好と差し向ひの場所に、腰を掛けようともしないでしよんぼりと、淋しさうに頭垂れたまゝ立つ。少しの間兩人無言。

（三好）澄子さん、――暫くでしたね、（澄子うなづく）まあ、お掛けになりませんか。――

（澄子）はい。

矢張り下を向いたまゝ、ずるずると引き卸されるやうに腰かける。

（三好）よく僕に會ふと仰つしやつて下さいました、――有り難う。

澄子うなずく、

（三好）今お母様から伺ひましたが、あなたは大さう苦勞をなすつたさうですね、それも僕はあなたからのお手紙で、大凡そ想像しないでもなかつたのですが、返事を差上げては山田君に惡いと思つたものですから、控へて居たのです。どうか惡く思はないで、――

（澄子）いゝえ、――御返辭を頂かうと思つて書いたのぢやないんですもの、――あんな手紙を度び度び差し上げたり何かして申譯がございません。でも私は、ほんたうに、苦しかつたのですから、――

（三好）ですがあなたは、僕の苦しいのが分つて居て下すつたでせうか？

（澄子）はい、それは、――

（三好）分つて居て下すつたんですね？

（澄子）（うなづいで）御返事は頂きませんでしたけれど、母からも御様子を聞いて居りましたし、よく分つて居りました。……分つて居ればこそ、かうして厚かましくお目に懸れるのでございます。

（三好）そのお言葉を僕はうれしく思ひます。此の前お目にかゝつたのは、たしかもう一年も前だつたと思ひますが、僕の心持ちは今もあの時と少しも變つては居ないのですから。さうしてあなたは、――山田君とお別れになるのださう

ですね？

（澄子）はい、――今度わたくし、別れる決心をいたしましたの。

（三好）しかし、山田君がそれを承知するでせうか。

（澄子）するもしないもないと存じます。もう今度こそ私は、何と云つても山田の所へは歸りません。その積りで出て參つたのでございます。

（三好）なぜお別れになるのですか？

（澄子）でも、山田は私を愛して居りませんのですもの。

（三好）けれどあなたは、此の前お目に懸つた時さう仰つしやつて居らつしやいましたね、――夫はつらく當るけれども然し愛情がないのではない、やつぱり何處かに愛情があるのだ。若し山田君に愛がないやうに見えるとすれば、それはあなた御自身の愛が足りないからだ。自分が惡いから夫が惡いので、自分こそ申譯がないやうな氣がする。――

（澄子）それは、あの時は申しました。――山田は私をいぢめますけれど、別れ話を持ち出すと泣いて頼むものですから、やつぱり私を愛して居てくれるのぢやないか。あの人はあゝ云ふ性質なので、心の底には温かい所があるのぢやないか。さう思ふと自分の方に濟まない事があるのだと思つて、どうかして心からあの人を愛するやうになりたいものだと、自分で自分を責めたこともございました。しかしそんな事は、みんな私の思ひ違ひだつたのでございます。山田は私を欺して居たのでございます。

（三好）ではもう山田君には、何の未練もないと仰つしやるんですね？

（澄子）未練なんかございませんわ、――お互ひに愛のない者が、一緒に居たところで何にもなりはいたしませんも

の、――私はただ、山田が普通の人間でないと云ふ事が、世間の誰からも爪彈きをされるやうな惡い人間だと云ふ事が、可哀さうだつたのでございます。母や兄に云はせますと、あんな人でなしと一緒に居るのは馬鹿だと申しますけれど、それが私には猶更氣の毒に思はれて、意地になつたのでございます。

(三好)そりや、あなたのその心持ちは僕にはよく分つて居ました。かう云つては失禮ですけれど、山田君がもう少し何とかなつて居る人だつたら、僕だつて恐らく默つて引込んでは居なかつたでせう。僕がいくら弱い男でも、立派な相手なら戰つても見たでせう。――ほんたうに僕は、相手が山田君だつたので、どうする事も出來なかつた。僕とあなたとがグルになつて、――いやさう云つては語弊があるかも知れませんが、僕が若し、山田君から突然あなたを奪ひ取つてしまつたら、誰が外にあの人を愛してやるでせう。あの人でなしの山田君を、誰が憐れんでやるでせう。僕はあなたと全く同じ氣持ちでした。それがあなたの意志でないやうに僕の意志でもありませんでした。僕はあなたと同じ悲しみの中に生き、同じ苦しみを苦しむのが、眞にあなたを愛する道だと思ひました。――ですがその理窟は、今もあの時と變らなくはないでせうか? あなたはもう、山田君を可哀さうとはお思ひにならないのでせうか?

(澄子)可哀さうなのは山田よりも私でございます、どうか私を可哀さうだと思つて下さいまし、………(泣きさうになるのをぢつと堪へて)私は、………山田に、………それはそれは非道い事を、………犬よりも猫よりも非道い事を、强ひられたのでございます。母には何も申しませんでしたけれど、山田は私に操を賣つて金を儲けろと申すのでございます。……(遂にしくしく泣き出す)私は山田の爲めには打たれたり蹴られたりいたしました、一緒に詐僞を働けの、にせ手紙を書けの何の、彼のと脅迫されました、でも今までは辛抱して居りましたけれど、そんな、操を賣れなどゝ云ふ、そんな事まで云はれたりして辛抱する理由が何處にありませう! 私は山田に侮辱されたのでございます。あの人に私を

妻とは愚か人間とも思つちや居ないのでございます。………（遂にテーブルに突俯す）………數馬さん、何卒私を可哀さうだと思つて下さいまし、私は口惜しうございます、………あなたより外にこんな話を聞いて下さる方はないのでございます。………

（三好）（背を撫でてやりながら強ひて冷靜に）山田君はそんな恐ろしい人だつたんですか、――

（澄子）私だつて、まさかそれ程とは思つて居りませんでした、――そりや私の方にだつて惡い事はございますけれど、……心から山田を愛してやらなかつたのは私の罪かも知れませんけれど、でも私は最後のものを取られるまで我慢したのでございます。……山田を愛するのが道だと思つて、愛してやらなければならないと思つて、あなたの心持ちだつて知らない事はなかつたのに、それを捨てゝも山田の爲めに盡してやりました。だのに山田は少しも私の心持ちを酌んでくれないのでございます、たとへ私が惡かつたにしろ、山田の方がその十倍も二十倍も惡いのでございます。……もう私の愛の力ではとても山田を救ふことは出來ません、私こそ救つて貰はなけりやなりません、私は弱い者なのでございます、人を憐れむ餘裕はないのでございます、それでも私は山田を捨てゝは惡いのでございませうか？……數馬さん、どうぞ私を憐れんで下さいまし、私の取るべき道を仰つてやつて下さいまし、……

（三好）僕があなたに、その道を云へと仰しやるのですか。

（澄子）……數馬さん、あなたは私を、赦しては下さいませんでせうか？……私は長い間あなたのお心に背いて居りました、あなたを欺いたばかりでなく自分自身を欺いて居りました、今その罰を受けて居るのでございます、此間手紙にも書いて上げました通り、みんな私が弱かつたのでございます。いつか一度は斯うなると思ひながら、山田を愛し切れない事は分つて居たながら、ぐづぐづに日を送つたのが惡かつたのでございます。……母や兄にも濟まなかつた

とは思ひますが、誰よりも一番あなたに濟まない事をいたしました。誰に赦して貰はないでも私はたゞ、あなたに赦して頂きたいのでございます。あなたにお詫びをする爲めに、斯うして逃げて參つたのでございます。でももうあなたは、それは取り返しの附かない事だと仰つしやるのでございませうか？

（三好）僕は、取り返しの附かない事なんぞ何一つないと思つて居ります。あなたは山田君を一時にもせよ愛して居らしつた、僕を愛して居らしつたかも知れませんが、しかしあの時は山田君を愛して居らしつた、さうして山田君の方へ行かれたのに何の誤りがあるでせう。僕はあなたとの約束を楯に取つて、あなたを責めようと云ふ氣はないのです。あなたが僕に背かれたのが惡いと云ふなら、僕も潔く讓つたのが惡かつたのです、まして僕は、潔く讓つたと云ひながら共の實決して潔くはなかつたんですから。……僕はあの時あなたに別れてから、始めてほんたうに、自分がどんなにあなたを愛して居たかと云ふ事が分つたのです。あなたの事を思はずには片時も生きて行けない事を知つたのです。……その心持ちは恐らくあなたも同じだつたではないでせうか？僕もあなたも、離れて見てから始めて強くお互ひの愛を感じたのです、あなたが山田君のやうな人の所へ行かれなかつたら、僕も此れ程あなたを思ひ、あなたの爲めに苦しみはしなかつたでせう、あなたと云ふ者が僕の眼に此れ程貴く美しく見えはしなかつたでせう。あなたは嘸かし、山田君の所で苦勞をなすつたでせうが、それは二人が愛する爲めには必要の事ぢやなかつたでせうか？山田君は僕の爲めにあなたをなくてはならない人にしてくれました、あなたと僕とを出來るだけ愛させてくれました、僕もあなたも何一つ取り返しの附かない事なんかして居ないんです。あなたが斯うして僕の所へ來て下さるのが運命だつたと考へれば、凡てが幸福に順當に運ばれて居たんです。……澄子さん、さあ、もう泣くことなんかないぢやありませんか、僕こそあなたにお禮を云はなけりやならないのです。……

（澄子）いゝえ、いゝえ、そんな事はございません。あなたが赦して下さらなければ、私は生きては居なれなかつたのでございます。あなたが居らつしやらなかつたら、どうして此の家へおめおめと歸つて來られませう。——數馬さん、どうぞお願ひでございます、一と言「赦す」と仰つしやつて下さいまし、たとへ私は母や兄に笑はれましても、「勝手な奴」だとか「意氣地なし」だとか云はれましても、唯あなたから「赦す」と一と言仰つしやつて頂けば氣が濟むのでございます。

（三好）僕があなたを赦すとすれば僕だつてあなたから赦して頂かなけりやたらない、あなたが僕を苦しめたやうに僕だつてあなたを苦しめたのだ。……ですが、もうそんな話は止めようぢやありませんか。僕もあたたも、結局お互ひに斯うなる爲めに苦勞をしたのだと、さう思はうぢやありませんか。僕等は間違つては居なかつたのです、凡べての過去は僕等を幸福にする爲めに仕組まれて居たのです。あなたは始めから山田君のものではなかつた、さうして今、僕の所へ歸つて來て下すつたのだ。

（澄子）もう私は何も申し上げることはございません、私は長い間僻んで居たのでございます、山田の所へ參りましてから誰も相手にしてくれませんので、根性がひねくれてしまつたのでございます。もう私はあなたの所へ參れるやうな人間ではないのだと、あきらめてさへ居たのでございます。どうぞあたたのお力で私を昔の澄子になすつて下さいまし、私を世間の冷めたい人の眼から庇つて下さいまし、……今こそ私は、永久にあなたのものでございます、……私を信じて下さいまし、……

（三好）分りました、よく分りました、僕は一度だつてあなたを疑つたことはなかつたのです、僕は昔からあなたを信じて居たのです、あなたが僕をお捨てになつた其時から。——あゝ、僕等はとうとう、一緒になる事が出來たんです

ね、――

三好、手をさし伸べて澄子の手をしつかりと握る。

牧子上手の襖よりたゞならぬ顏色で入り來る。二人の素振りを見てちよつと立ち止まり、聲をかける。

（牧子）三好さん、あの、失禮でございますが、……

三好と澄子、手を放して牧子の方を振り返る、牧子慌しく二人の傍へ寄つて來る。

（牧子）――實は、今山田がやつて參つたのでございます、――

（三好）山田君が？（俯いて澄子と眼を見合はせる）――そして何んだと云ふんです？

（牧子）澄子が居るかと申しますから、居ないと云つてやつたのですが、いや居るに違ひない、是非澄子に會はしてくれ、會はなけりやいつ迄立つても歸らないと申して、玄關に頑張つて居るのでございます。ほんたうに、まあどう致しませうか知ら？

（澄子）（縋り着くやうに三好の傍に寄り添ひながら）お母様、どうぞ山田を追ひ歸して下さいまし、山田に會ふのは嫌でございます、どうぞ會はせないやうになすつて下さいまし。

（牧子）お前さへ其の心持ちなら何とでも云つて追ひ歸すけれど、……でも、まあどうしようか知ら？どうしても歸らなかつたら、いつそ警察へ電話を掛けて先の刑事にでも來て貰はうか知ら？

（三好）いや、そんな事をなさらないでも宜しいでせう、……僕が會つてやりますから。

（牧子）あなたが？（さう云つて、澄子と二人の顏を判じるやうに見る）

（三好）はい、僕が會つてやります、どうせ一度は會ふ必要があるんですから。――まだ申し上げませんでしたけ

れど、僕は奥様にも圭之助君にも喜んで頂かなけりやならないんです、澄子さんは僕の言葉を聴き入れて下さいました、僕の所へ歸つて來て下さいました、もう決して御心配なさることはありません、僕は山田君の前へ出て、澄子さんは僕の妻だと、立派に云ひ切つてやる事が出來ます。僕は澄子さんに代つて、云ふべき事を充分云つてやる積りです。

（牧子）澄子や、三好さんの仰つしやる事は、――さうに違ひないのかね？お前、今度こそ間違ひはないんだらうね？

（澄子）（さしうつむいて）はい、――數馬さんが、何も彼も赦して下さいましたから、――

（牧子）ほんたうに、三好さんなればこそ赦して下さるんですよ、私にしろ圭之助にしろ、三好さんの御親切に動かされてお前を赦して上げるのです。三好さんが居らつしやらなかつたら、お前はどんな人間になつてしまつたか分りやしません。……三好さん。いづれ改めてお禮を申さなければなりませんが、此れと云ふのも全くあなたのお蔭でございます。まあ、此れも今度はよくよく眼が醒めた事と存じますし、折角詫まつて參りましたのですから、今迄の恩知らずをお赦し下さいますならば、……こんな者でも宜しかつたら何卒末始終を見ておやり下さいまし。實は、あまり勝手がましうはございますけれど、私とても斯うなる事を望んで居りましたので、さう願へれば當人も仕合はせでございますし、私もどんなに助かるか分りません。ほんたうにもう何から何まで御心配下さいまして、――

（三好）いや、さう仰つしやられちや僕が困ります、僕こそ此の問題ぢや散々あなた方に御心配をかけて、殊に圭之助君なんぞ始終挺擦つて居たんですから。僕はただあなた方に喜んでさへ頂けばよいのです。過ぎ去つた事はきれいに忘れて頂いて、今後の澄子さんの幸福を、僕と共に祈つて頂きたいんです。

（牧子）それは申すまでもございません、圭之助などはあなたにお氣の毒だと申して、不贊成を唱へて居りますくら

ゐですが、でも折角のお志を聞きましたら、まあどんなにか有難く思ひますでせう。

下手ドーアより圭之助へ＝來り、つかつかと三人の傍へ進む、

(圭之助)お母様、山田の奴、どうしても歸らんのださうですがね。今玄關で書生が會つて居たんですけれど、ありや早く何とかしちまふ方がよござんす。そんなに會ひたけりやいつそ當人を引き渡してしまふか、(さう云つてヂロリと澄子を睨む)でなけりや、話の模樣で僕が會つてもよござんすが。

(三好)いや、僕が會はうと云ふんだ、——君、もうそんな事を云はんでもいゝ、お陰で萬事都合よく解決して澄子さんも今度こそ僕の希望を容れて下すつたんだから。

(牧子)今お前にもその話をして、喜んで貰ひたいと仰つしやつて居らつしやるんです。……澄子や、お前お兄様にょいお詫びをしたらいゝでせう。

(澄子)(多少險を持つた顔つきでチラリと兄を一瞥する)お兄様、いろいろ御心配をかけまして申譯がございません、今迄の事は私が惡うございました。

(圭之助)僕はお前を赦し難いと思つて居たんだが、……しかし、三好君の好意に對して、もう何も云はない事としよう。三好君、ほんたうにいろいろ有り難う、地下の親父も君に對してどんなに感謝して居るか知れない、僕も少し云ひ過ぎた事はあつたか知れないが、僕の心持ちは君だつて分つて居ただらうし、君がそれ程にしてくれるなら僕も要するに有り難いと思ふばかりだ。どうか澄子を赦すと共に僕を赦してくれ給へ、さうして、改めて僕の妹として澄子を出來るたけ愛してやつてくれ給へ。……ま、精しい話は後でゆつくりするとして、兎に角それぢや、君は山田に會つてくれると云ふんだね。

（三好）あゝ、僕が澄子さんに代つて會はう、山田君に云ひ分があるなら僕が聞かう。

（圭之助）だが、——お母様、僕も一緒に會つた方がよくはないでせうか？何しろ相手があの通りの人間だし、それに三好君、——君は人が好過ぎるからね。

（牧子）それもさうだけれど、しかしお前だと、却つて又喧嘩になりはしないだらうか。

（圭之助）いや、山田は喧嘩するやうな奴ならいゝんだが、さうでないから始末に惡いんです。何しろ實に卑屈で品性が陋劣で、困つて來れば平氣な顔でいくらでも嘘をつくと云ふ、代物だから、あのくらゐ手に負へない人間はないんです。全く煮ても燒いても喰へない奴なんだから。氣長に相手になつて居ると一日かゝつたつて歸りつこありませんよ、まあ僕が居て傍からピシピシ遣つつけてやらなけりや、なかなか埒が明くまいと思ふけれど。

（三好）餘りピシピシ遣つゝけられると何だか僕が氣の毒になつて來さうだがね、

（澄子）でも、私、お兄様に入らしつて頂く方がいゝと存じます。全くさう云ふ人なんですから。

（牧子）それぢや三好さん、さうなすつた方がようございませう。まあ何と申しますか分りませんが、たとへどんな事がありませうとも決して澄子を會はせる事は出來ない、當人も會ひたくないと云つて居りますし、自分の意志で此方へ戻つて來た以上は、最早や富家の人間だからと、きつぱりさう仰つしやつて下さいまし……それからあの、（澄子に）何かお前、山田に云ふことでもあるなら三好さんから云つて頂いたらいゝでせう。

（澄子）いゝえ、もう何も申すことはございません、ただあの、先程お話しの證文のことでございますが、……

（圭之助）それは僕に委して置くがいゝ、どうせ穢い奴だから、お前を渡さないと云やあ結局金の問題になるんだ。僕の考へぢや、先刑事も云つたやうに其の證文の金だけは手切れ金の積りで、まあ仕方があるまいと思ふんだが——

(牧子)だけど、それだけで承知するだらうか？

(圭之助)しないと云つたつて、それ以上の事をしてやる理由はないんです、もう今迄にも度び度びあつたゞなんですから。——それも、ちやんと話が極まつた で、證文と引き換へに現金を渡してやる。猶又今後は一切當家と關係がないと云ふ事を、一本書かしてやる積りです。さうでもしなけりや金をやると云つたつて無意味な事です。兎に角談判は僕に委して置いて下さい、それで嫌なら構やしません、警察の手へ引き渡してやるばかりですから。

(牧子)まあね、お金の方はちつとやそつとの事は仕方がないから、そんな事よりか後々の掛り合ひがないやうにね、——萬一、此の後澄子が往來で遇ふやうな事があつても、挨拶なんかされたりしちや迷惑だから、もうほんたうにあかの他人と思つてくれるやうにね、——そこをうまく納得するやうに、穩便に話を極めてくれなけりや困りますよ。

(三好)いや、掛り合ひになると云つても此方の出樣一つですから、我れ我れの態度さへシツカリして居れば、その點は御心配になる事はあるまいと思ひます。

(牧子)(澄子に)何かお前、此方へ取つて置きたいやうな品物でもあるんなら、——

(澄子)そんな物、何もありは致しませんわ、——みんななくなされてしまひましたんですもの、——

(圭之助)何かあつたにしたところでくれてやるがいゝ。取つたつて仕樣がないさ、——

下手ドーアの外に騷々しい足音が聞える、つゞいて書生と山田との云ひ爭ふ聲が起る、「お待ちなさい！何所へ行くんです！默つて上つて來るなんて亂暴ぢやありませんか！」と書生が云ふ。「君、後生たから澄子に會はしてくれ給へ、僕はどうしたつて會はなきやならないんだ、此處だ此處だ、此の部屋に居るんだ、今聲が聞えたんだ」山田が泣聲になつてさう云つて居る。牧子と澄子、愴惶として上手の襖より出ようとする、途端に下手のドーアが開いて、書生に腕を執られたまゝ山田入り來る。痩せた色の青白い三十二三歲の男、垢

じみた袖の背廣にソフト・カラーを着け、長い髪を振り乱して居る。澄子を一眼見るや、

(山田) あ、澄子!

と云つて馳せ寄らうとする、澄子はちよつと振り返つて見、牧子に手を曳かれて無言の儘襖の外へ去る。

(山田)(哀れつぽい聲で) おい、澄子!何だつて行つちまふんだ、お願ひだ、己に會つてくれ、己を助けてくれ、己あ刑事に追つ駈けられて逃げて來たんだ、よう!會つてくれたつていゝぢやないか、お前は己が監獄へ打つ込まれてもいゝつて云ふのか、お前さへ居りやあ己は助けて貰へるんだ。

さう云ひながら身をもがいて後を追はうとする、書生猶も抑へて居る。

(圭之助)(山田を遮るやうに其の前へ進み、冷やかな皮肉な調子で) おい、おい、まあそんなに騒がんでもよからう、騒いだつてもう君の手は知れて居るんだからね、話があるなら落ち着いて其處へかけたまへ、僕等が代りに聞いて上げるから。

(山田)(圭之助に睨まれてやゝ怯みながら) だつて、——僕あ君たちぢや困るんだ、澄子に話がしたいんだ。

(圭之助) 澄子に?——しかし、澄子は君の何だと思つて居るんだね?

(山田) あれは僕の女房さ、

(圭之助) いや、女房だつた事はなからう、そりや今まで君と同棲しては居たゞらうが、澄子が君の正式の妻であることを誰も許しては居なかつた筈だぜ。

(山田)(ニヤリと物凄く笑ふ) ふん、さう云つたつてそりやあ駄目さ、澄子は兎に角自分の意志で僕の所へ來たんだからね。

山田が落ち着いて來た樣子なので、書生手を放す。

（圭之助）君は澄子の置き手紙を讀まなかつたかね？澄子は今度自分の意志で此の家へ戻つて來たんだよ。

（山田）いゝや、僕あ澄子の意志だとは思はんよ、澄子はそんな女ぢやないんだ、自分一人の考へであんな手紙が書けるやうな女ぢやないんだ、（甘いもんだと云ふ調子で嘲るやうな心持ちで云ふ）だから君、まあ何にしても會はしてくれ給へ、會ひさへすりやあ直ぐに分る事なんだから。

此の臺辭の間に、書生はもう大丈夫と見たらしくそつと退場する、

（三好）山田君、暫くでしたね、僕は三好です。

（山田）（始めて三好の方を振り向き、急に力を得た樣子で）あゝ、三好君ですか、失禮しました、僕はあなたにお願ひします、どうか澄子に會はして下さい、澄子を此處へ呼んで來て下さい、澄子はあなたの仰つしやる事ならきつと何でも聽きますよ。ねえ、さうでせう、あなたは澄子の心持ちを理解して居て下さるでせう、あれが僕を捨てるやうな女ぢやない事は、あなたは知つて居て下さるでせう、あなただつて御承知でせうが澄子は始終あなたに感謝してるんですよ、僕等が一緒になれたのはみんなあなたのお蔭だつて、いつもさう云つて居るんですよ、あなたは僕等を少しもお恨みにならないばかりか、いつも澄子の幸福を祈つて居て下さるんださうですね、僕はあなたの御好意を感謝します、あなたの同情に訴へてお願ひします　どうか澄子に會はして下さい、僕をこんな目に遭はせて、澄子は決して幸福ではないんですから！（以上少しも皮肉でなく、昂奮した、オドオドした態度で云ふ）

（三好）（非常に云ひにくさうに）山田君、僕は澄子さんの幸福の爲めに、君に會はせる事は出來ないんです、――

（山田）何ですつて？

（三好）僕は君に、君の同情者と思はれたくないんです。そりや或る時期には同情して居たかも知れない、しかし今となつては——或は君に恨まれても仕方のない位置にあるんです、澄子さんが君の物ではなくなつた今となつては、

——

（山田）わざと大仰に）あゝ、あなたまでがそんな事を云ふんですか、そりやあ非道い！そりやあ殘酷だ！あなたはそんな、ぢやなかつたんだ。

（三好）山田君、僕は改めて君にお斷りしなけりやならない、——澄子さんは僕の妻です、今日から僕の妻になつてくれたのです。

山田、心から惘いたらしく、急に眞靑な顔色になつて默然と三好を凝視する。

（三好）君は失禮ながら、それに就いて決して故障を云ふべき所はないやうに思ふ。僕に云はせれば、澄子さんは僕の所へ、——當然歸るべき所へ歸つて來てくれたのです。

（山田）分つた！君たちは僕を欺したんだ、みんなでグルになつて僕を一杯喰はしたんだ、

（三好）そんな事はない！そりや君の邪推です、今だから云ひますが君こそ澄子さんを欺したのぢやないでせうか。僕は君が、ほんたうに澄子さんを愛して居ると思つたからこそ、あの時君に讓つたのです。君が澄子さんを愛して上げなかつた以上、僕は當然僕の權利を主張してもいゝと思ひます。僕こそ君に欺されて居たのだと思ひます。

（山田）いゝや、何と云つたつて駄目だ、僕は君たちに欺されたんだ。僕が澄子を愛して居ないつて？——誰がそんな事を云ふんです？

（三好）澄子さん自身がさう云つて居るんです。

(山田)ふん、そんな事があるもんか、澄子こそ僕を愛して居なかつたんだ、いや、愛して居なかつたんぢやない、愛する心は充分あつたのに、それを誰かが邪魔して居たんだ、みんなで以て寄つてたかつて、、、澄子に下らない意地を附けて、始終僕を捨てさせるやうに何の彼のと壓迫して、あんな手紙まで書かして、さうしてとうとう…(口元に痙攣的な微笑を浮かべ、次第に泣き聲になる。)僕をこんな目に遭はせたんだ、三好君！あなたは僕の知らない間に澄子と相談したんでせう、いゝえさうです、ちやんと手筈をきめて置いたんです、あなたは僕を欺したんぢやありませんか、それでもあなたは紳士なんですか、(遂に泣き出す)え、三好君、…僕はあなたのやうな立派な人間と違つて始終悪い事ばかりしてね、………もう此の間ツから刑事に追つ駆けられて居るんですよ、………あなたは澄子が居なくつたつて、みんなが大事にしてくれるぢやありませんか、僕あさうは行かないんです、僕あ澄子が居なけりやあ誰も人間扱ひにやしてくれないんです、(此の邊のところ、澄子に聞えよがしの心持で、いかにも俳優らしい巧妙な抑揚頓挫をつけて泣いたり恨んだりする。狂言だか眞面目だか分らない調子。)それだのにあなたは僕の女房を取らうツて云ふんですか、あなたは泥坊だ、嘘ツつきだ、えらさうな顔をして居ながら僕のやうな貧乏人を欺さうツてんだ、いくら身分が違ふからツて僕の所へ來た以上はあれは僕のもんですよ、(突然三好の前に跪き、額を地に擦り着ける。)三好さん、お願ひです？どうか澄子に會はして下さい、澄子を僕に返して下さい、…

三好あつけに取られて、當惑さうに茫然とする。山田子供のやうに聲を擧げて泣き出す。

(圭之助)おい、此處は舞臺ぢやあないんだからね、好い加減にしといたらどうだ。いくら何と云つたつて會はせる譯にや行かないのだ、第一當人が會ひたくないと云つてるものを仕樣がないさ、——まあ、眞面目くさつて辯解するだけ馬鹿々々しいが、一體何を捕まへて僕等が貴樣を欺したと云ふんだね、斷つて置くが僕等が澄子に壓迫を加へたとか、意地

を附けたとか思ふのはみんな貴様の僻みなんだぞ。それどころぢやない、我れ我れの方ぢや疾うから澄子はあきらめて居たんだ。貴様みたいな人間に誘惑されるやうな奴なら、いつでも貴様にくれてやるんだ、

（山田　（泣きながら）嘘だ！そんならなぜ澄子は居ないなんて嘘をついたんだ！君たちは嘘ツつきぢやないか、えゝ？さうぢやないか。

（圭之助）まあ聞くがいゝ、我れ我れの方ぢや貴様が それ程大切にして居る物を、取らうと云 ふ意志はないんだよ。しかし其の大切にして居る物が、一向大切にされないので、自分の意志で逃げて來たんだから我れ我れの知つた事ぢやないんだ。それに、澄子の一身に就いては最初から三好君と云ふ人が居られる、僕等は三好君に對してこそ義理はあるが、貴様に何の義理があるんだ。澄子が過去の過ちを後悔して詫まつて來た以上、僕は改めて澄子の兄として、あれを貴様のやうな奴から庇つてやらなけりやならない。僕は兄の義務として....

（山田）いやだ、いやだ、君たちの云ふ事なんか聞きたくないんだ、云ふ事があるなら澄子の口から聞きたいんだ、澄子が何と云ふか澄子に會はしてくれ給へ、ほんの一と眼、ちよつとでいゝから會はしてくれ給へ。....僕は牢屋へ入れられるんだよ、警察へ引つ張つて行かれるんだよ、....僕を牢屋へ入れて置いて自分だけ助からうなんて、澄子はそんな薄情な女ぢやないんだ。

（圭之助）每度そんな事を云ふのだね、貴樣が牢へ入れられるのは不思議でも何でもないぢやないか、そんな事に一々構つちや居られないよ。

（山田）嘘ツつき！嘘ツつき！だから嘘ツつきだと云ふんだ！君たちは無理に壓制を加へて僕等の仲を割かうとするんだ！

下手ドーアをノックする音。つゞいて書生急ぎ足で登場、戸の内側に立つ。

(圭之助)(書生を見て)何だ！

(書生)あの、先刻の刑事が見えました、山田さんを引き渡してくれと申して居ります。

(圭之助)よし、ちやうど好い所だ、此處へ通してくれ、

(書生)はつ、

書生退場

(山田)(甚しく狼狽して)あゝ、あの刑事が己を追つ驅けて來たんだ、己はとうとう捕まるんだ、……三好君、僕の云つた事は嘘ぢやないでせう、僕はほんとに刑事に取つ捕まるんですよ、僕あ正直な事を云つてるんです、(再び三好の前に跪き、一層哀れつぽい聲で泣き出す)どうか後生だから會はして下さい！たつた一と眼！一と眼でいゝから！よう！三好さんお願ひです、此の通りです、(幾度も幾度も拜みながら)ねえ、どうか頼みを聽いて下さい、そりやあ今迄は僕が惡うございました、あなたにも澄子にも惡うございました、僕が嘘ツつきでした、欺したのは僕でした、……

此の時刑事入り來り、下手に突つ立つて默つて山田を睨んで居る。山田心付かず。

(山田)だから僕あ詫まります、此の通り詫まります、澄子にも詫まります、頼みを聽いてくれさへすりあ僕あ決してもう惡い事あしやあしません、此の後僕あもう決して、……

さう云ひながらそはそはした樣子でフイと下手を振り返る、刑事を見てギヨツとして、

(山田)あつ、

と云ひながら上手襖の方へ逃げ出さうとする、刑事飛びかゝつていきなり山田の襟頸と腕を捉へ、舞臺中央へ引き摺り倒す。

(山田)な、なにするんです！

(刑事)これ！貴樣抵抗するのか！

平手でびしやびしやと續けざまに横ツ面を擲る、

(山田)(髪の毛も洋服も滅茶滅茶にされて擲られながら)あいた、……あいた、……何するんです、……何も抵抗しやしないぢやないか、

騷ぎを聞きつけて上手襖より牧子出で來り、オドオドしながら様子を見て居る。

(刑事)(やつと擲るのを止め、商賣柄な冷酷な口調で)太い奴だ貴樣は！此の間から散々逃げ隱れて居つて、緣も由かりもない御當家を騷せて何亂暴を働くか！もう決して逃がしはせんぞ、さ、用があるから警察へ來い！さ、立て！立たんか！

(山田)(昂奮した顏に微笑を浮かべ、いやに落ち着いて嘲るやうに)立つよ、立つよ、立てと云はなくたつて立ちますよ、(さうさ云ひながらまだどつかとあぐらをかいて居る。)ふん、何だつて！緣も由かりもない御當家だつて！ふざけた事を云ひ給ふな此處の家の娘は僕の女房なんだ、憚りながら誰が何と云つたつて僕の女房なんだ、ねえ刑事さん、僕あ成る程詐欺をしたかも知れないが、僕を引つ張るんなら此處の内の娘だつて同罪だぜ、僕あ逃げも隱れもしやしないから早く彼奴を掴まへて來給へ、女房と一緒なら僕も何處へだつて行きますよ。

(刑事)何！生意氣なことを拔かす！貴樣は詐欺ばかりぢやない、窃盜を働いとるんだ！警察は貴樣を窃盜罪で逮捕するんだ、さあ立て、立てと云つたらなぜ立たんか！此奴、まだ剛情を！

もう一遍びしやりと張り倒し、引き起さうとする、

(山田)(不承無精に立ち上りながら、顏つきにも態度にも狡猾な所をまる出しにして)あゝさうかい、僕が泥坊だつて云ふのか

成る程ね、泥坊で掴まへられるんなら女房にや關係はない譯だ、此處の內の娘は——橋本さんの御令嬢は詐欺はなすつても泥坊はなさりやしないからね、成る程うまく出來てるもんだ、己たちのやうな貧乏人と違つて、好い所のお孃さんてものは得なもんだね、——

(刑事)(冷やかすやうに)さあさあ、貴樣悪黨に似合はん思ひ切りの悪い奴だな、文句があるなら警察で云へよ、(牧子等に向ひ、急に別人のやうな慇懃な態度で、)や、どうもはや、大變なお騷がせ申しまして飛んだ失禮を、——實は何でございます、あれから根津の方へ廻りまして張り込んで居りますると、此奴がお孃樣のお跡を追つて御當家へ參りましたので、飛んだ事だと存じまして早速附けて參つたのでございます。でもまあ。萬事うまく參りまして誠に好都合で、もう決して御心配はございませんから、何卒御安心下さいますやうに。

(牧子)有り難う存じます、お蔭樣で助かりましてございます。

(圭之助)いろいろお骨折で、どうも何とも、——後々の所も何分宜しくどうか、

(刑事)はい、承知いたして居ります、いづれそのうちにもう一度お邪魔に出ますかと存じますが、——では、今日は失禮いたします。

(山田)ふうん、それでちやんと分つたよ、君たちあ警察までグルになつて、詐欺の金は拂つてやつて、娘は引き取つて、僕一人を泥坊にして突き出さうつてえ手筈だつたんだね、どうだい、僕の云つた通りぢやないか、みんなで僕を欺したんぢやないか。——だが、まあそれもよからうが、此處の內の御令嬢は泥坊を亭主に持つて居らつしやるんだからそれだけは忘れないでくれ給へ。なあに、今更何と云つたつてあれは僕の女房さ、會ひさへすりやああの女はどうだつて僕の好きなやうにして見せるんだが、會はせないなんて君たちの方が餘つぽど卑怯だ。ま、いゝから當分預けて置かうよ、どうせ喰ひ込んだつて又直きに出て來るから、その時は女房にお目に懸るよ、いくら君たちが邪魔したつてきつと會つて見せるからね、いづれさうなりやあ此方のもんさ。

(刑事)えゝ、まだぐづぐづ云つて居る!早く行かんか!

(山田)ぢや、澄子に宜しく云つてくれ給へ。

山田。刑事に引き立てられつゝ下手へ去る。牧子等三人、ほつとした様子で顔を見合はる。

(圭之助)どうだい、全く驚いた奴だね、あの調子だからとても手に負へたもんぢやないんだよ。

(三好)いつもあんなだらうか！

(圭之助)いや、あれ程でもないんだけれどね、今日は先生よつぽど面喰つたと見えて、いよいよ奥の手を出したんだね。

(牧子)(三好に)ほんとにまあ、嘸お困りになつたでせう。

(三好) どうも、實に困りましたよ、相手が相手だから腹も立てられない、あの調子でやられると、何と云つていゝか分らなくなつちまつて。

(圭之助) 何しろずるい所をスッカリさらけ出して、恥も外聞もなく捨て鉢でかゝつて來られるんだから、溜らないよ。

(牧子) 私もね、まあ何事が起つたのかと思つて出て來たんですけれど、……だが、山田の奴もあんまりぢやないか、(口惜しさうに涙ぐむ)あんた大きい聲を出して、澄子に恥を掻かせなくつてもいゝだらうに、……

(圭之助) ま、さう仰つしやつても仕方がありません、あんた人間を相手にするだけ此方が惡いんです、もう此れきり縁が切れたんだからいゝぢやありませんか。

(牧子) そりや、さう云へばさうだけれど、考へれば考へる程あんた憎い奴はありません、……ほんたうにまあ、惡態掲ひをしたやうでどんなにせいせいしたか知れない。

(三好)僕も曾つて見て却ていゝ事をしたと思ひます、山田君があゝ云ふ人間だと分れば、もう何も遠慮する事はない譯ですから。僕は山田君に對していよいよ強くなれるのです。山田君は自分自身の惡さの爲めに受けなければならない。當然の罰を受けたのです、僕の勝利は正しい勝利です、僕はかう信じて、安んじて今後の幸福を樂しむ事が出來る

と思ひます、……

澄子が上手の襖をあけて、力なくうなだれながら這入つて來る。

（三好）あゝ、澄子さん、山田君はもう行きましたよ。あなた、お聞きになつたでせうが、よく我慢して下さいました。しかしあなたは決して此れ以上山田君を恨んではいけません、あの人は旣に當然の罰を受けたのですから。

（澄子）（三好が近づからうとするのを微かに避けるやうにして、依然としてうなだれた儘）……山田は可哀さうでございます、……私、あの、やつぱり——

（三好）え、何です、どうかなすつたんですか？

（澄子）私、やつぱりあの、………山田を捨てては惡いと存じます、………

三好以下三人、愕然とする、

（三好）あゝ、それぢやあなたは、——

（澄子）山田の所へ歸らうと存じます、………三好さん、どうぞ勘忍して下さいまし、一度ならずあなたの愛を裏切つた罪は、決して輕くはないと存じますけれど、……御好意はよく分つて居りますけれど、私どうしても山田を捨てる譯には參りません。

（牧子）今になつてそんな事を、——お前まあ、何を云ふのです？

（澄子）でも、何だか山田が可哀さうでなりませんの、——あの人はほんとうに獨りぼつちでございます、そしてみんなに欺されたのでございます。

（圭之助）貴樣こそ欺された癖にまだ夢が覺めないのか？　馬鹿！　大馬鹿者め！　誰が山田を欺したと云ふんだ！

（澄子）私が第一に欺しました、私はほんたうにあの人を愛してはをりませんでした、あの人は私を愛してくれましたのに、……

（圭之助）彼奴が貴樣を愛して居た？　何處にそんな證據がある？　貴樣は今彼奴が云つた事を聞かなかつたのか？

（澄子）いゝえ、すつかり聞いて居ました、聞いたればこそ云ふのでございます、——あの人は悪い人ですし、始終嘘ばかりつきますけれど、その嘘の中にほんたうの事があるやうに思ひます。山田は自分では嘘をつく氣で、本當の事を云つて居る時があるのでございます。私にはそれが悲しうございます、本當の事を云ふのにも、嘘の積りでなけりや云へないやうな、山田と云ふ人が可哀さうでございます、……

（牧子）そんな理窟が何處にあるものですか、あんなことを云はれたから、それぢやお前、あんまり情けないぢやないか。

（澄子）でも、あの人は三好さんの前で、額を地面に擦りつけて頼んで居たぢやございませんか。狡猾だと云へばそれ迄ですけれど、私を愛して居なければあんな眞似は出來ませんわ、あの人の云ふ事は本當でございます、あの人だけを警察へ渡して、私を庇はうとなさるのはあんまりひどうございます、みんなで山田を欺して居るのでございます。

（圭之助）（思ひ直してやゝ妥協的に）おい、澄子、まあ考へて見ろ、お前がそれだから猶更彼奴が附け上るんだ、彼奴はさつき何と云つた、會ひさへすりあ自分の物だ、どうでもお前なんか好きなやうにして見せるつて、威張つて居たぢやらうが。……お前そんな事を云はれても口惜しくないのか。

（澄子）口惜しくはございません、山田はそれ程私を信じて居るのでございますもの、——私は山田を愛してやらなけりやなりません、たとへ欺されても、何處までも、愛してやらなけりやなりません、さうしてきつとあの人を救つてやります、それが私の義務でございます。

（圭之助）さうか。——そこまで云ふなら仕方がない、僕もお前を妹とは思はないから、どうとでも勝手にしたら宜からう、その代り、もう二度と再び、詫まつてなんぞ來るなよ。

（澄子）はい、勿論でございます。

（三好）澄子さん、僕も山田君を欺した一人だと仰つしやるんでせうか？僕は、今となつては、たださう思はれるのが苦しい、——

(澄子) いゝえ、あなたをさうだと思ひません、それよりかあなたは、私があなたを欺したと思つておいでではないでせうか?

(三好) (涙ぐんで) そんな事があるもんですか、——悲しい事ですが僕は未だに、あなたの心持ちがよく分るんです、僕はあなたを憎みたいけれど憎めないんです。

(澄子) 私もあなたに憎んで下さいと云ひたいんですけれど、でもあなたは憎んでは下さいませんでせうね?——三好さん、お願ひですからどうか憎まないで下さいまし、私を哀れだと思つて下さいまし、いつまでもいつまでも、——

(三好) 分りました、もうそんな事は云はないで下さい、

(澄子) 私は今日まで山田の妻ではなかつたのです、今日からほんたうに山田の妻になつてやらなけりやなりません、どうか悪く思はないで、——山田の頼みを聴いてやつて下さい、山田は獨りぼつちなんです、誰も今まで山田の事を思つてやる人はなかつたんです、あなたの事は思つて居る者がありましたけれども、……

(牧子) 澄子やお前もう一度考へ直しておくれでないか、お前の爲めと云ふのが悪ければ、私の爲めだと思つて。

(澄子) お母様、どうかお赦しなすつて下さいまし、誰の爲めよりも山田の爲めを考へてやりたうございますから。

(圭之助) お母様構はないでお置きなさい。——云ふまでもない事だが、貴様もその覺悟で出て行くんなら、もう絶體に出入りは許さんからな。今までのやうな氣で居ちやならんぞ。

(澄子) (淋しい微笑) はい、よく分つて居ります。ではもうお目に懸りませんから、お母様もお兄様も御機嫌よろしう、——いつも我が儘ばかり申しまして、いろいろ御厄介になりました。」

(牧子) 澄子や、お前ほんたうに、——

去らうとする澄子に縋らうとし、圭之助に眼くばせされて躊躇する。澄子下手へ行く。

(澄子) 三好さん、ではもうあなたにも、——左様なら。

さう云つて、静かにドアーを出て行く。牧子テーブルに泣俯して泣く、三好は憮然として、その傍に棒のやうに立ち盡す。

(幕)——

(これは最初三幕物として書き出したのだが、締切に間に合はなくなつたし、且これだけでもそれ自身完成した一幕物として通用すると思ふから、先づ一幕だけ發表する事にした。しかし、あと二た幕に全體の思想の焦點があるので、それがないと氣が濟まないから、直ちに稿を次ぎ最近に發表する積りである。作者記)

編輯を了へて

◇我々からすればドチラでもよい、原であらうが、高橋であらうが結局は緣の遠い和尚たちだ。而し喜劇氣分で眺めて見れば、原と云ふ役者は緊張味がある、一陣の凄風が伴つてくる、高橋だと半ばは滑稽じみて野次氣分になれる。

◇兎に角、永年の壓力の中心はなくなつた、跡に殘つた連中は何れも五十步、百步だ、此秋加藤も奮起せずばモウ一生お陀佛だ、しかし我々は犬養や加藤なぞいふ連中はとうの昔から勘當しておる。

◇華盛頓の冷水會議にヒユーズとやらが譯の分らぬ提案をした、それが徹底的だと日本全權は讃めそやしておる、その案が徹底的だと驚くのを見ると日本全權なぞは内々頑强案位を携行したのぢゃないか、咄。

◇ハーデングの聲明とか、ヒューズの提案とか云ふものは當代政治家氣質を遺憾なく表明した極めてレベルの低いものだ、人間として感激の出來ぬ事務的のものだ。これでは列强事務員會議だ。そんな會合には屬官の二三人もやれば澤山だ。

◇鳥兎匆々、一九二一年も暮れてしまつた。過去には追懷の悲みがあり、將來には希望の愉悅が伴ふ、我々は一九二二年の大計畫を本月號で花々しく發表したいが、須く枚を啣んで新春を迎へる、嵐の前の沈默には相當の理由がある。しかし、世界的の大事業で、そして人道的に偉大なる貢獻を齎らすものであることだけは聲明しておく。

◇本社は雜誌「改造」が世界の文明事業に對して多大なる活◇をなし——科學——哲學——宗教その他凡百の文明運動に對して——そして人類の上に偉大なる貢獻をなし得ることを自信しておる。そして幾年か——幾十年かの後には必ず西洋文明を凌駕する特異ある文明を築き上げ得る覺悟を以つて前へ——前へと急進しておる。

◇若き哲學者鶴田義富君は十二月二十九日神戸發箱根丸で渡歐する、歸朝したら阿部次郎君と共に仙臺大學を居城とする、途中の一路平安を祈る。

◇正月號の本誌がいかに隆盛たる光彩を放つか、我社は日本に未だ曾つて見られなかつた深みあり、充實味のある大雜誌を發行して讀者に見えたい、もうすこし若々しくなつてお目にかゝります、一九二一年よ、左樣なら。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	増大號共 郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	増大號共 郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼外國よりの御注文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く
▲日本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割増の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾年拾壹月廿日印刷納本
大正拾年拾貳月一日發行
（定價八拾錢）
編輯兼發行者　東京市芝區[illegible]　平田貫一郎
印刷所　東京市京橋區[illegible]二十七番地　秀英舍
發行所　東京芝區櫻田備前町一　改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二

米國にて最近
發見されたる

神經衰弱藥發賣

○歐米から日本へ來て遺憾に堪へぬのは日本の藥局道德低き事
○藥の効能廣告不信用を來し日本では眞の良藥も廣告の方法がない
○だが只茲に米國藥學家メーゼン氏苦心七年最近完成せる事と
○弊コンパニー主本藥日本一手販賣契約に當り先づ米國より英獨和白佛伊等の順序に旅行專門に同病藥視察の結果神經衰弱に對し本藥の價値豫想以上偉大なる確信を得たこと丈けを廣告し置く

メーゼン氏レゾート

○効能　一般の神經衰弱　譬へば頭痛、眩暈、耳鳴、熟眠不能、體量減退、不活潑、悲觀、紀憶力思考力缺乏、遺精、夢精、早漏、陰萎、婦人ヒステリー等
○藥價（和譯說明付）小九十錠入金六圓、大百八十錠入金十圓、郵送十五錢、領土四十五錢、輕るきは小瓶病永きも大二瓶にて大抵全治不思議

東京丸ノ内有樂町一丁目四番地

本店米國桑港　N.S.　鈴木コンパニー日本支店

日本發賣元

◎全國に販賣店募集す　店主　鈴木仁兵衛
營業時間九時より五時迄日曜、祭日休
振替東京五七四二八　電話丸ノ内一〇三一・一〇三二・一〇三三

◇一世を壓する完

改造社編輯局編纂

文化哲學叢書

監修者として哲學界の完璧を網羅し、一世を壓する權威の所產を社會に提供することは既に前號に豫告せる如し。今回愈々その準備成り、各方面に亘りて一粒選りの新銳を物色して執筆を依囑したり、尚全部十二冊とする考なりしも、佛國のアルカン叢書の如く、冊數を制限せず、頁數も制限せず、その出版の年限を定めずして、永久に「文化哲學叢書」の名を以て發行するに至るべし隨つて大體は著書の形式を採るべきも、中には飜譯の形式を取る者もなしとせず。

監修者（いろは順）

文學博士 波多野精一
文學博士 西田幾多郎
文學博士 朝永三十郎
文學博士 米田庄太郎
文學博士 田邊元
法學博士 左右田喜一郎
理學博士 桑木彧雄
文學博士 藤井健治郎
文學博士 深田康算

高級紳士服廉價調製

—最新英國式裁縫—



1 2 3 4 5

◇弊店は英國式裁縫に最も優秀且つ熟練せる裁縫師多年研究の結果絶對に假縫をなさずして着心地よき調製は弊店獨特の技術で他の追從を許しません、

◇上記の方法で寸法記入三分の一以上手附金御送附あれば必ず一週間以内に仕上げ殘金は代金引換小包にて御送致します

□フロック三ツ揃	金百拾圓内外
□モーニング三ツ揃	金九十五圓内外
□セビロ三ツ揃	金五十圓内外
□オーバ壹着	金四十五圓内外
□トンビ壹着	金五十五圓内外
□其他小供服及びコート各種好みに應じます	



1AよりBまでの上衣の長さ、2脊中の中央Cより肩Dまでの間、肩DよりカフスEまでの間の各寸法、3チヨツキFの上からの胸の周圍、4ズボンHの上からの腰の周圍、5ズボンの内側（股下）OとPとの長さ、身長、體量、其他ソリ身とか猫脊等の身體の特長、トンビは和服の着丈、和服の上よりの胴廻り、首廻り等、曲尺、鯨尺の區別明記のこと

◇市内御一報見本持參店員參上いたします◇

◇地方郵券八錢御送附見本送りいたします◇

東京市本郷區眞砂町廿六番地

並木高等洋服店

電話下谷四八〇七番

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS. LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS. ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾年拾貳月一日發行(毎月一回一日)
大正拾年拾壹月廿日印刷納本
第參卷第拾參號
拾貳月號
定價 金八拾錢